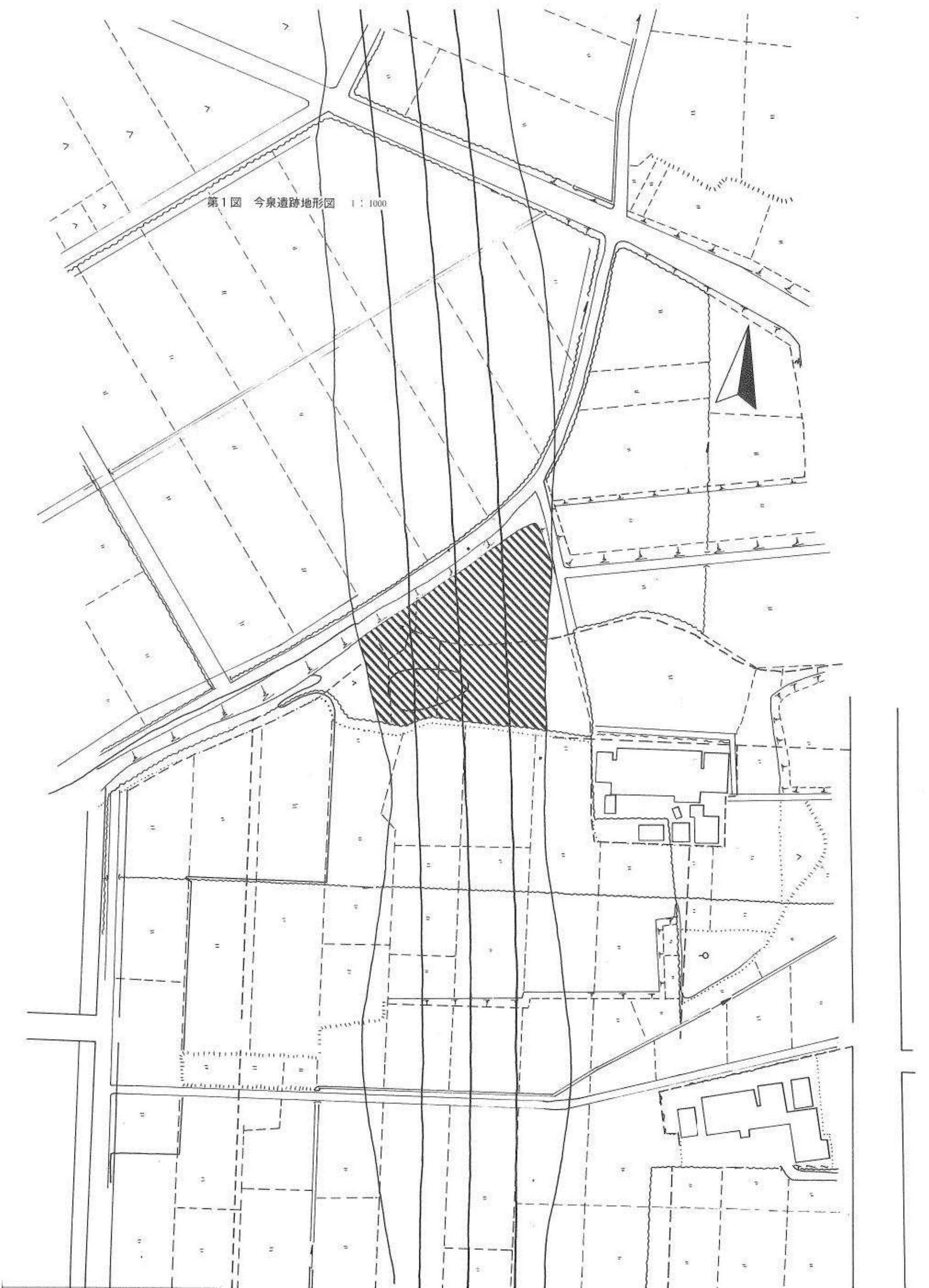


今 泉 遺 跡

1. 遺 跡 名 今泉遺跡（略号 1175）
2. 所 在 地 岩手県水沢市佐野
3. 調 査 主 体 岩手県教育委員会・日本道路公団
4. 調 査 担 当 岩手県教育委員会
5. 調 査 期 間 昭和50年6月9日～9月12日
6. 調査対象面積 約1935m²
7. 発掘調査面積 約1809m²

第1図 今泉遺跡地形図 1:1000



I 遺跡の立地と層序

(1) 遺跡の立地

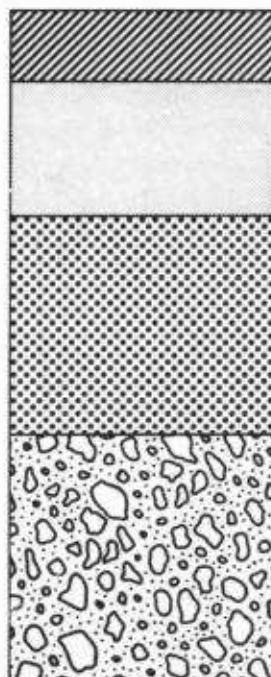
本遺跡は水沢市の北端、水沢市佐野に所在する。水沢段丘の北縁に位置し、胆沢川を眼下に見下す段丘崖上の平坦面に形成されている。尚、胆沢川は東流して北上川に注ぐ。海拔約54～55mで、現河床との比高は約4～5mとなっている。

段丘崖は、胆沢川そのものの水力によりかなり侵蝕されている。また、水沢段丘の北縁は、大勢としては胆沢川の流れに沿って北東方向に張り出す形となるが、本遺跡周辺では開田事業などでかなり原地形とは異なっている様子である。

土地利用の現状は畠地であるが、土地の人によれば、かつては宅地・墓地があり、また遺跡の南半は水田であったとのことである。

(2) 遺跡の層序

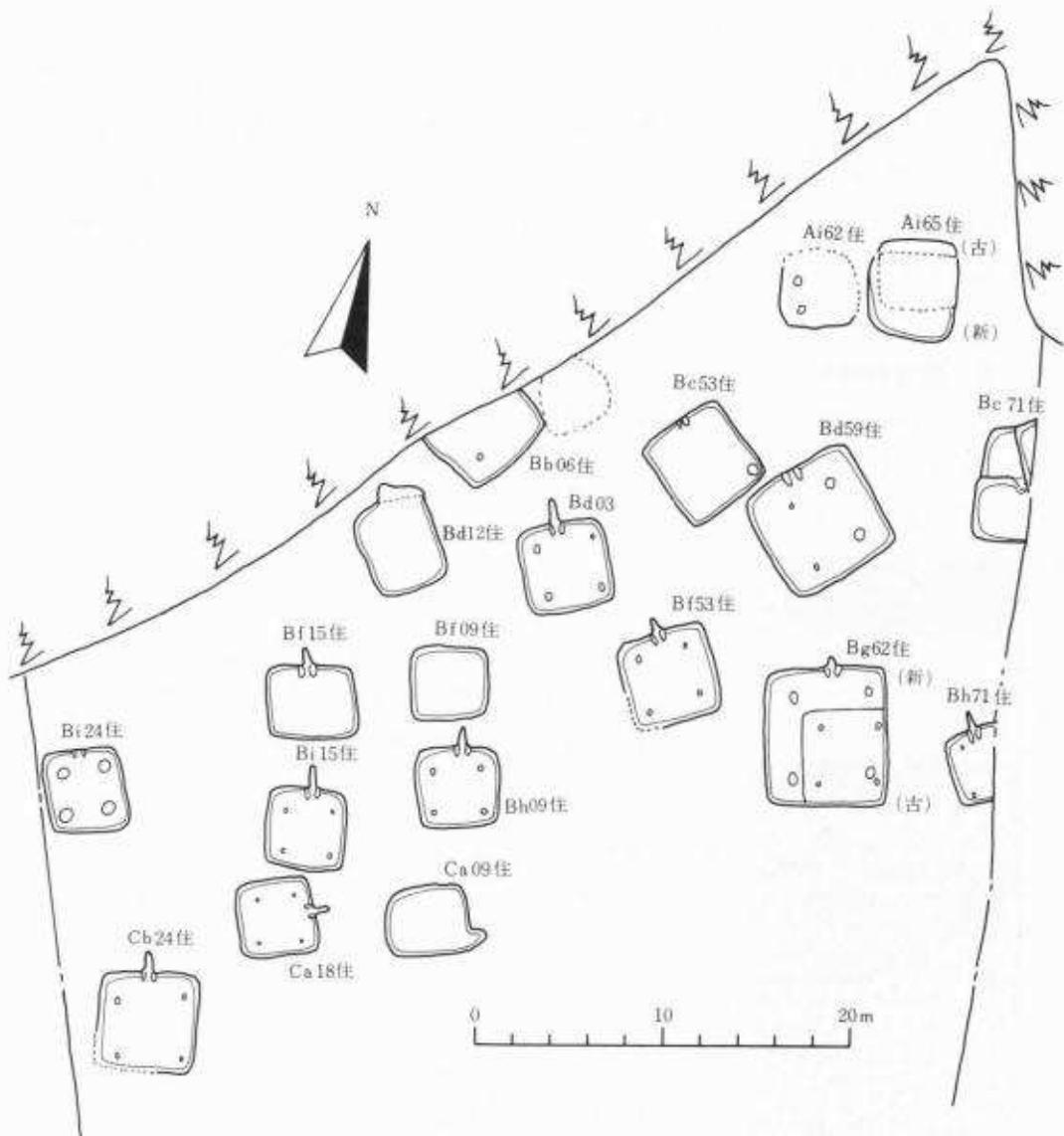
表土から基盤の礫層に至るまで4層に大別される。表土下のII層とした上面が遺構検出面であり、遺構の多くはIII層上面にまで達している。段丘崖縁の遺構は、水力の侵蝕によりその大半を失っている例もある。



- I. 茶色のシルト質土。耕作土。12～14cm。
- II. 暗褐色シルト質土。表面は茶かる。湿気のある場合にはやや粘性・縮まりあり。乾燥時にはクラックに入る。北側で25cm。南側で60～80cm。遺構検出面。
- III. 黄褐色シルト質土。粘性弱で乾燥するとサラサラしている。南側で1.4～1.5mの厚さ。
- IV. 基盤の段丘礫層。砂粒中に入頭大の礫が存在。最底でも3m以上はある。

第2図 今泉遺跡・層序概念図

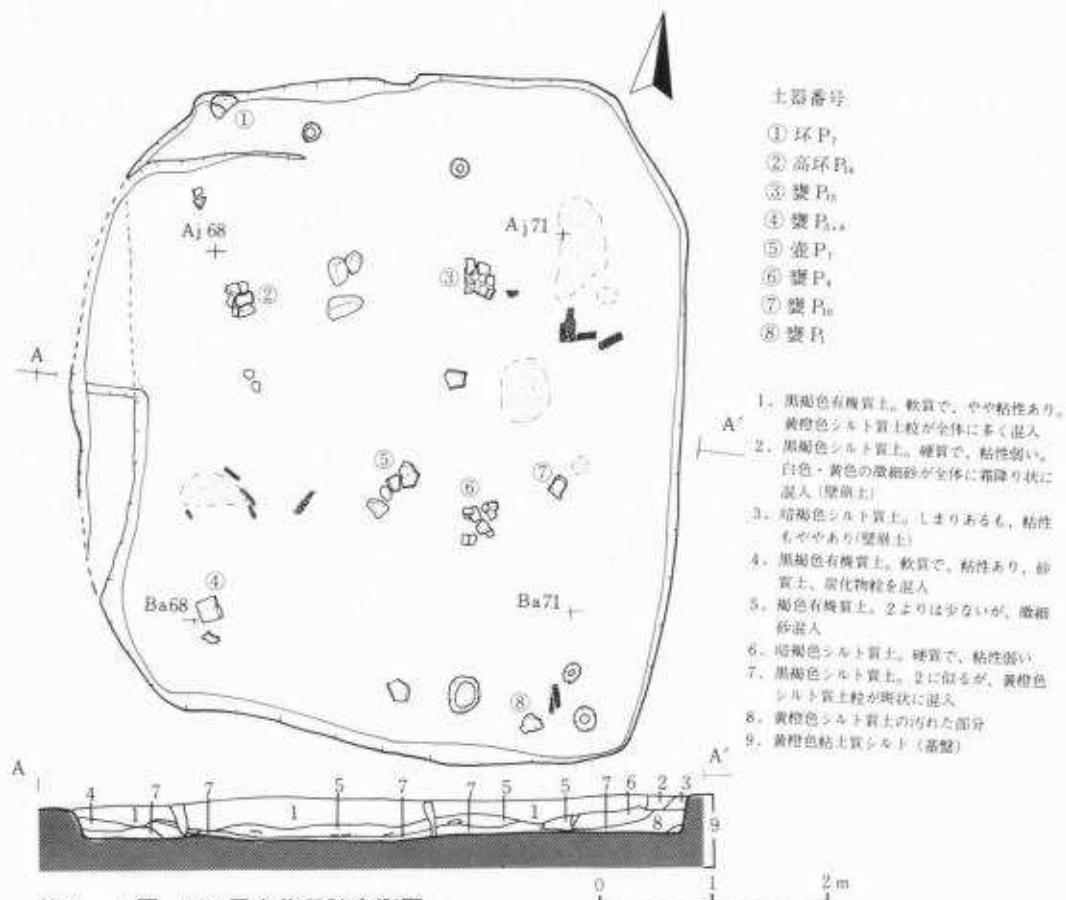
第3図 遺構配置図



以下については、概念図を示して土性を註記する。

II 発見された遺構と遺物

Ai65竪穴住居跡（第4図・第1表）



第4-1図 Ai65竪穴住居跡実測図

遺跡の西北隅の現在の段丘崖直近に位置。耕作土直下の暗褐色シルト質土層上面（本遺跡の遺構検出面はすべてこれと同一であるので、以下の説明では、それには特に触れないこととする）に検出。

西方に隣接するAi62住居跡と一部重複し、またAi65（以下には住居跡は省略する）自体に於いても、新・旧の重複が見られる。図中の竪穴住居床面上に、北辺・西辺が一部2本見られるのがそれであり、新期のものは旧のものよりやや南方と、南へずれた位置で重複している。

重複関係その他の理由で平面形は判然とはしないが、前述の一部残存の壁からすると、少な

一 今泉遺跡 一

くとも新期のものは一辺4.5m（推定）・床面積20.25m²（推定）程の正方形となるようである。住居中軸線（推定される北壁と南壁の中点を結んだ線）の方向は、ほぼ磁北に一致する。

遺構内に堆積している層は、大別して三層になる。

第1層 黒褐色有機質土層。軟質でやや粘性がある。壁際に一部壁の崩土と思われるブロックがある。

第2層 褐色有機質土層。締まりがあってやや硬質。粘性は弱い。新期の住居跡内にのみ分布する。

第3層 黒褐色シルト質土層。締まりがあってやや硬質。粘性は弱い。この層の上面がある時期の生活面と思われ、土器片他が同一のレベルに分布する。

床面は比較的平坦面が多い。床面上（ある時期の生活面）に5箇所の焼土塊と炭化材7個がみられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、ほぼ24cm前後（遺構検出面まで。以下壁高について同じである）の壁高となる。他に5箇所（うち1個は旧のもの）の浅いピットがある。

それらの各ピットはいずれも浅く、位置も不整で、柱穴と認めるべき積極的な根拠を示すものはない。

カマドと明確に認め得るものは存在しない。新期住居跡の北東隅一帯と、南東隅の一部に焼土の分布がみられたが、何れも7層の上にのり床面は焼けておらず、カマド・炉とは認め難い。

その他周溝・貯蔵穴など特記すべき施設は存在しない。

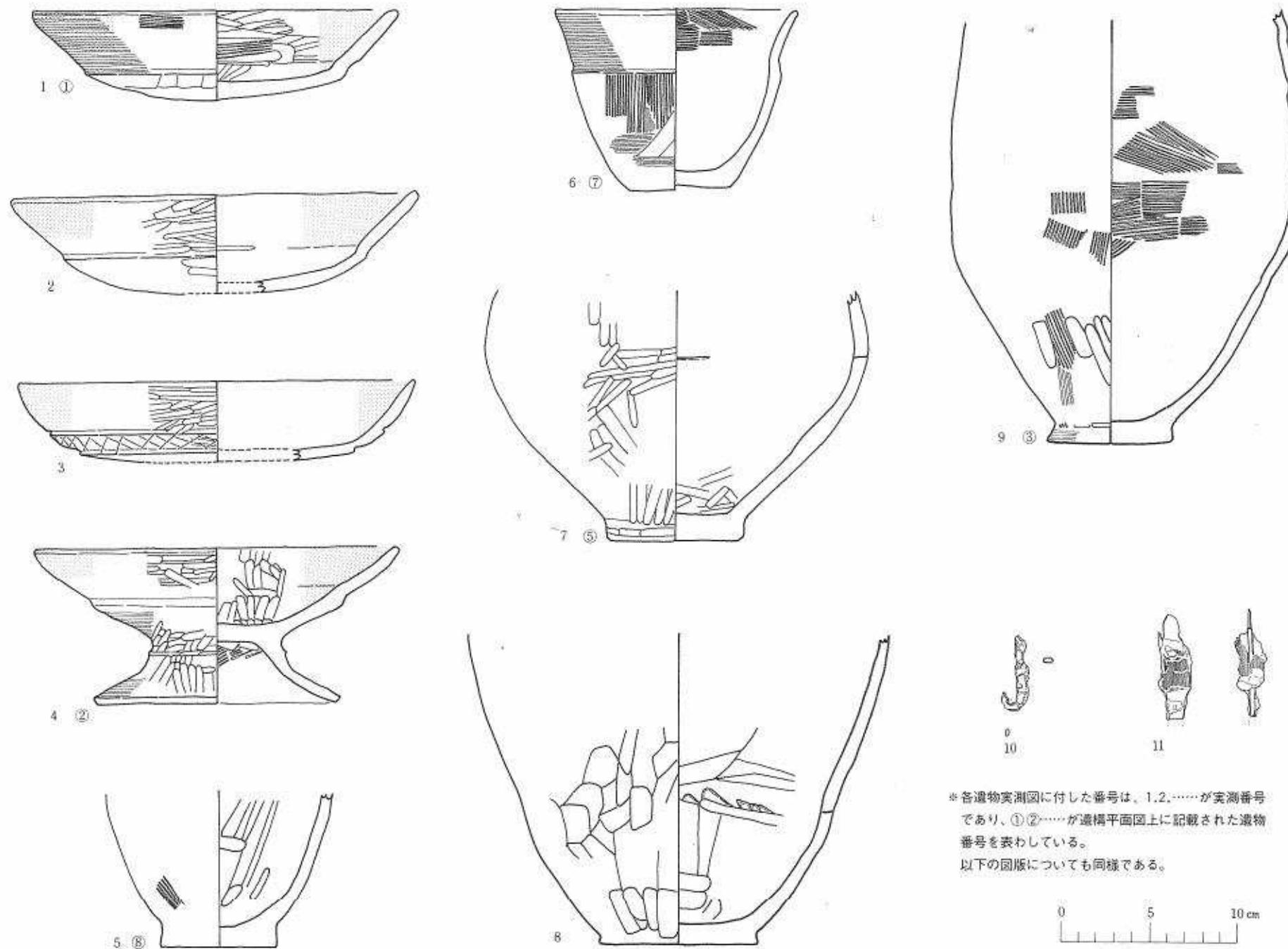
年代決定に資するものとしては、新・旧の床面上出土の土師器類が挙げられる。

（遺 物）

I 土 師 器 (第4-2図 1~9)

第1表

分類	土 器 番 号 上 の 図 上 の 番 号	実 測 図 番 号	調 整								器 高 度	口 徑	底 径	備 考				
			口 緑 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部									
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面								
甕	⑦	6	刷毛目	横ナテ	刷毛目のち ニガキ	刷毛目	刷毛目のち ニガキ	刷毛目 部分ナテ	ナ テ	ヘラケズリ	10.2	13.8	5.8					
		8	欠	失	欠	失	欠	失	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		9.0				
	⑧	5	欠	失	欠	失	欠	失	ヘラミガキ	横毛目	ヘラミガキ	ヘラケズリ(?)		6.7				
	③	9	欠	失	欠	失	欠	失	刷毛目	刷毛目のち ニガキ	刷毛目	ニガキ(?)		7.0				
瓶	⑮	7	欠	失	欠	失	欠	失	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ		7.8				
环		3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	4.5 +2	22.6	15.6 内 黒			
	①	1	ヘラミガキ	横ナテ	ヘラミガキ	横ナテ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	5.1	20.3		内 黑			
		2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.6	23.2	内 黑			
高环	②	4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	刷毛目のち ニガキ(?)	ヘラミガキ	横ナテ	8.8	20.8	14.0	内 黑			



* 各遺物実測図に付した番号は、1, 2, ……が実測番号であり、①, ②, ……が遺構平面図上に記載された遺物番号を表わしている。
以下の図版についても同様である。

第4-2図 Ai65竪穴住居跡出土遺物実測図

II 鉄 器

釣針形（同10）：逆刺様の突出部まで備えているので、釣針と断言できるであろう。正確な断面形は銷などのために判然としないが、やや薄手で長方形ないし長楕円形を呈するように見える。上端部を欠失しているので、系との連結部分の形状は知り得ない。

刀子形（同11）：断面形が楔形をなし、柄と思われる木質も残存しているので、刀子と推定した。比較的良好な残存状態である。柄と接する部分の身の上部に棒状の鉄の部分があるが、何らかの特別な工夫かもしれない。

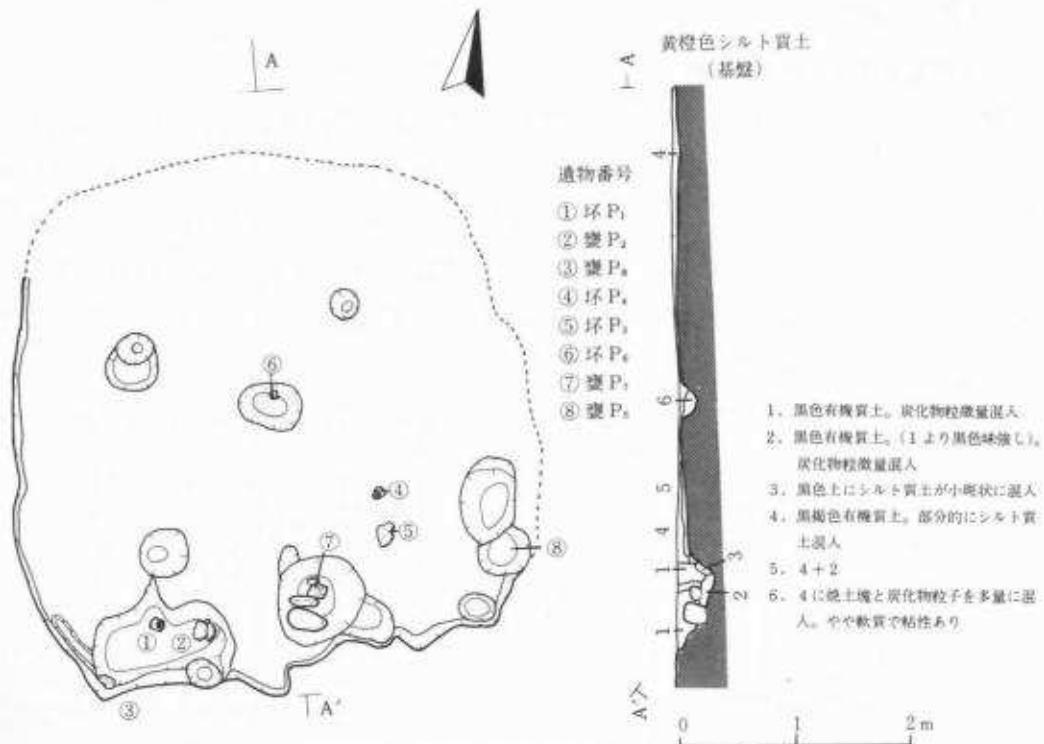
Ai62竪穴住居跡（第5図）

前述のAi65の西隣に検出。残存状況が非常に悪く、特に北半にそれが著しい。東端部付近で一部Ai65と重複。その他、増・改築等の事実はみられない。

平面形は特に北・東両辺が不明のため判然とはしないが、残存両辺からすると一辺4m（推定）前後、床面積16m²（推定）のやや中央部の膨らんだ方形になるものようである。中軸線の方向は、磁北からやや西に偏する。

遺構内に堆積した土層は、大略二層からなる。

第1層 黒褐色有機質土層。遺構全体にみられ、本来的な遺構覆土であったと思われる。



第5-1図 Ai62竪穴住居跡実測図

—今泉遺跡—

第2層 黒色有機質土層。床面上にうがたれたピットの覆土である。

床面は、南壁沿いの部分に多くピット類がうがたれている他は、比較的平坦部分が多く、北半にそれが著しい。壁高は、南壁の一部では10cm前後、北半部では判然としない程非常に浅い。床面上に大小11個のピットが存在する。

そのうち壁際を離れ中央部に寄っている3個は、平均径40cm、平均深さ（床面から）20cmを測り、柱穴となる可能性がある。南東部にはそれがみられない。尚、西北のものには、掘り方・柱あたりも一応見て取れる。配置は大略対角線上にのるといつてよい。

カマドと明らかに見做し得るものはないが、床面には中央に50×30cm、深さ10cmの梢円形の浅い掘り込みがあり、その中に焼土が充填していたので、あるいはこれが炉として用いられた可能性がある。

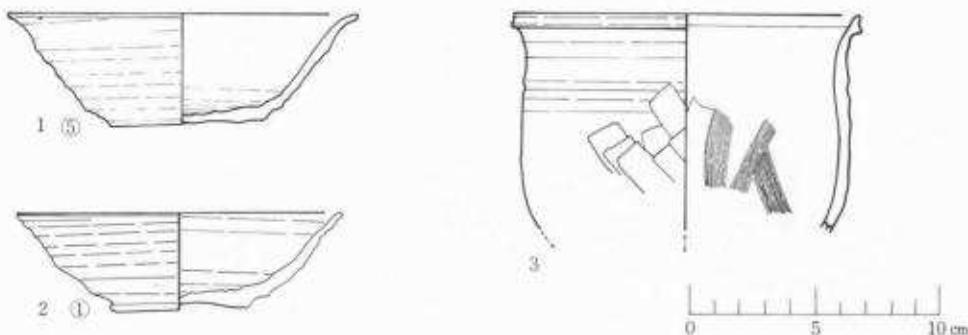
床面上にみられるその他の施設としては、南壁の中央付近に長梢円形ないし長方形の、西南隅付近にはほぼ円形の掘り込みがあり、その中に前者には土器片、後者には土器片と長大な碟が入っていた。これら両者は、一応貯蔵穴的なものと考えておく。尚、東南隅にも円形等の掘り込みがあり、貯蔵穴とも考えられるが、遺物等もないので性格不明としておく。

当遺構の年代推定に資するものは、床面上出土の环と貯蔵穴中出土の甕の各土器類である。

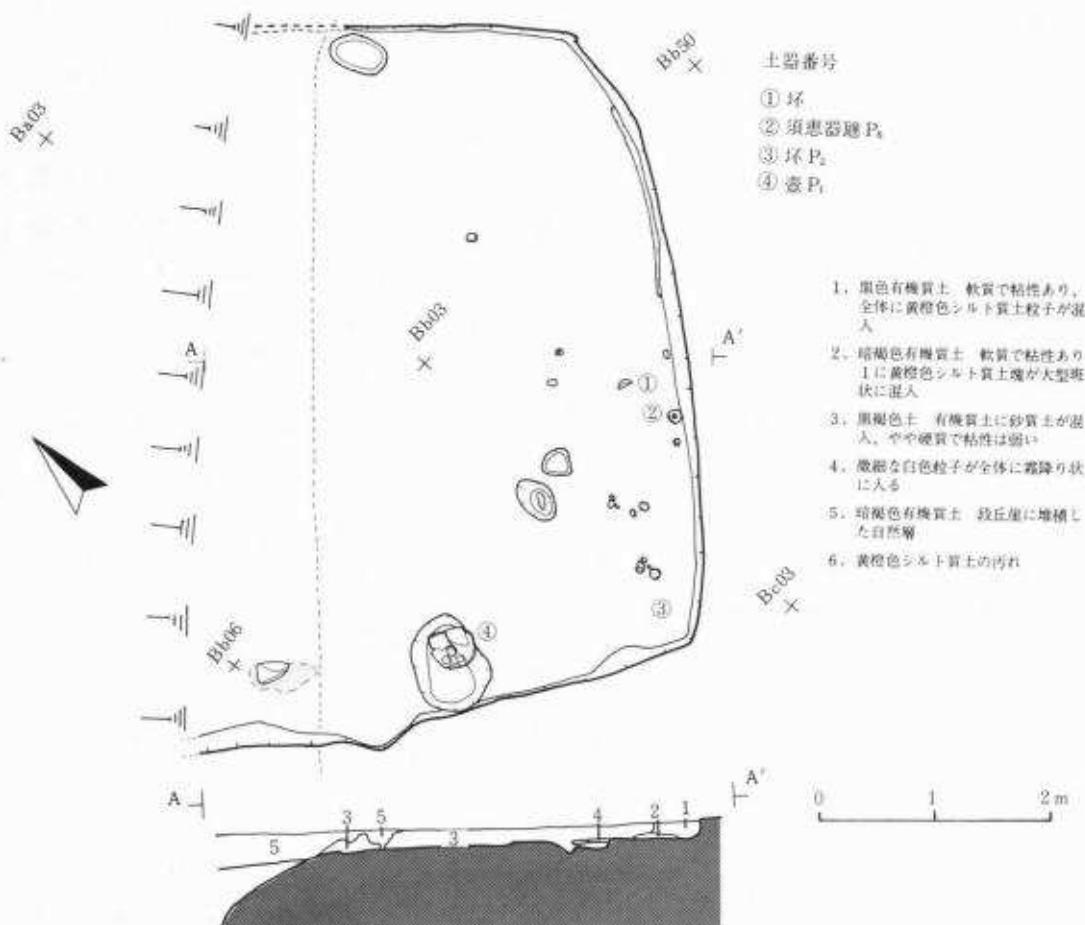
(遺 物)

I 土師器質のロクロ成形土器

环1・2（第5-2図1・2）：ロクロ成形。回転糸切による切離して、調整はみられない。両者共に体部は底部からやや外反気味に立ち上がる。器表面には内外共にロクロ成形時の凹凸がみられる。内面には箇ミカキ調整や、黒色処理等はみられない。（尚本土器のように成形にロクロを使用したことが明らかで、しかも色調が須恵器のそれのような所謂「燃べ色」を呈しないものを、いかなる範疇に含めればいいかについては種々議論のあるところなので、ここでは一応標記のような名称を与えておいた。）



第5-2図 Ai62豊穴住居跡出土遺物実測図



第6-1図 Bb06竪穴住居跡実測図

壺（同3）：所謂「長胴形」までいかない中型の壺。成形にロクロを使用。体下半部にやや膨らみを持つ。口縁は緩く外反するが、口唇部には直立した突帯を繞らし、ロクロ成形のものにみられる強く屈曲する口縁を印象づけている。体部上半外面には横走するロクロ成形痕、下半には縦方向の箆削り調整痕がみられる。内面上半は外面に同じ、下半には縦・斜方向の箆ナデ様の調整痕がみられる。

以上は一括遺物と見做されてよいであろう。

Bb06竪穴住居跡（第6図 第2表）

遺跡敷地の北縁中央部に検出した。現在の段丘崖に臨み、その北半は胆沢川の侵蝕のため削

—今泉遺跡—

り取られ欠失している。

他の住居跡との重複関係や増改築の事実は認められないが、東南辺の一部はロクロ土師器・須恵器等を若干量出土する焼土を伴うピットに隣接する。

既述の通り侵蝕により北半を欠くので正確な平面形は不明であるが、残存する東・西壁と南壁からすると、一边5~5.5m(推定) 前後、床面積25~30.25m²(推定) 程度の、中央にやや膨らみを持つ方形になるように思われる。住居の中軸線の方向は、磁北から約50°西に偏している。

遺構内に堆積した土層は大別して二層からなる。

第1層 黒色有機質土層。軟質で粘性を持つ。藪の根等の作用であろう。

第2層 黒褐色土層。有機質土に砂質土が混じりやや硬い。遺構の主たる覆土である。尚、北端の段丘崖へと落ち込む部分には、草木根による有機質土や、基盤の黄橙色シルト質土の崩れ等の土層がみられる。

床面には一部凹凸もみられるが、おおむね平坦である。凹凸部の一部に黄橙色粘土質シルトを貼った部分もみられるが、全面を貼り床にはしていない。

壁の立ち上がりは急であるが、自然力による削平のためか壁高は深くて20cm前後と比較的深い。床面上には大小4個のピットがある。それらのうち、配置からみて柱穴の可能性のあるものは西南部のものであるが、それとても浅いものであり、積極的には主張し難い。

カマドないし炉と認めてよいものは残っていないが、西壁の中央部付近の床面に焼土が堆積し、その上に礫がのっている。後述の貯蔵穴様のものとの位置関係を考え合わせると、あるいはこれがカマドの痕跡とも考えられるが、袖部などの痕跡は全くみられないため、それも積極的には主張し難い。ここでは侵蝕により削り取られた可能性の方が大きいのであろう。

その他西壁直下中央やや南に楕円形の掘り込みがあり、その中に大形の壺型土器が据えられていた。これが所謂「貯蔵穴」の典型的なものであろう。これと正反対の東壁中央部にも楕円形の掘り込みがあるが、これには遺物もなく、貯蔵穴とする積極的証拠に欠ける。

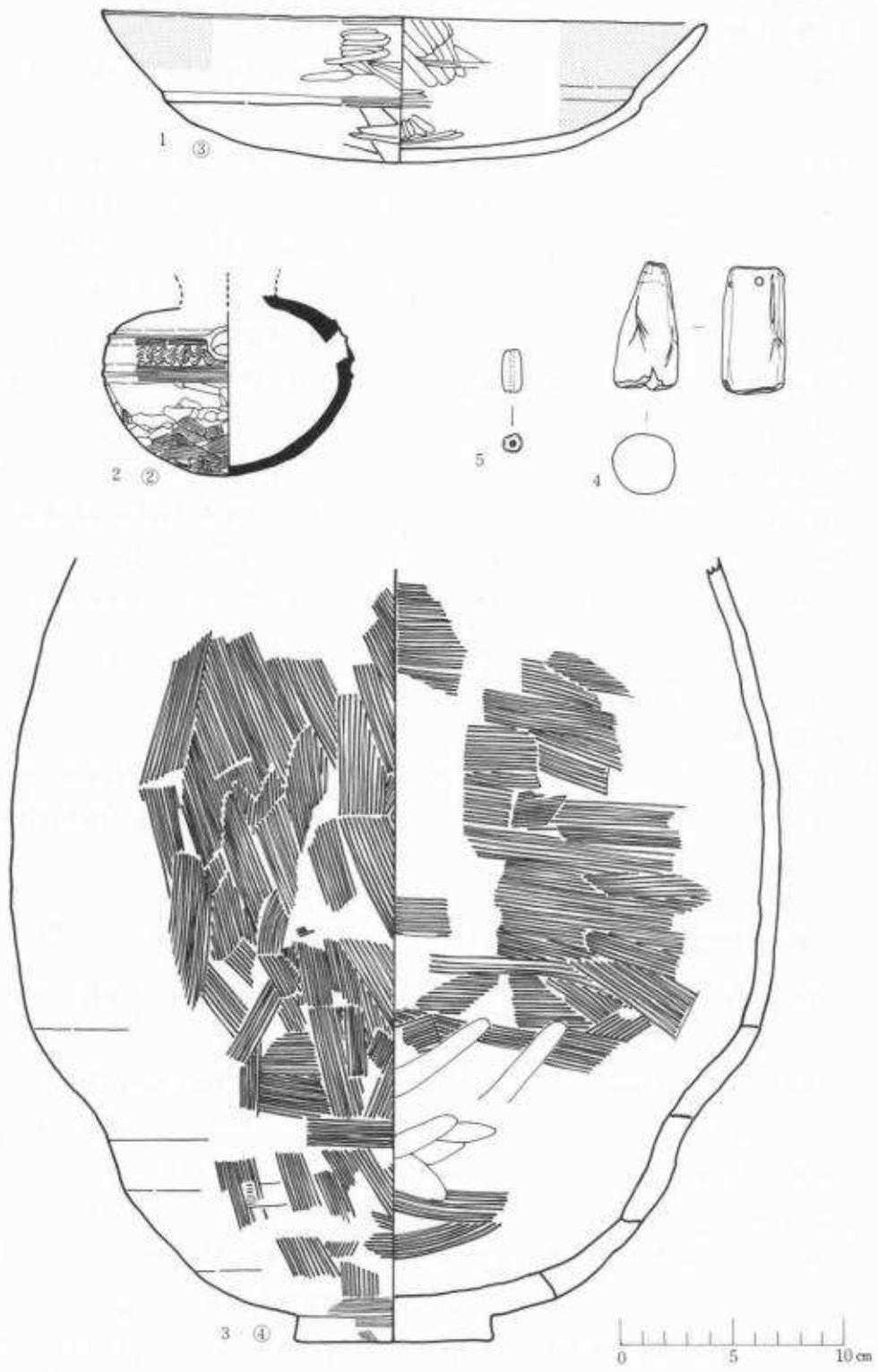
さらに南壁直下東半部に周溝状の凹みが一部みられる。その他特記すべき遺構はない。

遺構の年代推定の資料としては、床面上出土の土師器壺、貯蔵穴出土の土師器壺等があり、問題はあるが床面出土の須恵器甕もそれに加える。

(遺物)

I 土 頭 器 (第6—2図: 1, 3) 第2表

分類	土器 番号 平 面 圖 上 面 番 号	番 号	調 整										器 口 底 高 徑 徑 徑	備 考		
			口 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部							
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	高	口 徑	底 徑	
壺	④	3	磨毛口	磨毛口	磨毛口	磨毛口	磨毛口	磨毛口	磨毛口	磨毛口	磨毛口	磨毛口	5.0	8.9		
环	⑤	1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	6.5	26.8	内黒口縁
			ヘラミガキ	ヘラミガキ									6.5	26.9		
			ヘラミガキ	ヘラミガキ									ヘラミガキ	ヘラミガキ		



第6-2図 8b06竪穴住居跡出土遺物実測図

II 頸 惠 器

頸（同2）：南壁中央直下の床面上に検出した。頸部を欠くが、それは恐らくあまり高く（長く）なるものではないであろう。

胎土の質・焼成ともに良好で、緻密で硬い。色調は濃い灰色で、典型的な焼け色。

肩部にはロクロ成形痕が残存し、肩部直下から体部中央までに文様帶が区画される。文様帶の上下限は、その両側を沈線状に凹めることによって強調される隆線状のものによって区切られる。従って上下限ともに、隆線状のものの両側には、工具でなでた痕跡が顕著に残存している。文様帶内部には横走する櫛描波状文が施される。また上限の隆線は、そのまま注口部周縁の隆線へと連続する。体部下半から底部にかけては、鋸削り調整が入念に施され、丸底に仕上げられる。

III 石 製 品

鍤（同4）：適当な名称を知らないのでこう呼ぶ。棹秤りのおもり状ないし釣鐘状の形状を有し、上端から下方へ1孔、それと直交する形でもう1孔がうがたれ、逆T字状となり、都合3個の孔口を有する。下底面中央に溝状の刻み目がつけられている。表面は全面入念に研磨され、光沢を有する。記号風の刻み目もあるが、定かではない。

ちなみに重量は51.5gである。

IV 装 飾 品

管玉状製品（同5）：土製である。表面は研磨され、土師器坏内面の黒色処理と同様の漆黒を呈し、光沢がある。縦断面は長楕円形に近い長方形をなす。彩色その他の事実は認められない。

Bc53豎穴住居跡（第7図・第3表）

遺跡敷地中央やや北寄りに検出。耕作によりかなり削平されており、表土除去後直ちに床面上に位置する遺物の上端が露出した程であった。

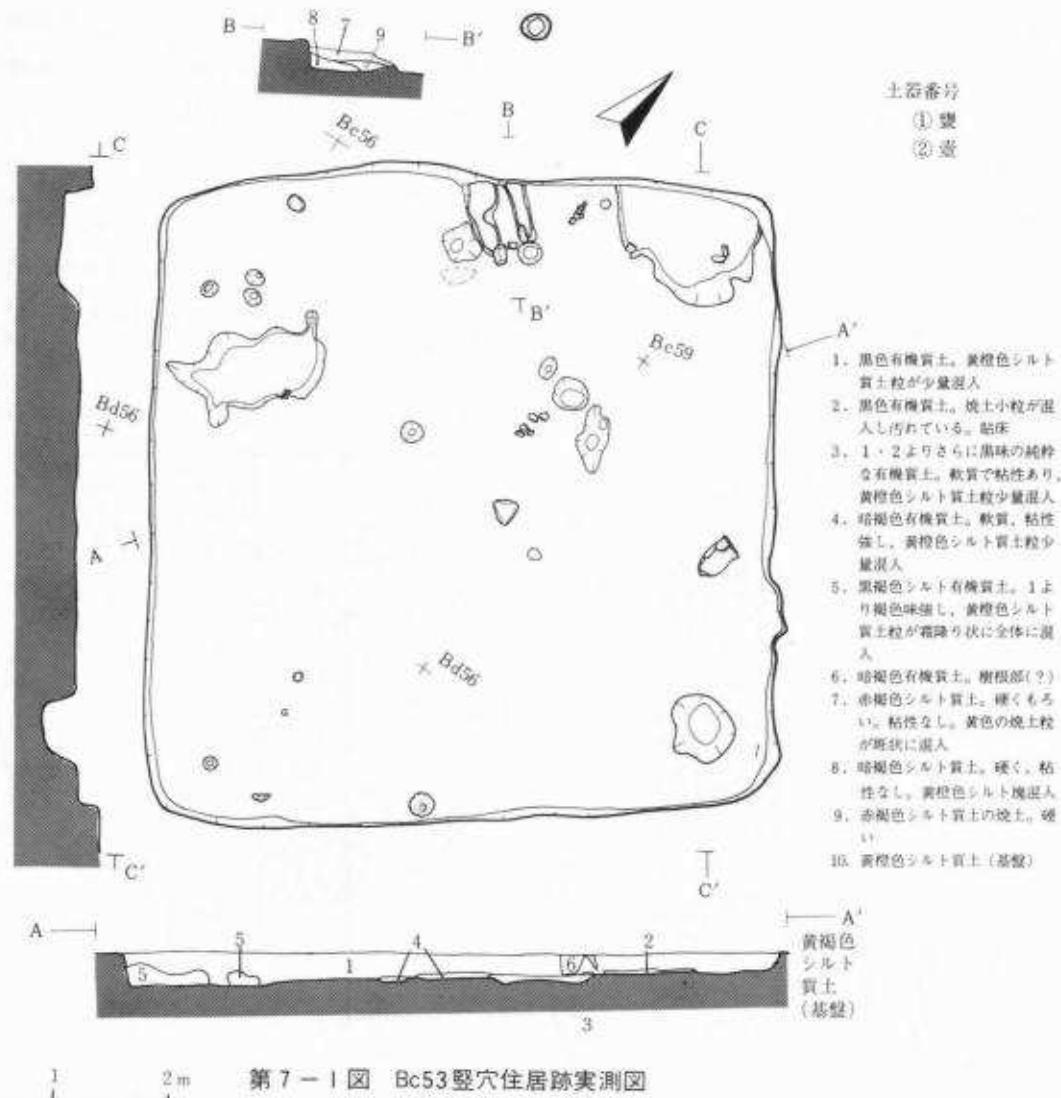
他の遺構との重複関係あるいは増改築の何れも認められない単独の遺構である。

平面形は攪乱を受けずかなりきれいに残存し、端正な正方形をなす。規模は一辺5m、床面積25m²程度であろう。住居の中軸線の方向は、磁北から48°西に振れる。

遺構内に堆積した土層は大別して二層となる。

第1層 主要覆土である黒色有機質土。ベースはシルト質土であったのだろうが、有機質土化しており、粘性も強い。基盤の黄橙色シルト質土粒が少量混入。

第2層 床面に接する数量からなり、恐らくは貼床的なものであろう。焼土粒混入の黒色有機質土、暗褐色有機質土等があり、何れも粘性が強い。



床面の状況は、担当者の不注意から遺構東半のそれを3cm程掘り下げ過ぎたので正確は期し難いが、あまり凹凸は無いことだけは確かで、比較的平坦面が広かったといえよう。壁は残存部は良好な状態を示しており、垂直に近く立ち上がり、壁高は前記の通り削平を受けたために浅く14~20cm前後である。床面上には大小13個のピット類がある。

そのうち柱穴と明らかに解し得るものは東南部の1個のみで、痕跡かと思われるものは西北部の1個である。前者は径50cm、深さ30cm程で、柱あたりは判明しなかった。その他のピットには、少なくとも主柱穴と見做し得るものはない。

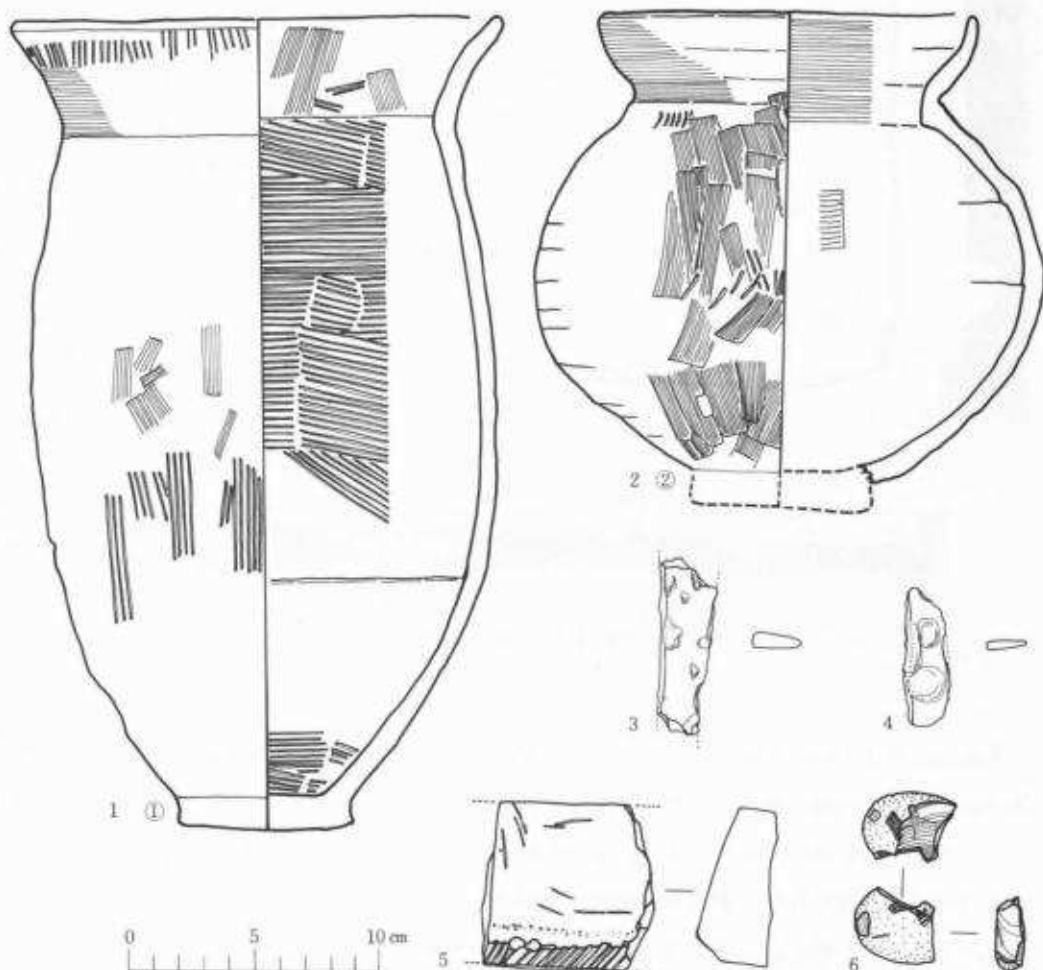
カマドは北壁中央に構築されている。壁に接して黄色粘土質シルトを2列土手状に南へ70cm

程延ばして袖部となし、袖部南端には河原石を門の字状に立てて芯とする。その場合の礫相互の間口35~40cm、深さは25~30cm。火床はやや掘り凹めてあり、そこは全面焼けている。支脚やその機能を果たすべき礫などは火床上にはみられないが、土師器襲片が1個存在した。

煙道は入念に調査したが検出できなかったので、これは本遺構のカマドには土中をうがって構築するような煙道はなかったというべきなのであろう。

その他の施設としては、北東隅に不整形で浅い掘り込みがあり、その底面から土師器片を若干量検出した。これだけでは積極的証左とはいひ難いが、カマドとの位置関係を考慮して、貯蔵穴的な機能を想定したい。

その他には、床面ほば中央部に入頭大の礫がみられるが、その周囲には何らの異常も認めら



第7-2図 Bc53竪穴住居跡出土遺物実測図

れず、性格不明といつておく。

周溝はない。

最後に、東壁中央やや南部が外方に張り出しているが、これは本遺構のように少なくとも平面形の残存状況の良好なものに於いては、そこに何らかの意味があるよう気がしてならない。

遺構年代推定の手掛りとしては、床面出土の土師器甕と、鉄製品等がある。

(遺物)

I 土師器(第7-2図・1・2) 第3表

分類	土平 器 番 号	実測 図 番 号	調査								器 高 度	口 径	底 深 度	備 考				
			口 縁 部		体 部 上半		体 部 下半		底 部									
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面								
甕	①	1	刷毛目のち ヘラナデ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目	刷毛目のち ヘラナデ	刷毛目のち ヘラナデ	刷毛目	刷毛目	ヘラナデ	32.5	19.6	6.9					
壺	②	2	横ナデ	横ナデ	ヘラナデ		ヘラミカキ ヘラナデ	欠失	欠失	20.0	15.2	7.5						
壺														埴輪				

II 石製品

砥石(同5)；床面出土の破損品。三面を研磨している。一面には原石を切り出すか、周縁の形を整える際につけられたと思われるノミ痕状の平行する凹みがみられる。材質は流紋岩質凝灰岩である。

III 鉄器(同3・4)；覆土出土であるが参考のために掲げた。断面形をなし、刀子的なものであろうか。時代不明。

IV 黒曜石片(同6)；これも覆土出土。黒曜石原石をほぼ半割し、その断面をあたかも搔器ないし削器の刃部のようにつくり出している。一部縁片には使用痕とも見做し得る細かい破碎部がある。

Bc71堅穴住居跡(第8図・第4表)

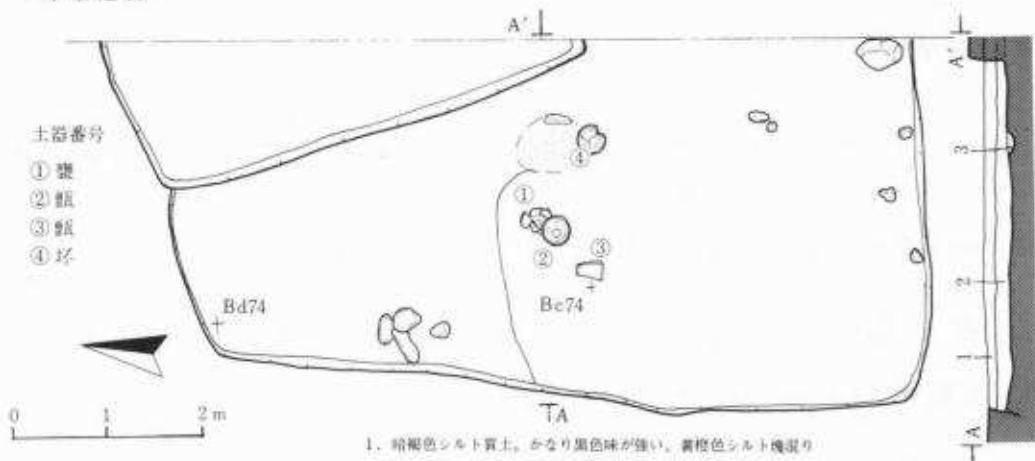
遺跡敷地東辺部中央やや北に検出。耕作により削平され残存状況は不良。東半は高速道路用地外にわたるので、その部分は未調査である。

二棟の住居跡が重複しており、東に偏するものが新期のものである。

平面形は両者ともに不明としか言えないが、強いて述べると、新期のものは一辺3.5m(推定)床面積12.25m²(推定)前後の規模の方形になるのではないかと思われ、その中軸線は磁北から25°程西に偏するようである。

旧期のものも同様に推定すると、一辺3.4m、床面積11.56m²程の方形をなすと思われる。遺構中軸線の方向は、磁北にはほぼ一致し、約5°西に振れるのみである。

—今泉遺跡—



第8-1図 Bc71竪穴住居跡実測図

遺構内に堆積した土層はすべてで三層である。

第1層 暗褐色シルト質土層。かなり黒色味が強い。締まりがあり、粘性はあまりない。黄橙色シルト質土塊の混じり具合の差が新旧両遺構の区別の手掛りであって、前者の方がやや多い。

第2層 黒色に近い暗褐色シルト質土。第1層より黄橙色シルト質土塊量がやや少ない。以上が遺構内覆土である。

第3層 褐色シルト質土。基盤の黄橙色シルト質土の汚れたものであろう。かなり粘性がある。この層の上面がある時期の生活面であろう。

床面形状は両者ともに大略平面をなし、ピット類その他はない。壁高は残存状態が良くないので浅く、平均14cmを測るのみ。

Bc71住 第4表

分類	上 平 面 図 上	番号 圖 上	調 整												器 高	口 徑	底 深	備 考				
			口 縁 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部		内 面		外 面									
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面								
袋			横ナリ	横ナリ	ヘラナリ	刷毛目																
			横ナリ	横ナリ	ヘラナリ	刷毛目																
	①	3	横ナリ	横ナリ	刷毛目 のち?	刷毛目 のち?	矢 先	矢 先	矢 先	矢 先	矢 先	矢 先	矢 先	矢 先	15.5							
片	③	1	ヘラニガキ	横ナリ	ヘラニガキ	横ナリ	ヘラニガキ	ヘラニガキ	ヘラニガキ	ヘラニガキ	ヘラニガキ	ヘラニガキ	ヘラニガキ	ヘラニガキ	5	17.5		内 黑				
瓶	②	2	ヘラニガキ のち 横ナリ	横 ナ リ	刷毛目 のち ヘラニガキ	刷毛目	ヘラニガキ	刷毛目							14	19 18.5	7.5					
	③																					

従って、柱穴を想定させるものはない。

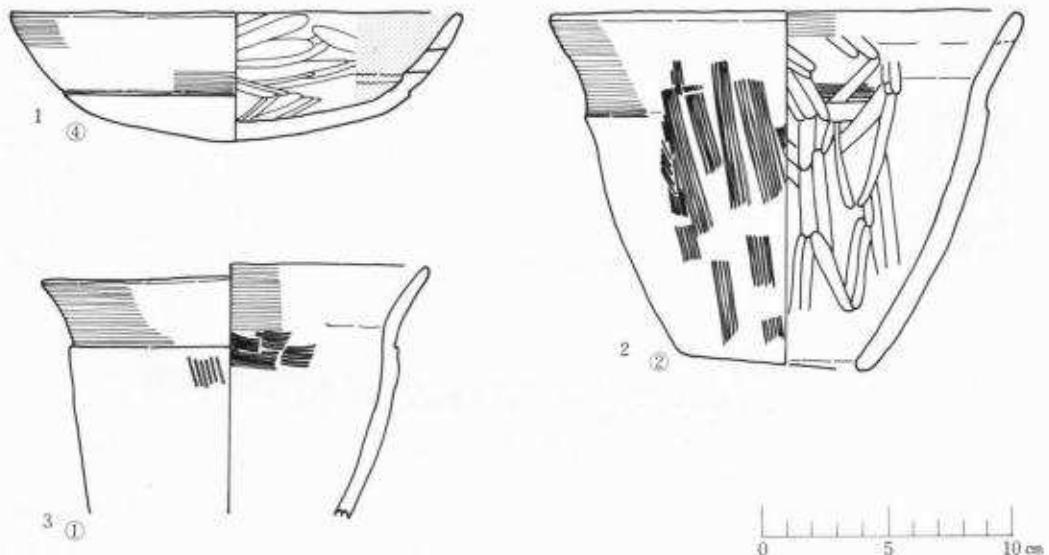
炉ないしカマドと見做し得るものは存在しないが、旧期住居跡北辺のはば中央と思われる部分に焼土の集積がみられ、その上に礫がのり、しかもその周辺に遺物が多くみられる。あるいはこれがカマドの痕跡かもしれない。

その他の施設は特にない。

年代推定の資料となし得るものは、新期には皆無、旧期では床面上出土の土師器甌・瓶・壺などである。

(遺 物)

I 土 师 器 (第8-2図・1・2・3)

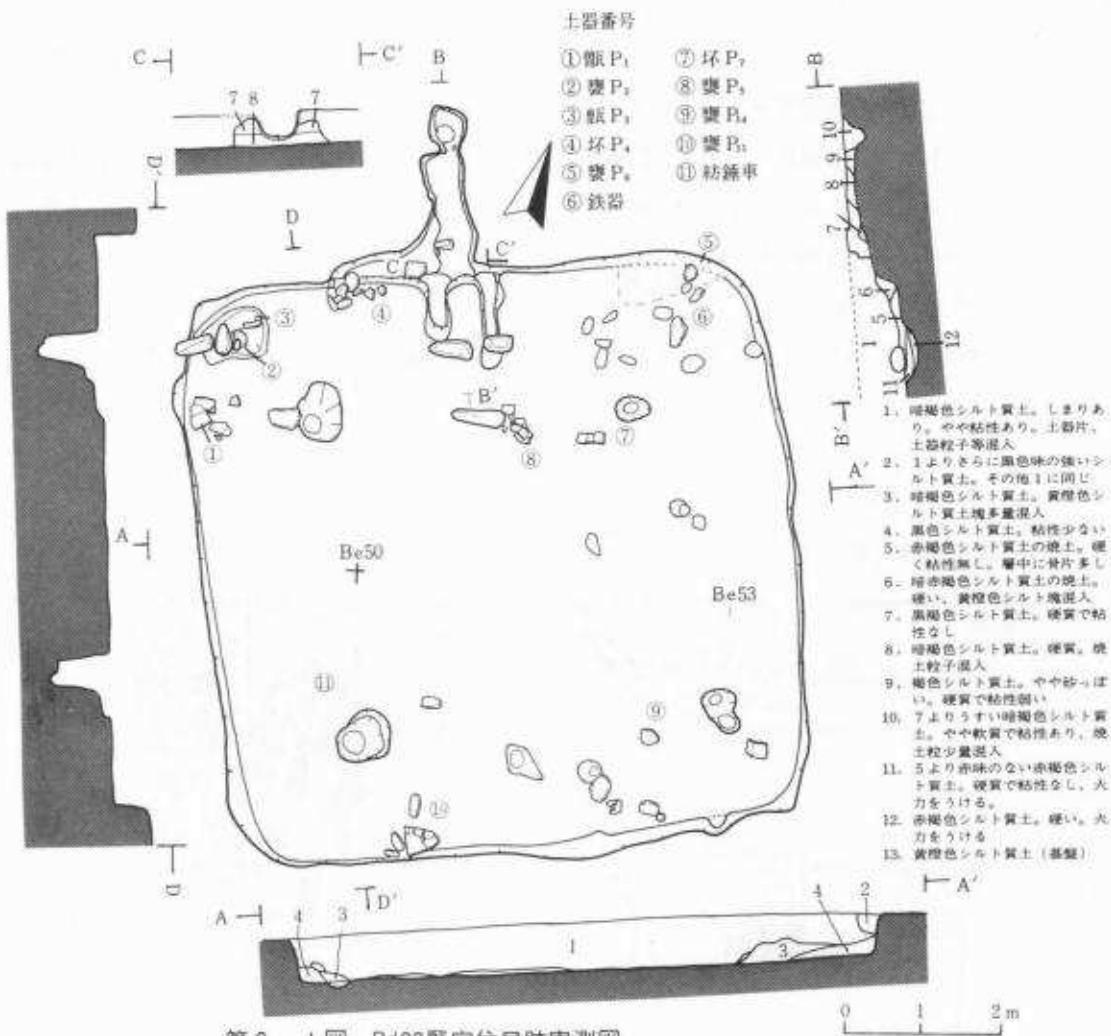


第8-2図 Bd03竪穴住居跡出土遺物実測図

Bd03竪穴住居跡 (第9図・第5表)

遺跡敷地内ほぼ中央やや北寄りで、既述のBb06の南隣に検出。本調査の最初に検出した遺構である。他の遺構との重複関係・遺構内の増改築の事実は何れもなく、一部の掘り過ぎを除けば保存状態の良好な単一の遺構である。

遺構の平面形は、四隅にやや丸味を持つきれいな正方形をなし、その規模は南北4.7m×東西4.7m、床面積22.09m²程度になる。住居の中軸線（北壁中央にあるカマドの中心点と南壁の中点を結ぶ線は）は、磁北より約24°西に振れる。



第9-1図 Bd03竪穴住居跡実測図

遺構内に堆積した土層は単純で、大別して二層からなる。

第1層 暗褐色シルト質土層。覆土の大半を占め、本遺跡の覆土に最も多くみられるもの一つ。締まりがあるが、粘性もややあり、土器片・土器粒子・炭化物粒等が混入。

第2層 暗ないし黒褐色シルト質土層。床面に接して堆積しているが、壁際に多いという特徴もある。黄橙色シルト質土塊もみられ、壁の崩土でもある。床面上にみられるものは生活による汚れであって、貼床とまではいえないと思われる。

床面の残存状況は非常に良好で、殆んど平坦である。壁の残存状況も良く、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30~35cmである。床面上に大小8個のピット・掘り込み類があり、他には25個の礫と北東隅壁直下の焼土集積部がみられる。

前記のピット・掘り込み類のうち、少なくとも主柱穴と認め得るものは、ほぼ対角線上にのる形で分布しているやや大きめのピット4個であろう。特に西半（西北隅と西南隅）の2個は掘り方・柱あたりの両者を認めることができ、良好な残存状態を示している。それによると、

掘り方はほぼ円形をなし、その径30~40cm、柱あたりの径20cm前後、深さ40~50cm程である。

カマドは、他の多くの例と同一で、正確に北壁の中央に構築される。黄色粘土質シルトを袖部構築用に用いること、焚口部に長大な川原石を「門の字」状に作り出すことも同様である。但し現状では水平に架せられる礎はその部位に存在しなかつたが、焚口南部床面上にある礎があるのである。焚口間口60cm・高さ25cm、カマド奥行70cmの規模である。

煙道は本遺構に於いては存在し、北壁中央部から北に基盤を掘り込んで作ってある。カマド火床が住居壁とぶつかる部分で一段(15cm)高くなり、それから煙道としてやや浅めになりながら、そのまま北方へ1m延びる。その先端部には煙出しが作られ、円形で上径20cm・下底径10cm・深さ20cmの規模である。

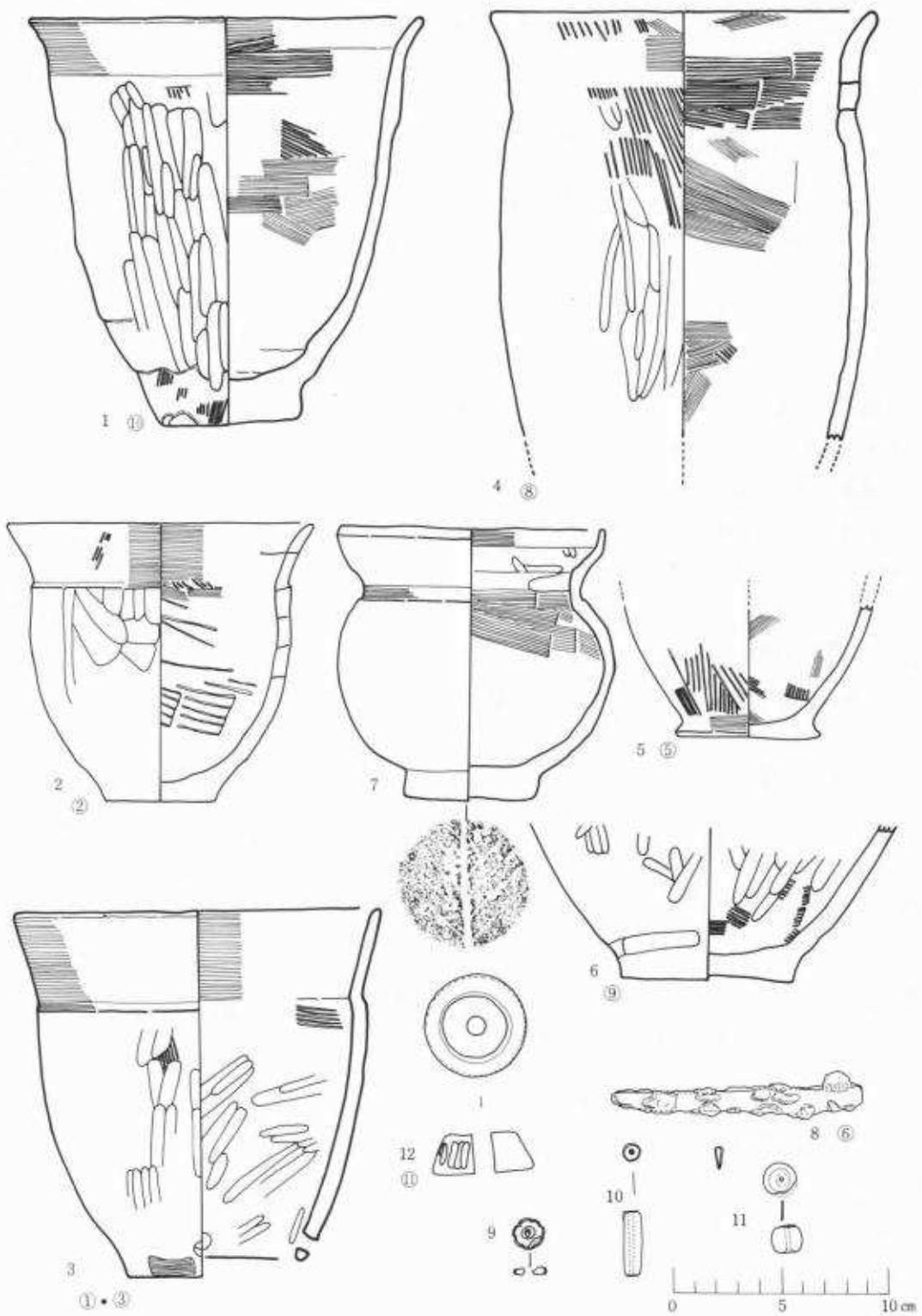
床面上のその他の施設としては、西北隅に楕円形の掘り込みがあり、その中に礎・土師器等がみられた。恐らく貯蔵穴と見做してよいのである。反対側の東北隅の床面に焼土があり、その上に礎が3個のっていたが、床面は焼けておらず、性格不明の焼土としておく。

年代決定の資料としては、床面上・貯蔵穴中出土の土師群がある。尚、本住居跡には須恵器の出土はみなかった。

(遺 物)

I 土 师 器 (第9-2図・1~7) 第5表

分類	土平 器 圓 錐 上 等 号	実 測 圖 番 号	調 禁								器 口 徑 高 度 従 量 従 量 従 量	備 考			
			口 線 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 面						
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面					
集	②	2	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目のち 横ナデ(?)	刷毛目のち 横ナデ(?)	ヘラナデ	刷毛目のち ヘラナデ	ヘラナデ(?)	刷毛目		12.9	12.7 14	5.1 (?)		
	④	6	欠失	欠失	欠失	欠失	刷毛目のち ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ の極限(?)	ヘラミガキ			8.0		
	⑤	5	欠失	欠失	欠失	欠失	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目	横ナデ(?)	刷毛目 横ナデ(?)			6.7		
			横ナデ	横ナデ	ヘラナデ	ヘラミガキ	刷毛目								
			横ナデ(?)	横ナデ(?)											
	⑩	1	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目	刷毛目のち ヘラミガキ	ヘラナデ	刷毛目のち ヘラミガキ	ヘラナデ(?)	ヘラミガキ 木葉瓶	19.0	16.4	6.3		
壺	⑧	4	刷毛目のち 横ナデ(?)	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目のち ヘラナデ	刷毛目のち ヘラナデ(?)	刷毛目のち ヘラナデ	ヘラナデ(?)	欠失	欠失	19.8	18.0			
		7	横ナデ(?) その下 ヘラミガキ(?)	横ナデ(?)	ヘラナデ(?) or ヘラナデ	ヘラミガキ or ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ or ヘラナデ	ヘラナデ(?)	ヘラミガキ	12.6	12.3	6		
瓶	①・③	3	横ナデ	横ナデ	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目のち ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ ヘラナデ			17.0	16.8	8.1		
													多孔式		



第9-2図 Bd03竪穴住居跡出土遺物実測図

II 鉄 器

刀子形製品（同8）；一側縁が薄くなり、断面形態が楔形をなすものである。比較的良好な残存状態。

III 装飾品

覆土出土のものであるが、一括して取り扱った。

花弁形製品（同9）；覆土出土の石製品。両面と周縁を入念に研磨した後、周縁の7箇所に刻み目を入れる如く細く研磨して、都合7弁の花弁状に作り出している。中央に孔がうがたれるが、それは両面からなされたもので、中心部が最も細くなり、またその両面に於ける中心部がずれている。これは、石器時代の石器にみられる特徴に一致するもので、穿孔に金属器を用いなかつた可能性がある。従って、その所属年代にはかなり疑問が生ずるが、一応ここに掲げておく。

管玉状製品（同10）；床面出土の土製品。縦断面形はほぼ長方形をなす。表面は入念に研磨され、さらにあたかも土師器坏に於けると同様に黒色処理されたかのような漆黒色をなし、光沢を持つ。彩色等は認められない。

トンボ玉状製品（同11）；覆土出土の土製品。縦断面形は正方形に近いが、やはり本來的には球形であろう。管玉状製品程には籠ミガキが施されず、光沢もない。また、黒色処理様の色調・光沢もともにない。破損部からすると、胎土は黒味がかった灰色である。彩色の痕は認められない。

IV 土 製 品

紡錘車（同12）；全面入念に籠ミガキで仕上げている。全体的に稜にやや丸味をおびる。中心の孔の周縁は鋭角的である。ちなみに重量は46gである。

Bd12堅穴住居跡（第10図・第6表）

遺跡敷地は中央の北端部、現在の段丘崖に直近の位置にあり、既述のBb06の西隣にあたる。北端部に於いて二棟が重複していることが微かに認められるが、増・改築等の事実は認められない。

平面形は、旧期住居跡については不明。新期住居跡については、北壁中央部がやや乱れていくが、大略長方形をなし、その規模は長辺（南北方向）5m（推定）、短辺（東西方向）4m、床面積20m²程となろう。住居中軸線の方向は、磁北から約33°西に振れる。

旧期住居跡内に堆積した土層は、段丘崖直近の北端部に微かに残存しているのみであるが、二層からなる。

第1層 暗褐色シルト質土層。硬質で粘性が弱く、やや砂っぽい。

—今泉遺跡—

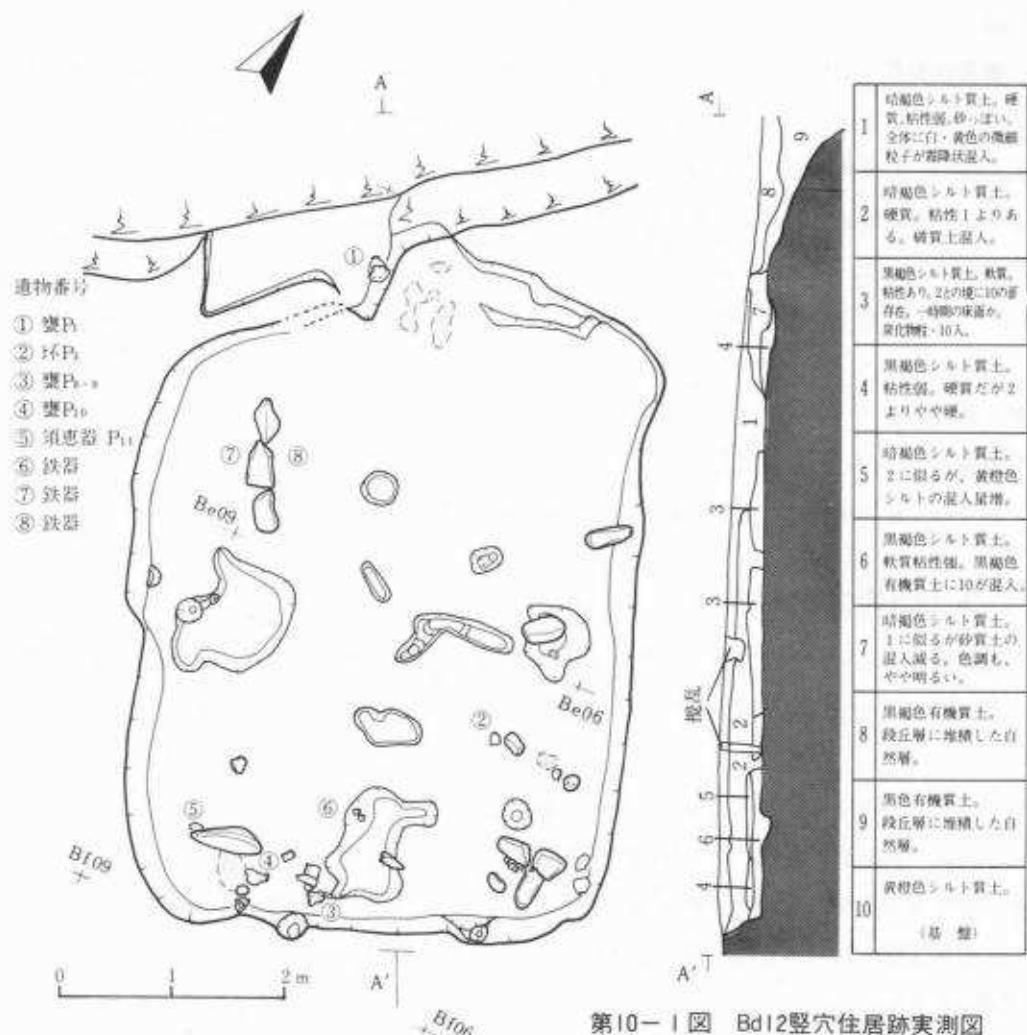
第2層 床面直上に堆積した黒褐色シルト質土層。硬質で粘性は弱い。その上面に焼土があり、一時期の生活面ないし何らかの施設の痕跡を示すものであろう。

新期住居跡内の堆積土層は大別し三層からなる。

第1層 暗褐色シルト質土。硬質で粘性弱く砂っぽい。

第2層 暗褐色シルト質土。砂質で第1層よりは粘性が強い。以上の二層が主体的な遺構覆土である。

第3層、床面直上に堆積した土層。この上面が一時期の生活面である。貼床と主張できる程には全面に分布しないし、綺まりもない。黒褐色あるいは暗褐色のシルト質土で、おおむね軟質で粘性が強い。炭化物粒その他が混じる。



第10-1図 Bd12縦穴住居跡実測図

床面の状況は、旧期住居跡については不明。新期住居跡は、他例に比しピット類・礫・焼土等が多く変化に富む。壁高は旧期住居跡については不明であるが、焼土のある部分で遺構検出面から測ると30cm程になる。新期住居跡は南壁で測ると40cm程である。床面上や壁直下に合計14個のピット・掘り込みがあり、別に5箇所に礫の分布がみられる。

それらのうち、何らかの形で柱穴に関連すると思われるものは5個あり、うち3個は床面上に、2個は壁直下に存在する。それらの平均径は24cm、深さは5~10cm。現状で規則的な配置を明らかに示すものは壁直下の2個のみであるが、床面上のものもそれに礫の分布を加味して考える（礫がそれぞれ四隅に近く分布する点）と、少なくとも主柱穴は大略対角線にのるような形で、四隅に1本ずつあったと推定できる（後述のBi24などに於いて、柱穴掘り方中に礫が存在する例がある）。また、南壁直下の2個のものは、上家構造ないし出入り口等の推定に資料を提供できるものと思われる。

炉ないしカマドについては、旧期住居跡では不明であるが、焼土が一部残存し、その部分の床面が浅く凹んでいることを把えると、あるいはカマド火床の痕跡かとも思われる。すると、その設置位置は、少なくとも北壁のいすこかということになる。

新期住居跡については、西南隅と東南隅に焼土塊がみられるが、何れもカマドないし炉と見做すことはできない。

床面上のその他の施設については、まず周溝はみられないし、貯蔵穴と見做し得るものもない。ただ床面中央部に長楕円形の掘り込みがみられるが、現状では性格不明としかいえない。同様に、床面上に分布する礫についても、その周辺に何らの異常も認められないので、作業台その他の機能を推定することもできず、性格不明である。それより既述したように柱穴関連のものと見做した方がよいのであろう。但し、西北隅の3個が一列に配列されたような印象を与えることは、やや人為的なものを感じさせる。

遺構の年代推定の手掛りとしては、旧期住居跡については焼土西隣出土の土師器甕が、新期住居跡については床面出土の土師器甕・环・須恵器甕が挙げられる。

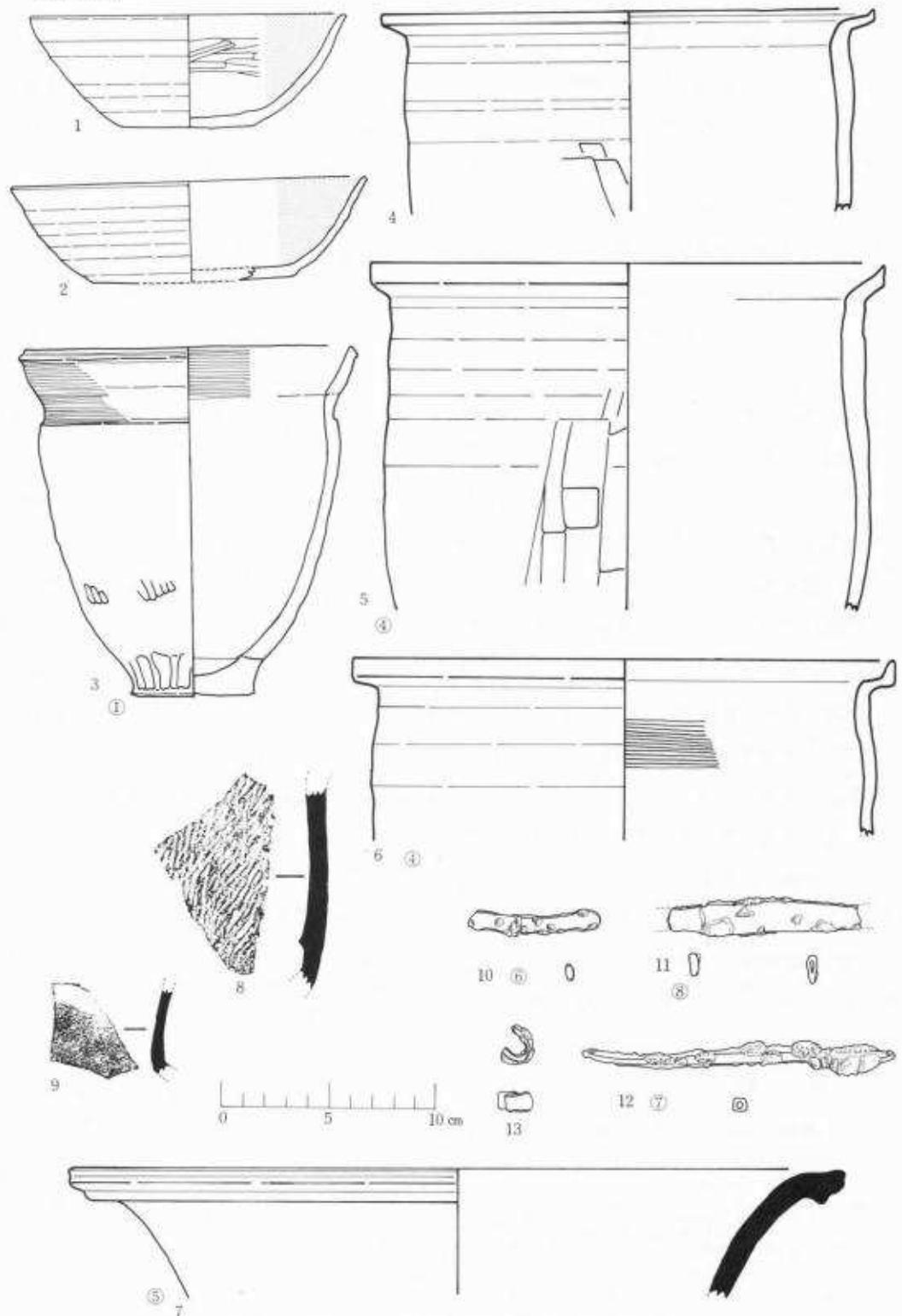
(遺物)

I 土師器 (第10-2図・1~6)

第6表

分類	土平 器皿 番号 上の 番号	実測 図 番号	調								器 高	口 徑	底 径	備考				
			口縁部		体部上半		体部下半		底部									
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面								
甕	①	3	横ナテ	横ナテ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	四凸あり	ミガキ(?) 木蓋鉢(?)	16.3	15.8	5.8					
	⑤	7	ロクロ成形	ロクロ成形	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失			36.2	須恵器				

—今泉遺跡—



第10-2図 Bd12堅穴住居跡出土遺物実測図

甕	④	5	ロクロ 水挽瓶	ロクロ 水挽瓶	ロクロ 水挽瓶	ロクロ 水挽瓶	ロクロ 水挽瓶	ヘラケズリ	欠失	欠失	23.9	
		4	ロクロ 水挽瓶	ロクロ 水挽瓶	ロクロ 水挽瓶	ヘラケズリ					23.0	
	④	6	ロクロ 水挽瓶	ロクロ 水挽瓶		ロクロ 水挽瓶					25.3	
壺					ロクロ							須恵器
		1	ヘラミガキ				ロクロ水挽 のち ヘラケズリ	ヘラミガキ	回転系切 のち ヘラミガキ	5.6	15.7	5.7
		2	ヘラミガキ	磨減	ヘラミガキ	ロクロ 水挽瓶	ヘラミガキ	ヘラミガキ	回転系切 のち ヘラケズリ	5.3	15.6	5.8
环				ロクロ				ヘラミガキ	ヘラケズリ	5		
			ヘラナテ		ヘラケズリ				回転系切			
			ロクロ成形									
			ヘラミガキ	ロクロ水挽	ヘラミガキ	ロクロ水挽	ヘラミガキ	ロクロ水挽	ヘラミガキ	回転系切 のち ヘラケズリ		内里

II 須恵器

甕（同7）；黒味がかった紫色を呈す大型品。口縁部のみである。外反する口縁の端部が肥厚しているが、これは本来はもっと強く屈曲し、しかも鋭い棱を持つ口縁が変形し、丸味を帯びたものであろう。

その他に覆土出土のものも参考までに掲げた。

III 鉄 器

刀子形製品1・2（同10・11）；刃部と思われる部分の断面形が楔形をなし、それ以外の部分の断面は長方形をなすものをこれとした。1の断面は中空状をなし、あるいは鍛造品か。

釘形製品（同12）；断面が方形をなす長大なものをこう名付けた。

鑽状製品（同13）；偏平な断面を持ち、恐らくは椿円形の形状をなすと思われるものをこう呼んだ。刃物の柄の端にはめ、刃物と柄の装着を確実にするような機能を持つのであろうか。

Bd59竪穴住居跡（第11図・第7表）

遺跡敷地中央やや東寄りに検出。他の遺構との重複あるいは遺構内での増改築の事実は認められず、保存の良好な単一の遺構である。

遺構の平面形は比較的端正な正方形に近く。その規模は南北6.2m×東西6.5m、床面積約40.30m²程度である。本遺跡の竪穴住居跡群中ではBg62に次ぎ第二位の規模であり、最大級のクラスに入る。住居の中軸線（カマドの中心に一致する北壁の中点と南壁の中点を結ぶ線）は、

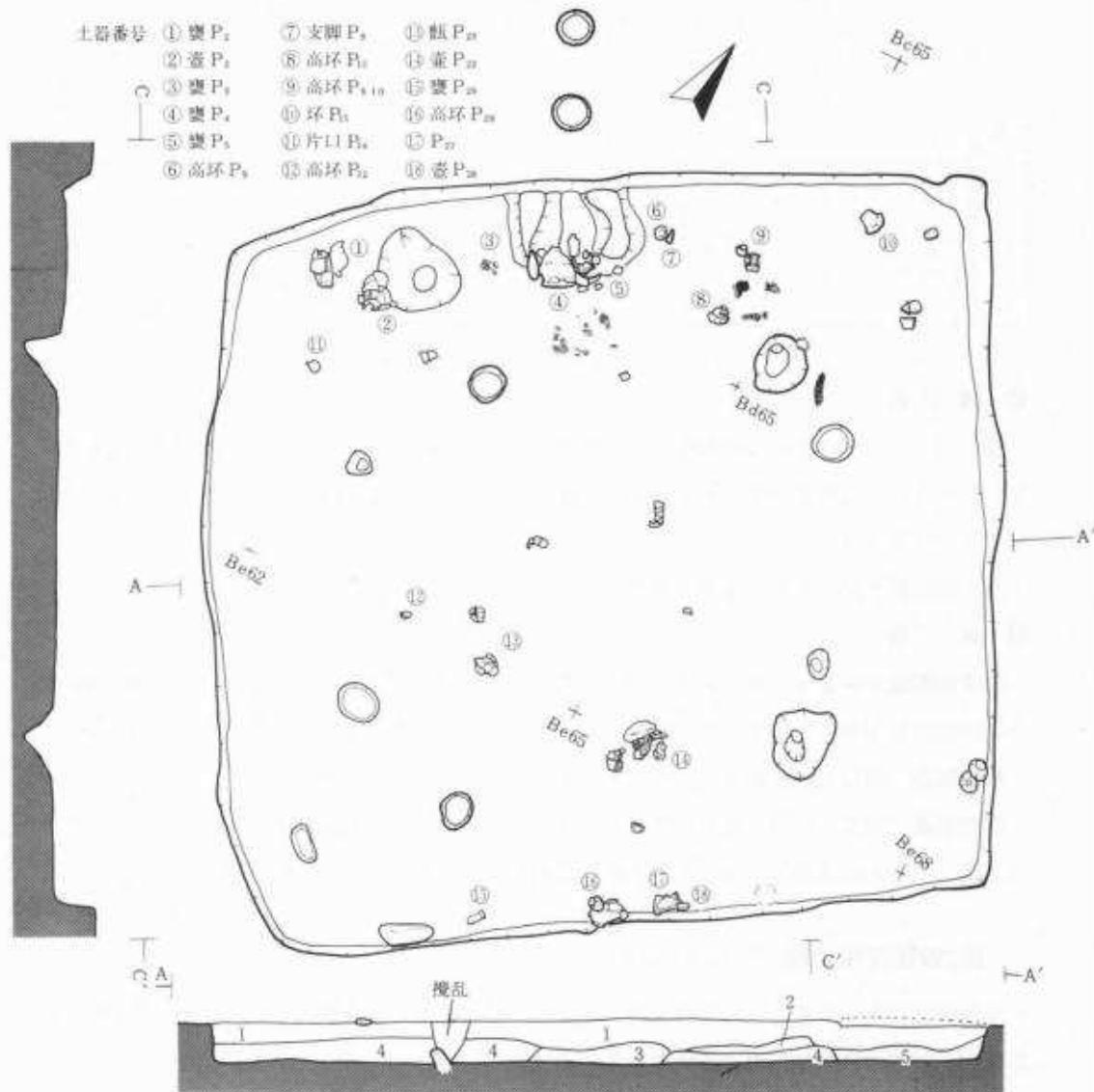
—今泉遺跡—

磁北より約42°西に振れる。

遺構内に堆積した土層は大略二層からなる。

第一層 明褐色シルト質土層。かなり締まりがあって硬く、粘性はありません。本遺跡に最も多くみられる遺構覆土である。

第二層 床面に接して堆積した暗褐色ないし黒色のシルト質土層群を一括した。何れも1層に比し軟質で粘性がある。炭化物粒等が混じる。数枚の層に分かれ、その堆積ぶりにやや不自



第II-1図 Bd59整穴住居跡実測図

1. 暗褐色シルト質土。しまりありて硬し。黄褐色シルトの小粒混入
2. 暗褐色シルト質土。しまりありて硬し。黄褐色シルト塊多量混入
3. 黒色シルト質土。軟質。黄褐色シルト塊を殆ど混入せず
4. 暗褐色シルト質土。やや軟質で、粘性あり。2より黄褐色シルト塊の量少ない
5. 暗褐色シルト質土。4に殆ど同じであるが黒味がやや強い

然なものがあるが、意図的なものかどうかは判然とし難い。

床面の残存状況は非常に良好で、殆んど平坦である。壁の状況も同様に非常に良好で、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30~40cmである。床面上に大小12個のピット・掘り込み類がある。

そのうち少なくとも主柱穴と認めてよいものは、ほぼ対角線上にのる位置関係にある4個であろうか。特に東半の2個（東北隅と東南隅）のものからは、掘り方・柱あたりの両者をも窺うことができる。それによると、ほぼ円形の掘り方径50cm前後、柱あたり径15~20cm、深さ30cm前後である。尚掘り方壁の何れかの半分が垂直をなさず、傾斜を持つものもある事実も認められ、柱を建てる際あるいは抜き取る際の有様を推測させる資料となろう。

カマドは正確に北壁の中央部に構築されている。他の例と同様に、黄色粘土質シルトによって壁から2本の土手状の袖部を南へ作り出す。袖部の南端焚口部には、やはり同様に長大な礫を「門の字」状に構築する。推定されるカマドの規模は間口50cm、奥行70cm、高さ30cm前後等である。火床部はこれも同様に多少掘り凹めてある。明白に土中に構築された煙道と認められるものは入念に調査したにもかかわらず、検出し得なかった。しかし、カマドの北隣にピットが存在することを考え合わせると、やはり何らかの形式の煙道が存在したのであろう。あるいは後述のCa18にみられたトンネル式の煙道を見落した可能性もなくはない。

床面上のその他の施設としては、カマド左隣には円形の掘り込みがあり、その周縁に土師器が置かれていた。これは貯蔵穴と見做されてよいものであろう。周溝は認められない。尚、南壁中央やや西（西南隅付近）の壁直下に礫があるが、これもあるいは住居の構造に何らかの関連を有するものかもしれない。

その他特殊例ではあるが、カマド焚口前とその右隣の床面に炭化した植物繊維の広がりが部分的にみられた。現場での観察によると、編んだような繊維の交叉がみられた。従ってあるいは床面上に何らかの植物質の敷物が存在した可能性もある。

年代推定の資料としては、カマド中・カマド周辺・床面上等出土の土師器群がある。

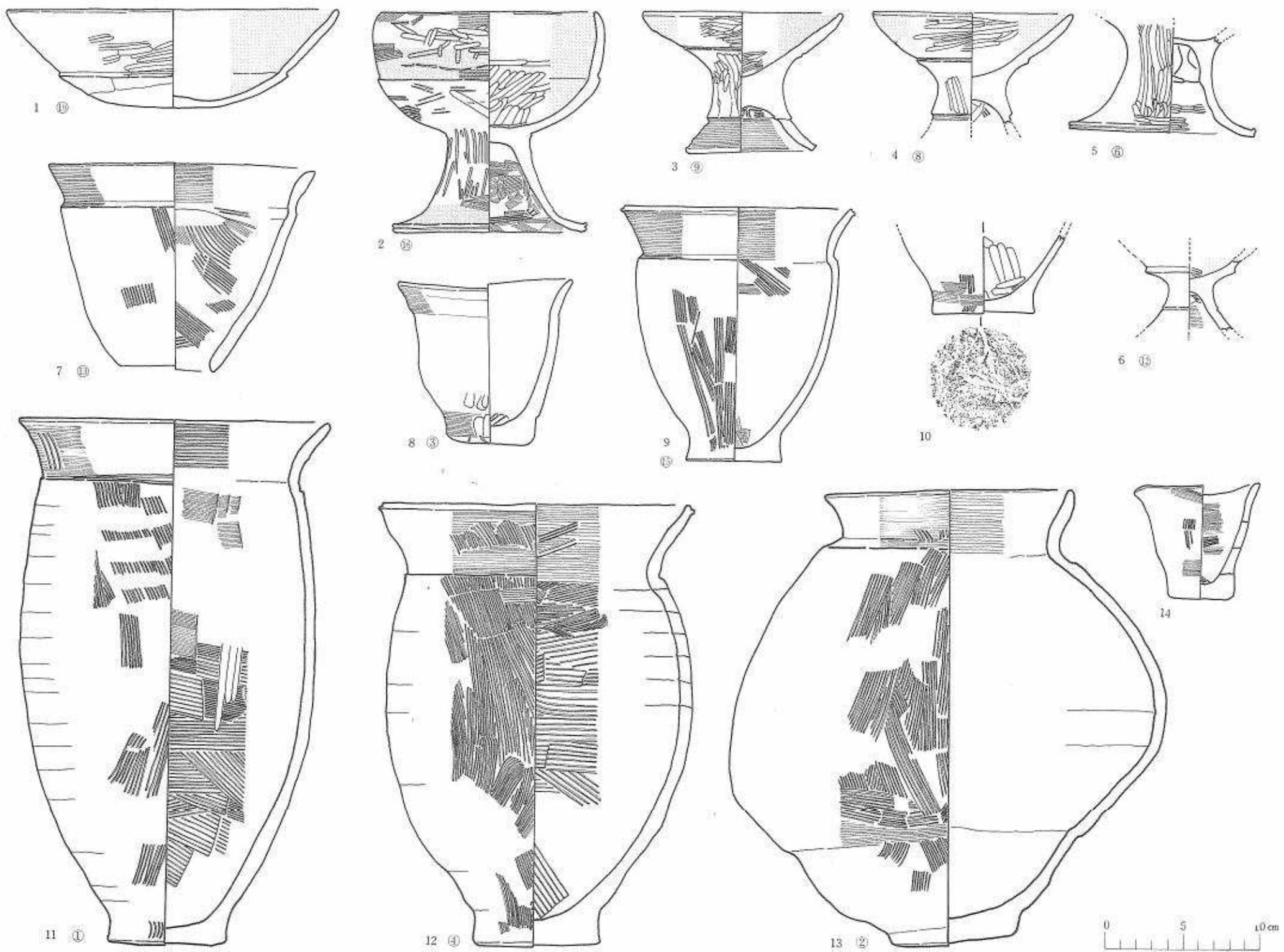
(遺 物)

I 土 师 器 (第11-2・3・図1~19) 第7表

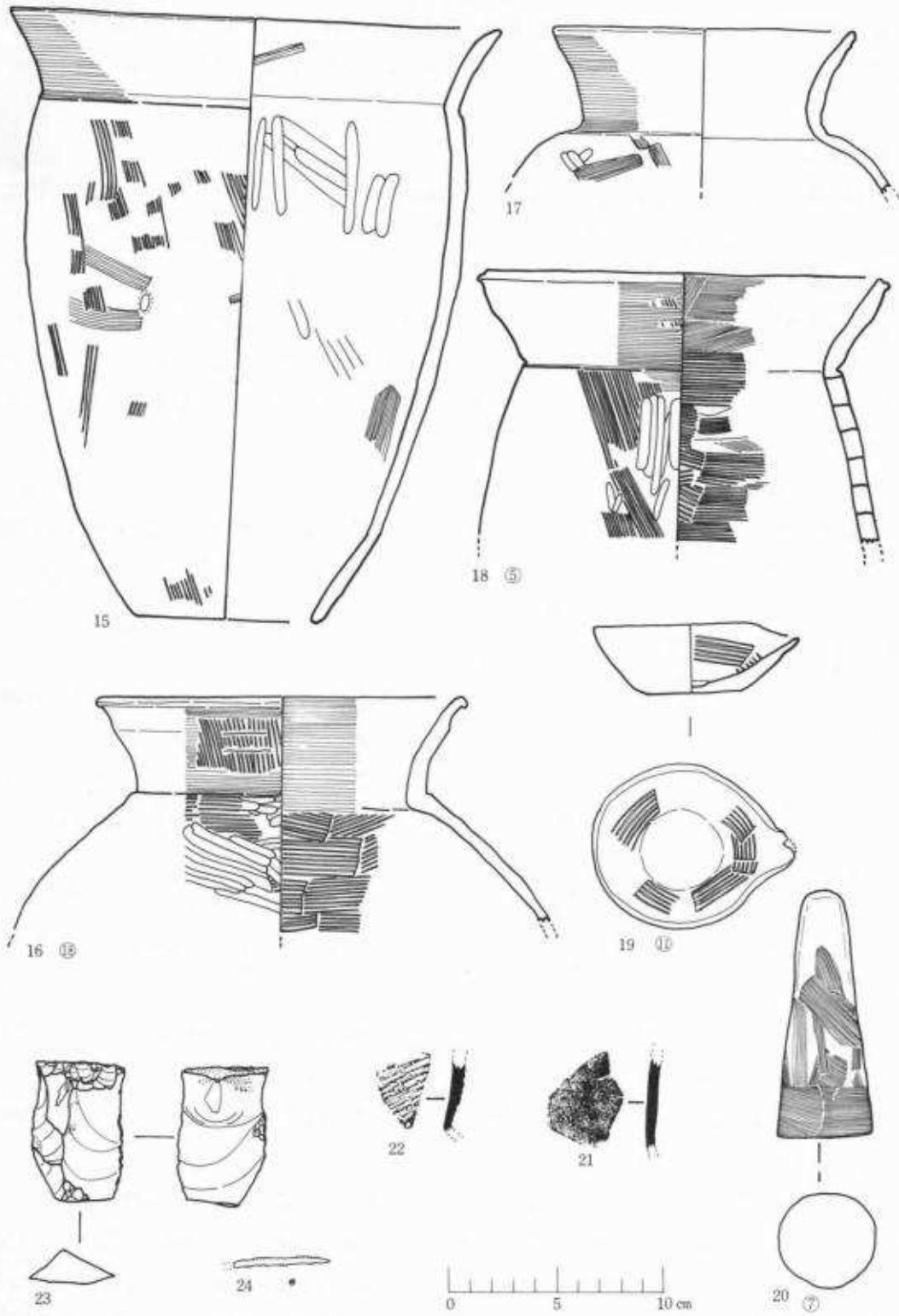
分類	土平面 器 器 番 上 号	実 測 器 器 番 上 号	調 整								器 口 徑 高	口 徑 徑	備 考			
			口 横 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部							
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面						
甕	①	11	刷毛目 のち 横ナテ	33.8	20.0	7.6										
	④	12	刷毛目 のち 横ナテ	28.6	20.2	8.2										
	⑤	18	刷毛目 のち 横ナテ	刷毛目 のち 横ナテ	刷毛目 のち 横ナテ	刷毛目 のち 横ナテ	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失	+	19.2				

—今泉遺跡—

	14	刷毛目 のち 横ナデ	刷毛目 のち 横ナデ(?)	刷毛目 のち 横ナデ	刷毛目 のち 横ナデ	刷毛目 のち 横ナデ	ヘラナナナ	刷毛目 のち 横ナデ	木葉瓶	7.5	8.1	3.4	環
◎	19	横ナデ	横ナデ	刷毛目 のち ヘラミガキ 又はヘラナデ	刷毛目	刷毛目 のち ヘラミガキ 又はヘラナデ	刷毛目 のち ヘラミガキ 又はヘラナデ	刷毛目 のち ヘラミガキ 又はヘラナデ	ヘラカキ(?)	16.3	5.1	6.1	
	17	横ナデ(?)	横ナデ(?)	不 明	ヘラナデ	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失	14.0			
									刷毛目	刷毛目 木葉瓶			6.6
									刷毛目	木葉瓶			8.
	10	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失	刷毛目 のち ヘラミガキ	刷毛目	ヘラナデ	刷毛目 木葉瓶			6.6
◎	8	横ナデ(?)	横ナデ(?)	横ナデ(?)	ヘラミガキ(?)	横ナデ(?)	ヘラナデ	ナデツケ	木葉瓶	10.7	11.3	5.8	
									木葉瓶				8
	13	横ナデ(?)	刷毛目 のち 横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目 のち ヘラミガキ	刷毛目	ヘラミガキ	木葉瓶	29.05	15.9	8.2	
◎	16	横ナデ	刷毛目 のち 横ナデ	刷毛目	刷毛目 のち ヘラミガキ	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失	16.4			
									木葉瓶				8.5
													須忠器
		不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	不 明	欠 失	欠 失			環
◎	1	ヘラミガキ	ヘラミガキ (ナナナ)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ のち ヘラミガキ	6.3	20.9		内黒 丸底环 or 目
		ヘラミガキ	横ナデ						ヘラミガキ ヘラミガキ				
		ヘラミガキ	ヘラミガキ						ヘラミガキ ヘラミガキ				
		ヘラミガキ	ヘラミガキ						ヘラミガキ ヘラミガキ				
		ヘラミガキ	ヘラミガキ						ヘラミガキ ヘラミガキ				
		ヘラミガキ							ヘラミガキ				
			ヘラミガキ						ヘラミガキ				
◎	2	ヘラミガキ	ヘラナデと ヘラミガキ			ヘラミガキ	ヘラミガキ のち ヘラミガキ	刷毛目 ナデツケ ヘラナデ	ヘラミガキ	14.1	14.0	12.5	内黒 彩色
◎	3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	横ナデ ヘラナデ	ヘラミガキ ヘラミガキ	9.1	13.0	8.2	口縁・内黒
◎	4	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデツケ(?)	ヘラミガキ (ナデツケのち ヘラミガキ)	8 (種)	12.9		内黒
◎	5	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失	ヘラミガキ (ナデツケのち ヘラミガキ)	ヘラミガキ	7.7		12.0 内黒
◎	6	ヘラミガキ	ヘラミガキ			ヘラミガキ	横ナデ(?)	ヘラナデ ナデツケ	ヘラミガキ ヘラナデ			1.7	内黒
◎	7	横ナデ	横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目		13 (種)	16.8	5.5	
	15	ヘラミガキ (ナデツケ)	刷毛目 のち 横ナデ	ヘラミガキ	刷毛目 部分的 ヘラナデ	刷毛目 ヘラナデと ヘラミガキ	刷毛目			28.1	22.6	8.4	
片口	◎	19	ヘラナデ	ヘラナデ (ナデツケ)	刷毛目	ヘラミガキ 横ナデ		ナデツケ	ヘラミガキ のち ヘラナデ	3.5	長10 幅8	6.2	



第11-2図 Bd59竪穴住居跡出土遺物実測図



第11-3図 Bd59竪穴住居跡出土遺物実測図

—今泉遺跡—

II 積層器（同21・22）；破片ではあるが、床面上から2個出土したので掲げておく。22は表面に叩き目の縦目が鋭著にみられるが、裏面には特に何もみられない。21は、あるいは長頸の何らかの器形になるものであるかもしれない。

III 鉄器

針状製品（同24）；針とするには細すぎるとと思われる、断面形が円形のものを一応こう呼んだ。

IV 土製品

カマド支脚（同20）；カマド火床上ではなく、カマド外の右隣に検出した。すると、この種の支脚は、カマド火床に固定される（礫を火床に埋め込み、直立させるなどの例あり）ものではなく、使用に際してカマドに着脱するものなのであろうか。表面には刷毛目様調整痕や横ナテ調整の痕がみられ、比較的入念に作ってある。

V 石 器

剝片（同23）；覆土出土であるが、参考までに掲げた。頁岩製の縦長剝片で、打撃面・打撃瘤・フィシャー・リング等が良好にみられる。縄文時代晚期のものであろうか。

Bf09堅穴住居跡（第12図・第8表）

遺跡敷地ほぼ中央部に検出。他の遺構との重複関係はない。遺構内での増改築の痕は一部疑問箇所はあるが、はっきりとそれと見做し得るものはない。保存状態は不良。

平面形は四隅に丸味があり、中央部が弧状に微かに膨らむ大略方形をなし、その規模は南北3.9m×東西4.1m、床面積15.99m²程度となる。住居中軸線の方向（南北両壁の中点を結ぶ線）は、磁北から約11°45'西に振れる。

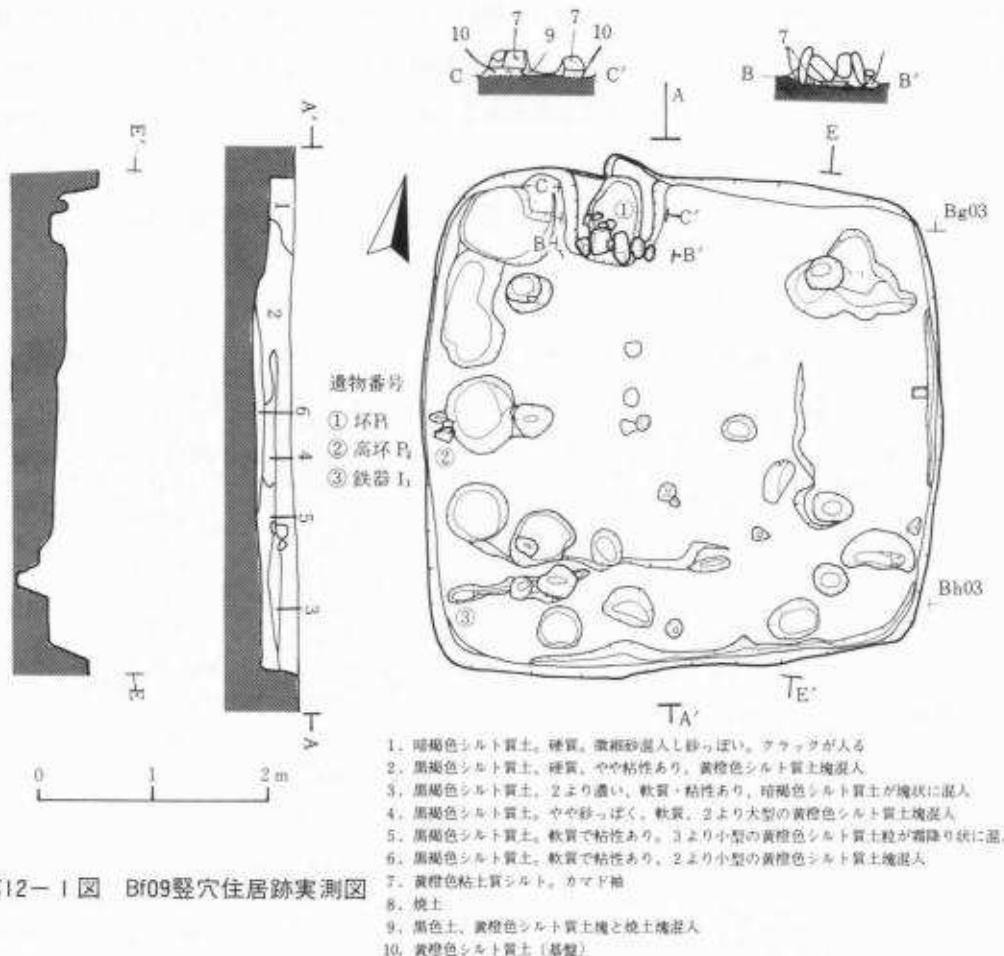
遺構内に堆積した土層は大略三層をなす。

第1層 暗乃至黒褐色のシルト質土層。締まりがあって硬いが、粘性もややある。覆土上半の大部分を占める。

第2層 黒褐色シルト質土層。数層からなるが、基盤の黄橙色シルト質土塊を混入する点に特徴がある。第一層に比し、やや軟質で粘性が強い。

第3層 黒褐色シルト質土層。軟質で粘性もある。床面直上に堆積したものであるが、貼床的なものとは考えられない。

床面の状況は、今泉遺跡内では珍らしくピット類・掘り込み類が多くあり、凹凸が激しい。その中には、床面がほぼ方形に低くなる部分なども含まれる。それが、南壁と東壁には併行することから、あたかも増改築があったかのような印象を与えるのであるが、土層・柱穴等の観察からしてその痕跡とは認められず、もともとこのような凹みの部分を有する住居であると



第12-1図 Bf09竪穴住居跡実測図

理解した。壁高は30cm前後である。

床面上のピット類のうち、少なくとも主柱穴と認めてよいと思われるものは、ほぼ対角線上にのる4個であろう。円形で、平均径31cm、平均深さ19cmである。

カマドは他例の多くと同様に北壁に構築されるが、その中央部ではなくやや左方（西方）に寄った部分に構築されている点が例外的である。煙道の痕跡は土中には殆んど認められず。カマドの北端が少々外方に張り出した程度のものである。その他の点は他例に共通する点が多いので、詳細な説明は省略する。焚口部の「門の字」状の礫のうち、上に架せられるものは半折し床面上に落ちている。焚口の間口75cm・高さ30cm、袖部奥行60cmである。火床部はやや凹みその支脚その他の施設は認められない。

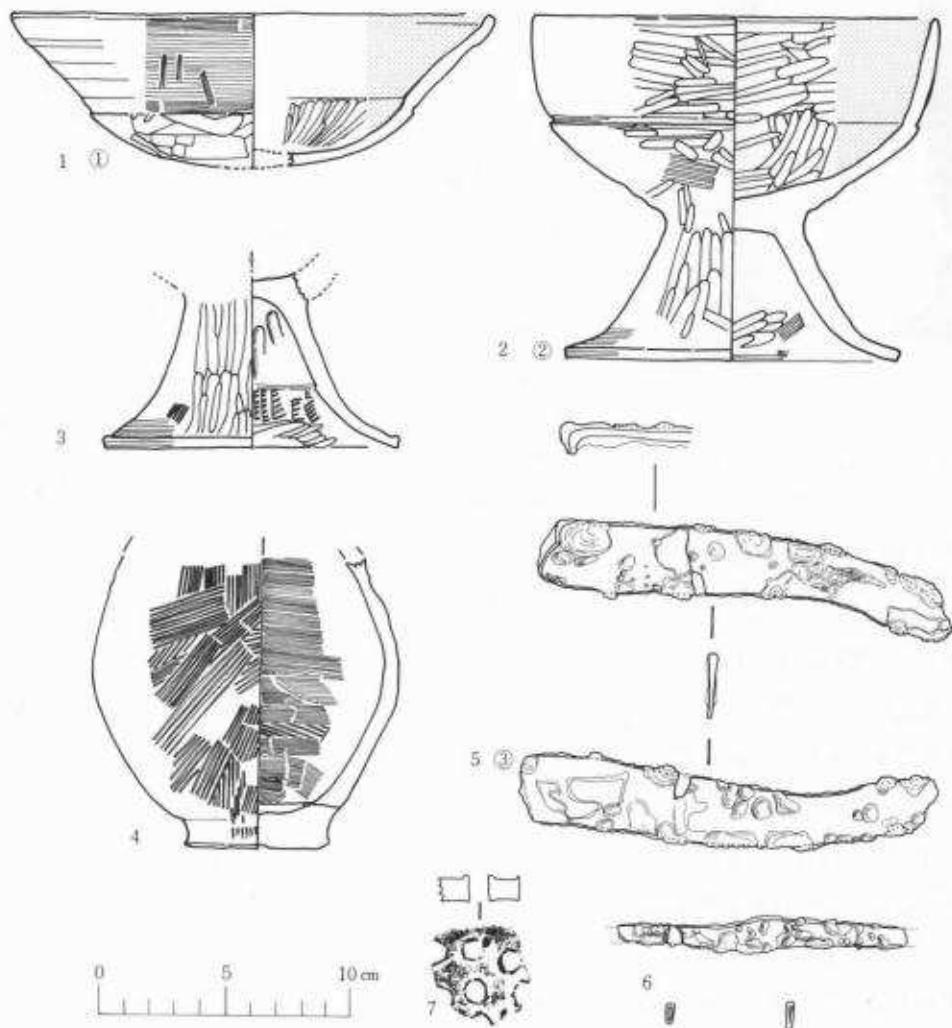
床面上のその他の施設としては、まず西北隅に方形に近い掘り込みがある。やや浅めて、しかも遺物その他の出土がみられないが、カマドとの位置関係からして貯蔵穴の可能性がある。周溝と思われるものは、東壁直下の中央部分と南壁直下のほぼ全域にみられる。さらに、特に

—今泉遺跡—

西壁と南壁に沿う床面には、浅い円形のピット列がみられる。遺物等の出土をみないので性格は不明であるが、そのうち南壁側にみられる2個の位置関係は整然としたものであり、あるいは住居に関連する何らかの遺構となる可能性がある。但し、浅いので主柱穴などにはならないのであろう。

年代推定の資料としては、少ないながらも床面から出土した土師器その他がある。

(遺 物)



第12-2図 Bf09竪穴住居跡出土遺物実測図

I 土 師 器 (第12-2図・1~4・7)

第8表

分類	土平 器 番 号 上 の 番 号	実 測 団 番 号	調 整								鋸 高 度	口 徑	耳 径	備 考				
			口縁部		体部上半		体部下半		底 部									
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面								
裏														頭部				
			横ナギリ		ヘラミガキ 又はヘラナ	ヘラミガキリ												
表	4				崩毛目の中 ヘウナナギリ	崩毛目	崩毛目の中 ヘラナナギリ	崩毛目の中 ヘラカヌナギリ	崩毛目	崩毛目	13.0	5.8						
中	①	1	ヘラミガキ	横ナギ	ヘラミガキ	横ナギ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	6.2	19.3						
高 環	②	2	ヘラミガキ	ヘウナナギリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	崩毛目の中 ヘラカヌナギリ	ヘラミガキ 横ナギ	13.7	16.0	13.2					
		3	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	ヘラミガキ ナナギリ	崩毛目 ヘラミガキのち 横ナギ	6.0	4.8	11.8	16底部 内黒				
他		7												多孔式				

II 鉄 器

鎌形製品（同5）；ほぼ完全な、床面出土のもの。全体的に薄手で、形状はブーメラン形に湾曲している。一端が折り返してあり、他端はやや細くなっている。断面形は薄い楔形をなす。

刀子形製品（同6）；床面出土の破損品。薄手で断面形が楔形をなす部分と、長方形をなす部分とからなるもので、前者を刃部、後者を柄に差し込む部分と想定した。断面には何れにも中空部がみられる。

Bf15堅穴住居跡（第13図）

遺跡敷地中央やや西寄りの、現段丘崖北縁から南にやや南下した地点に検出した。

他の遺構との重複関係・遺構内での増改築の相方ともに認められない。しかし遺構の残存状況は概して不良である。

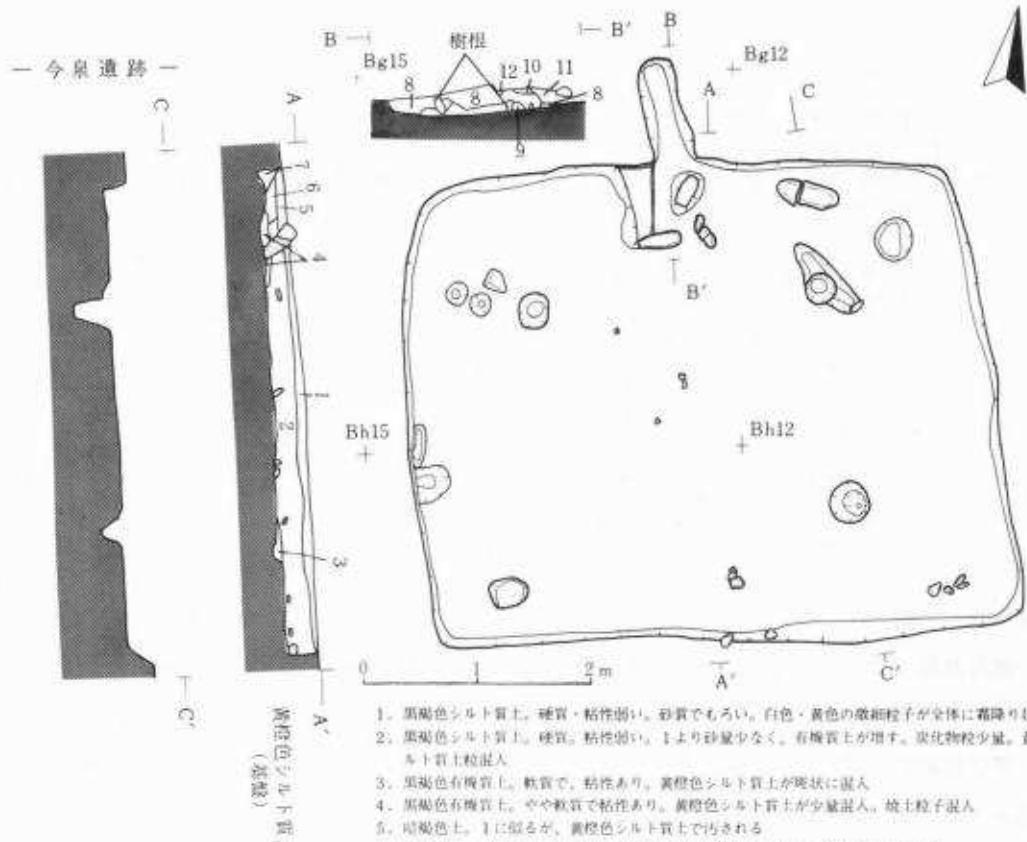
平面形は遺存状況が不良であるので正確は期し難いが、調査結果によると横長の長方形をなし、その規模は東西4.7m×南北3.7m（推定）、床面積17.39m²（推定）程になるようである。住居中軸線の方向（北壁中央のカマドの中心と南壁の中点を結ぶ線）は、磁北から約13°30'西に振れる。

住居内に堆積した土層は、大略二層である。

第1層 黒褐色シルト質土層。砂っぽくてもろく、粘性もあまりない。

第2層 黒褐色シルト質土層。第1層よりは砂っぽくなく、有機物量が増加する。しかし比較的硬質で、粘性もそれ程ない。炭化物粒少量が混入。その他の層はカマド周辺に数層が認められただけで、非常に単純である。

床面はほぼ平坦であり、傾斜は殆どない。現壁高は21cmとやや浅めである。床面上に10個のピット・掘り込み類と、2個の礫が存在した。



第13図 Bf15壁穴住居跡実測図

1. 黒褐色シルト質土。硬質、粘性弱い。砂質でもよい。白色・黄色の微細粒子を全体に蘊藏状に入れる
 2. 黒褐色シルト質土。硬質、粘性弱い。より砂質少なく。有機質土が増す。炭化物粒少量。黄褐色シルト質土粒混入
 3. 黒褐色有機質土。軟質で、粘性あり。黄褐色シルト質土が斑状に混入
 4. 黑褐色有機質土。やや軟質で粘性あり。黄褐色シルト質土が少額混入。植土粒子混入
 5. 暗褐色土。1に似るが、黄褐色シルト質土で汚される
 6. 暗褐色土。硬質で、粘性弱い。2に似るが黄褐色シルト質土。脱上膜で汚される
 7. 黒褐色土。やや硬質でしまりあり。黄褐色シルト質土の塊状混入が少ない
 8. 黑褐色有機質土。砂質土まじり、硬く、粘性弱い。燒土粒子混入
 9. 暗褐色有機質土。軟質で、やや粘性あり
 10. 暗褐色シルト質土。硬く、粘性弱い。白色微細粒子が蘊藏状に入れる
 11. 暗褐色シルト質土。軟く、やや粘性あり。燒土粒子混入

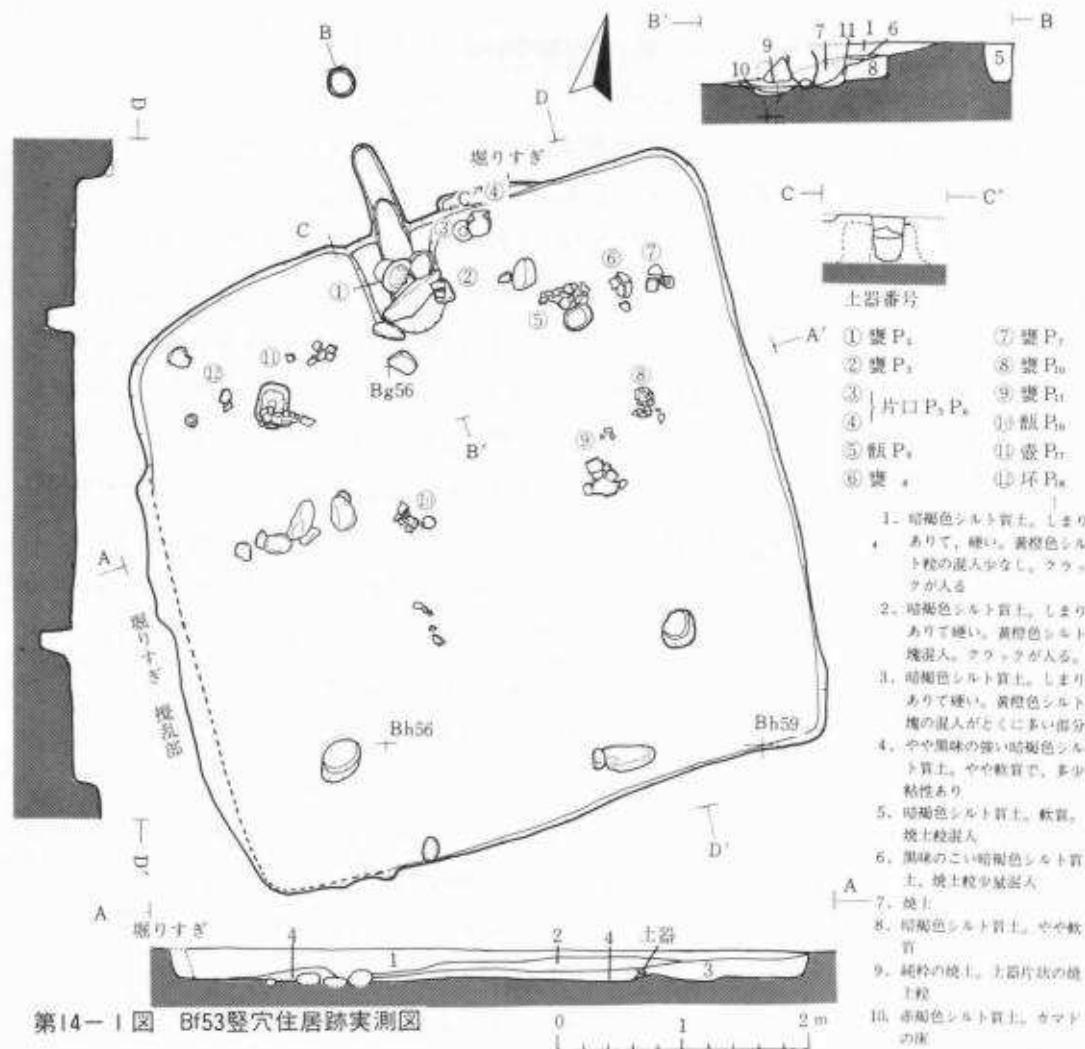
ピット類のうち、少なくとも主柱穴と認めてよいものは、ほぼ対角線上に並ぶやや大きめの4個であろう。それらは大略円形をなし、平均径27cm・平均の深さ22cm程である。他に西壁中央やや南方の壁直下に2個のピットがあるが、これは住居に関連する何らかの施設の痕跡かもしれない。

床面上にはその他の施設は認められない。

カマドは他の例と同様に正確に北竜中央に作られている。但し、遺存状態は不良であり、袖部東半は破壊されている（その他、焚口部の礫が倒壊するなど、当遺跡中では「破壊」という印象の強い遺構である）。袖部の構築法・焚口部に於ける礫の使用などは、他の例と共通するものである。焚口の間口75cm・高さ25cm。カマド奥行65~70cmと規模にも共通点が多い。

カマド火床と煙道の結合部には段ではなく、カマド火床と煙道底はほぼ同レベルをなす。煙道は北方へ80cm程延びて終結し、その端部には煙出し用と認めるべき特別な施設はない。また、その部分の底部には、磚・土器片等も認められない。

年代推定の資料となし得る程に良好な遺物は出土しなかったが、カマド・煙道の特徴等からある程度の推定はなし得る。



第14-1図 Bf53竪穴住居跡実測図

Bf53竪穴住居跡 (第14図・第9表)

調査区域のほぼ中央、やや東寄りに検出した。他の遺構との重複関係、遺構内での増改築の事実、何れも認められない。

遺構の平面形は、四隅に微かに丸味のつくやや不整な正方形をなし、その規模は東西4.8m(推定)×南北4.9m、床面積23.52m²(推定)となる。西壁の大部分と西南隅・北壁のカマドの両側の一部は、調査時に於ける掘り過ぎと、樹根による擾乱でやや乱れている。住居の中軸線の方向(北壁中央にあるカマドの中心と南壁の中点を結ぶ線)は、磁北から約30°西に振れている。

遺構内に堆積した土層は、大別して二層からなる。

第1層 暗褐色シルト質土層。比較的縮まりがあって硬い。乾燥するとクラックが入る。覆土の上半を占める。尚、人為的に投入されたと思われる人頭大の礫が多く存在する部分もあった。

—今泉遺跡—

第2層 黒乃至暗褐色シルト質土層。やや粘性が強くなり、黄橙色シルト質土塊・遺物等の混入量が増加する。貼床は認められない。

床面はほぼ平坦といってよく、遺存状態は良好である。壁高は30cm前後。床面上には合計4個のピットと、4箇所の礫の分布がみられる。

上記4個のピットは、ほぼ対角線上に並び、そのすべてを主柱穴と認めてよいものであろう。形状は円形で、平均径25~30cm・平均深さ25~30cmをなす。尚、南半の2個はやや傾斜を持つ。

カマドは既述の通り、正確に北壁の中央部に取り付けられる。カマド本体の構築方法は、黄橙色粘土質シルトを用いて袖部を構築する点・焚口部に「門の字」状に礫を配置する点・燃焼部床がやや凹む点等々、多くの例にはほぼ共通する特徴が示される。焚口部の間口60cm・高さ20cm、袖部奥行70cm程である。本体中には、土師器甕2個が遺存していた。煙道は顕著に発達し北壁から北に70cm程延びる。燃焼部床と同じレベルをなす部分が、北壁から30cm延びた所で15cm程高くなり、その先の50cmは徐々に浅くなって自然に終結する。その端部より北40cmの所に径20cm・深さ30cm程の円形ピットがある。位置的には正に煙出しに相当するが、煙道部とトンネル状に連結する事実は認められない。しかし覆土に若干の焼土粒を混入しているので、一応煙出しの可能性が大きいものと見做しておく。本例は今泉遺跡中で、カマド遺存状況が最良のものの一つに数えられる。

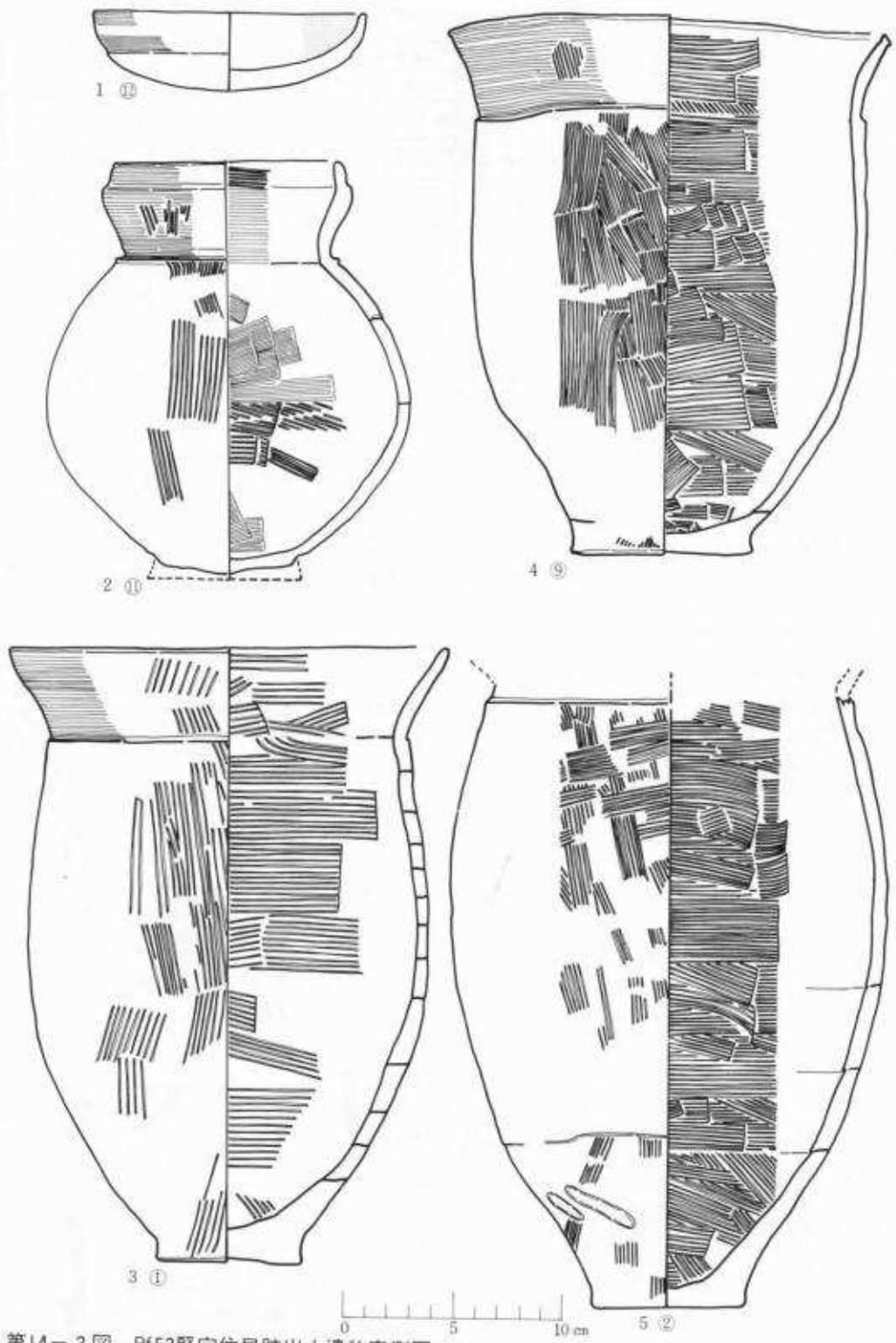
床面上のその他の施設としては、ピット・掘り込み類がみられないことは既に述べたが、その他のものとしては礫がある。うち2個はカマドに比較的近い位置にあり、そこに何らかの意味がありそうである。西半部にみられる7個の集積部分も、人為的な配置と見做せることもなく、何か意味がありそうであるが、周囲に特記すべき現象は認められない。南壁直下の大小2個は、あるいは建物の構造に何らかの関連を有するものかもしれない。

年代推定の資料としては、カマド本体中・床面上に検出された土師器群他がある。

(遺 物)

I 土 師 器 (第14-2・3図・1~8) 第9表

分類	土平 面 器 番 号	実 測 図 番 号	調 整								器 高 度 高 度 度 度	備 考			
			口 横 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部						
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面					
甕	①	3	刷毛目	刷毛目のち ぬけナタ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目 へラニガキ	28.1	20.1	6.7		
				ぬけナタ		刷毛目									
					刷毛目のち へラニガキ	刷毛目									
									刷毛目	へラニガキ					
	②	5	火 头	火 头	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	木 置 瓦	38.9		7.0		



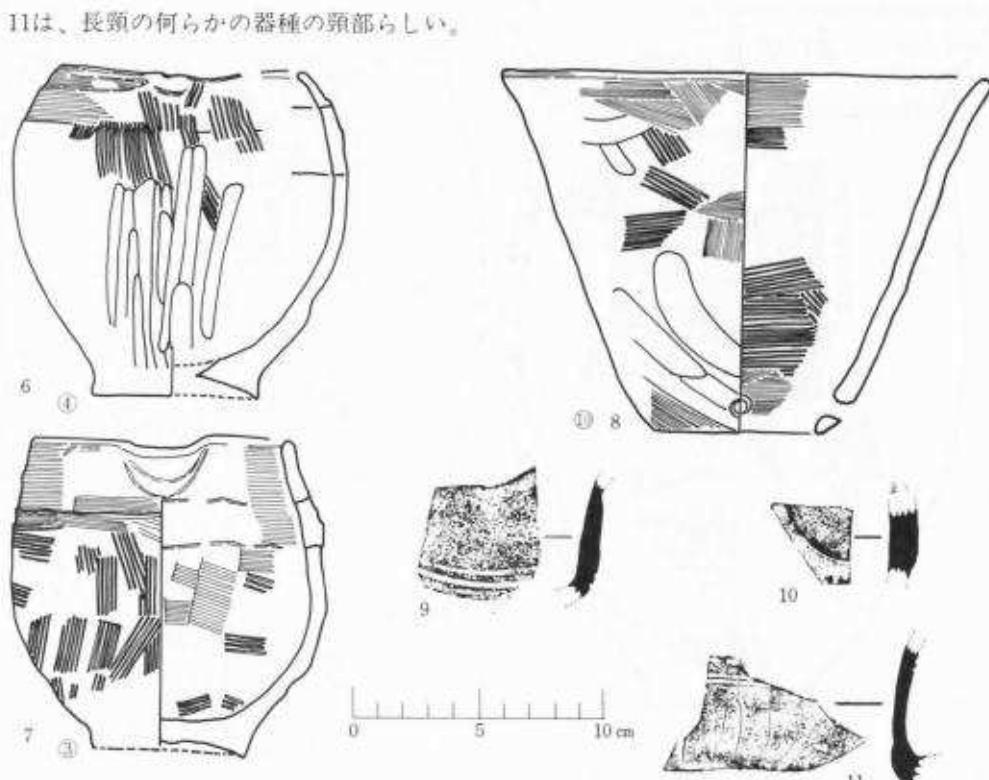
第14-2図 Bf53竪穴住居跡出土遺物実測図

—今泉遺跡—

分類	土平面 器図 番号 上 号の 番号	実測 図 番号	調 整								器 高	口 径	底 径	備 考				
			口 締 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部									
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面								
甕	⑨	4	刷毛目のち 横ナナデ	刷毛目のち 横ナナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	木葉底	24.7	20.2	8.4				
壺	⑩	2	刷毛目のち 横ナナデ	刷毛目のち 横ナナデ	ヘラナナデ (刷毛のち)	刷毛目	刷毛目のち ヘラナナデ	刷毛目	ヘラナナデ	刷落	19.0	10	6.7					
														須恵器				
坪	⑪	1	ヘウミガキ	ヘウミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不 明 (ヘウミガキ)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	3.6	12.5		内 黒			
							刷毛目のち ヘウミガキ											
瓶			横ナナデ	横ナナデ	刷毛目	刷毛目												
	⑫	8	横ナナデ	横ナナデ	刷毛目	刷毛目 ヘケズリ	刷毛目	刷毛目	刷毛目のち ヘケズリ			14.2	19.6	6.8				
片 口	⑬	7	横ナナデ	刷毛目のち 横ナナデ	刷毛目のち ヘラナナデ	刷毛目	横毛目	横毛目	刷毛目	ナナフケ	欠 失	12.7	R13 B10.6	6.1				
	⑭	6	刷毛目のち 横ナナデ	刷毛目のち 横ナナデ	横ナナデ (刷毛のち)	刷毛目	横ナナデ (刷毛のち)	刷毛目のち ヘラミガキ	刷落	刷落	刷落	12.5 13	9.7	6~7				

II 須恵器(同9・10・11)；何れも破片であり、器種も不明であるが、一応掲げた。

9・10は、あるいは壺類似の器種になるとも考えられる。9には箆による削り調整、10には緑色の釉類似の被膜がみられる。壺の肩部であろうか。



第14-3図 Bf53竪穴住居跡出土遺物実測図

新期Bg62竪穴住居跡（第15図・第10表）

調査地の中央やや東南部寄りに検出した。

東壁と南壁を共通する形で旧期Bg62住居跡と重複している。これはやや問題はあるが、旧期Bg62の拡張と見做すよりは、完全な新築と見做した方がよいのであろう（後述するように旧期Bg62の部分の凹みをほぼ完全に埋めてしまっていること・そこから遺物の出土が見られないこと・旧のカマドがこわされていること等から、上のように推定した）。全体的な遺存状態は非常に良好である。

平面上は、西壁の中央付近が樹根のため一部乱れているが、全体的には形の整った、しかも隅の角ばった長方形をなし、その規模は東西6.4m×南北7.3m、床面積46.72m²程である。今泉遺跡中では最大級の規模である。住居中軸線の方向（北壁と南壁のそれぞれ中点を結ぶ線）は、磁北から14°17'西に振れている。

遺構内に堆積した土層は大略二層からなる。

第1層 暗褐色シルト質土層。それをベースとして、全般的に微細砂も混じり、また黄橙色シルト質土塊も混入する。硬質で粘性はあまり無く、乾燥するとクラックが入る。ただし西端部の一部には樹根の影響によると思われる有機質土層もみられ、当然のことながら軟質で粘性に富む。

第2層 暗褐色シルト質土層。第1層にみられた黄橙色シルト質土塊はそれほど顕著には認められない。硬質で粘性はあまり無い。

第3層 黄褐色シルト質土層。基盤の黄橙色シルト質土を、一段低い凹みとして残った、旧期Bg62住居跡の床面上に敷きつめ、床面のレベルをそろえたもの。その意味では貼り床的な性格もある。やはり軟質で粘性がみられる。

床面の状況は傾斜もみられずほぼ平坦である。西壁の中央部以外は壁もしっかりしており、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は35cm程度である。床面上には大小8個のピット類があり、また床面中央からやや南に偏して礫の分布がみられる。

床面上のピット類のうち、やや大きめで、ほぼ対角線にのる位置関係にある4個が、少なくとも主柱穴であろう。うち西方の2個には、一応掘り方と柱あたりの部分を指摘できる。それらによると、掘り方の形状は梢円形ないし長方形に近く、長径約55cm・短径45cm・深さ35cm程度、柱あたりはほぼ円形で径約15~20cm・深さ40cmである。西南隅の柱あたりのように、掘り方の北半に寄った部分に位置する例もある。また東北隅の柱穴は、やや傾斜して穿たれている。

カマドは北壁に取りつけられる。他の多くの例とは異なり、北壁の中央からやや東寄り（カマドの中心が北壁の中点から東方へ35cmずれており、カマド左袖の上端の線が大略北壁の中央にあたる）に構築されている。袖部の構築法・形態・焚口部の「門の字」様の礫の状況、燃焼

— 今泉遺跡 —

部底の凹み等、カマド本体の特徴は他の多くの例に共通する。焚口部間口60cm・高さ30cm、袖部奥行80cmである。カマドの遺存状態は最良の部類に入り、さらにまたその内部・周辺の遺物の残存状況も非常に良好で当時の生活相復元の為の良好な資料となる。短いながらも煙道も備えられる。北壁から北に40cm程度、燃焼部底が北壁と接する部分が20cm程高くなり、煙道部底はそのレベルのまま北へ延びる。この形式は後述のBh71・Ca18等にもみられるものである。明確にそれと見做しうる煙出しあは土中には検出できなかった。また燃焼部底には礫・支脚その他の施設は認められなかった。

床面上のその他施設としては、カマド西隣に径50cm程度の掘り込みがあり、その縁に壺型土器が位置していた。これは貯蔵穴と見做されてよいものであろう。周溝類似のものは北壁東半・西南隅・南壁中央部等に認められたが、幅も狭くかつ浅く、あまり顯著ではない。なお西壁直下の周溝に連続する形で、不整形の掘り込みがあり、その中に小型の壺その他の土師器類がみられるが、あるいはこれも貯蔵穴様の機能を推定してもよいのかもしれない。さらにカマド焚口の南に浅い円形の凹みがみられるが、これはカマドの使用時に関連する何らかの痕跡である可能性がある。最後に床面上に散見できる礫群は、その周辺に土器類を多く検出できたがその他の特異な状況を看取できなかったので、一応性格不明としておく。出入口等を推測させるものは認められなかった。

年代推定の資料としては、今泉遺跡内で一・二を争うほど良好な状態で床面上、カマド中出土の大量の土師器類と若干の須恵器片その他があげられる。

(遺 物)

I 土 師 器 (第15-2・3・図2~20)

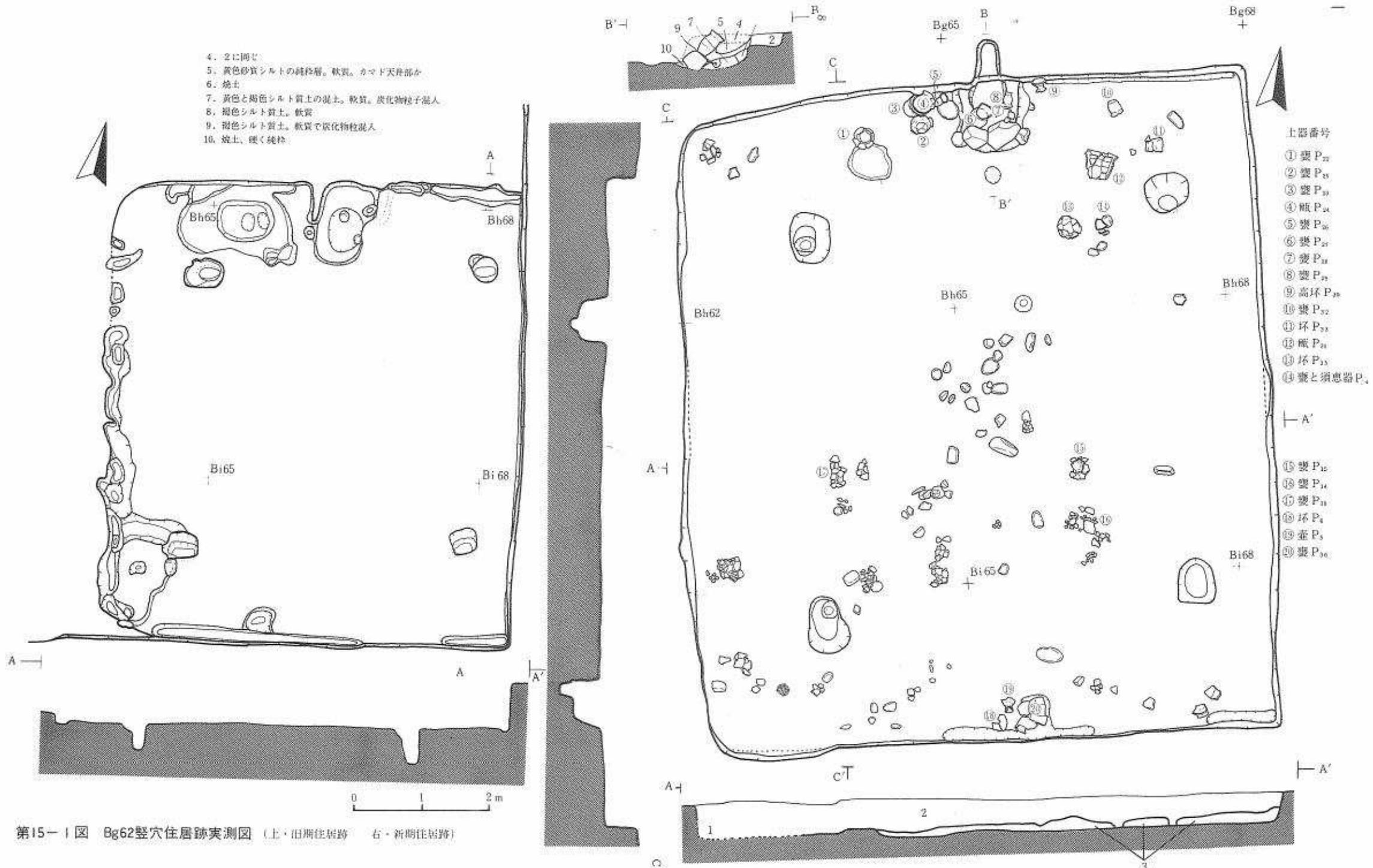
II 須 惠 器

壺型(同1)；破片ではあるが床面出土。体下半底部と思われる部分のみであるが、やや丸味をもつ底部の壺型ないしそれ類似の器形となるようである。体部中央にあたると思われる部分に沈線が繞る。内面には凹凸がありロクロ成形痕を留めるが、外面はほぼ全面に箒削り調整が加えられている。底部外面のほぼ中央部が「へソ状」に凹む。

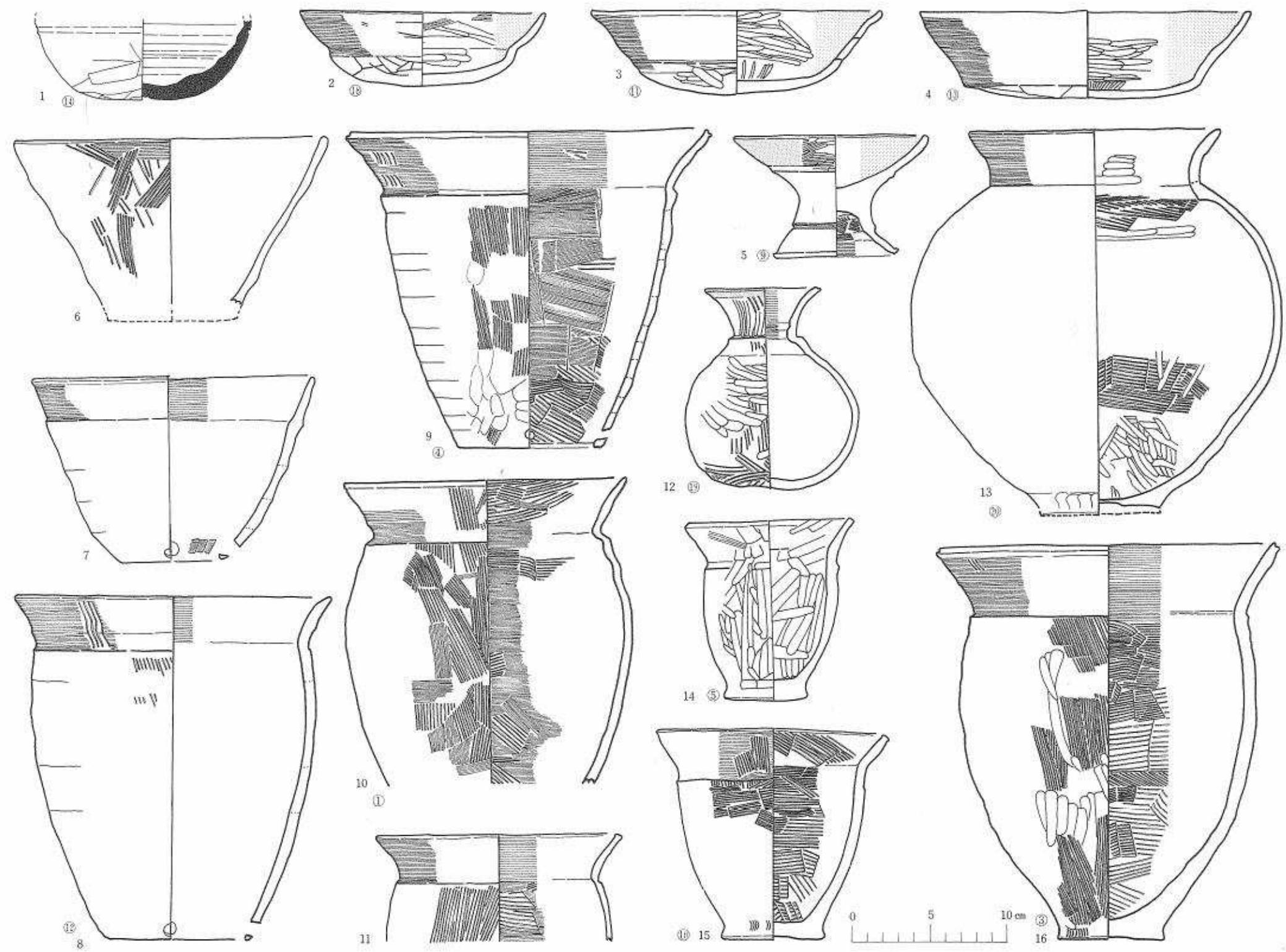
III 鉄 器

刀子形製品(同21)；比較的保存状態の良好な小型品。刃部と思われる部分が偏平で、しかも木質部も残存していることから、刀子と推定した。なお木質部の端部には輪状の金具がはめ込まれている。

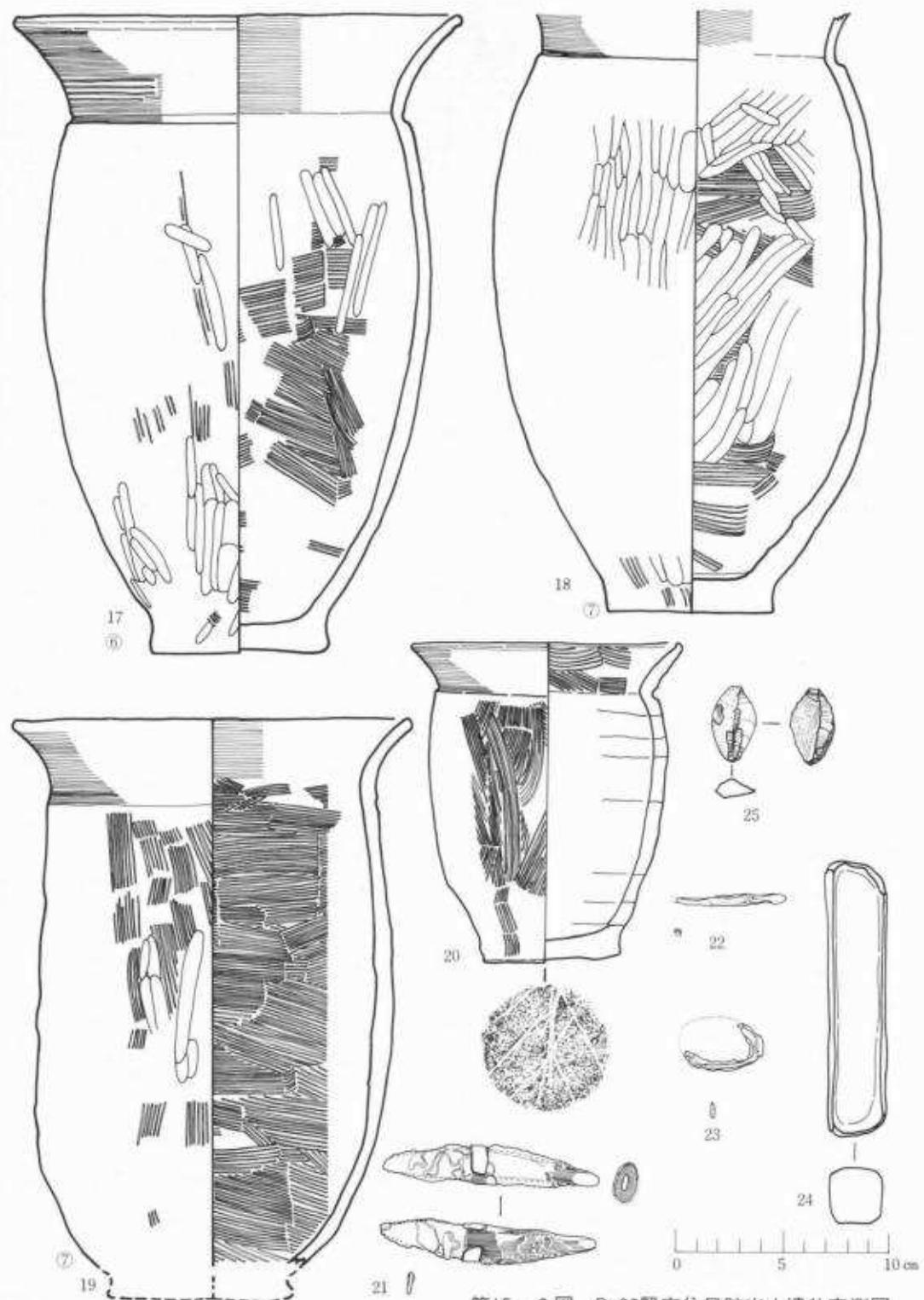
針状製品(同22)；針ほどには太くなく、断面形が円形を呈すものをこう呼んだ。断片である。



1. 褐褐色シルト質土上に黄細砂と黄褐色シルトが塊状に入る。かたい。
2. 褐褐色シルト質土。微細砂混入。かたく粘性なし。
3. 褐色シルトを層状にしきつめたもの。軟かく、粘性あり。Bg62(右)住の部分の固みにしきつめたもの。



第15—2図 Bg62堅穴住居跡出土遺物実測図



第15-3図 Bg62竪穴住居跡出土遺物実測図

第10表

分類	土器 の 平 面 圖 上	番号 測 定 図	調 整								器 高 度 径 深 度 備 考			
			口 線 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部					
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面				
甕	⑦	14	横ナ子or ヘラミガキ	横ナ子or ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	11.7	11.0	5.3	
		20	刷毛目	横ナ子	ヘラミガキ	刷毛目	横ナ子	刷毛目	横ナ子	木葉瓶	15.1	12.7	6.7	
	⑥	17	横ナ子or 横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	29.9	20.6	8.3	
	⑦	19	横毛目	横ナ子	横ナ子	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	欠失	欠失	21.4	
	③	16	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	25.6	22.1	6.8	
	⑩	15	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	13.8	15.0	6.8	
									刷毛目					
									刷毛目	刷毛目				
	⑦	18	横ナ子 ヘラミガキ	横ナ子	横ナ子	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	ヘラミガキ	28.8	15.6	7.5
						横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子				
壺	⑫	12	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	13.1	7.5	5.5	
	⑬	13	横ナ子or 横ナ子	横ナ子	横ナ子	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	24.8	16.4	7.7	
	⑪	3	ヘラミガキ	横ナ子	ヘラミガキ	横ナ子	ヘラミガキ	横ナ子	ヘラミガキ	横ナ子	5.4	18.6	内黒 丸地for 三	
	⑭	2	ヘラミガキ	横ナ子	ヘラミガキ	横ナ子	ヘラミガキ	横ナ子	ヘラミガキ	横ナ子	4.7	15.9	内黒	
			ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ					17			
高杯	⑮	4	ヘラミガキ	横ナ子	ヘラミガキ	横ナ子	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.6	21.4	15.2	
	⑯	5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	7.8	12.6	8	
瓶	⑰	9	刷毛目	横ナ子	刷毛目	横ナ子	刷毛目	横ナ子	刷毛目	横ナ子	20.3	23.6	9.2	
		7	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	12.0	18.3	6.4	
	⑱	8	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	横ナ子	22.4	20.6	8.8	

鑑状製品（同23）：用途不明であるが、断面形が偏平な長方形をなし、おそらくはリング状の全体形をなすと思われるものをこう呼んだ。21の柄の端部にみられるようなものであろうか。

IV 石 器

砥石（同24）：床面出土の太鼓の撥状の石であり、表面が平滑に研磨されているように思われる。一応砥石として掲げた。しかし通例の砥石とは石材が異なり、研磨による擦りへり方もまた異なるので、あるいは自然礫かもしだす、その場合にはむしろカマド関連のものと解した方がよいのかもしれない。

黒輝石破片（同25）：覆土出土品であるが参考のために掲げた。おそらく剥片であろうが一部に表皮を残す。特別な細部加工は認められないが、断面の一部に使用痕らしき細かい破碎部がみられ、それが使用痕であるとすれば搔器的な機能を推定すべきであろうか。

旧期Bg62竪穴住居跡（第15-1図）

既述のとおり東壁と南壁を新期Bg62住居跡と共有する形で重複して検出されたもの。新住居

跡の床面清掃後にその輪郭が現われた。

平面形は大体長方形をなし、その規模東西4.6m(推定)×南北5.1m、床面積23.46m²(推定)程となろう。西壁がやや乱れている。住居中軸線の方向(北壁と南壁のそれぞれの中点を結ぶ線)は磁北より約13°西に振れている。新・旧の振れの差は約1°であり、殆ど同じと見做してよい。

遺構内に堆積した旧住居跡本来の覆土は残存しておらず、新住居跡に帰属せしめるべき既述の第2層がみられるだけである。

床面には殆ど傾斜も無く、ほぼ平坦である。壁高は、新住居跡の検出面までを測ると約50cmとなる。床面上には大小22のビット、掘り込み、溝類がある。

それらのうち、少なくとも主柱穴と見做してよいものは、ほぼ対角線上にのる形で配置され円形ないし長方形をなす4個であろう。平均深さ40cmである。東半の2個には掘り方と柱あたり様の部分を区別でき柱あたり径は約15cm程である。

カマドは痕跡程度にしか残っていないが、北壁に取りつけられたらしい。新住居跡例と同様に中心からやや東にずれた位置である。その他の構造等は一切不明だが、表面が焼けた楕円形の凹みがある点(カマド燃床部底か)；凹みの中央に円礫がある点(「門の字」の焚口部礫の抜き取り痕か)・凹みの西北端部にやや火力をうけた黄色粘土質シルトがある点(袖部か)等々から、他の多くの例に類似する構造であったと推定できる。推定される焚口間口70cm・カマド本体奥行90cmである。煙道部・煙出し部についても不明であるが、少なくとも土中に溝状に構築されるような形式の煙道部は認められない。

床面上のその他の施設としては、カマド左隣に不整な長方形の掘り込みがあり、位置的にみて貯蔵穴と見做しうる可能性がある。西南隅にも類似のものがある。周溝は痕跡的にではあるが、東壁以外の各壁直下に残存している。西壁の長楕円形の小ビット列は、周溝の痕跡と見做すべきであろう。

年代決定の資料となる遺物は全く出土せず、既述の第2層の存在とも考えあわせると、新住居を構築する際に除去された可能性が強い。したがって年代は遺構の特徴等から推定する他はないが、いずれにしても新・旧問には、時間的にあまり大きな隔りは無いものと思われる。

Bh09豊穴住居跡(第16図・第11表)

遺跡敷地中央やや西寄りに、既述のBf09の南に接して検出した。他の遺構との重複関係も遺構内での増改築の事実もともに認められず单一の遺構である。焼失により廃絶された家屋と考えられ、その結果として逆に各種の遺存状況が非常に良好なものとなっている。

遺構の平面形は、四隅にやや丸味をもつ正方形をなし、その規模は東西4.3m×南北4.3m、床面積18.49m²となる。住居中軸線の方向(南北壁のそれぞれ中点を結ぶ線)は、磁北から約14°15'

西に振れている。

遺構内に堆積した土層は大別して二層になる。

第1層 黒褐色シルト質土層。やや硬質で、粘性もそれほど強いとはいえない。黄橙色シルト質土塊・有機質土塊・炭化物塊等を混入し、覆土の大半をなす。

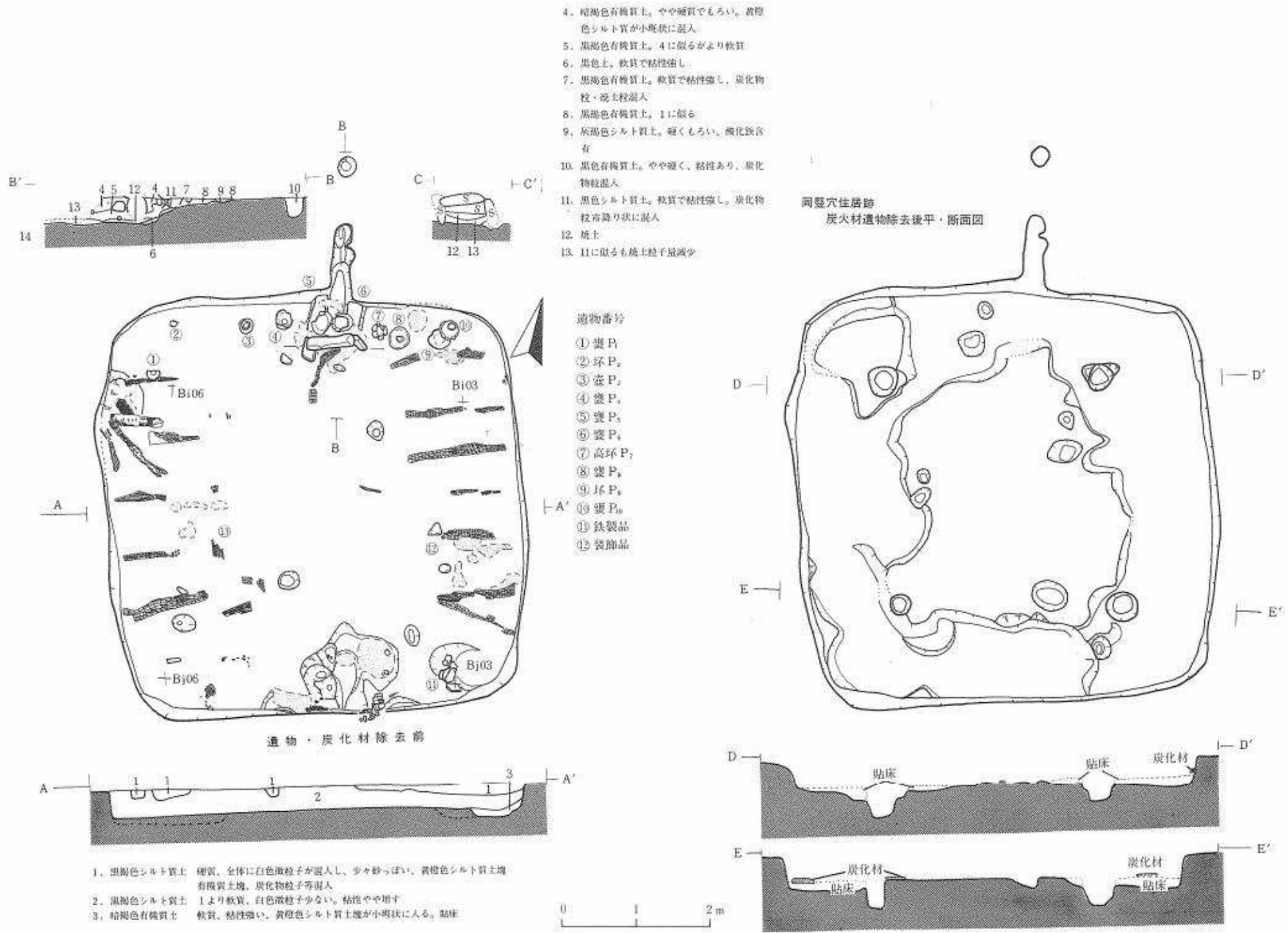
第2層 暗褐色有機質土層。軟質で粘性も強い。黄橙色シルト質土塊が斑状に混じる。後述のような床面上に一度つくられた掘り込み部分の凹みの覆土である。

若干の焼土の分布が見られる生活時の床面と思われる面の状況はほぼ平坦であり、その上に炭化材・遺物等がある。住居の構築法上他例には見られない特徴をもつ。それは住居の床面をつくる過程で、住居床面の中央が島状に高く残るように各壁に沿って巾80~100cm・深さ10~15cm程の掘り込みをつくる点である。この掘り込みを一旦つくっておいて、直ちにそれを前記の第2層でもって埋め戻して中央部の床面のレベルと同一にしている。したがって実際に生活を営んだであろう床面は平坦になることは既に述べた。この作業の目的は不明といわざるを得ないが、しかし、後述する4本の主柱穴と思われるもののすべてやカマドが、この掘り込みの中におさまることからすると、この掘り込みは主柱穴やカマド等の施設を築くさいの一種の「掘り方」的な意味を、さらに周溝類似の用途をもっているのではないかとも推定できる。壁高はこの掘り込み底からは35~40cm、生活時の床面からは25~30cmとなる。床面上には大小13個のピット掘り込み類がある。

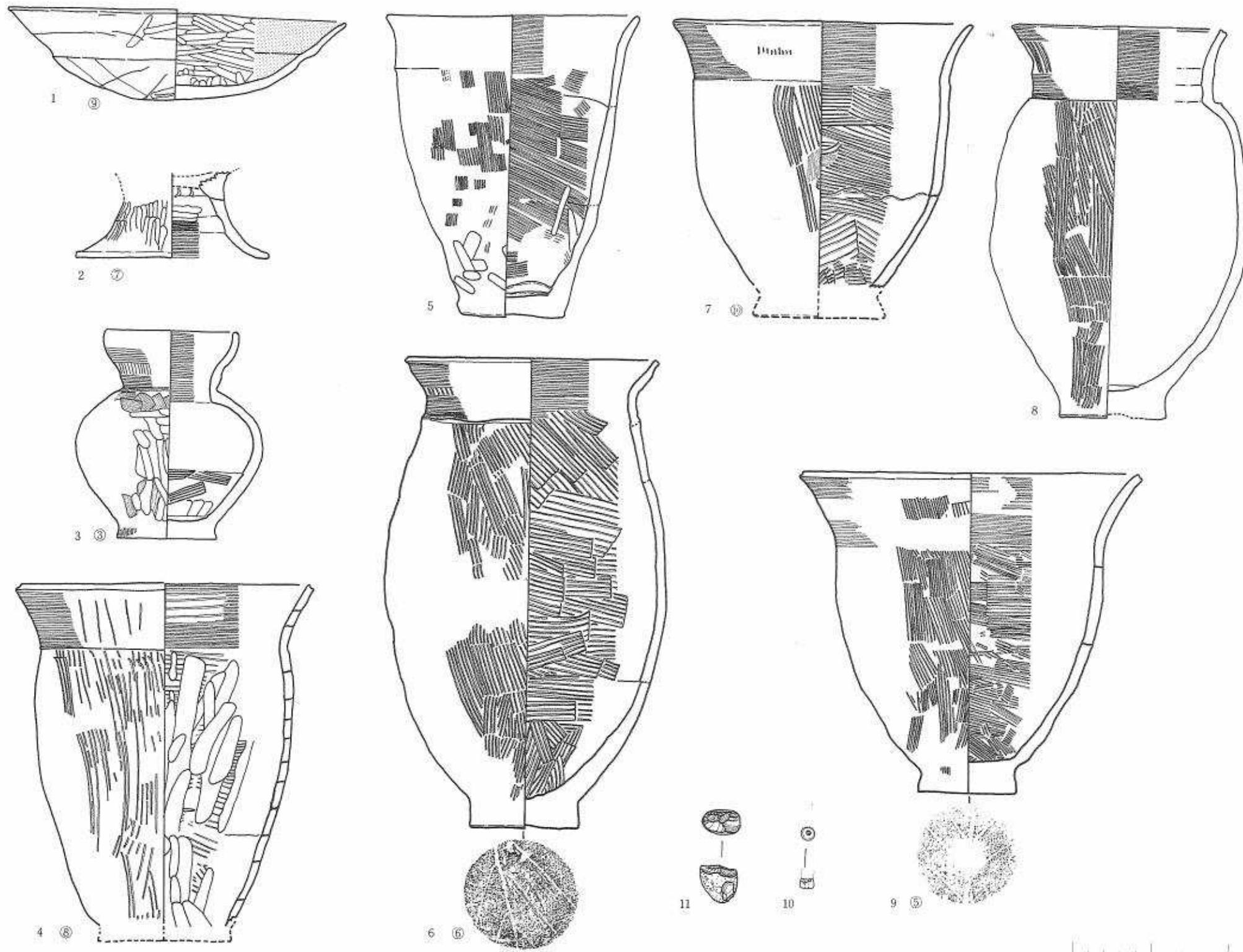
それらのうちで少なくとも主柱穴と見做し得るものは、ほぼ対角線上にのるように配置され前記掘り込み内に収まる円形の4個であろう。平均径27cm・平均深さ24cmである。尚主柱穴中には遺存した柱脚等は認められず、黒褐色の有機質土のみが存在した。

カマドは北壁に取りつけられているが、中心からやや東方へずれている。カマド本体の構築法・焚口部の「門の字」状の礫の使用（本例では完全な形で遺存している）等、他の例に共通する特徴をもつ。焚口部の間口70cm・高さ35cm、本体奥行60cmの規模である。本例には煙道部も煙出し部も備わっている。燃焼部底が北壁と連結する部分はやや高くなり、それを底面とする煙道部が北方へ80cm程延び、徐々に浅くなる感じで自然に終結する。そこからさらに北へ45cmの所に径20cm・深さ20cmの円形ピットがある。覆土に炭化物粒が認められた点や、煙道部との位置関係からしても煙出し部としてもよいのではないかと思われる。本例ではカマドのみならずその周辺の遺物の保存状態が非常に良好であったのが特に目立つ。

床面上には貯蔵穴その他の施設は認められない。ここで生活時の床面上に多く認められ、本例が焼失家屋ではないかと推定せしめた炭化材について記す。これらは結果的に既述の一旦掘り込んでおいて埋め戻した、ある意味では貼り床的なものの表面に位置している。それらの配置は、東西壁の側に、それぞれが東西方向に併行するものである。東側に7箇所・西側にも7



第16-1図 Bh.09堅穴住居跡実測図



第16-2図 Bh09竪穴住居跡出土遺物実測図



箇所あったと考えられる（東南隅付近のものは調査時の不手際から削平してしまった）。中央部には遺存が見られない点が特異に感ぜられる。これらはいずれも端部が床面に直立ないし埋め込まれているものは存在せず床面上に横たわるもののみである。したがって少なくとも柱ないし壁材関連のものではないといつてよいと思われる。となれば残る可能性は屋根材となるであろう。屋根材とくに「垂木」様のものと見做し得ると思われる。さらにこれらの配置が、放射状をなすいわば求心的なものではなく、南北壁に併行するものである点をとれば、その上屋は所謂「切妻」的なものになるかとも推定される。ただし、東南隅・カマド焚口部前等に、あるいは放射状になるかとも思われる材があるのが気になるが。なお入念に調査したが、壁部には板材の配置などは認められなかった。

年代推定の資料としては、カマド中やカマド周辺の北壁直下、一列にならんで豊富に発見された各種の土師類がある。

(遺物)

I 土 師 器 (第16-2図・1~9) 第11表

分類	土平 器 器 番 号 の 上 方 番 号	実測 図 番 号	調 整								器 高 さ cm	口 径 cm	底 径 cm	備 考				
			口 線 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部									
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面								
表		5	横ナデ	横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	ヘラミガキ	ナデブケオ ヘラナガ	ヘラケアリ	19.5	16.4	6.8				
	⑥	6	横ナデ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	木葉瓶	30.3	16.5	7.0					
	⑧	4	横ナデ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	欠失	欠失	22.1	18~19	8.3					
	⑩	7	横ナデ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	欠失	欠失	17.1	19~20	7.5(?)					
	⑤	9	刷毛目のち ヨコナデ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	木葉瓶	20.6	21.4	6.0					
		8	横ナデ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	木葉瓶	25.2	13.0	6.0					
			刷毛目	刷毛目	刷毛目													
壺					刷毛目	刷毛目				木葉瓶								
	③	3	横ナデ	刷毛目のち 横ナデ	刷毛目	ヘラミガキ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	ヘラミガキ	ナデブケ	13.3	8.0	6.4				
	⑨	1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5.8	21.7		内無			
			ヘラミガキ	ヘラミガキ					ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ							
			ヘラミガキ	ヘラミガキ					ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ							
高環	⑦	2	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	欠失	ヘラミガキ (刷毛目?)	ヘラミガキ	4.6	12.5	7.4				
			横ナデ	横ナデ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	ヘラミガキ	ヘラミガキ	13.1	15.5	7.4				

II 装飾品 (同10)；破片ではあるが球形はなさず管状をなすものと推定できる。土製。遺存の状況が不良なので詳細は不明であるが、焼かれており、彩色などは認められない。床面出土。

III 石 器

黒曜石片（同11）：他の例と同様に覆土からの出土であるが、参考までに掲げる。黒曜石原石の円礫を半割し、その断面を刃部同様に剝離している。そこに使用痕らしい細かい破碎部があり、もしも使用したとすれば搔器ないし彫器的な機能を推定してよいのであろうか。

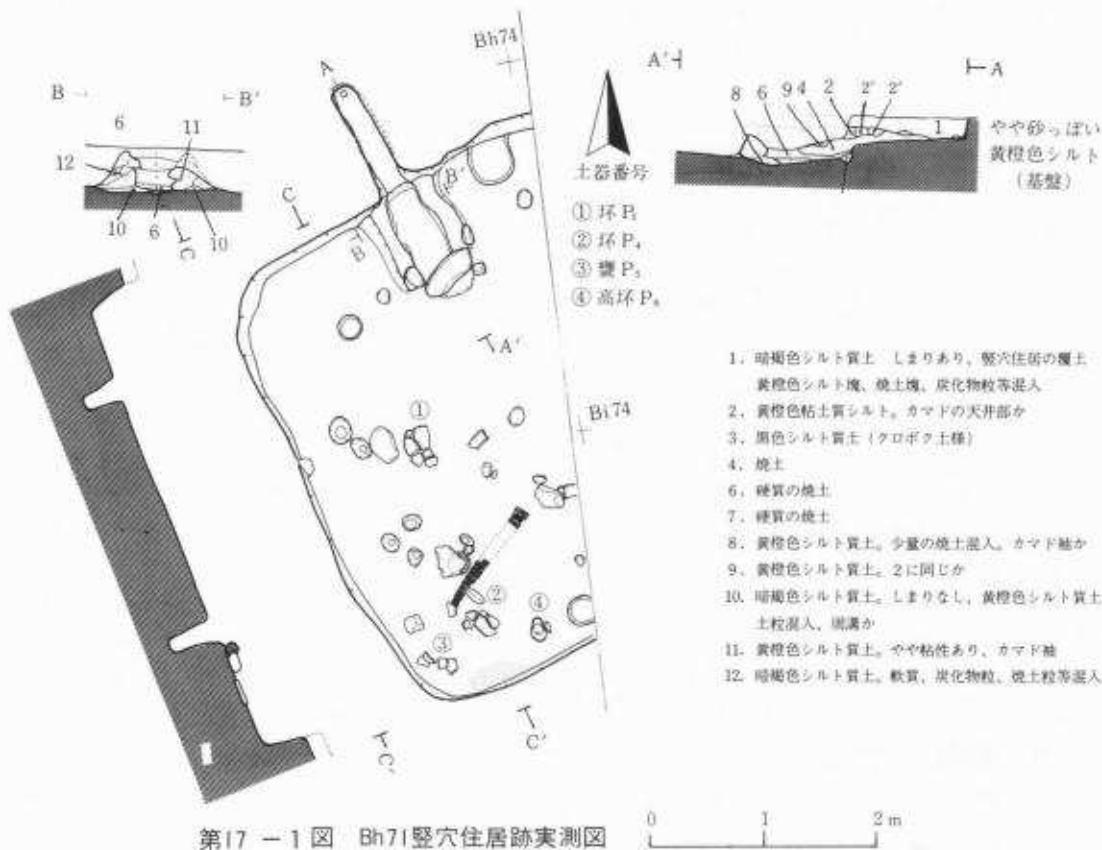
Bh71堅穴住居跡（第17図・第12表）

遺跡敷地東縁中央やや南寄りで既述のBg62の東隣りに検出。その東半は道路敷地外にわたったため、その部分は未調査である。

他の遺構との重複関係と増改築の事実は、少なくとも調査分の範囲内には認められない。

遺構の平面形は未調査分があるために未詳としかいいようがないが、後述のカマドが北壁のほぼ中央に位置すると仮定すると、大略長方形となり、その規模東西3.5m（推定）×南北3.9m、床面積13.65m²（推定）程にもなるのであろうか。住居中軸線の方向（これもしいて推定して、カマド中心部と推定される南壁の中点を結ぶ線、ちなみにそれは煙道の東西二等分線の延長には一致する）は、磁北から約29°西に振れる。

遺構内に堆積した土層はほぼ一層である。実測図にはよく表われていないが、暗褐色シルト



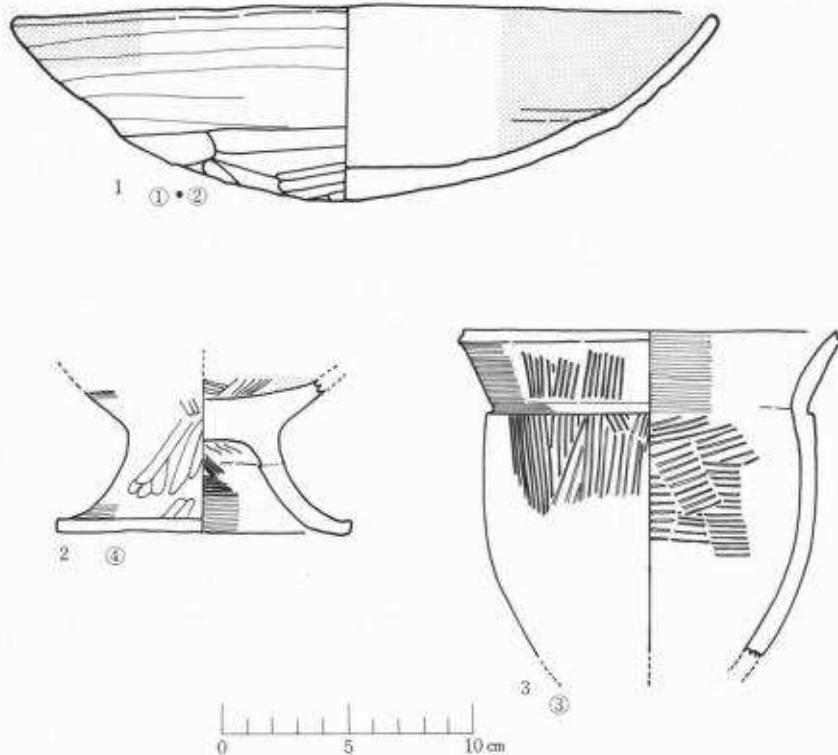
第17-1図 Bh71堅穴住居跡実測図

質土層。しまりがあって粘性はあまり無く乾燥すると大きくクラックが入る。黄橙色シルト質土塊・焼土粒子・炭化物粒子等が混入する。

床面には傾斜や激しい凹凸はみられずほぼ平坦である。壁の遺存状況もよく、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約50cm程である。ただし掲げた実測図では30cm程になっているが、これは遺構検出に苦労した結果、かなり掘り下げ過ぎたために生じたものである。床面上には9個のピット・掘り込み類と、数個の礫、焼土の集積部等がみられる。

それらのうち、少なくとも主柱穴と見做しうるものは、ほぼ対角線上にのる位置にあり、円形をなす4個であろう。平均径20cm・平均深さ30~35cmである。掘り方と柱あたりの区別はつけられなかった。尚西南隅の1個の縁に礫が位置していたが、これはあるいは柱関連の機能をもつものかもしれない。

カマドは北壁につくられている。未調査部分があるために不明であるが、他の例からしてほぼ北壁の中央に近い部分に取りつけられたのであろう。カマド本体の構築法・燃焼部底の形状・焚口部の構築法などに他例に共通する特色がある。焚口部の「門の字」状の礫の遺存状態は非常に良好である。本例には煙道部と煙出し部もみられる。燃焼部底が北壁と接続する部分が



第17-2図 Bh71竪穴住居跡出土遺物実測図

— 今泉遺跡 —

一段高くなり、それが煙道部底となり・そのままほぼ水平に北へ90cm延び、そこで垂直に立ち上がり終結する。末端部近くの底面上に土師器片が1個みられ、ここが煙出し部とされた可能性が強い。なお燃焼部底と北壁が接続する部分の北壁直下に細い溝状のものがあり、それはおそらく周溝の一部と考えられる。とするならば、本例においては住居の壁とその直下の周溝をほぼつくりあげてからカマドを構築したということになる。

床面上にみられるその他の施設としては、まず東北隅に円形の掘り込みがある。これはカマドとの位置関係からして貯蔵穴にうってつけのものであるが、5cmと非常に浅く、その点に多少躊躇させるものがある。次に礫の分布についてはそれ自体の配置に何らかの意図も読みとれず、またその周辺にも何らの異常も看取できないので、性格不明といわざるを得ない。ただし、それらの中にあるいは柱関連のものがあるかもしれないことについては既に述べたとおりである。最後に西南隅の壁直下に焼土の集積と、その近くに1本分の炭化材が見られるが、これらについても積極的な意味は読みとれなかった。少なくとも焼失家屋ではないのであろう。

年代推定の資料としては、床面出土の数点の土師器がある。

(遺 物)

I 土 師 器 (第17-2図・1・2) 第12表

分類	土 士 器 番 号	実 物 圖 番 号	調 整								器 高 度 mm	口 徑 mm	底 径 mm	備 考				
			口 檻 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部									
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面								
甕			刷毛目	刷毛目 <small>のち 横ナメ</small>							32.8	17.5	7.0					
甕	③	3	刷毛目 <small>のち 横ナメ</small>	刷毛目 <small>のち 横ナメ</small>	刷毛目	刷毛目	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失	16.6	10.3	6.4					
坪	①②	1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラケヅリ ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	10.8	10.3					
高坪	④	2	欠 失	欠 失	欠 失	欠 失	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ 横ナメ	4.7	34.0						

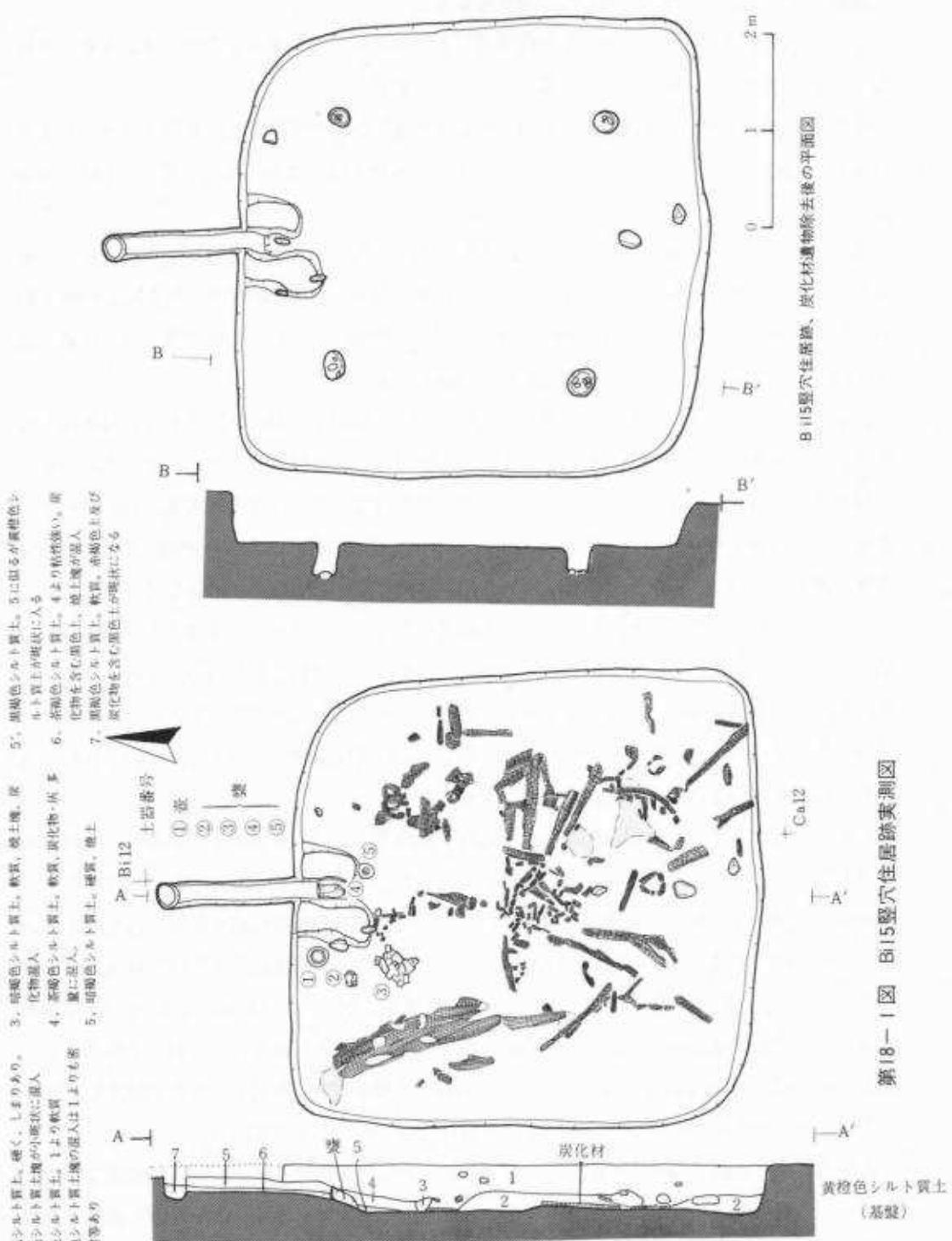
B15豎穴住居跡 (第18図・第13表)

遺跡敷地中央部やや西寄りの地点で、既述の焼失家屋Bh09の左隣に検出した。後述のように本例も焼失家屋である。

他の遺構との重複関係も、遺構内での増改築の事実とともに認められず、単一の遺構である。床面上に大量の炭化材が遺存しているので、本住居は火災により廃絶を、その後も同一場所での復興・新築はなかったと見做しうる。そのため遺構・遺物の保存状態が一面ではかえって良好なものになっているといえる。

遺構の平面形は、四隅にやや丸味を帯びた長方形をなし、その規模は、東西4.2m×南北4.5m、床面積18.90m²程になる。住居の中軸線(北壁の中央にあるカマドの中心と南壁の中点を結ぶ線)は磁北から約6°5'西に振れている。

1. 黒褐色シルト質土。硬く、しまりあり。
2. 黄褐色シルト質土。7箇所が小断面に入り
黄褐色シルト質土質入。
3. 黑褐色シルト質土。軟質、硬土層。底
化物混入。
4. 黄褐色シルト質土。軟質、炭化物・灰・多
量に混入。
5. 黑褐色シルト質土。硬質、地
炭化物等入り。



第18-1図 B15号穴住居跡実測図

— 今泉遺跡 —

遺構内に堆積した土層は大別して二層からなる。

第1層 黒褐色シルト質土層。やや硬質でしまりがあり、乾燥するとクラックが入る。黄橙色シルト質土塊が小斑状に混入する覆土の大半を占める。

第2層 茶褐色乃至暗赤褐色シルト質土層。第1層に比しやや軟質で、黄橙色シルト質土塊の混入も密になる。炭化物・土器片等が混入する。床面・炭化材等に密着してその上層に堆積している。

床面の状況は傾斜も殆どみられず、ほぼ平坦である。炭化材・遺物等は床面上に密着して遺存している。床面は全体的にはあまり焼けておらず、部分的な焼土の集積が見られる程度である。壁の残存状況も良好で、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40~45cm程度であろう。床面上には4個のピットと3個の礫の分布が見られるのみである。

4個のピットはほぼ円形をなし、その平均径20cm・平均の深さ25~30cmであり、対角線上に正確にのる位置関係にある。したがってこれら4個は主柱穴と見做してよいものと思われる。尚掘り方と柱あたりの区別はつけられなかった。また柱穴中には柱脚の残欠等は検出されず、黒褐色の有機質土のみが認められた。既述のBh09とともにこの点に多少の疑問が残る。それは柱脚が遺存しないことの解釈である。即ち自然に腐敗してしまったので遺存していないのか、あるいは火災後に人為的に抜き取られたために遺存しないのか、という問題である。調査時の観察によると主柱穴の周囲には特別な異常は認められなかつたし、とくにBh09における整然とした炭化材の遺存配置などからすると前者の解釈がより妥当なものだとは思えるのであるが。最後にすべての柱穴底面に数個の礫がみられたが、これはBi24例におけると同様に、柱脚を支える一種の礎盤的な役割をになうものとも考えられる。

カマドは北壁の中央に構築される。その構造は他の多くの例に共通する点が多い。焚口部の礫は左袖部のものしか残存していないがやはりこれも「門の字」状をなしていたのである。焚口開口60cm・高さ30cm、本体部奥行90cm程にもなろう。本例は煙道部・煙出し部も備えている。今泉遺跡としては、比較的長めのそれらを有する。カマド燃焼部底が北壁と接続する部分が傾斜をもって一段高くなり、そのレベルが煙道部底面となる。そのままほぼ水平に北へ110cm程伸び、末端部に径20cm・深さ30cmの円形ピットを穿ち、煙出し部としたものようである。後述のCb24に共通する構造である。カマド燃焼部には土師器甕が横倒しの状態で位置し、同じく燃焼部底には礫がうめ込まれ、支脚として用いられたものようである。

床面上にはその他の遺構は検出できなかつたが、大量の炭化材と若干の焼土集積部分が遺存していた。炭化材の量の多大と焼土の存在から、本例を焼失家屋の可能性があると判断し、既にそのような説明を加えてきた。これらの炭化材はすべて床面上に単にのるだけの状態にあり、床面上・壁直下に直立していたことをうかがわせる証左は、何も存在しなかつた。また壁に沿

って垂直に立った状態にあったことをうかがわせる資料も存在しなかった。したがってこれらは柱材や壁関連の材ではなく屋根関連の材と見做すべきと思われる。その遺存配置をみると、既述のBh09例に比し非常に乱雑で、火災後の人為的な攪乱をすら推定せしめるものがある。もしもそれが無かったと仮定した場合には、これらの配置の特徴は、住居の中心から放射状になっているとすることができよう。すると、その屋根の構造はBh09において推定した「切妻」的なものとは大きく異なることになろう。調査結果から得た資料では以上の二様の解釈が可能になることだけを掲げておく。

遺構の年代推定の手掛りとなしうるものは、カマド中・カマド周辺出土の土師器類がある。

(遺 物)

I 土 師 器 (第18-2・3図・1~7) 第13表

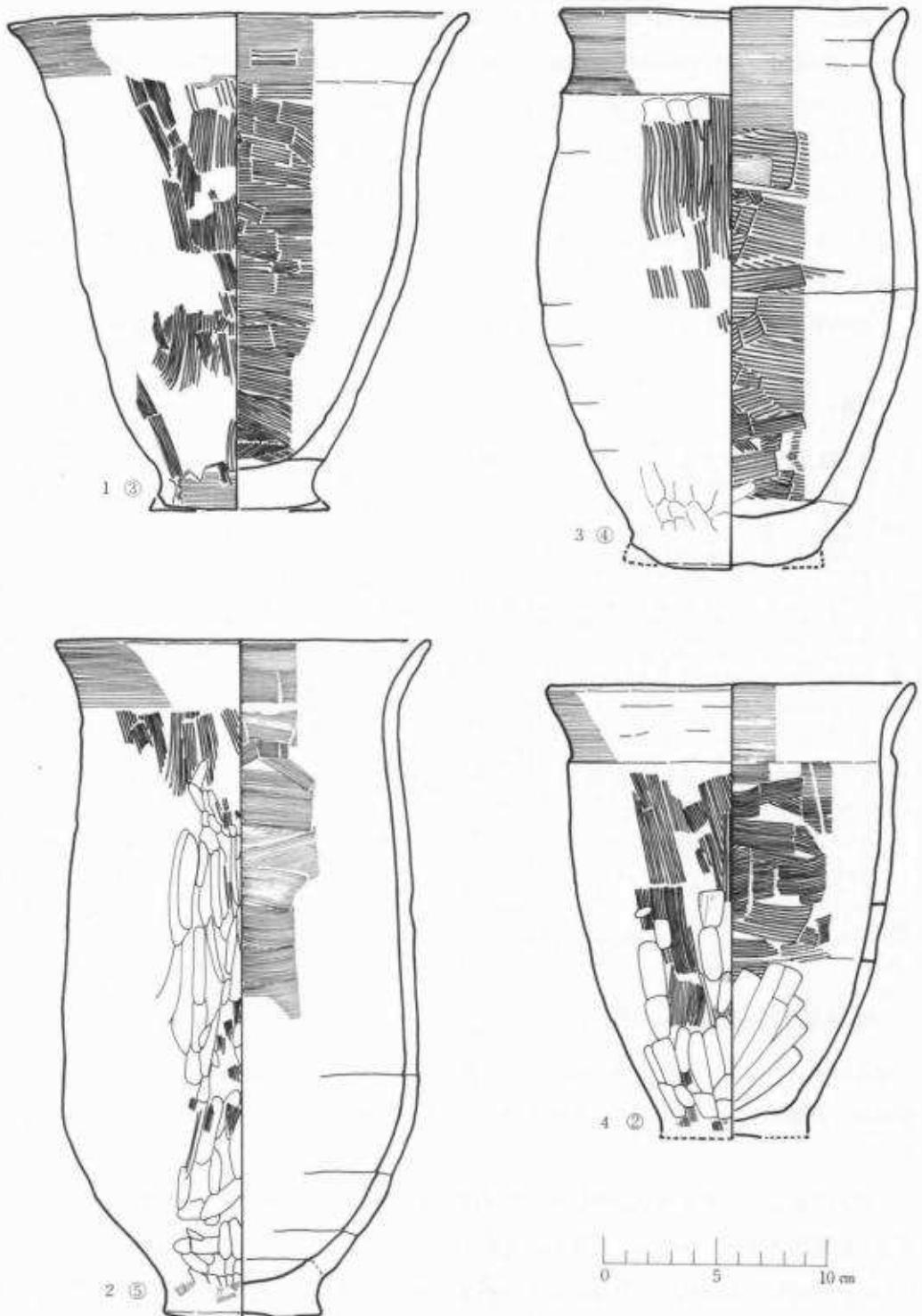
分類	土平 器 面 番 上 号	実 測 図 番 号	調 整								器 高	口 徑	底 径	備 考					
			口 線 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部										
			内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面									
腰					刷毛目(?)	ヘラケズリ													
	②	4	横ナテ	横ナテ	刷毛目	刷毛目	刷毛目のち ナテツケ	ヘラケズリ or ヘラミガキ	刷毛目	刷毛目	20.3	16.2	6.6						
	③	1	横ナテ	横ナテ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	ミガキ	22.2	20.6	7.6						
	④	3	横ナテ	横ナテ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	ミガキ or ナテツケ	25.1	15.6	8.6						
	⑤	2	ヘラナテ	横ナテ	ヘラナテ	ヘラミガキ	ヘラナテ	ヘラミガキ	ヘラナテ	ヘラナテ	30.5	17.0	7.2						
垂		6	横ナテ	横ナテ	刷毛目のち ヘラミガキ	ヘラケズリ					13	15~16	7(?)						
	①	5	横ナテ	刷毛目のち 横ナテ	刷毛目のち ヘラミガキ	刷毛目	刷毛目のち ヘラミガキ	ヘラミガキ	欠失	欠失	14.0								
环					水性灰										須恵器				
			ミガキ	横ナテ					ミガキ	ヘラミガキ(?)									
		7				ヘラケズリ 刷毛目					6.2	6	6.4		小型鉢 又は瓶				
高环						ナテが ミガキ(?)		ミガキ											
底							刷毛目	ヘラケズリ											

B124 積穴住居跡 (第19図・第14表)

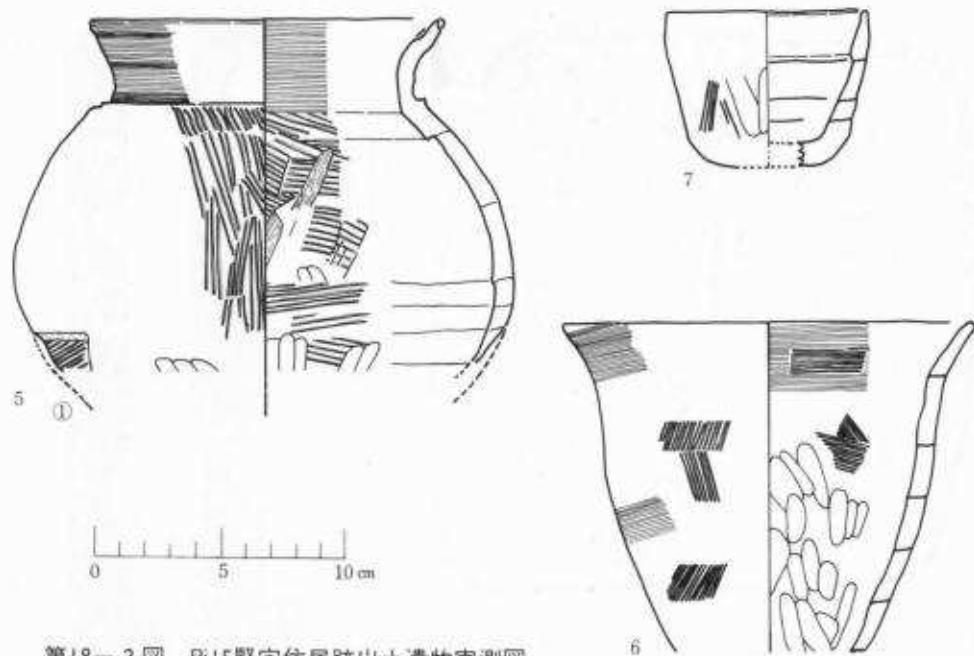
遺跡敷地西北縁部に検出した。段丘崖にはほど近い平坦面である。他の遺構との重複関係も、遺構内での増改築もいずれも認められず单一の遺構である。遺構の保存状態は非常に良好である。

遺構の平面形は大略正方形に近いが、四隅に丸味をもち、また各壁の中央部が外方に張り出すように弧状のカーブをもつ。全体的に丸味が印象づけられる。その規模は東西4.3m×南北4.3m、床面積18.49m²程度となる。住居中軸線の方向（北壁中央のカマドの中心部と南壁の中点とを結ぶ線）は、磁北から約20°西に振れている。

遺構内に堆積した土層は非常に単純であり大別して二層となる。



第18-2図 Bi15竪穴住居跡出土遺物実測図



第18-3図 BI15竪穴住居跡出土遺物実測図

第1層 暗褐色シルト質土層・黒色味が強い。大型の黄橙色シルト質土塊が混入。覆土の大半を占める。

第2層 黄橙色シルト質土と褐色シルト質土の混土。床面に接して、部分的にみられるのみ。生活の何らかの痕跡であろうが、貼床ではない。

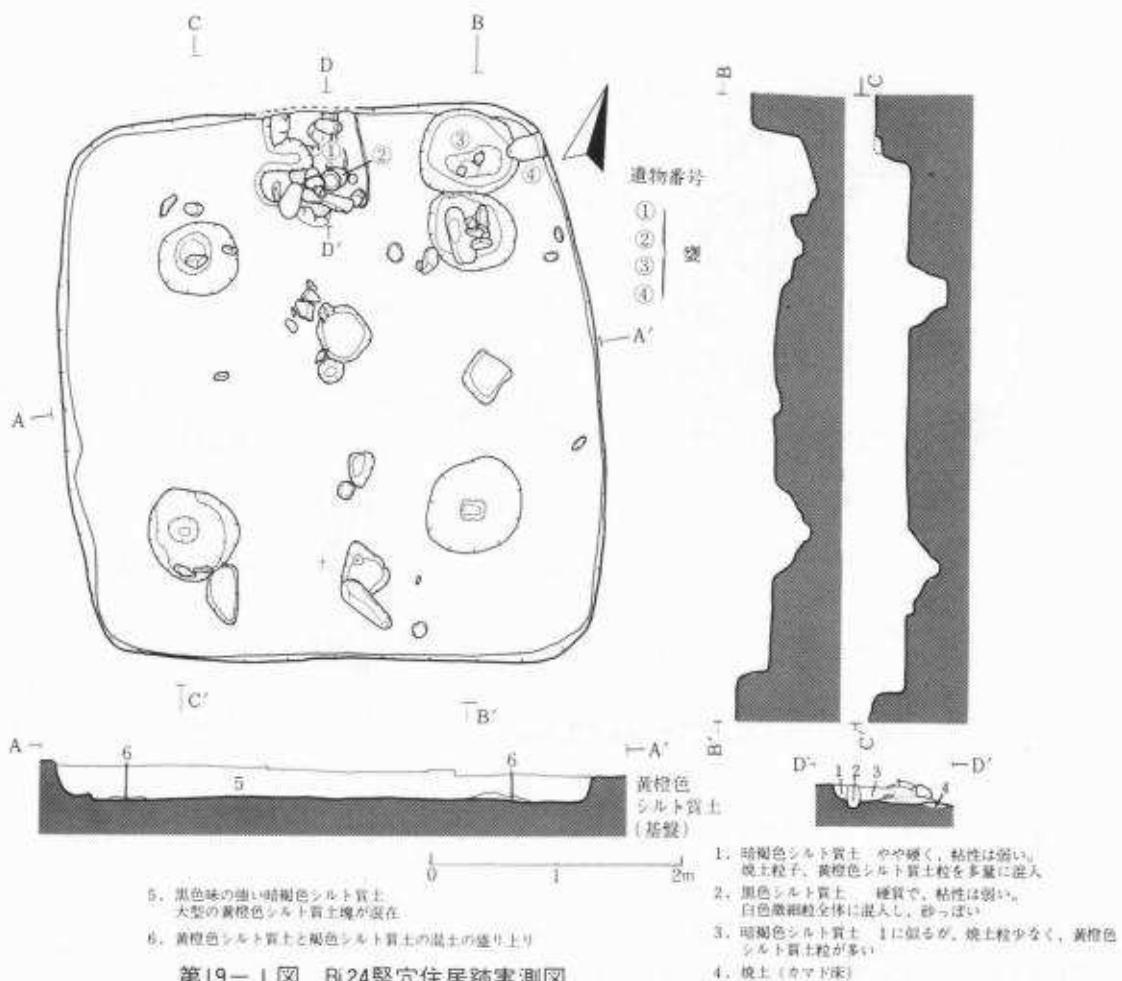
床面には傾斜もみられず、全体的にはほぼ平坦である。壁の遺存状態も良好で、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30cm前後である。床面上には大小10個のピット掘り込み類がある。

それらの中で、少なくとも主柱穴と見做しうるのは、正確に対角線上に位置する大形の4個であろう。これらは今泉遺跡中で最良の資料といえ、掘り方と柱あたり、さらにおそらくは柱穴に伴うと見做しうる礎の三者が、明白なセットをなしていることを看取できる。

掘り方はほぼ円形をなし、その径約60cm~70cm、柱あたりと思われるものは楕円形ないし長方形をなし、長径20cm・短径15cm・深さ30cm程度を測る。

東北隅の掘り方覆土に礎がみられるが、これらはおそらく柱を周囲から圧して固定するためのものと考えられる。また西北隅のものの柱あたり部の床面にも礎が見られるが、これには柱端部を支える礎板的な役割を想定しうると思われる。

主柱穴は以上であろうが、他に床面中央部には南北に一列にならぶピット列がみられる。これらはすべてが深いわけではないが、その配置からみて住居の構造に関連する何らかの意味をもつものかもしれない。



第19-1図 Bi 24堅穴住居跡実測図

カマドは北壁に正確に中央に構築される。左袖部が破損するなど多少遺存状況が悪い部分もあるが、構造その他は他例に殆んど同一である。焚口部間口70cm・高さ27cm、本体部奥行80cm程度である。本例には土中にそれと認められるような煙道部・煙出し部は検出できなかった。

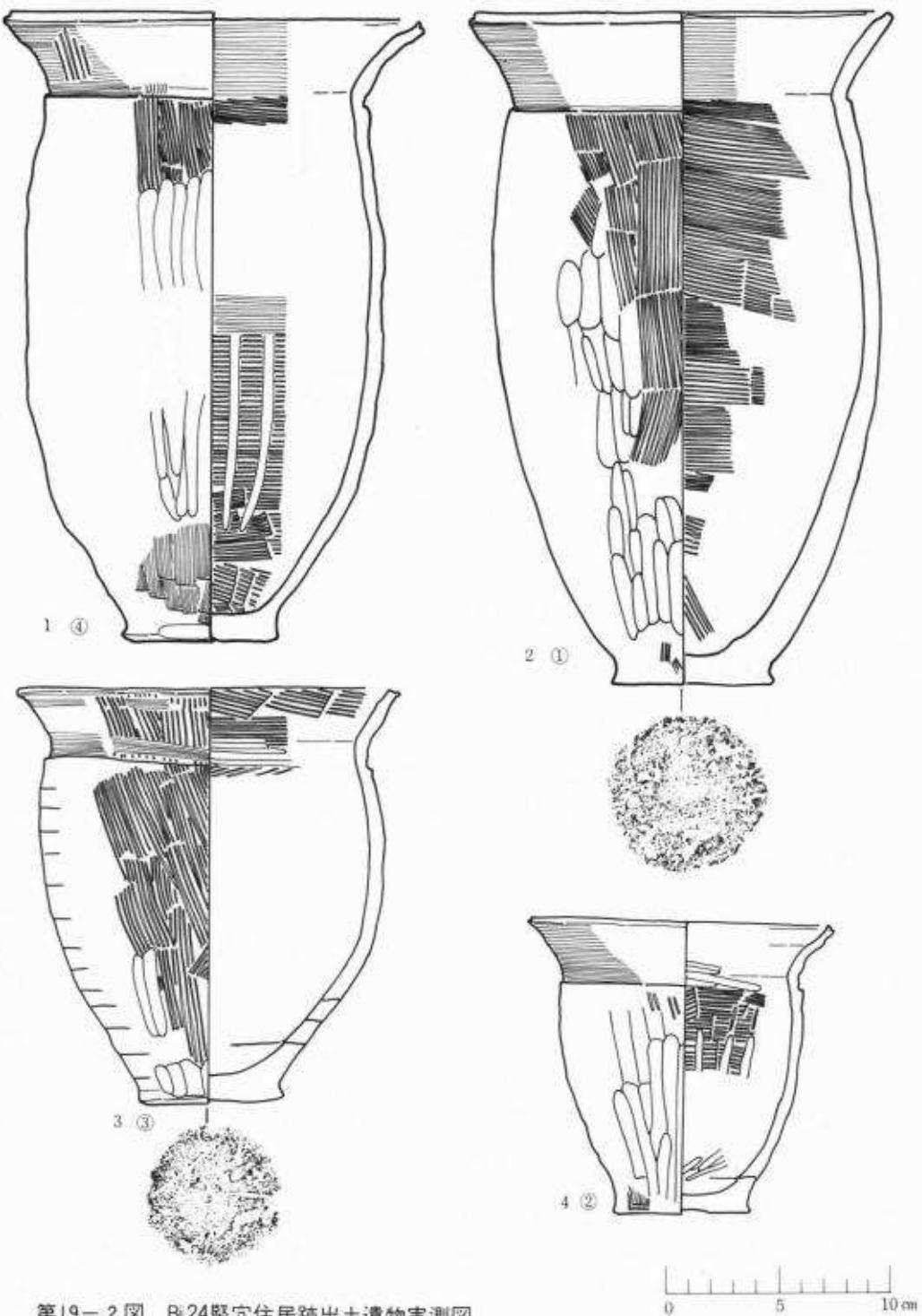
床面上のその他の施設としては、カマド右隣の西北隅に径75cm・深さ30cmの掘り込みが穿たれ、その上縁と内部に大小の土師器の甕が位置していた。これは貯蔵穴と見做してよいものであろう、これ以外の施設は認められない。

年代推定の資料としては、カマド中と貯蔵穴中から出土した土師器類があげられる。

(遺 物)

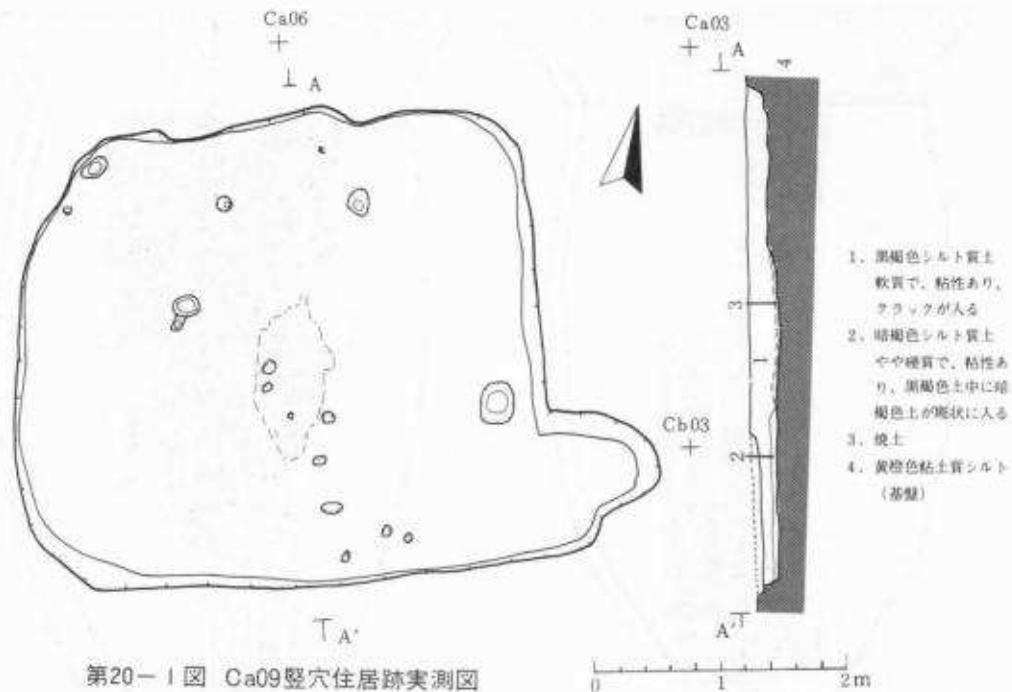
I 土 師 器 (第19-2図・1~4) 第14表

分類	土 士 器 の 固 形	番 号	測 定 数	調 整								算 高	口 径	底 径	備 考				
				口 筒 部		体 部 上 半		体 部 下 半		底 部									
				内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面								
甕	①	2	横ナナ 横ナナ	横ナナ	横ナナ	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	2.5	木葉瓶						
		4	ヘラミガキ 横ナナ	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	2.5	木葉瓶						
		1	横ナナ 横ナナ	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	2.5	木葉瓶						
		3	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	横毛目	2.5	木葉瓶						



第19-2図 B-24竪穴住居跡出土遺物実測図

0 5 10 cm



第20-I図 Ca09竪穴住居跡実測図

0 1 2m

Ca09竪穴住居跡様遺構(第20図)

遺跡敷地中央部南端近くで、前述のBh09の南方に検出した。

東南隅で後世の掘り込みと重複しているが遺構内での増改築の事実は認められない。

前記の後世の掘り込みの張り出し部を除いた遺構の平面形は、大略長方形に近く、その規模は東西4.1m(推定)×南北3.7m(推定)、床面積15.17m²(推定)程となろう。

遺構内に堆積した土層は大別して二層からなる。

第1層 黒褐色シルト質土層。この種のものとしては珍らしく軟質で粘性もある。やはり乾燥すると大きくクラックが入る。覆土の大半を占める。

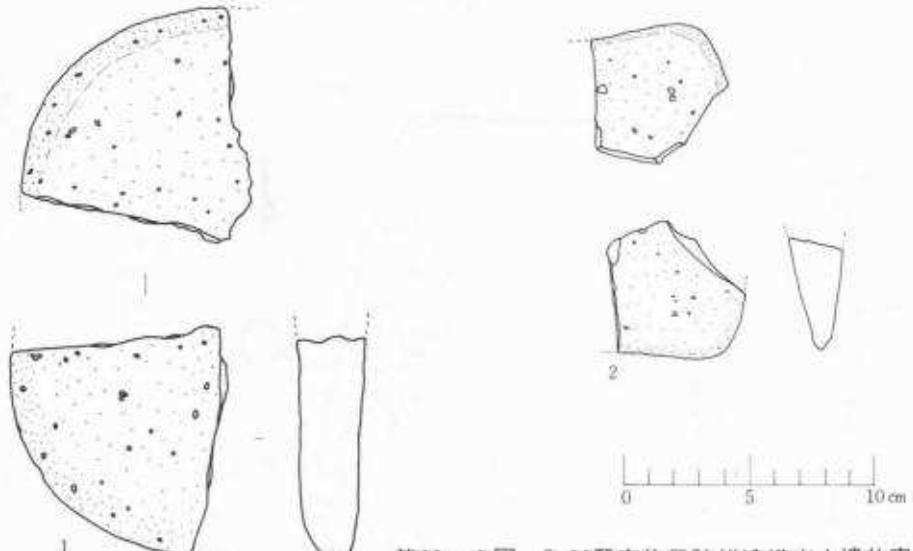
第2層 暗褐色シルト質土層。やや硬質となるが、粘性もややある。黒褐色土塊が小斑状に混入する。遺構北半の中央部にのみ部分的に分布する。

床面は傾斜もなくほぼ平坦である。壁の遺存状態は不良で、傾斜をもって立ち上がり、壁高は一応18~20cm程である。床面上には6個のピットと数個の礫、焼土が見られる。

それらのうち明らかに柱穴と見做しうるものは存在しない。

カマドと見做しうるものもやはり存在しないが、床面中央部に楕円形の焼土集積部分があり、あるいはこれが炉的な機能を果したのかもしれない。床面上の礫は性格不明であり、その他の施設は存在しない。

年代推定の資料となしうるものは床面上からは全く検出されなかった。わずかに覆土中から



第20-2図 Ca09竪穴住居跡様遺構出土遺物実測図

繩文式土器（晩期）の細片と、ロクロ成形と思われる土師器の細片を得たのみである。

以上のように、本遺構は積極的に竪穴住居跡と主張することは、少しく躊躇せざるを得ず、標記のような遺構名を冠した次第である。しいて年代を推定すれば、覆土中出土の遺物とAi62の如きカマドをもたない遺構の年代とを勘案して少なくとも奈良時代までは遡らず、平安時代以降に属する可能性があるとのみいっておく。

（遺 物）

打割された偏平碟（第20-2図1・2）： 覆土出土であるが参考までに掲げた。他の例と同様に偏平な円碟の周縁と片面を研磨し、それをうすくまたは平らにしたもので、半割ないし四分割したもの。したがって片面はフラット、片面はカーブすることとなる。用途、年代とともに不明である。

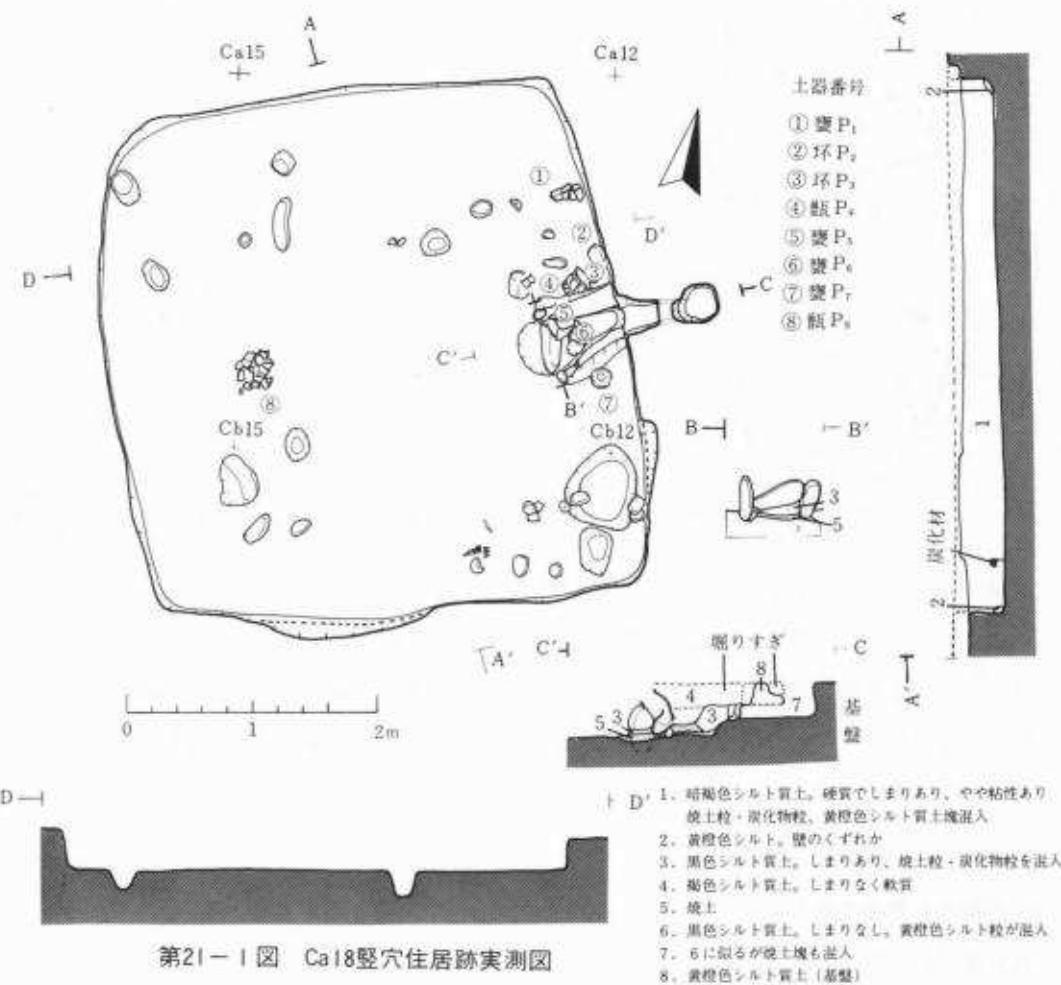
Ca18竪穴住居跡（第21図・第15表）

遺跡敷地西南端近くで、既述の焼失家屋Bi15の南壁にはほ壁を接して検出した。

既述のとおりBi15とは非常に近接はしているが重複はしておらず、また遺構内の増改築の事実も認められず、単一の遺構である。ただしその割には、カマド以外の遺構各部の遺存状態は良好とはいえない。

遺構の平面形は、南壁の中央付近を調査時にやや掘りすぎてしまった点、さらに各壁が心もちカーブする点を除けば、大略正方形に近い。その規模は東西4.1m×南北4.15m、床面積17.015m²程になる。住居中軸線の方向（東壁のはほ中央に取りつけられたカマドの中心と、西壁の中点とを結ぶ線）は、磁北から69°15'東へ振れている。これら今泉遺跡内で検出した竪穴住

—今泉遺跡—



居跡の中で、本例のみがカマドを東壁に有することに起因する。

遺構内に堆積した土層は非常に単純で、大略二層からなる。

第1層 暗褐色シルト質土層。硬質でしまりがあるが、粘性もややある。乾燥するとクラックが大きく入る。各遺構にもっとも普遍的にみられる土層である。焼土粒・炭化物粒・黄橙色シルト質土塊等が混入する。

第2層 黄橙色シルト質土層。やや汚れており、しまりもあまりない、部分的に壁際にみられるのみなので、壁の崩土であろう。

床面には傾斜は殆んどみられず平坦に近い。壁の残存状況は良好で、ほぼ垂直に立ち上がり、壁高は約24cmを測る。床面上には大小10個のピット・掘り込み類、数個の礫等がみられる。

10個のビット。掘り込み類のうち、明確に主柱穴と見做しうるものは残念ながらない。しか

し、西北隅・東南隅のそれぞれに多少その可能性があり、さらにひいき目にみれば、東南隅の長方形に近いものと、西南隅のやや大きめであるが不整形のものにもその可能性があろうか。いずれにせよ、本遺構では、他の多くの例におけるようなきちんとした配置をなすようなピットは存在しない。前記4個の平均径25cm・平均の深さ20cm程度にもなるであろうか。掘り方・柱あたりの区別はできなかった。

カマドが例外的に東壁中央に構築されたことについては既に述べた。構築位置は全く異なるが、しかしその他の構築法等の特徴は、共通性が強い。とくに焚口部の「門の字」状の礫の遺存状態は非常に良好で、最良の部類に属する。焚口部間口76cm・高さ20cm、本体部奥行70cm程度となる。本例には煙道部も煙出し部も備わっている。煙燃部底が北壁と連結する部分が10cm程度高くなり、そこからが煙道部の底面となる。煙道部はそのまま北へ50cm延び、その先は径20cmの煙出し部となる。煙道部と煙出し部はトンネル状に連結している。これは今泉遺跡においては、それと明確に認められた唯一の例である。煙出し部の底面には、特別な施設は認められない。

床面上のその他の施設としては、まず東南隅の径50cm・深さ20cmの掘り込みがあげられる。これはカマドの右隣という位置関係からしても、貯蔵穴と見做されてよいものであろう。この他に床面上に礫が数個認められたが、これらにはその用途を推定させるに足る積極的証拠を見出しえなかつた。

年代推定の資料としては、カマド中・カマド両側に検出した土師器群があげられる。

(遺物)

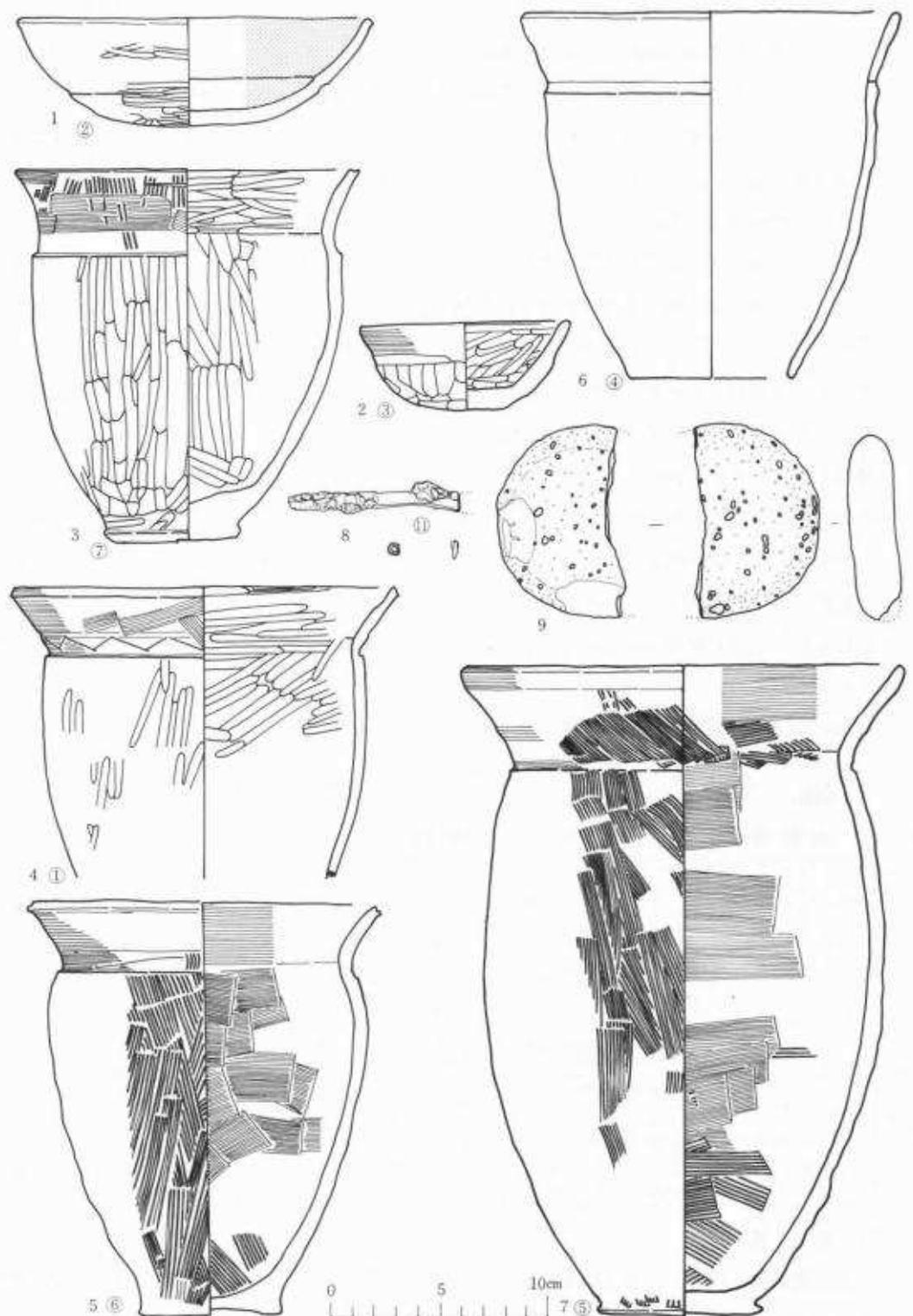
I 土師器 (第21-2図・1~7) 第15表

分類	土平面 器番号	実測 番号	調 整								器 高	口 徑	底 徑	備考	
			口縁部		体部上半		体部下半		底 部						
			内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面					
底	①	4	ヘラミガキ 横ナナテ	刷毛目のち 横ナナテ	ヘラミガキ 横ナナテ	ヘラミガキ 横ナナテ	ヘラミガキ 横ナナテ	ヘラミガキ 横ナナテ	ヘラミガキ 横ナナテ	ヘラミガキ 横ナナテ	18.0				
	⑤	7	横ナナテ	刷毛目のち 横ナナテ	刷毛目のち 横ナナテ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	ヘラケズリ 木葉瓶	30.1	20.5	7.7	
	⑥	5	刷毛目のち 横ナナテ	刷毛目のち 横ナナテ	ヘラナテ	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	刷毛目	木葉瓶	19.4	16.4	6.7	
	⑦	3	ヘラミガキ 横ナナテ	刷毛目のち 横ナナテ	ヘラミガキ 横ナナテ	刷毛目のち 横ナナテ	刷毛目のち 横ナナテ	刷毛目のち 横ナナテ	ヘラミガキ 横ナナテ	ヘラミガキ 横ナナテ	12.3	16.0	6.0		
环	②	1	ヘラミガキ	5.1	16.5		(内黒)								
	③	2	ヘラミガキ	横ナナテ	ヘラミガキ	横ナナテ	ヘラミガキ 横ナナテ	ヘラミガキ 横ナナテ	ヘラミガキ 横ナナテ	ヘラミガキ 横ナナテ	ヘラミガキ 横ナナテ	4.1	9.8	4.1	(中)
瓶	④	6	ヘラミガキ 横ナナテ		17.0	17.6	7.6								
			横ナナテ												

II 鉄器

刀子形製品(同8)；覆土出土であるがおそらく刀子であろう。刃部と思われる部分の断面形状は偏平で、柄にさし込むと思われる部分のそれは方形でかつ中空である。

III 打割された偏平礫(同9)；これも覆土出土である。特徴は既述のCa09のそれに同じである。

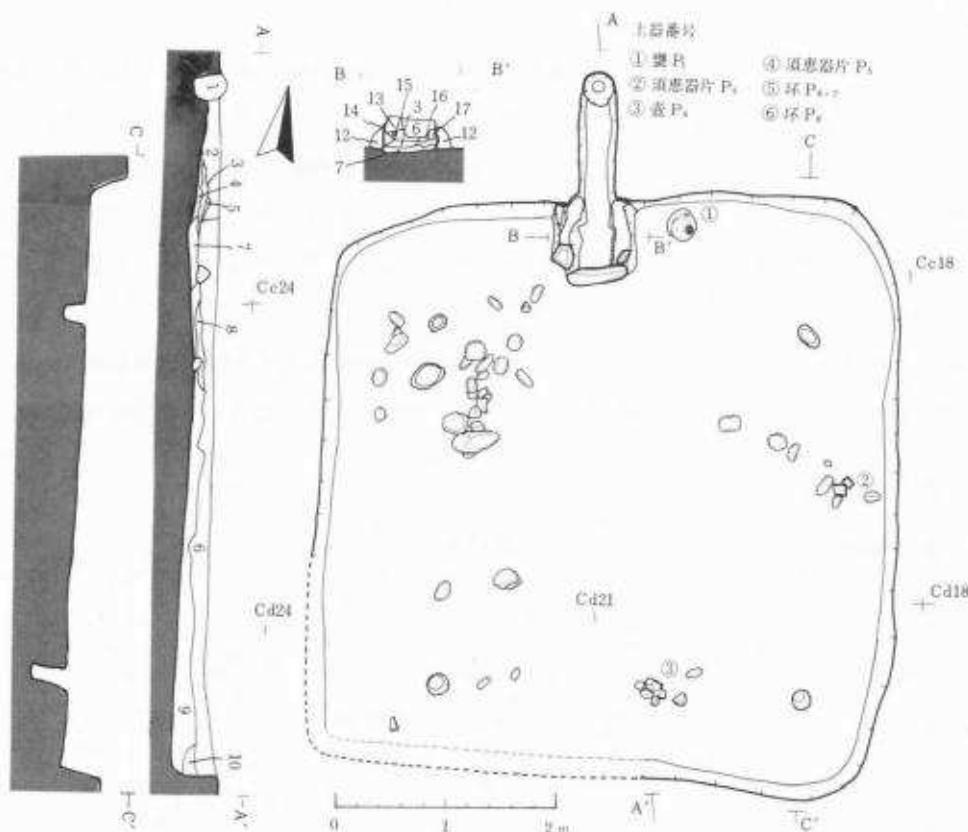


第21-2図 Ca18竪穴住居跡出土遺物実測図

Cb24竪穴住居跡（第22図・第16表）

遺跡敷地西南端に検出した。

他の遺構との重複関係も、遺構内での増改築の事実もともに認められず、単一の遺構である。ただし、南壁と西壁の大部分が農業用水路のために破壊され、不明となってしまっている。その他の遺構・遺物の遺存状態もあまり良好とはいえず、全体的に保存不良といわざるを得ない。遺構の平面形は大略やや長方形がかった正方形をなし、その規模は東西5.2m（推定）×南北5.5m（推定）、床面積28.60m²（推定）程になろう。住居中軸線の方向（北壁中央に取りつけられたカマドの中心と、推定される南壁の中点を結ぶ線）は、磁北から約90°西に振れる。



第22-1図 Cb24竪穴住居跡実測図

1. 茶褐色シルト質土。やや硬質、粘性あり。燒土粒混入。一部に
黄褐色シルト塊混入
2. 茶褐色シルト質土。やや硬質、粘性あり。燒土、炭化物粒混入。
1より暗い
3. 燃土
4. 焙褐色シルト質土。かたいがやや粘性あり。炭化物混入
5. 黄褐色シルト質土。軟質で粘性あり
6. 焙褐色シルト質土。やや硬いが、粘性もあり。黄褐色シルト塊
混入
7. 赤褐色シルト質土。軟質で粘性あり。燒土塊・炭化物粒混入
8. 黑褐色シルト質土。軟質、粘性あり
9. 黑褐色シルト質土。12より粗く硬いが粘性もややあり
10. 黑褐色シルト質土。軟く粘性あり
11. 黄褐色粘土質シルト（基盤）
12. 暗褐色粘土質シルト。カマド附
13. 楔色シルト質土。かたく、粘性無し。燒土粒混入
14. 楔色シルト質土。13より黒味強し、かたく粘性無し。燒土粒混入
15. 赤褐色シルト質土。硬いが、やや粘性あり
16. 赤褐色シルト質土。15より黒っぽい。軟質で、粘性あり
17. 楔色シルト質土。14に似る

—今泉遺跡—

遺構内に堆積した土層は大別して二層からなる。

第1層 暗褐色シルト質土層。やや硬質ではあるが粘性もややある。乾燥するとクラックが大きく入る。黄橙色シルト質土塊が混入。

第2層 黒褐色シルト質土層。しまりがあるが粘性もかなり出てくる。農業用水路等の影響かと思われる。

床面は中央部がやや高く、南方が低くなり多少の傾斜面をもつ。壁は残存部では垂直に近く立ち上がり、壁高は約40cmとなる。床面上に5個のピットと散在する礫群がみられる。

5個のピットのうち、大略対角線上にのる位置関係を保つ4個が、あるいは主柱穴と見做されてよいものかもしれない。それらの平均径20cm・平均の深さ32cm・掘り方と柱あたりの区別はなしとなかった。

カマドは北壁の中央に構築される。構築法その他は多くの例に共通する。焚口部も礫も残存する。焚口部間口60cm・高さ30cm、本体部奥行80~85cm程である。本例にはBi15のようなやや長めの煙道部と煙出し部が備わっている。燃焼部底が北壁と接続する部分が傾斜をもって高くなり、そこからが煙道部底となり、それが徐々に浅くなりながら北へ1m延び、その端部に径20cm・深さ30cm程の円形ピットが穿たれ、そこが煙出し部となるもようである。煙出し部底面は煙道部底よりも深くなる。

床面上にはその他の特別な施設は認められない。床面上に散在する嘘も性格不明である。

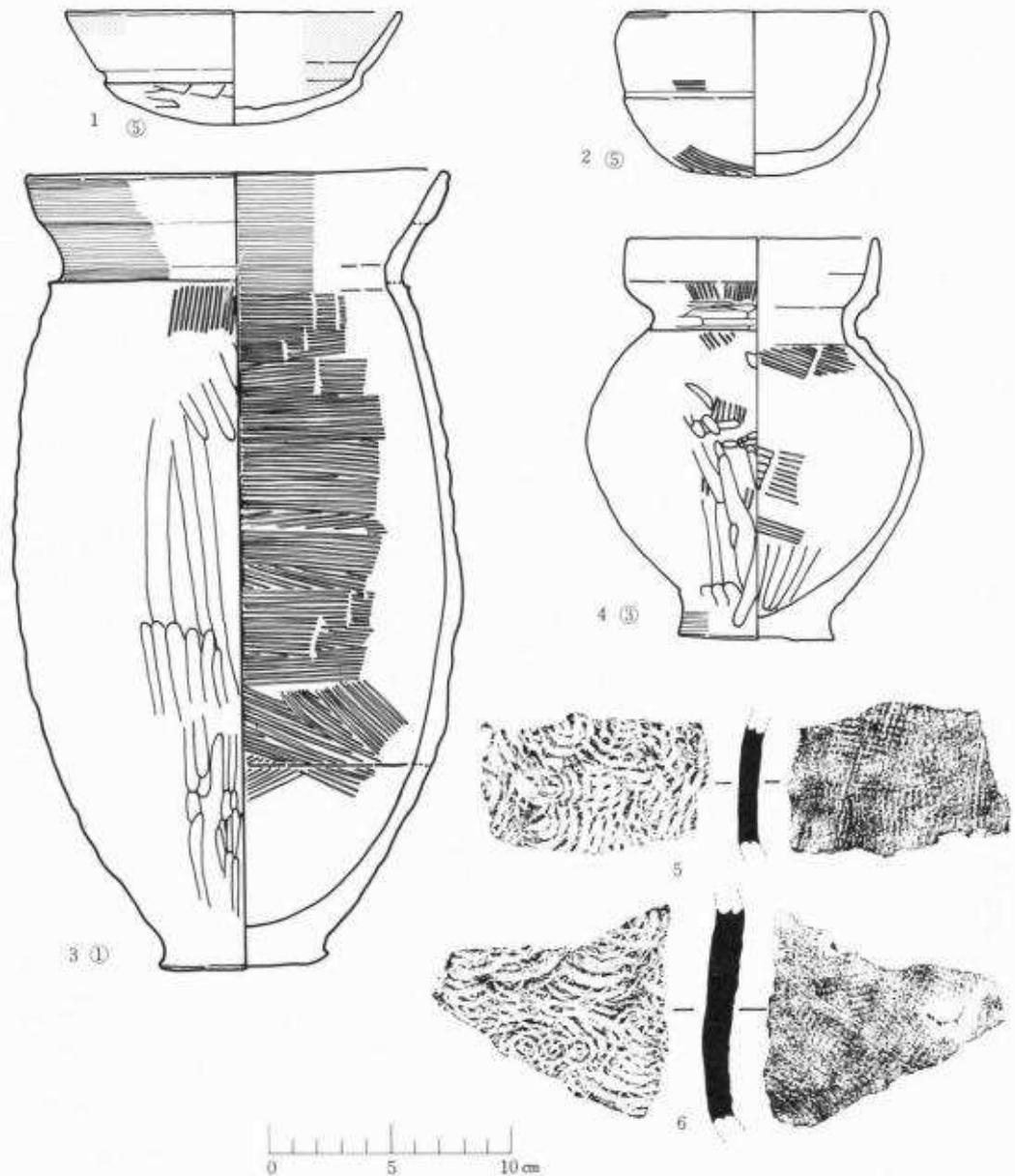
年代推定の資料としては、カマド周辺から出土した若干量の土師器と須恵器破片類がある。

(遺物)

1. 主 師 器 (第22-2図・1~4) 第16表

II 積惠器

甕（同5）；破片ではあるが床面出土。おそらく甕型であろう。外面に不鮮明ながら叩き目
内面に所謂「青海波」文類似のものがみられる。外面には一部に施釉ともみえる灰緑色の部分
がある。



第22-2図 Cb24竪穴住居跡出土遺物実測図

第17表 遺構一覧

遺構名	設置長 m	床面横 m	床面横 m	平面形	壁 m	直 m	横 m	中 m	軸 m	左の組合 れの位置	主柱穴 孔の配置	主柱穴 孔の枚数	戸・ガマドの 設定位置		軸組合無しと 壁通がつく りの区分	その他の 設定位置	左の 壁	右の 壁	
													壁定位置	戸・ガマドの 設定位置					
Ai 65 新	4.5	4.5	20.25	正方形	丸	0.24	北壁と南壁の中点を結ぶ線	N 6°W	?	?	?	?	?	?	?	無	/	無	
* Bb 05	?	?	?	?	?	0.24		?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	
Ai 62	4.0	4.0	16.00	正	丸	0.10	北壁と南壁の中点を結ぶ線	N 11°W	4?	壁内正方形	(6)?	無?	?	?	?	?	?	?	
Bb 06	5.0	5.0	25.00	正	丸	0.20		N 50°W	1?	?	?	?	?	?	?	有	円形	南壁中央	クロロ底形
Bc 71 新	3.5	3.5	12.25	正	角	0.14		N 25°W	2	?	?	?	?	?	?	?	?	?	
* Bb 07	3.4	3.4	11.56	正	丸	0.14		N 5°W	?	?	?	?	?	?	?	有	長円	西壁中央	
Bc 53	5.0	5.0	25.00	正	角	0.20		N 48°W	1?	壁内	?	無?	?	?	?	?	?	?	
Bd 12 新	4.0	5.0	20.00	長方形	丸	0.30		N 33°W	4?	壁内正方形	?	無?	?	?	?	?	?	?	?
* Bb 08	?	?	?	?	?	?		?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
Bd 59	6.5	6.2	40.30	長	角	0.40	北壁と南壁の中点を結ぶ線	N 42°W	4	壁内正方形	?	無?	?	?	?	?	?	?	?
Bd 03	4.7	4.7	22.09	正	丸	0.35		N 22°W	4	?	?	?	?	?	?	有	円形	ウマト左側 (西)	
Bf 15	4.7	3.7	17.39	長	角	0.21		N 13°W	4	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
Bf 09	4.1	3.5	15.99	長	丸	0.30		N 12°W	4	?	?	?	?	?	?	有	円形	ウマト左側 (西)	
Bf 53	4.8	4.9	20.52	正	角	0.30		N 30°W	4	?	?	?	?	?	?	?	?	?	
Bg 62 新	6.4	7.3	46.72	長	角	0.35		N 14°W	4	?	?	?	?	?	?	有	円形	ウマト左側 (西)	
* Bb 04	4.5	5.1	23.46	長	角	0.50		N 15°W	4	?	?	?	?	?	?	有	長円	?	
Bb 08	4.3	4.3	16.49	正	丸	0.30		N 14°W	4	?	?	?	?	?	?	有	円形?	カマド右側 (東)	
Bb 71	3.5	3.9	13.65	長	丸	0.50		N 30°W	4?	?	?	?	?	?	?	有	円形?	カマド右側 (東)	
Bi 24	4.3	4.3	18.49	正	丸	0.30		N 20°W	4	?	?	?	?	?	?	有	円形	?	
Bi 15	4.2	4.5	38.90	長	丸	0.40		N 50°W	4	?	?	?	?	?	?	有	?	?	?
Ca 09	4.1	3.7	15.17	長	丸	0.20		?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
Ca 18	4.1	4.1	16.81	正	角	0.24	東壁と西壁の中点を結ぶ線	N 69°E	4?	壁内正方形	東	?	?	?	?	有	円形	カマド右側 (東)	
Cb 24	5.2	5.5	28.60	長	丸	0.40	北壁と南壁の中点を結ぶ線	N 9°W	4	?	?	?	?	?	?	有	円形	カマド右側 (東)	

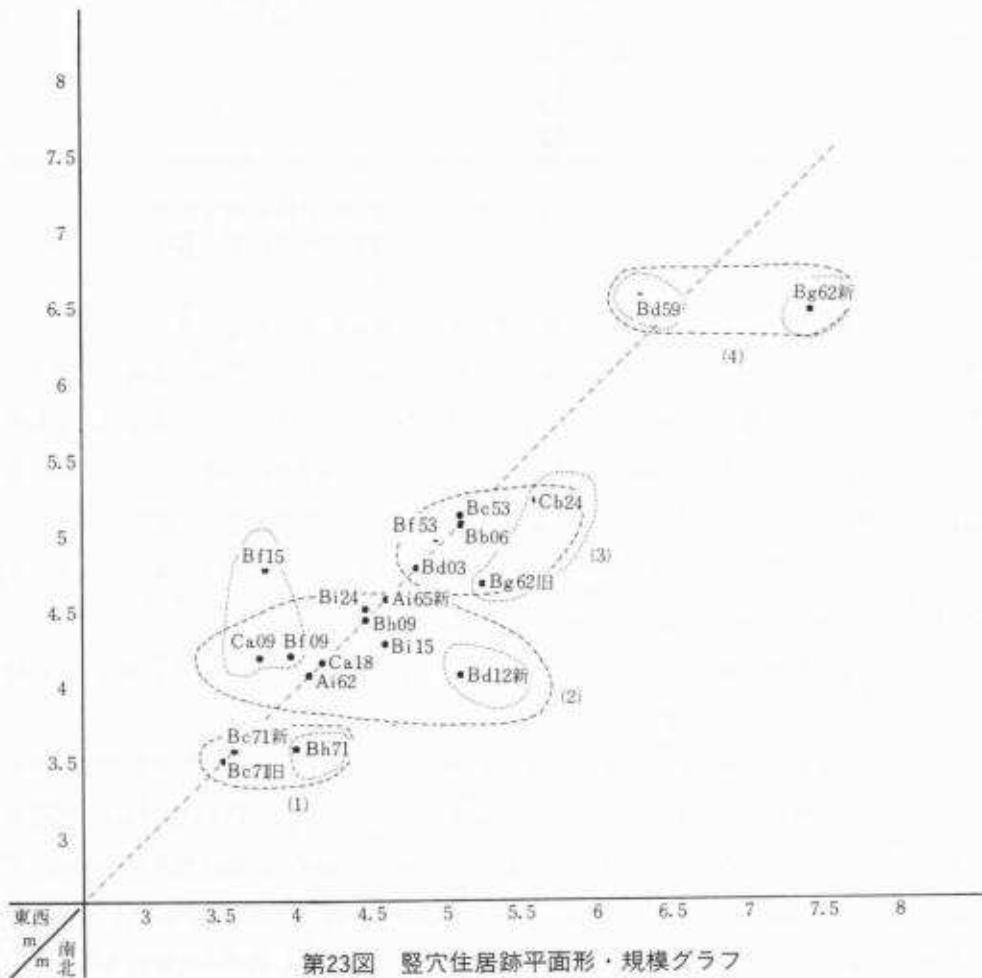
III 考察とまとめ

遺構要約

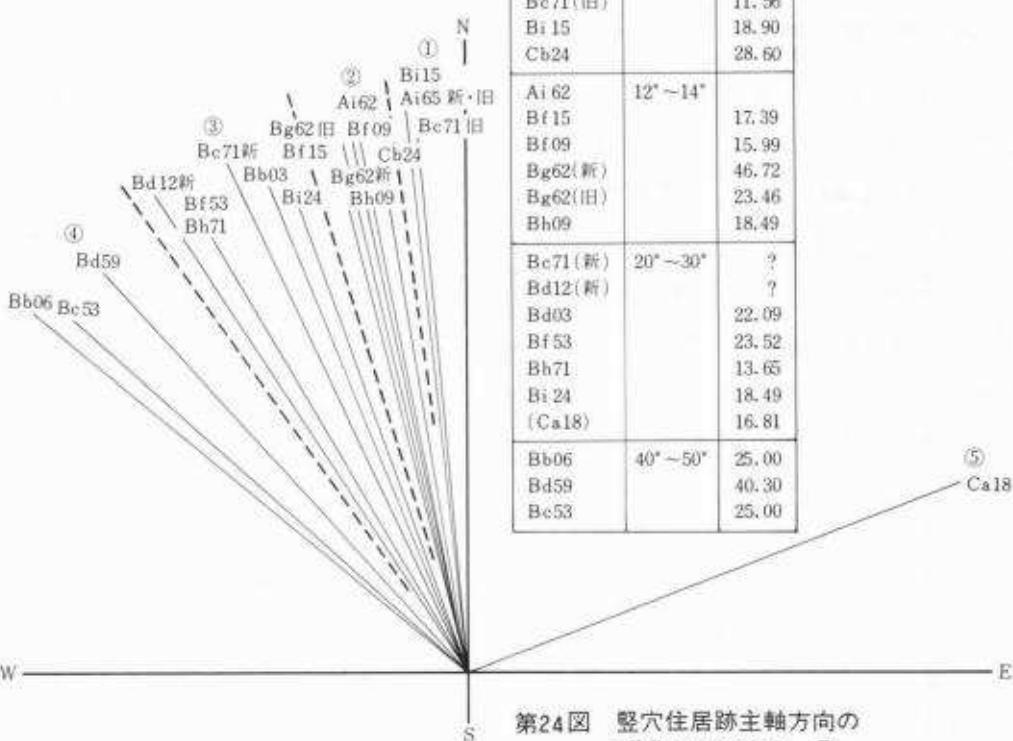
本遺跡出土の遺構（竪穴住居跡）をまとめると第17表のようになる。これをもとに若干の項目についてまとめておく。平安時代以外のものを中心として述べる。

(1) 規模と平面形=これらをグラフにすると第23図のようになる。即ち平面形態は、(1)南北に長い長方形、(2)東西に長い長方形、(3)正方形にそれぞれ近いものの3種があるが、前二者は変異の中に収まるものと考えられ、基本形は最後者である。規模は、①3.5m前後、②4~4.5m前後、③4.6~5.2m前④6m以上の4種があり、最後者は最も少数であり、他の三者が主体をなす。

(2) 住居住主軸方向の磁北からの振れ=これをグラフにしたもののが第24図である。これによると、①その振れが 10° 未満のもの5、② $12^{\circ} \sim 14^{\circ}$ 未満のもの6、③ $20^{\circ} \sim 30^{\circ}$ のもの7、④ $40^{\circ} \sim 50^{\circ}$



第23図 竪穴住居跡平面形・規模グラフ

第24図 壇穴住居跡主軸方向の
磁北からのふれ一覧

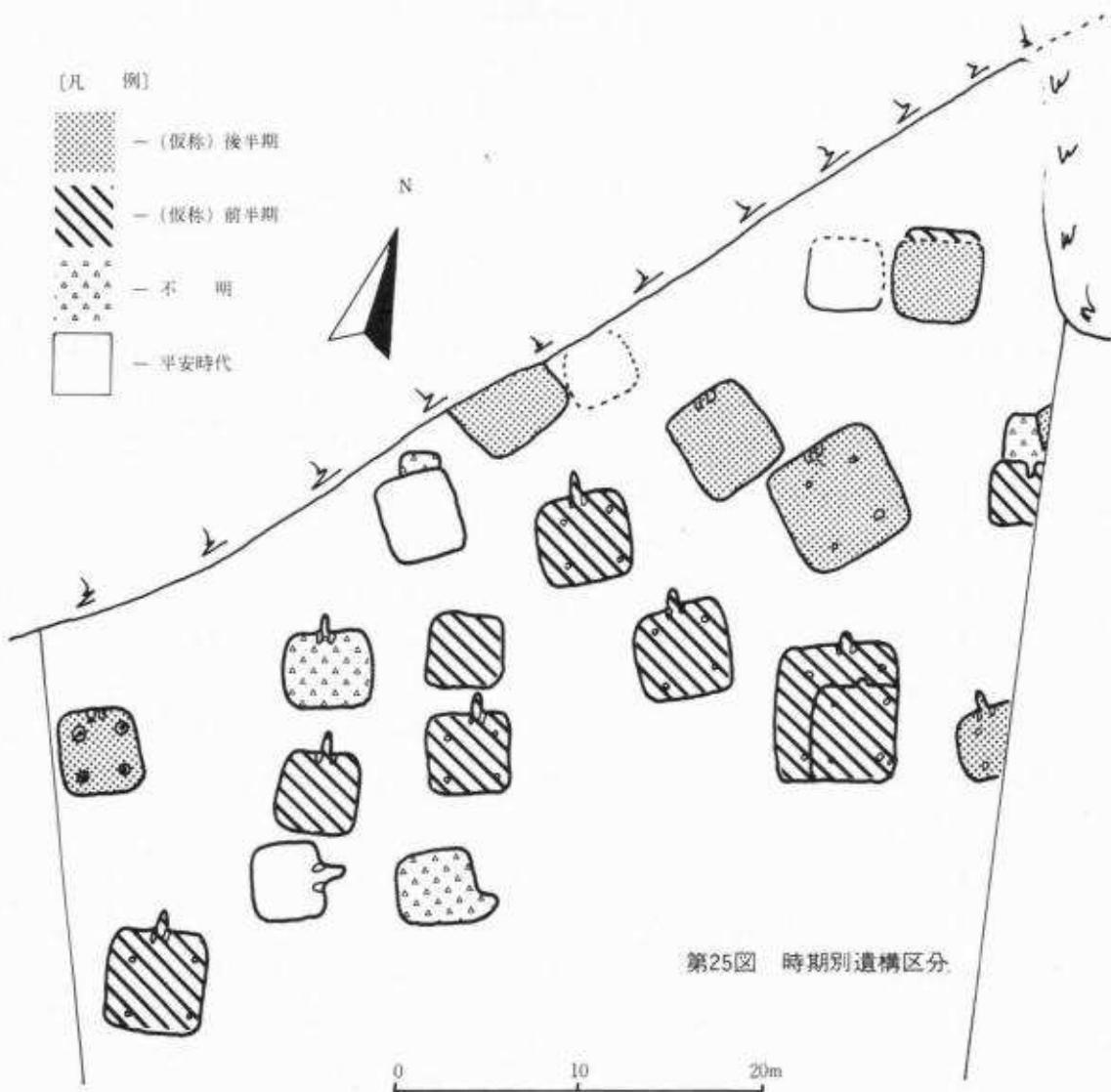
のもの3の形で存在する。これらは前二者対後二者と整理することもできよう。

(3) 柱穴に於ける柱あたりと掘り方の有無=良好な資料は少數であるが、明瞭に両者を区別できる例(Bi24住)も存在することからすると、その類例はより多く存在する可能性がある。また柱穴際に礫(人頭大以上)を配す例もある(Bi24)。更に別に触れてあるように、掘り方中に分割した板状礫をもたたき込む例もあり、柱穴構築法については更に注意されてよい。

(4) 壇穴自体の“掘り方”的存在=これも確認したのはBh09住のみであるが、そのような問題意識を持って調査すれば、更に類例は増えたことであろう。

(5) 上屋構造=Bh09住の炭化材の遺存状況からして、骨格をなす材(垂木的なもの)が助骨状をなすものが存在したことは確実である。

(6) 煙道の構築方法=現時点に於いて明白な痕跡を示すものと、そうでないものの二種がある。カマド本体の構築法に強い齊一性を看取できるのに比し、極めて対照的である。煙道構築法が確立・安定しない時期であるとも考えられる。ちなみにカマド自体は水沢市面塚遺跡に於いて既に6世紀代に出現し、煙道を有するカマドは同様性に於いて本土器群に先行すると思われる段階に於いて出現している。カマド他の構築法にはこの他にも各種の変遷がある。



第25図 時期別遺構区分

(7) 遺構の時期区分=膳性遺跡に於ける知見を援用すると、遺構の時間差は“竪穴住居主軸方向の磁北からの振れ”に最も良く反映されるらしい。それは、より古期のもの程磁北に一致するが、ほぼ近いものが多く、新期のもの程西に振れる。というものである。もちろんそれはあくまでも“傾向性”であり、例外も少数存在するのは当然である。それと、別に触れた遺物の検討結果からすると、以下の二大別が可能である。(第25図)

- (a) 假称前半期 Ai65(旧)・Bc71・Bd03・Bf09・Bf53・Bg62・Bh09・Bi15・Cb24の各住居跡。
- (b) 假称後半期 Ai65(新)・Bb06・Bc53・Bd59・Bi24・Bh71・Ca18の各住居跡。

— 今泉遺跡 —

(a)が9棟、(b)が7棟となる。これを(1)で述べた規模の点からみると、両期ともに1棟の④と、それ以外の①～③との組み合わせからなることとなる。集落全城の発掘調査を行なっていない現段階であり強弁は避けねばならないが、該期の集落の構成要素（竪穴住居の規模）に上記二者がある可能性のみは指摘しておく。規模の差が何を反映しているかは検討課題として残る。

尚、仮称両期とも現段丘崖から南へ幅30mの帯状の地帶に住居が営なまれる。

(8) 遺構の種類—調査域内には竪穴住居跡のみを検出し、その他のものはない。これは集落内の場の使い分け（居住域と墓域など）が存在した可能性のあることの反映とともに、時代性の反映をも想定すべきである。水沢地方に於いては平安時代から集落の構成要素が複雑化（大溝・井戸・掘立柱建物などが加わる）する。

(9) 遺構の配置—既述の仮称二期相互の重複はみられない点が特徴的である。慎重に避けた占地ともとれる現象である。その背景は不明である。

仮称二期内の遺構分布に顕著な特徴は看取できない。

(10) 本遺跡は奈良時代以前（7世紀～8世紀初）に集落が営なまれ、その後かなりの時間をおいた平安時代に再度利用されている。より古い段階についていって、後掲の編年試案のVI群期単期の集落といえる。

水沢市周辺の集落遺跡の存続期間・状況にはいくつかの類型がある（第18表）。調査範囲その他の種々の制約は承知の上で、あえて類型化を試みる。平安時代以前に利用が開始された集落で、

(a) 単期もしくは一定の中断期間をおき再度集落が営なまれるもの。

(b) 複数期間にわたり継続的に営なまれるもの。

前者の類例は水沢市玉貫・今泉・膳性・高山・西大畠・面塚・金ヶ崎町上鮮田であり、後者のそれは東大畠・石田などである。この現象の背景のメカニズムは現状では不明であるが、農業生産力の発展状況などが一つのモメントとして利用していた可能性もある。母村・分村的な側面も考慮する必要がある。立地論的には、(a)に掲げた諸遺跡（古墳時代～奈良時代まで）が共通した立地を示している点に留意すべきであろう。更には、古墳時代集落の立地は、弥生時代のそれに共通する事実もある。何れにしても今後の重要な検討課題である。

尚、仮称VII群期（あるいは痕跡的なあり方を示すものも含めるとVII-b群期の末）から造営が開始される集落の数が極めて多い。この背景には律令政府の直接的支配権の進出という政治的因素が作用したことは想像に難くないが、そのような変化のきざしが既にVII-b群期に発する点にも留意したい。それは既に触れた如くに、占地の変化の開始期が、胆沢扇状地に於いてはVII群期、和賀川流域に於いてはVII-b群期になる、という点にも現われている。

第18表 集落營造・存続状況

出土遺物とその考察

〔1〕 土器について

(1) 各器種の分類と特徴

1. 繩文式土器 表土や遺構覆土中より、大洞A'式類似の土器片少量を得た。何れも遺構と本來的な共伴関係を示すものではない。本遺跡周辺に同期の遺跡が存在した可能性を示すものではある。その点から、繩文時代晩期末葉の遺跡と古代の遺跡が同一の占地をすることもあった一資料となり、立地論的観点からする主題への一資料には成し得よう。

2. 土師器 土師器は各遺構より豊富に出土しており、本遺跡出土遺物の主体をなす。器種には甌・甕・壺・坪・高坪・片口型・鉢型の7種類がある。何れの器種も通常使用されている概念を基準として分類したが、甌の一部には從来「壺」といわれることもあった体部球形のものも含ませ、坪にはかなり大型で浅いもの、深いもの（皿や椀といわれるものか）も一括させてある。

以下に各器種毎の分類を行なうが、各遺構出土のものを一括して扱い、その後に遺構毎の組成を検討し、最後に編年的位置を検討したい。それらの際に使用する器面調整の技法の用語は、宮城県岩切鴻ノ巣遺跡の調査報告のそれを使用する。

(註1) 岩切鴻ノ巣遺跡 宮城県文化財調査報告書35集 東北新幹線関係遺跡調査報告書I

甌 甌は53点出土している。それらは、成形に於けるロクロの使用・不使用、口縁・肩部の器形上の特徴から次の3類に大別できる。

A類 ロクロ不使用。口縁は外反し、肩部に顯著な段乃至棱を有するもの。

B類 ロクロ不使用。口縁は外反し、肩部に段乃至棱を持たないもの。

C類 ロクロ使用。口縁が強く屈曲するもの。

以上の3類は、その他の特徴（最大径部位・体部形状・器体の大小・器面調整の技法上の特徴等）からさらに細分でき、大略第19表のようになる。但しC類については、出土例も少なくかなり均一な特徴を示すので、これ以上の細分は行なわない。

甌A類 成形にロクロを使用しない。口縁は外反し、肩部に強い段を形成する。器体の大きさ（器高）には以下の6種がある。

a . 15cm以下

b . 16~20cm

c . 21~24cm

d . 25cm周辺

	ロクロ・肩部	器 形	大きさ	調 整	実 時 図
A	ロクロ不使用	肩部有段	I	a 15以下 イ 刷毛目	A-I-a-イ
				b 16~20 + ヘラ削り	
				c 21~24 ヘラミガキ	
			最大径	d 25 口	A-I-d-口
			I	e 26~30 刷毛目	
				f 30以上	
		II	口縁外反 長脣形	d イ	A-I-e-イ
				e 口	
			I	f 体部中央	A-I-f-口
			III	d イ	A-II-d-イ
		III	口縁外反 珠脣形	e 口	
				f イ	
B	ロクロ不使用	肩部無段	口縁外反	a	B-e-イ
			長脣形	b イ	
			最大径	c	
			I	d 口	B-f-イ
			口 縁	e ロ	B-e-ロ
				f	
C	ロクロ使用	口縁屈曲			C

第19表 壺 分 類 基 準

— 今泉遺跡 —

e. 26~30cm

f. 30cm以上

体部形状には、最大径の部位をも加味すると 3 種ある。

I. 長胴形で、最大径が口縁のもの。

II. 長胴形で、最大径が体部中央のもの。

III. 球形をなし、最大径体部のもの。

器面調整の技法には 2 種ある。

イ. 刷毛目調整の後に、内外両面乃至その何れかに箒削り・箒ミガキ・箒ナデ等を加えるもの。(口縁は横ナデ)

ロ. 口縁は内外両面とも横ナデ調整、体部には刷毛目調整(外面縦・斜位、内面横位が原則)のみが施されるもの。

壺 B 類 これもロクロ不使用。肩部に段あるいは稜を持たず、口縁と肩部(体部上端)の区別は器面調整技法により(口縁部は横ナデ調整)なされる。器形は口縁外反の長胴形で、最大径部位は口縁に一致。器体の大きさには前記の d・e の 2 種があり、器面調整の技法には前記のイ・ロがある。

尚、A・B 類ともに底部はかなり突出した印象を与え、体部との区別は非常に明確に成し得る。また、底部外面に木葉痕のあるものが多い。

壺 C 類 成形にロクロ使用。恐らく長胴形をなし、口縁部は強く屈曲する。体部上半にはロクロ成形痕が、下半には縦方向の箒削り調整痕が顕著にみられる。底部は欠失しているが、恐らくはあまり突出した感を与えない、A・B 類に比しやや大きめの平底となるであろう。

壺 9 点出土している。その器形を窺い得るものはすべて無底式のものであるが、多孔式のものの破片も極く少数出土している。口縁・肩部の器形上の特徴から以下の 2 類に分類できる。

A 類 口縁外反し、肩部に顕著な段乃至稜を形成するもの。

B 類 口縁外反し、肩部に段・稜を持たないもの。

以上は、器高により 2 類に分類される。

I. 比較的小型(15~17cm)

II. 比較的大型(20cm以上)

更に、体部下端の細孔の有無により 2 種類に分かれ、これらをまとめると第 20 表のようになる。

これらの器面調整の技法は、口縁には内外両面とも横ナデ調整が施され、体部には刷毛目調整の後内面に主に箒ナデ調整を加えて仕上げられる。

壺 7 点出土している。口縁(口頭)部の器形上の特徴から 2 種に大別できる。

I 類 口縁(口頭)部が外反し、肩部に軽い段を持ち、球形の体部を有するもの。細頸壺的

実測図			
器形	大きさ(cm)	細孔	
			A-I-a A-II-b B-I-a B-II-a
A 口縁外反 肩部有段	I 15~17	a 有	
	II 20以上	b 無	
B 口縁外反 肩部無段	I	a	
	II	b	

第20表 瓶分類基準

実測図			
頸部の特徴	頭部立ち上がり	体部形	
I 細頸壺的	長	球形	1 II-a
II 広口壺的	a 長い	球形 小型	
	b 短い	球形 小型	II-b
	c 短い	球形 大型	II-c

第21表 壺分類基準

実測図					
大きさ	口縁形状	脚部	比率 脚高		
I 比較的大型 口径 16 cm	a 直口	イ 有段	1.3 1		
II 比較的大型 口径 20 cm	b 内湾気味	ロ 無段	0.95 1	I-A-ロ-あ II-B-ロ-イ-あ	II-C-ロ-イ-い
III 口径 13 cm 前後	外縁				

第22表 高坏分類基準

印象を与える。器面調整の技法には、器外面は刷毛目調整後箆ミガキを加え、内面では口縁（口頸）部横ナデ調整、体部箆ナデ調整などがある。

II類 口縁下半（口頸といふべきか）が直立氣味に立ち上がり、その上方が一旦外傾した後再び直立氣味になるもの。広口壺的な印象が強い。器体はほぼ球形をなすが、やや歪で、横長の楕円形的なものが多い。

この類は口縁（口頸）部の細部の形状・器体の大小により、更に次の3種類に分類できる。これらをまとめると第21表のようになる。

- a. 前記の最後に立ち上がる部分が比較的長く、器体が小型のもの。
- b. 同じ部分が短く、器体が小型のもの。
- c. 器高20cm以上の大型品。

器面調整の技法は、体部外面では刷毛目調整後主に箆ミガキが加えられ、口縁（口頸）部には横ナデ調整が加えられる。内面もほぼ同様であり、刷毛目調整痕をそのまま残すものは少ない。

壺 19点出土している。壺は大別して2類になる。

A類 成形にロクロを使用しないもの。

B類 成形にロクロを使用するもの。

以上は、体部の器形上の特徴等から更に細分できる（第23表）。尚、A類については、その底部は例外的な一例を除いてすべて所謂「丸底風」であり、器内面には箆ミガキ・黒色処理が施されている。また器外面の体部と底部の境界にはすべて段があり、その部位は器体のはば中央かそれよりやや下位に限定されるのが通例で、下方に偏するものは一例だけである。更に、器外面の段に対応する内面に軽いくびれがみられるのも通例である。従ってこれらは特徴としてはいちいち言及しない。

A類のI 体部が直口乃至内清氣味に立ち上がるもの。直上する度合が強いものと弱いものとがあるが一括した。

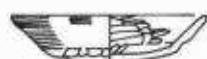
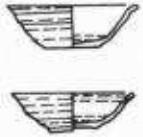
器面調整の技法には3種の組み合わせがある。

- a. 体部横ナデ調整、底部箆削り調整
- b. 体部横ナデ調整、底部箆ミガキ調整。
- c. 体・底部とも箆ミガキ調整。

A類のII 体部外反するもの。器外面の段の部位は前述の通り器中央からやや下位の所にあるが、一例のみが下端に近い部分にある。

器面調整の技法には、次の組み合わせがある。

- a. 体部横ナデ調整、底部箆削り調整。

口 ク ロ		体 部 特 徴	調 整 + 特 徴	実 测 圈	
A	ロクロ不使用	I 直 口 内 湾 気 味	a 体部ヨコナデ 底部ヘラ削り		
			b 体部ヨコナデ 底部ヘラミガキ		
			c 体 部 底 部 } ヘラミガキ		
		II 外 反 気 味	a 体部ヨコナデ 底部ヘラ削り		
			b 体 部 底 部 } ヘラミガキ		
			c		
		III 外 端 気 味	a 体部ヨコナデ 底部ヘラ削り		
			b 体部ヘラミガキ 底部ヘラ削り		
			c 体 部 底 部 } ヘラミガキ		
B	ロクロ使用	I 外 反 気 味	a 内面黒色處理 回転系切		
		II 内 湾 気 味	b 黒色處理無し 回転系切		
第23表 环 分 類 基 準					
B-II-a		B-I-b			

— 今泉遺跡 —

b. 体・底部ともに範ミガキ調整。

A類のIII 体部に湾曲がなく、直線的に外傾するもの。器外面の段の部位は器中央からやや下位である。口径は、小は10cmから大は27cmまでと非常に変化に富む。

器面調整の技法には、以下の4類の組み合わせがある。

a. 体部横ナテ調整、底部範削り調整。

b. 体部範ミガキ調整、底部範削り調整。

c. 体・底部ともに範ミガキ調整。

d. (覆土出土でしかも例外的な一例であるが) 外傾する体部と平底風の底部を持ち、器中央からやや下位に段を有し、その段から底部に至るまでの部分に沈線によって斜格子目状の施文を行なっているものである。つまりこの土器にあっては、口縁部・体部・底部の3部位を指摘できることになる。器面調整技法には、口縁・底部ともに範ミガキが施される。尚、他の壺に比し、胎土が精良で焼成も良好で硬いという特徴もある。

B類 4点出土。成形にロクロ使用。器形上の特徴は体部外反であるが、その度合の強いものと弱いものがある。

技法との関連では、前者は回転糸切無調整、後者には回転糸切後の何らかの調整と内面黒色処理が指摘できる。

高壺 脚部のみのものも含めて11点出土。これらは器体の大小、環部体部の器形上の特徴他から3類に大別できる。(P97第22表)

尚、脚のみのものを除いたすべての例に於いて、壺部内面には範ミガキと黒色処理が施され、壺部外面中央には段が形成されるが、これもいちいち言及することは避ける。

I類 比較的大型(口径16cm前後、器高14cm前後)で、ほぼ直上するかあるいはやや内湾気味に直上する体部を有する。環部外面の段に対応する部位にくびれを形成する。脚部上半は強くは開かず、裾部に至って急激に外方に開き、ほぼ平坦に近くなる。

器面調整技法は、壺部外面上半には横ナテ調整後範ミガキが、下半では刷毛目調整乃至範ナテ様の調整を施した後に範ミガキが行なわれる。脚部は、縦方向の範ミガキや、範ミガキと同時に多少粘土を搔き取ったかのような調整が行なわれたらしく、縦方向の併行する細長い凹みがみられる。裾部には横ナテ調整がみられる。尚、一例のみだが、環部外面全体と脚裾部外面に赤色の塗彩を施したものがある。

II類 I類と同様に口径20cmを越える比較的大型のもので、体部が外傾し大きく直線的に開く。I類と同様に、器外面の段に対応する器内面のくびれを有する。脚部の形状はI類とは異なり、脚上部に段を有し、I類よりも低い脚高を示し(4cm)、脚部中央から裾広がりに開く。

器面調整としては、環部口縁部範ミガキ調整、環部体部横ナデ調整後範ミガキ調整、脚部上部（段まで）は範ミガキ調整、段以下も範ミガキ調整、裾部は横ナデ調整後範ミガキ調整等がみられる。

III類 口径13cm前後と比較的小型のもの。環体部はII類よりも更に直線的に外傾し開く。脚部上半は円筒状を呈し、中央よりやや下位に段を持ち、段以下が裾状に開く。尚脚上半の円筒状の部分は大半に粘土が充填されており、I・II類の脚部が中空をなすのに対し著しい相違を示している。また、脚の段部は同時に裾部との接合部位でもある。

器面調整の技法としては、環部器外面が口縁・体部ともに範ミガキ調整が施されるが、段部に沿って横ナデ調整の痕跡が残っているので、範ミガキ調整の前に横ナデ調整が施された可能性がある。

脚部上半は範削り調整の後に範ミガキ調整が施され、段以下の裾部には横ナデ調整が施される。脚部内面は、裾部には外面と同様横ナデ調整が施され、それより上方の天井部ともいべき部分には、刷毛目調整の後に範ミガキ調整や範による強いナデツケの調整が加えられる。

片口型 片口型の土師器は3点出土している。2棟の堅穴住居跡からの出土しかみておらず、あるいはあまり普遍的な存在を示すものではないかもしれない。器形上の特徴から2類に大別できる。

I類 球形に近い比較的高い器高を示し(13cm前後)、やや内湾気味に直上する口縁を有する鉢型土器の口縁の一部を外方に圧して片口（注口）部分を作り出したもの。口縁部と体部は、その境界の段乃至稜によって区別し得る。底部形状は、腰のそれと同様にやや突出した感じの平底であろうが、二例ともに剥落しており、詳細はわからない。但しその剥落の状況は、両者ともにやや上方に向かってドーム状になっており（揚げ底風）、製作時の何らかの特別な技法を示すものかもしれない。

器面調整の技法としては、器外面に於いては口縁部横ナデ調整後一部範ナデ調整、体部に縱方向の刷毛目調整後一部範ナデ調整を実施しているものと、刷毛目調整後縱方向の範ミガキ調整を加えるもの等がある。器内面では、口縁部は外面同様横ナデ調整、体～底部には横方向の刷毛目調整後横方向の範ナデ調整が加えられる。

II類 器高3cm、口径8cm前後の浅い環様の土器の口縁の一部をIと同様に圧して片口（注口）部分を作り出したもの。

器面調整の技法は、器外面では風化のため体部のその判定は不可能であるが、底面には範ミガキ調整が加えられている。器内面では、横方向の刷毛目調整が器壁に沿って一段施される。

鉢型 1点のみの出土。適当な名称を知らないので、一応鉢型と呼称しておく。（揚げた実測図は破片からの図上復元であるので、体部の外傾の度合は必ずしも正確ではないであろう。）

もっと開いて器高が低くなるとしたならば、瓶型の一部のものに類似してくるであろうが、一応鉢型としておく。底部は欠失して不明であるが、あまり大きくはならないと思われる。

器面調整の技法としては、器外面では全面に縦・斜方向の刷毛目調整が施され、その後に口唇直下のみに幅の狭い横ナデ調整が加えられている。器内面は、全面に横位の刷毛目調整が実施される。

3. 須恵器 須恵器は、豊穴住居跡から若干量が出土しているにすぎないので、本遺跡の遺物の主体を構成するとは言い難い。しかし、少量ではあるがその出土状況は、ロクロ不使用段階での土師器の中に於けるやや特異な存在として出土したり、あるいはロクロ使用が定着した段階のセットの一つとして出土したりしているので、その持つ意義は大きい。

出土した器種は内甕と甕、器種不明のものの3種である。

内甕 口縁部の破片1個体分である。図上復元による推定口径は40cm前後、器厚は約1cmである。外反する口縁の端部が肥厚し、そこが二段の段状に作り出されるが、その棱線はあまり鋭角的ではなく丸味を有している。ロクロ成形時の条線の他には特に目立った調整痕は残していない。

甕 Bb06豊穴住居跡の床面より出土したもの。1点のみ。比較的小型ではあるが、胎土の質・焼成ともに非常に良好で、緻密で硬い。色調は濃い灰色。口頭部は欠失しているが、恐らくはあまり高く（長く）はならないであろう。丸底。

肩部にはロクロ成形痕たる細条線を留めるのみ。肩部直下から体部中央までに文様帶が区画される。文様帶の上・下限は、その両側を沈線状に凹めることによって強調されている隆線状のものによって区切られる。従って、上・下限ともに隆線状のものの両側には、工具でナデた痕跡が顕著に残存している。文様帶内部には、横描波状文が施文されている。また上限の隆線はそのまま注口周縁の隆線へと連続する。体部下半から底部にかけては箒削り調整が入念に施され、丸底に仕上げられる。

器種不明のもの 底部小破片であるので器種は判然としないが、恐らく、壺乃至それに類したものになると思われる。Bg62豊穴住居跡の床面よりの出土。体部中央に沈線が繞らされ、その下にロクロ成形痕がみられ、体部下半には箒削りの痕跡が顕著にみられる。底面中央はへそ状に凹んでいる。沈線に接続する部分が屈曲しているので、恐らくその部分が肩部となるのであろう。

(註2) 壺の胎土には、色調が黄色で焼成が良好にもかかわらず比較的もろいという共通性があり、またその表面の剥離の状況にも共通性がみられることから、あるいは瓶用の特別な素地粘土の選択・使用が行なわれた可能性がある。

(註3) 本類のII-Cとしたものと、甕のA-IIIとしたものの器形が極似するが、両者の区別は、甕A-III

類の口縁形態が所謂「外反」であるのに対し、壺II-C類のそれが前述したものであるところからつけた。II類は肩部に段を形成するが、丸底風のものはない。

(註4) 壺には器表面が膜状の剥離を示すものがあり、あるいは壺型土器の成形には、繩文式土器のそれにもみられるような一種の化粧粘土(Slip)の使用乃至、特別な素地粘土の選択・使用が行なわれたのかもしれない。

(註5) これらの調整は、調整を示すものとして言及されることの多い「回転箆削り」「手持ち箆削り」等のものとはかなり違っているように思われる。軽いナデといった感が強い。

尚、本類土器を土師器の何れに所属せしめるべきかについては、種々問題があるが、ここでは器面・須恵器の色調が所謂「くすべ色」をしておらず肌色がかかった褐色をしていること、器内面に黒色処理・箆ミガキ等が施されていることをもって、一応土師器として取り扱った。

(2) 遺構に於ける各類土器の共伴関係

以上(1)に於いては今泉遺跡出土の土器を器種毎に分類し、その特徴を説明したが、次にこれらの土器群が各遺構内でいかなる共伴関係を示すかを検討し、分類された土器がいかなる組み合わせ・まとまりを持つかをみて行きたい。

今泉遺跡に於ける遺構は、その殆んどすべてを竪穴住居跡が占めることは既に述べたところである。従って本遺跡出土の土器群は、殆んどすべて竪穴住居跡出土のものということになる。しかもその出土状況には、覆土からよりも床面上から出土したもののが圧倒的に多いという特徴がある。更に、床面上出土のものの多くが復元可能土器乃至完全土器であるという現象も顕著である。つまり、それらはその本来的位置に近い状態で発見されたと解し得る可能性が大きい。極端な例では、甕がカマド中に据えられたまま検出されたり、甕の中へ瓶が嵌め込まれたまま検出されたりしている。寧ろ甕にあっては、カマド中に据えられるか、あるいはカマド際に置かれた状態で検出されるのが普通であったといえよう。その他の器種についても、大略カマド周辺に集中して検出されることが多かった。但し、高环や小型壺にあっては、カマドと反対側の壁(今泉遺跡にあっては大部分南壁)の中央部に発見される例があったことを挙げておく。これは要するに、今泉遺跡の竪穴住居跡出土の土器群相互は本来的な共伴関係を有すると見做してよい根拠に成し得るのである。

第24表は、今泉遺跡の各竪穴住居跡出土土器の各器種毎の個体数と各遺構内に於けるそれぞれの組成比率の一覧である。分類規準は(1)で述べたものである。尚、当然のことながら、組成比率については出土個体の絶対数がある程度以上なければその意味はないのであり、その点からはBd59とBg62の両竪穴住居跡の例が最も良好な資料といえ、Bh09・Ca18・Bf53・Bi15の各竪穴住居跡の例はそれに次ぐものといえよう。

以上の観点から第24表の結果を累積グラフ化したものが第26図である。前述の理由からBg62・Bd59・Bh09・Bf53の各住居跡の結果のみを掲げたし、また成形にロクロを使用している土器を主に出土する例の代表として、少量の出土ではあるがBd12竪穴住居跡の結果をも掲げた。

以下にBg62・Bd59両住居跡の結果をやや詳しく検討する。Bg62住居跡の器種毎組成比率は、甕50%・瓶15%・壺5%・环15%・高环5%・片口型5%・鉢型なし・須恵器（一個体と見做して）5%である。高环の比率がやや低い感があるが、その他についてはまずは妥当な線を示しているのではないかと思われる。

次にBd59住居跡のそれを示すと、甕50.3%・瓶11.2%・壺なし・环5.6%・高环27.8%・片口型5.6%・鉢型と須恵器なしである。壺と环がかなり少ない点と甕の中型のものが不足している点が異常に思われるが、その他は妥当な比率を示しているのではないかと思われる。

それにもかかわらず、この両者の組成比率（即ちグラフの線）にはかなりの類似性を感じさせるものがある。そこで次にはその相異点を中心に、やや詳しく両者を比較して行きたい。

甕に於いては、Bg62住居跡（以下住居跡は省略し略号のみで表記する）では、すべて肩部有段で無段のものは皆無、しかも器体の大きさがa～fまで万遍なく揃うのに対し、Bd59では僅かながらも肩部無段のものが入ってくることなどが挙げられる。

瓶に於いては、器形・大小・器面調整の技法ともに非常によく類似するが、Bg62出土のすべてが体下端部の細孔を有するのに対し、Bd59ではそれらが皆無の点に相異がある。

壺は両者とも非常に貧弱であり、Bg62に小型丸底甕のものが一例あるにすぎない。あるいは壺が貧弱であるという事実に何らかの意味があるのかもしれない。

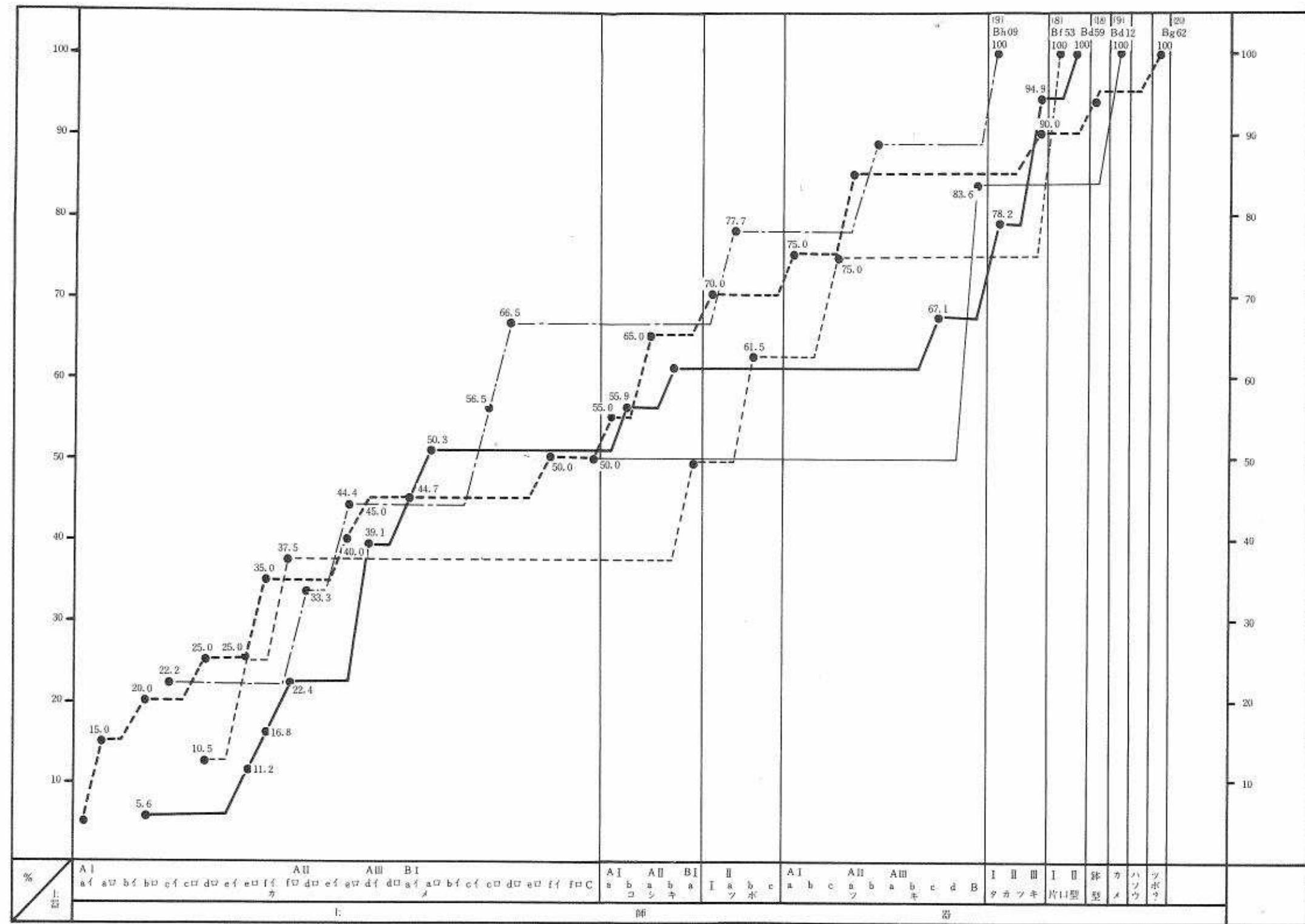
環以上の大きな相異は、环に於いてみられる。Bg62例ではA-I-a類、A-II-a類がみられるのに対し、Bd59に於いてはA-III-c類がみられるのみである。換言すると、前者に於いては体部がやや内湾気味になるかあるいは外反する器形を有し、体部横ナテ・底部鏝削りの調整が行なわれるのに対し、後者に於いては外傾する体部を持ち、体・底部ともに鏝ミガキが施されることになる。

高环については、Bg62ではIII類のみがみられ、Bd59ではI・II類が共伴する。しかし、これはもともと高环は絶対数の少ない器種とも考えられるので、前者にI類が欠落していることが直ちに本来的意味を持つかどうかは即断できないであろう。

片口型と鉢型については、両者ともに普遍性を欠く傾向があるので、前者がBd59に、後者がBg62に出土した事実のみを挙げておく。

以上が両者の近似点・相異点のあらましである。これらからすると、両者は非常に近似した関係（生産活動的な側面）にあるが、环・甕等にみられる微妙な相異点から、やや時間的な相異を内包するとしてよいのではないかと思われる。このことは、遺構配置の面からも頷けよう。つまり、この両竪穴住居跡は今泉遺跡に於いては最大級に属するものの2つであるが、空間的にはほぼ南北に隣接している。従って、このような大規模な住居が2個同時に存在することは、他の竪穴住居跡との関係をも考慮するとかなり考えにくくと言えよう。

第24表 各遺構の器種別個体数と組成率 No.



第26図 各遺構の器種別個体数と組成率No.2

次に土師器と須恵器の共伴関係についてみると、Bb06・Bg62・Cb24・Bd12・Ai62に於いてそれらがみられる。但し、前三者と後二者では、その共伴関係の意味は根本的に異なる。それは前三者に於いては須恵器甕・壺（？・破片）・甕（破片）等が例外的な存在としてロクロ不使用の土師器に共伴するのに対して、後二者では須恵器の器種・量が増加し、しかも土師器にもロクロが使用されているのである。よって、前三者と後二者とは、その歴史的段階を明らかに異にする見做し得るのである。

(註6) 如上の器種による造構内での分布の相異が何を示すのかは、充分に検討されてよい課題であろう。

そのような意味で、各造構平面図中に土器の出土位置をも示しておいた。また、本遺跡に於ける土器の出土状況がそのプライマリーなものを示すことが多そうであるという現象の持つ意味は何か、という問題についても充分に検討されるべき事項であろう。

(註7) 但し、この点については後者の例の中に体下端部を一部欠失しているものがあるので、絶対的な相異と見做せない可能性もあるにはある。

(註8) 但し、壺的な機能（一般に貯蔵といわれる）を果たす他の容器（例えば須恵器甕・壺等）を欠く事實を考えると、あるいは甕A-III類としたものにその機能を求められるかもしれない。（甕A-III類を壺としなかった理由は既に述べた）。

(3) 土器の器面調整技法の検討

以上の分類は器形上の特徴に、よりウェイトを置いたものであった。以下には土器の部位毎に器面調整技法を観察し、前述の組成の分析結果との関連性を検討してみる。この場合、少なくともBd12(側)とAi62の両者とそれ以外の竪穴住居跡との間には技術上決定的な違いがあることは既述の通りであるので、以下の観察はロクロ不使用の遺物（特に土師器）を主体的に出土する遺構にのみ限定して行なう。従って須恵器が出土するが、Bb06・Bg62・Cb24も当然その対象となる。

第25表がその一覧であるが、先と同様器種毎に検討する。

肩部 肩部の有無の状況は、遺構によってまちまちである。有段のみ、有段・無段混在の例がある。

最大径部位は口縁に一致するものが基本であるが、体部中央にあるもの・球形の体部をなすものと共に伴する例が多い。つまり、I・II・IIIはセットをなすと考えられるのではないだろうか。

器体の大小は①～⑥まで揃うのが基本形と考えられる。

器面調整技法は、口縁は内外ともに刷毛目調整の後横ナデ調整が行なわれる。例外としては、口縁下半から段に至るまでの部分に鋸歯状の沈線文を施したもののが一例ある。従って、口縁の技法の項目は設けなかった。体部調整技法では、刷毛目調整のみのもの・刷毛目プラス範ミガ

—今泉遺跡—

臺	口 頸 部	肩 部	底 部	大小(口径)	技 法					
					口 頸	肩 部	体 部	底 部		
壺	① 外 反 ② 直口一内凸	① 有 段 ② 無 段	① 平 底 ② 丸 底 風	① 10cm前後 ② 15cm以上	① ナ テ ② ミ ガ キ ③ ケ ズ リ ④ 刷 毛 目	① ナ テ ② ミ ガ キ ③ ケ ズ リ ④ 刷 毛 目	① ナ テ ② ミ ガ キ ③ ケ ズ リ ④ 刷 毛 目	① ナ テ ② ミ ガ キ ③ ケ ズ リ ④ 刷 毛 目	① ナ テ ② ミ ガ キ ③ ケ ズ リ ④ 刷 毛 目	
環	口 線	口・体部境界	内面くびれ	中央 部	脚高/環高	備 考				
甌	① 外 傾 ② 直 口	① 有 段 ② 無 段	① 有 ② 無	① 有 段 ② 無 段	① 1.5 ② 1.3 ③ 1.4	内面黒色処理はすべてにみられる。破片は無視。				
甌・瓶	口 線	肩 部	最大径部位	大小(器高)cm	技 法	細 孔				
甌	① 外 反 ② 直 口	① 有 段 ② 無 段	① 口 線 ② 体 部 ③ 体部(球形)	① 15 以 下 ② 16 ~ 20 ③ 21 ~ 24 ④ 25 ⑤ 26 ~ 30 ⑥ 30 以 下	① 刷毛目 + ミガキ・ケズリ ② 刷毛目主体	① 有 ② 無	細孔の有無は瓶についてのみ。			
环	口 線 ①外傾 ②外反 ③直口 一内	口・体底部境界 ① 有 段 ② 無 段	境界の部位 ① 中 央 ② 中央より やや下位 ③ 下 位	内面くびれ ① 有 ② 無	大小(口径)cm ① 10 前 後 ② 14 ~ 16 ③ 18 ~ 20 ④ 20 ~ 22 ⑤ 24 前 後 ⑥ 27 以 上	技 法 ① ナ テ ② ミ ガ キ ③ ケ ズ リ ④ 刷 毛 目	体 部 ① ナ テ ② ミ ガ キ ③ ケ ズ リ ④ 刷 毛 目	底 部 ① ナ テ ② ミ ガ キ ③ ケ ズ リ ④ 刷 毛 目	内面黒色処理 ① 有 ② 無	備 考 事稀に黒色処理のないものが存在するので設定した。

第25-1表 器面調整技法一覧表分類基準

キ・箇削り・箇ナテ調整のものが併存するのが常態らしい。

その他、特に顔料使用の事例などは皆無である。

甌 肩部有段のものと無段のものがあり、器体の比較的大きなものと小さなものがセットをなすようである。器形・器面調整技法等共通点が多い。そのうちで顕著な相異は、一部疑問があるが、体下端部の細孔の有無であろう。

臺 出土量が少ないので限界がみえるが、遺構により器体の大小に相異があると考えることができよう。

器面調整の技法は、基本的には口縁(口頸)部横ナテ、肩部以下は刷毛目後箇ミガキの各調整である。

环 比較的相異点が多い。体部形態は①のみ、②のみ、①+②、①+③の組み合わせ、③のみがある。②と③の組み合わせがないのが注目される。

体・底部境界の段の部位は、器体中央よりやや下位になるのが原則であり、例外は下か中央方に偏した一例のみ。器体の大小は、一遺構内ではあまりばらつきがみられず、比較的類似した大きさのものになるといってよい。

器面調整の技法は、体部と底部のそれを組み合わせて考える。技法の組み合わせとしては、

- ① 体部横ナテ、底部箇削り
- ② 体部横ナテ、底部箇ミガキ
- ③ 体部横ナテ、底部刷毛目

第25-2表 器面調整技法一覽表

- ④ 体部篦ミガキ、底部篦ミガキ
- ⑤ 体部篦ミガキ、底部篦削り

の5種がある。これらの遺構内に於ける組み合わせには、

- Ⓐ ①のみ
- Ⓑ ①+② (①>②)
- Ⓒ ③+① (③=①)
- Ⓓ ④のみ
- Ⓔ ④+① (④=①)
- Ⓕ ⑤のみ

の6種類がある。これらから、各遺構をⒶ・Ⓑを主にするものと、Ⓓ・Ⓔ・Ⓕ的なものにまとめることができそうである。

その他の技法、特に器内面の篦ミガキ・黒色処理は施されるのが原則であるし、くびれについても同様である。

文様は特に施されないのが原則であるが、斜格子目状の沈線文が施される一例が存在することには既に触れた。

高坏 器面調整の点からあらためて触れるべきことは特ないので、組み合わせについてのみ再述しておく。

- ① I・III類共伴
- ② III類のみ
- ③ II類のみ

であるが、①の例が存在することは重要であろう。

片口型と鉢型のものについては、他の土師器とセットをなす一器種であることを指摘するに留める。

須恵器

翫 Bb06の床面から、壺II-C・坏A-I-C類に共伴した。

壺(?) Bg62の床面出土。破片のため正確な器種は不明。

甕(?) Cb24の床面出土。破片のため正確な器種は不明だが、内面に所謂「青海波」文があり、甕か坏A-I-a・A-III-a類に共伴。

以上が技法の特徴の概略である。これらからみた限り、今泉遺跡の各竪穴住居出土の遺物は、それぞれの器種に於いてよく似た内容を示しているといえよう。特に、意図的に採用してきた「異技法の共伴関係の重視」という観点を組み入れると、それらの間の相異はますます小さくみえてくる。従って既に指摘した通り、各竪穴住居は非常に近似した時間の枠内におさまると

—今泉遺跡—

の解釈も可能になる。とはいっても、これだけの数が同時に存在することは不可能なのであって、以下には壺を手掛りとしてこれらを編年的に考察していきたい。その他の器種についてはその結果を敷衍していきたい。

(4) 土器の編年的考察

本遺跡出土土器は大略以上のようなものである。これらはすべて遺構内からの出土であり、それぞれがセットの主体乃至セットの一部をなすと見做されてよいものであることは既に触れた。次に、これらの土器群なかんずく土師器がいかなる編年的位置を占めるかについて、従来の型式標準やその他類似遺跡に於ける土師器のあり方を参考にしながら考察していきたい。

東北地方古代の土器のうち、まず土師器の編年研究については、その南部に於いては氏家和典氏の業績が、その北部については桜井清彦・草間俊一両氏の業績が古くより知られ、その大綱がたてられたといってよい。

その後前記氏家氏の一連の研究、及び小笠原好彦・阿部義平、桑原滋郎氏などの研究によつて、あるいはまた東北各県に於ける古代城柵・官衙址研究の進展により、その詳細化といつそうの肉づけが行なわれてきたといえる。

一方、須恵器の特に壺については、岡田茂弘・桑原滋郎両氏の研究によりかなり詳細な編年体系がたてられ、また須恵器と土師器を組み合わせとして一体視する視点の確立などによって今後いっそうの進展が期待される。

これらを踏まえて今泉遺跡出土土器を整理したものが第26表である。これをもとに今泉遺跡出土の土器を編年的に説明し、併せて問題点をも指摘したい。尚、視覚的に示した方がわかりやすいので、第25表を配列換えたものを第26表とした。

1. 土師器の編年上の位置について

既に触れてきた通り、本遺跡出土のロクロ不使用土師器群を主体とする土器群は非常に強い類似性を持ち、存続期間の幅があまり広くないものと見做し得る。これらのまとまりを有する土器群は、従来の型式観・編年観を採用すると、栗田式に最も類似するものである。従って本群土器の編年上の位置を以上の時期と考えておく。絶対年代も従来の見解の通り7世紀代を中心とする時期を想定しておく。

但し、若干詳細に遺物を検討し、更に東隣の勝性遺跡に於ける遺構変遷上の知見を採用すると、本遺跡の遺構・遺物は二分することも可能のようである。遺構変遷上の知見については別に触れたので、遺物についてそれを述べる。二大別を遺構で示す。

前半期……Ai 650時・Bc71・Bd03・Bf09・Bf53・Bg62・Bh09・Bi15・Cb24 計9棟

後半期……Ai650時・Bb06・Bc53・Bd59・Bi24・Bh71・Ca18 計7棟

第26表 遺構毎出土遺物一覧

遺構	土		骨										器										鏡 指 器		備 考							
	力		メ		コ		レ		キ		フ		ホ		ツ		キ		タ		ガ		ツ		メ							
	口様	肩部	最大径	大きさ	技法	その他	口様	肩部	最大径	大きさ	技法	縫孔	口頭	肩部	底部	大小	口頭技法	肩部技法	体部技法	底部技法	体部技法	底部技法	黒色處理	その他	口様	境界	内側	外側	片	ツ	鏡	
Bf 09	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Bg 03	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Bd 03	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Cb 24	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Bi 15	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Ai 65	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Bc 71	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Bf 53	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Bh 09	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Bi 24	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Bc 53	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Bb 06																																
Bd 59	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Ca 18	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
Bb 71	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

（前期）前半期

（後期）後半期

両者の相異は、甕型に於いて最も顕著である。即ち、前者には肩部無段で胴部最大径が胴部中央から下半にくるものを含み、後者は肩部有段が大半を占め、胴部最大径は肩部に一致し底部も明確に突出する。從来の型式觀の住社式により近いものも含むものが前者ということになる。

壺に於いてはその数が少ないが、体部上半のナデ調整が前者により多く存在するともみれる。しかし、ミガキ技法も存在することは既に何度も触れてきた通りである。

以上二大別は可能であるが、この両者を異型式とすべきか否かは現状では不明である。該期の土器群は今後細分可能とのみ述べるに留めておく。諸性遺跡にその種の良好な資料がある。

- (註9) 氏家和典 東北土師器の型式分類とその編年 歴史14輯
- (註10) 櫻井清彦他 東北地方北部の土師器と竪穴に関する諸問題 館藏所収 1958年
- (註11) 草間俊一 盛岡市史先史期 盛岡市史第一分冊所収 1958年
- (註12) 氏家和典 隆興国分寺跡出土の丸底杯をめぐって —奈良・平安期の土師器の諸問題—
- (註13) 小笠原好彦・阿部義平 宮城県新田遺跡の土師器 考古学雑誌54-2 日本考古学会 昭和43年
- (註14) 宮城県文化財調査報告書35集 東北新幹線関係遺跡調査報告書1
同24集 東北自動車道関係遺跡発掘調査概報 —刈田郡巣王町地区—
- (註15) 岡田茂弘・桑原滋郎 多賀城周辺における古代杯形土器の変遷 研究紀要I. 多賀城碑特集
宮城県多賀城跡調査研究所 1974年3月
- (註16) 工藤雅樹・桑原滋郎 東北地方における古代土器生産の展開 考古学雑誌第57卷第3号
昭和47年2月

2. 須恵器(甕)の編年上の位置について

この資料は口頸部以上を欠失するので若干の疑義は残るが、東北地方に於ける須恵器在地生産開始期にはば近い編年上の位置を占めると思われる。類似した器形を持つ資料は、仙台市大蓮寺窯跡・福島市稻荷塚古墳・福島県下入ノ内遺跡1号住居跡等にみられる。これらの絶対年代は5世紀後半～6世紀前半と想定されている。尚、本県に於ける同期の可能性ある資料としては、金ヶ崎町高野原出土の高壺がある。

前記の下入ノ内遺跡は5世紀中葉末と想定され、かつ共伴土師器は南小泉式である。それに對して本遺跡の共伴土師器は明らかに栗圓式類似のものであり、須恵器と土師器の年代間に大きなギャップがある。この現象の背景の究明は、“伝世”的可能性をも含めて今後慎重に行なわれなければならないが、奈良時代以前に於ける集落出土の“特異な遺物”的り方の類例を蓄積すること、それらと古墳副葬品とを比較することなどがまず行なわれるべき必要な手続きであろう。

— 今泉遺跡 —

- (註17) 本資料については林謙作・渡辺泰伸・中村浩・伊藤博幸・宮城県文化財保護課・同多賀城跡調査研究所・東北歴史資料館・仙台市教育委員会の諸氏・諸機関から多大の御教示を受けた。感謝する。
- (註18) 渡辺泰伸 東北古墳時代須恵器の様相と編年—須恵器編年試論— 考古学雑誌第65巻第4号
昭和55年3月 下入ノ内遺跡 福島県文化財調査報告書第82集 伊達西部地区遺跡発掘調査報告
福島県教育委員会 昭和55年

(2) 鉄器・装飾品について

本遺跡出土の鉄器・装飾品類は第27・28表の通りである。以下には、これらに関連した若干の問題を指摘しておく。

(1) 出土頻度が他遺跡に比し高いと思われる。特定の遺構への集中出度の現象はみられず、ほぼ半数程度の遺構から出土している。(但し装飾品はBd03竪穴住居跡から若干多く出土しているかのようであるが、絶対数が少ないのでその判定は差し控える。)それは一応想定した新・古の両段階に於いて言える。同様のことは東隣の膳性遺跡に於いてもみられるとのことである。

一方、北隣の上辯田遺跡・猫谷地遺跡の同期の住居跡からは極めて稀な出土しかみられない。従って、本遺跡の“豊富”な鉄器出土例はやや特異に属するものと思われる。

(2) 末期古墳副葬品に共通する要素も併わせ持つものが存在する。本県内の末期古墳の副葬品をみると、玉類(勾玉・切子玉・臼玉・小玉・丸玉・管玉・緒占玉・土玉)、装身具その他(腕輪・耳環・鎗帶金具)、金属器(直刀・薙手刀・鎌・鞘尻金具・刀子・斧・鉈・釣針・釘・刺突具・鍔鋤先・鎌・轡・鐙・鏡・紙状・釘・その他不明)、鏡鑑類、錢貨類、紡錘車、土師器、須恵器(甕?・提瓶・その他)などが挙げられる。副葬品の豊富な器種に比し、集落内出土の貧弱さは当時の政治的・社会的状況の正確な反映であろうが、ここではそれには触れない。貧弱さの中に、副葬品に共通するものが存在する点に留意したい。それは東隣の膳性遺跡に於いては、主頭太刀の一部や水晶製と思われる切子玉なども出土しており、その傾向はいっそう顕著である。また本遺跡に於ける鰐、膳性に於ける高环・短頸壺・高台付环などのやや特異な器種からなる須恵器などのあり方も同様である。

以上のことから、本遺跡を含む地域の該期の集落に他地域とはやや異なる性格を想定することができよう。既に述べたBb06竪穴住居跡の年代の異なる須恵器の共伴現象も、この延長上で理解すべきかとも思われる。今後の資料の蓄積が、更に必要であろう。

(註1) 鉄器の定着自体は、既に塩釜式期(高山遺跡)に完了していたと思われる。本遺跡の時期に於ける鉄器の“流通性”の具体相については、今後解明すべき問題であるが、前記の副葬品と集落出土例の比較もその一助にはなろう。恐らく、製品の形での“流通”ではあったろう。

(註2) 泰良時代以前の集落跡出土に於ける鉄器の種別の中には、明白な斧・鎌先などは殆んどみられない。それらが顕著になるのは平安時代以降である。

第27表 鉄 器 一 覧 表

番号	遺構名	名 称	長さmm	幅 mm	厚さmm	出土層位	完・破	実測図	備考
1	Bc 53	刀子	65	15	6	覆土	破片	○	新
2	"	刀子	55	15	3	覆土	破片	○	
3	"	不明	42	30	20	床面	破片		
4	Cb 24	刀子	53	9	2	覆土	破片		古
5	Bf 09	鍔	170	30	4	床面	完全	○	古
6	"	刀子	115	12	4	床面	破片	○	
7	"	刀子	95	12	5	覆土	破片		
8	Bd 12	刀子	90	13	5	床面	破片	○	新
9	"	刀子	61	8	4	床面	破片	○	
10	"	鍔	13	7	2	床面	破片	○	
11	"	針 状	147	6	6	床面	破片	○	
12	Ca 18	刀子	78	9	2	覆土	破片	○	新
13	Bf 53	不明	26	10	3	覆土	破片		古
14	"	不明	40	30	1	覆土	破片		
15	Bd 03	刀子	48	12	3	覆土	破片		古
16	"	不明	35	28	6	覆土	破片		
17	"	刀子	115	10	3	床面	破片	○	
18	Bb 06	不明	35	25	10	床面	破片		新
19	Bd 59	針	40		6	覆土	破片		新
20	"	針	45		径25	床面	破片	○	
21	Bg 62	刀子	100	15	15	覆土	完全	○	古
22	"	鍔	35	7	2	覆土	破片	○	
23	"	針	52		径3	覆土	完全	○	
24	"	板 状	35	26	5	覆土	破片		
25	Aa 65	釣針	42	4	2	覆土	破片	○	新
26	"	刀子	59	12	15	覆土	破片	○	

第28表 装飾品 一 覧 表

番号	遺構名	名 称	長さmm	径 mm	重さg	材 質	出土層位	実測図
1	Bd 03	管玉状	31	7	2.6	土製	床面	○
2	Bd 03	トンボ玉状	12	15	3	土製	覆土	○
3	Bd 03	花弁形	厚さ4	15	1	石製	覆土	○*
4	Bb 09	トンボ玉状	6	8	0.5	土製	床面	○
5	Bb 06	管玉状	19	9	2.0	土製	床面	○

*石質……淡緑色細粒凝灰岩

〔3〕 石器類について

出土した石器類は第29表にまとめた。縄文時代石器の混入と思われるものは除外した。奈良時代以前のものは、砥石類のみである。Bb06豊穴住居跡のものは鍤に類似するが、同様に砥石であろう。

〔4〕 土製品類について

紡錘車1とカマド支脚1である。紡錘車は奈良時代以前に通有の形態を有する。本県に於ける該期の出土例は極めて多く、かつ、県南・県北に於ける差異も殆んどない。該期に於ける織維関係の労働のあり方を反映するものといえ、興味深い。

〔5〕 黒耀石について

覆土層中より18点を得た。その背景は不明であるが、埋土中に限定される点はその廃棄の時期を縄文時代以外に求めさせるものであり、若干興味深い点である。表を残す母岩に近いものと、フレイク・チップに近いものがある。

第29表 石 器 一 覧 表

番号	遺構名	名 称	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	出土層位	実測図
1	Bc 53	砥 石	65	60	29		床 面	○ a
2	Ca 18	磨 製 石 牙	31	30	18		覆 土	
3	Bb 06	石 鍤	55	23	25	51.5	覆 土	○ b
4	"	鍤	33	11	4		覆 土	c
5	Bg 62	砥 石	130	25	25		床 面	○ d
6	Bd 59	フ レ イ ク	62	40	18		覆 土	○
7	"	縦 影 石 鋏	61	16	5		覆 土	

(質) a……流紋岩質凝灰岩

d……細粒石質凝灰岩 (珪化している)

b……流紋岩質細粒凝灰岩

c……月質泥岩

第30表 土 製 品 一 覧 表

番号	遺構名	名 称	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	出土層位	実測図
1	Bd 03	紡 錘 車	上径32	下径46	18	46	床 面	○
2	Bd 59	カマド支脚	114		46	173	床 面	○

—今泉遺跡—

本遺跡の周辺に於ける原産地には、国鉄折橋駅西方の段丘崖がある。

古墳時代～奈良時代の遺跡に於ける黒曜石出土には、江別式などの所謂北方的要素を強く有する土器群の共伴現象が多く認められるが、本遺跡に於いてはその例にあたる土器類は未検出である。逆に、水沢市石田遺跡出土の江別式土器には黒曜石製石器は共伴しない。

(註1) 高橋文夫氏の教示により実査・確認・採集している。その他には以下の箇所が挙げられる。

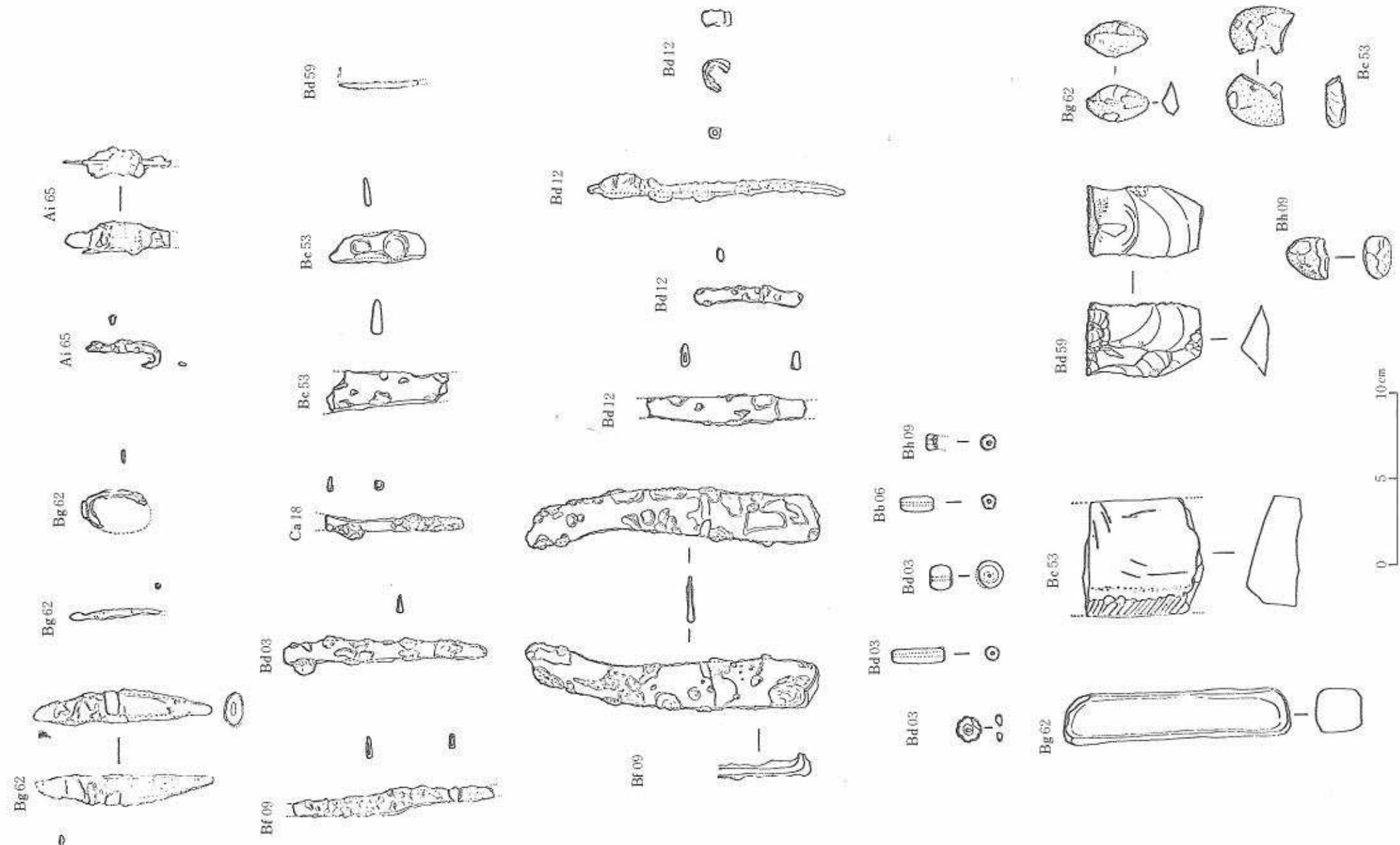
第31表 黒曜石一覧表

<table border="0"> <tr> <td>① 表皮を残すもの</td><td>-----</td><td>18</td><td rowspan="3">すべて覆土出土</td></tr> <tr> <td>うち大型で母岩に近いもの</td><td>-----</td><td>5</td></tr> </table>										① 表皮を残すもの	-----	18	すべて覆土出土	うち大型で母岩に近いもの	-----	5
① 表皮を残すもの	-----	18	すべて覆土出土													
うち大型で母岩に近いもの	-----	5														
② フレイクとチップ	-----	13														
番号	遺構名	①	②	計	番号	遺構名	①	②	計							
1	Cb 24	3	2	5	6	Bb 06	1	0	1							
2	Bd 03	4	0	4	7	Bh 09	1	0	1							
3	Bg 62	5	3	8	8	Bi 15	1	0	1							
4	Bc 53	2	3	5	9	Ca 18	3	0	3							
5	Bd 59	2	0	2	10	Bi 24	0	1	1							

Ca 09					Ca 18						
番号	重さg	たてcm	よこcm	厚さcm	備考	番号	重さg	たてcm	よこcm	厚さcm	備考
1	130	7	4.5	3		20	330	7.5	6.5	3.6	
2	300	8.5	7	2.8		21	105	6	4.4	2.0	
3	230	8	8	3		22	110	5.5	5	2.0	
4	75	7	4.5	2		23	175	7.2	5.2	2.0	
5	190	7.5	6	3		24	130	7.5	4.6	1.9	
6	300	9	8	3		25	125	7	4.5	2.1	
7	220	8.5	6	2.7		26	140	6	4.6	2.8	
8	240	8.5	7	2		27	25	4.7	3.3	1.2	
9	315	13.5	5	3.5	完全、四み石?	28	160	8.7	5	2.3	
10	130	6.5	4.5	2.7		29	25	5	5	1.2	
11	215	11	5	2.2		30	100	6.7	5	2	
12	220	7.5	5.5	3.2		31	95	6.5	4.5	2.2	
13	30	5	3.4	1.5		32	70	8	4.2	1.6	
14	250	9.5	8	2.2		33	180	7.5	7	2.7	
15	90	8.5	4.5	1.5	完全						
16	80	6.5	4.7	1.7							
17	100	9.5	2.7	2.7							
18	75	5.7	4.3	2.2							
19	75	5.5	5	2.3							

第32表

破碎礫一覧表



第27図 鉄器・装飾品・石器・黒縛石実測図

- (註2) 花泉町飯倉地区の滝沢層の露頭・国鉄東北線「清水原」駅付近の五反田地内の段丘疊層中。…熊谷常正氏の教示による。また同氏は東北地方の黒曜石出土遺跡の集成を行なっている。
- (註3) 和賀郡湯田町川尻の旧土畠鉱山付近。…八重樫良宏氏の教示による。
- (註4) 零石町橋場の小赤沢地内の段丘疊層中。…高橋与右衛門氏の教示による。さらに佐藤二郎氏の教示によれば、岩手郡零石町周辺の橋場層(新第三紀中新統最上部)は石英安山岩質凝灰岩と一部焼結凝灰岩などがあるが、その北部においてはその間に黒曜岩・松脂岩等の破片を混在するとのことである。したがって前記の小赤沢地内以外にも産出地が存在する可能性は大である。

[6] 破碎疊について

適当な名称を知らないので仮にこう呼ぶ。恐らくは梢円形に近い形状を有する板状疊を、二分割～四分割したものである。竪穴住居跡2箇所の覆土中から出土している。性格等は不明である。

類例は東隣の膳性遺跡にあり、竪穴住居跡の柱穴の掘り方中に集中して検出されている。柱材の押え役的な機能が想定されているらしい。相互の接合資料もあり、この想定は肯定されるべきものであろう。但し、同様の措置が取られる例は殆んどみられず、一種特異な構築法ではある。ちなみに膳性遺跡に於ける例(D-8住居跡)は、遺跡内に於ける最大規模のものである。これが単に建物の大小にのみ関係する措置か否かも、今後検討されねばならない。

- (註) 帰岩手県埋蔵文化財センター調査の「膳性遺跡D-8住居跡」同センター鈴木恵治氏の教示を受けた。深謝する。

結語

- (1) 本遺跡は、奈良時代初期まで(7世紀～8世紀初まで)と、平安時代の集落跡であり、前者の遺構が主体をなす。
- (2) 両期ともに竪穴住居跡のみからなる。
- (3) 前者の同時存在竪穴住居数は10棟以内と思われる。
- (4) 前者の共伴土器群は、従来の栗圓式(そのやや古い部分と思われるものを含む)に最もよく類似する。
- (5) 集落は比較的短期間でいったん営なまれなくなり、若干の時間の経過のうちに再度占地される。
- (6) 東隣の膳性・玉貫の両遺跡と一体化して評価さるべきものと思われる。

(参考)

集落構成の要素と予察

集落規模の完全な復元は困難である。ここでは集落を構成する諸遺構類を概観し、その変化の一端を見るに留める。具体的な図版については巻末参考資料を参照されたい。

- (1) 第I～V群期 確認された限りでは竪穴住居跡のみからなる。相互にやや距離をおいた2～4棟からなる。正方形プランと長方形の二種がある。
- (2) 第VI群期 7～12・13棟前後の竪穴住居跡のみからなる。正方形プランで大小の三種の組み合わせになる。前代より規模が拡大したと言える。
- (3) 第VII群期 前代にはほぼ共通するが、20棟前後と規模がさらに拡大する例も出てくる。集落内に“支群”的なグループを持つ例もある。住居跡に加え“大溝”も出現する（尻引）。これらは単なる排水路とは考えられない。
- (4) 第VIII群期 遺構の種類が増加する。沖積面上の自然堤防上（宮地）や、低位段丘上の微高地（林前）に立地する集落に“井戸”が伴う。宮地においては井戸をはさんで南北に住居を営む形式をとり続けており、集落内の井戸使用の実態・その所有形態に関しての示唆に富む。井戸枠の構造にも変遷がある。

立地にかかわらず“掘立柱建物”が加わる（膳性・西大畑・石田・林前・森山工業団地・北に偏するが紫波町上平沢新田）。そのあり方に二種ある。

- (A) 竪穴住居跡と隣接し併存するもの。
 - (B) 竪穴住居跡と異なる地点に存在する（林前・B₁）、それとは併存しないもの（西大畑・B₂）。前代と同様の“大溝”を有する（石田・宮地）。
- (5) 第IX群期以降については、大規模調査例は窯業関連のもののみであり、一般集落の様相は必ずしも明らかではない。あえて言えば、遺跡数は増加するが、遺跡個々は小規模化する傾向にあると言えよう。

要 約

- (1) 古墳時代～奈良時代の集落は基本的には住居跡のみからなる。奈良時代半ば～末にかけて大溝が伴い始める。
 - (2) 平安時代初～前半にかけては、住居跡・大溝・井戸・掘立柱建物などで構成される。
- 集落の構成要素については他に語るべき項目も多い（例えば墓域）が、省略する。

(註1) 1棟前後の若干大規模なものを中心とし、その周囲に中小規模のものが配される形をとるものが多い。

い。これが末期古墳の配置に共通するという意見には従うべきであろう。

林・伊藤他、角塚古墳調査報告 胆沢町教育委員会 1976年

(註2) それは“筒状”的ものから、板材を組んだ“井桁状”へと変化している。

(註3) 第I-V群期における両者の関係は未詳である。第VI-VII群期については、水系で区切られた各地域毎に集落が存在し、それに近接して墓域も造営される形をとる。墓域は一定期間以上それとして意識され続ける。第VIII群期以降については不明である。“方形あるいは円形周溝状遺構”と呼称されているものが墳墓の周溝である可能性は高いと思われるが、詳細は未詳である。なお9世紀とされる見分森古墳は方形である。

なお相去遺跡群において“長方形の土塁”とされたものが墓地であるならば、10~11世紀前半に別種の葬制も行なわれていたことになる。

相去遺跡—古代集落の発掘—(現地説明会資料) 岩手県教育委員会・北上市教育委員会 1973年

集落に関する予察

1. 古代において、集落様相に数期の変化期がある。それは①古墳時代前期、②古墳時代末期~奈良時代初期、③奈良時代半ば以降末期、④平安時代前半期の大別四期である。変化は各分野にわたるが、時期により性格に多少の相違がある。例えば④には須恵器の窯など“政治的、色彩の強いものが顕著に伴う”。①にも高い“政治性”が当然想定されるが、資料不足であり未詳としておく。②・③にも外的要因の作用は当然存在するが、それは④的なものは無く、その意味で“自主的・主体的”な動向に基本的にはあったと言えよう。

以上の諸変化期は從来常識的に想定されてきたそれとほぼ合致しよう。いうまでもなく④と胆沢城(そして志和城他)の設置は無関係ではないであろう。④の多方面にわたる“政治的、色彩の濃い変化は、律令政府進出の反映と見做されるべきである。

2. 集落の形態に類型があり、それは時代差をある程度反映する。類型は以下の如くである。
〔A〕 明白な計画性を持たない“自然村落”というべきもの。少なくとも奈良時代の集落の大部分が該当し、基本的には竪穴住居跡からなる。大型のものに中小が組み合わせになり、末期古墳の配置に通ずる。一定期間で造営が中断される傾向がある。在地・土着集団の集落と思われる。各種の発展傾向、他地域との交流が見られる。奈良時代末期には、次第に顕著になる諸変化の部分的兆しが数分野に現われ始める。

〔B〕 遺構の配置・集落の造営状況に一定の計画性を窺わせる“計画村落”ともいうべきもの。平安時代初期~前半代の集落の大半が該当する。“計画性”は竪穴住居跡・掘立柱建物・井戸・大溝・窯等の遺構種別の増加、それら相互の配置、立地面を含めた造営状況、その地域的限定性等々の諸側面に現われている。さらに数類型がある。

I. 前代との連続性を示す(少數)もの。

(I a) 竪穴住居跡・掘立柱建物・その他が組み合わせになるもの。

(I b) 若干規模の大きな掘立柱建物のみからなるもの。

II. 前代との連續性を殆んど示さないもので、Iより多数。

(II a) 竪穴住居跡・掘立柱建物・井戸等が組み合わせり、(I a)に共通するあり方を示すもの。出土鉄器に農具的なものが目立つ。

(II b) 遺構・遺物画面にやや特異と見做し得る要素を持つもの。それらは①須恵器窯（見分森）、②鉄滓・フィゴ羽口等を多く出土する（力石他の江刺地方の諸遺跡）、③多量の鉄製武具の出土（同前）、④木簡（落合II）、⑤石帶（力石II）、⑥硯（同前）、⑦墨（上平沢新田）などである。これらは從来“識字層の存在”を示す、とりわけ一定の“政治性”を示すとされてきたものの多くを含む。それを採って、この類型には“政治性”を想定しておく。その地理的位置が所謂城柵・官衙遺跡、建部される諸郡の位置と密接に関連すると思われる等の特徴も指摘できる。これを制度史上的概念といかに対応させ得るかは、今後の検討を要しよう。

以上のA・B類型の性格について、簡略的ではあるが推定を試みる。即ち、奈良時代までのA類型には、在地の支配原理の貫徹する“自然村落”的性格、B類型に律令制的支配原理に基づく“政治村落（律令村落）的”性格を想定できる。B類型の中には、Aが律令制的に再編されたもの（Ia）他地域よりの“移民”集団により新規造営されたもの（II a）、種々の次元と、“軍事的”なもの（I b・II b）が存在する可能性が強い。“移民”云々については、遺構・遺物の特徴の把握とその系統の検討から、ある程度明らかにしえよう。

B類型村落の明確な存在は、全般的には衰退期に向かいつつあった律令制が、辺境において模範的・理念型的に行なわれた可能性をも示唆するものである。

3. 掘立柱建物の性格に複数があり得る。

岩手県南～県中央にかけて、平安時代に属すると思われる掘立柱建物を伴う集落跡は5例ある。可能性の高い森山工業団地も加えると6例になる。その何れもがVIII群期に関連することは既に述べた。したがって岩手県地方の古代集落内の掘立柱建物の初期は大略確定したと言える。

その主屋規模は3間×2間、4間×2間、5間×2間などの諸類型からなる。大部分は中抜きの形式をとるが、膳性例のみが純柱である。

集落内のあり方には、A・B₁・B₂の三種あることは既に触れた。そのうちAたる石田の6棟、B₂の西大畠の4棟が複数（ただしすべてが同時存在ではない）存在、他は1棟の単独存在である。これらを踏まえ、その性格想定を試みる。

(1) Aのうち単独存在には、少なくとも“倉庫”的なものが含まれよう。複数存在のものの

一部にもそれがあろう。しかし後者のうちの石田・西大畠のあり方は、掘立柱建物自体に“居住施設。的なものも含まれる可能性をも示唆する。石田の西面廻のある”主屋。を中心とし、その周間に“倉庫。的なものを配す遺構配置と、それと軌を一にする溝類の配置は、さらに進んで、特定集団の所有する一括建物群の存在を示唆するものとも考えられる。しかもそれに竪穴住居跡をも伴う可能性がある。

西大畠例は、遺構周辺に遺物散布が集中する傾向が顕著に見られる。

何れにせよ現状での時期の細かい特定は出来ないが、少なくとも平安時代前半期に掘立柱建物の中に“居住施設。的なものが存在した可能性は大である。ただし西大畠例は梁行5間のものを含むなど、他例より明らかに大規模なもののみで構成される。しかもB₂類型でもあることからすると、西大畠例に通常集落以外の、何らかの意味での“官衙。的なものを想定すべきかとも思う。

(2) AとB₁のあり方の異同を竪穴住居跡との対応関係からみることも出来る。即ち、相互に直近の位置関係にあるものに対応関係を想定出来るAと、“いくつかの小単位である竪穴小群の共有関係にある。とも見做し得るB₁である。

掘立柱建物と竪穴住居の対応関係の復元については、個々の遺構の位置の特定、厳密な同時存在遺構の確定などの基礎的操作が必要である。

4. 遺跡内の遺構集合（支群）について

遺跡内に“支群。ともいるべきものが存在することは既に触れた。それは時代・遺跡の性格の異同にかかわらず、何らかの形で存在したらしい。それらの具体的認定は今後的一大課題である。

その中の特に顕著な現象“規模の異なる竪穴住居跡の組み合せとしての存在。は、種々の問題を提起する。例えば、

(1) AがB-I-aに“再編。されるにあたり、前代の共同体組織がある程度利用された可能性。

(2) B-II-bの“政治性。の強いと思われる集落にもそれが見られることは、一種“人為的。な集落造営の際にも、移住前のあり方を踏襲・擬制した可能性。

等の諸点である。これらの観点も、遺構の機能の観点に加えて設けられるべきであろう。何れにせよ“支群。的なものの認定・設定は各種共同体の具体相の復元に必要不可欠の前提であり、今後も継続追求されるべきである。

(文責) 相原康二 (昭和54年末稿了)

(註1) 構性・西大畠・石田・林前・上平沢新田

—今泉遺跡—

(註2) 他に調査者により第Ⅳ群期に属する可能性ありとする1棟が西大畠にある。梁間・桁行が3間×1間の規模で、掘り方は円形。柱あたりは細く、他例とは明白に異なる。

(註3) 林前遺跡S.B.63建物跡

林前遺跡一区画整理に伴う範囲確認調査 岩手県水沢市文化財報告書第3集 岩手県水沢市教育委員会
1979年

(註4) 吉田努氏によると、太田方八丁遺跡外郭築地内の住居跡群にもその傾向があるとのことである。また真城ヶ丘団地も同様である。

伊藤博幸 奈良・平安時代の村落構造とその特質 考古学研究会岩手支部3月例会報告レジュメ 1979年

¹⁴C測定結果

ここで住居跡の年代に関わる¹⁴C測定結果について触れておく。

焼失家屋と推察されるBh09竪穴住居跡内出土の炭化材が測定試料である。材質はケヤキの一部とされ、床面からの出土によるものである。当然、家屋構造に関わる材と思われる。

日本アイソトープ協会による測定結果は、 1460 ± 60 y B.P. (1420 ± 60 y B.P.) と計算されている。換算年代は年代誤差を2倍にして換算すると370~610年代となり、奈良時代以前の時期に相当するものである。

Bh09竪穴住居跡に於ける出土遺物の編年上の位置については、先にも記した通り7世紀代を中心とする時期に想定している。当遺構は、特に二大別したうちの前半期ということで、換算年代の下限にも求められるのであろうか。出土遺物のみに關していくれば、須恵器甌や黒耀石のあり方からみれば古い要素のあることも事実であるが、遺跡そのものの年代観と直接的に関わりを持つとするのはまた別問題であろう。従って、ここでは既述の事実と予察の一端を記すに留める。

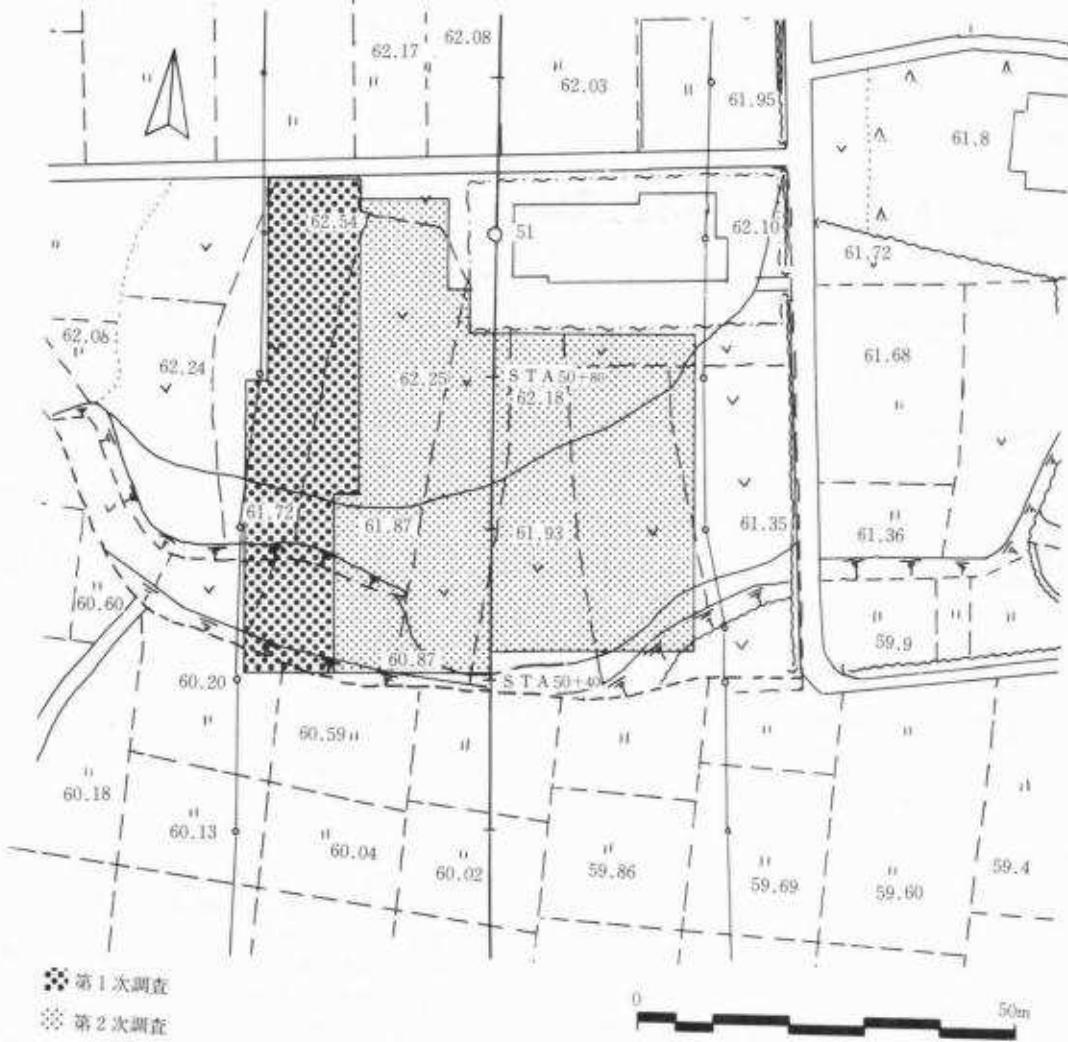
(註) 年代は¹⁴Cの半減期5730年(カッコ内はLibbyの値5568年)にもとづいて計算され、西暦1950年より過る年数(year B.P.)として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計算管のガス封入圧力および温度の読み取りの誤差から計算されたもので、¹⁴C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95%となります。なお¹⁴C年代は必ずしも眞の年代と等しくない事に御注意下さい。

西 大 畑 遺 跡

1. 遺跡所在地 水沢市佐倉河字西大畠
2. 調査期間 第1次昭和49年10月30日～12月7日
第2次昭和50年7月28日～9月30日
3. 調査面積 約2970m²
4. 発掘面積 約2970m²
5. 遺跡記号 NOH74・NOH75

I 遺跡の位置と立地 (第1図)

当遺跡は水沢市佐倉河字西大畠にあり、水沢駅の北西約3kmに位置する。遺跡は胆沢扇状地の北西部にて、低位の水沢段丘上に立地する。水沢段丘は東流する小河川に開析され、その中に東西方向に広がる低湿地の沖積地をかかえ、段丘と沖積地は崖面をもって画される。北側崖面を境とする北の段丘縁部と南の沖積地は比高差約1mである。北の段丘が南にゆるく傾斜して沖積地をのぞむ段丘縁部に遺跡は立地する。南側沖積地には水田が広がり、北側も削平されて水田地帯となっており、その間にはさまれた微高地の畠地で標高約62mの場所にある。尚、沖積地を中心に挟んだ北及び南の東西に延びる段丘縁部には多数の遺跡が存在する。



第1図 遺跡地形図

II 調査の経過 (第3図)

調査は2次にわたって行なわれた。第1次は昭和49年10月30日から12月7日まで西側約720m、第2次は昭和50年7月28日から9月30日まで残りの東側約2250mの全面発掘を行なった。報告は第1次・第2次における調査の成果を一括して扱う。

当遺跡は段丘縁部にあって東西に広がるものであるが、道路敷となる遺跡の範囲は東西約60m、南北約65mにわたる。調査は路線中心杭STA 50+40と50+80を結ぶ線を基準とし、3m間隔でこれに平行及び直交する線を設けて3mグリッドを組んだ。STA 50+80地点をCa50グリッドとし、東西南北に夫々延長してグリッド名を付した。

段丘縁部はやや微高地的な地形を示し、地表面から地山上面まで約15cm程の耕作土一層で遺物を含む。耕作土である表土除去後、種々の遺構が検出される。南端崖面からは多量の遺物が出土したが、新しい溝が1条東西に走るだけで、遺構は検出されなかった。

III 遺跡立地面の基本的層序 (第2図)

層序の調査は発掘区東端のBi74地点から東2mの間で、深さ1.5mについて行なった。

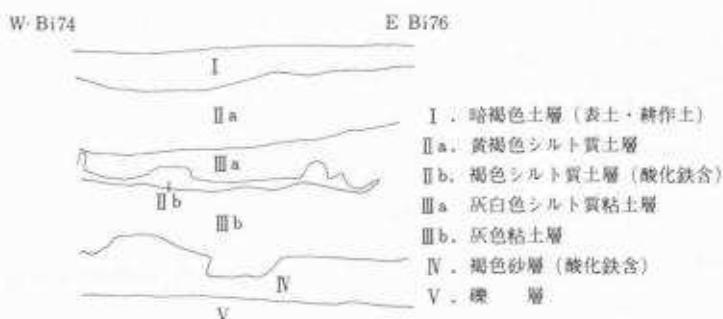
第I層：調査区東半は暗褐色土層で、西半は黒褐色土層である。表土の畑地耕作土で、遺物包含層である。層厚約15cmである。

第IIa層：黄褐色シルト質土層。この層から下は地山であり、層の上面が遺構検出面である。層厚約35cm程で水平に堆積している。所によつてはI層との間に漸移層が薄く入る所もある。遺構はこの層の中位まで掘り込まれている。

第IIb層：褐色シルト質土層、層厚5cm程の薄い層で、酸化鉄を含む。IIIa層とIIIb層の間に起伏をもつて入り込む。

第IIIa層：灰白色シルト質粘土層。層厚約20cm前後で、やや褐色がかる。

第IIIb層：灰白色粘土層。層厚約35cm程で、比較的厚い層である。



第2図 遺跡の基本層位 縮尺1/40



第3図 西大畠遺跡、ブリッド・遭構配置図

第IV層：褐色砂層、層厚約20cm前後で酸化鉄を含む。層下面是比較的水平である。

第V層：礫層で、水沢段丘構成層の瘤木礫層である。

IV 検出遺構と出土遺物

1. 溝状土壌（第4図）

検出された溝状土壌は4基で、細長い溝状を呈するものである。この土壌の名称については種々に仮称されているが、ここではその形態から溝状土壌とする。4基の溝状土壌の分布地区は発掘区の北側微高地にあり、北西部に3基、北東部に1基である。調査範囲も限られ、発見数が少なくまばらな分布なので、分布状態や配置関係等は不明である。遺構検出面は表土下の地山・黄褐色シルト質土層上面である。

溝状土壌の上縁は細長い溝状で、壙底は更に狭小の溝状を呈する。長軸断面は両壁共に垂直な立ち上がりを示す。短軸断面は上方に向かって外開きする「U」字状や「V」字状を呈す。土壌内覆土は自然堆積で、壙底に汚れた土、中間に壁部崩落土、上部に流れ込んだ土が夫々堆積する。土壌内出土遺物は、Bi30溝状土壌覆土から石鎚1点(220)が出土しただけで他は皆無である。壙底部は平坦で、何ら施設を設けた跡は見当たらない。

Bi30溝状土壌はその一部西側が調査範囲外にかかり、全体の形状を明らかにする事ができなかった。Bi68溝状土壌は、古墳末期から奈良時代の遺構・Bi62住居跡によって西端を切られている。Be27溝状土壌はBe24A・B建物跡の柱掘り方によって南東部を切られている。

以上4基の溝状土壌の規模等は次の表の如くである。

第1表 溝状土壌一覧

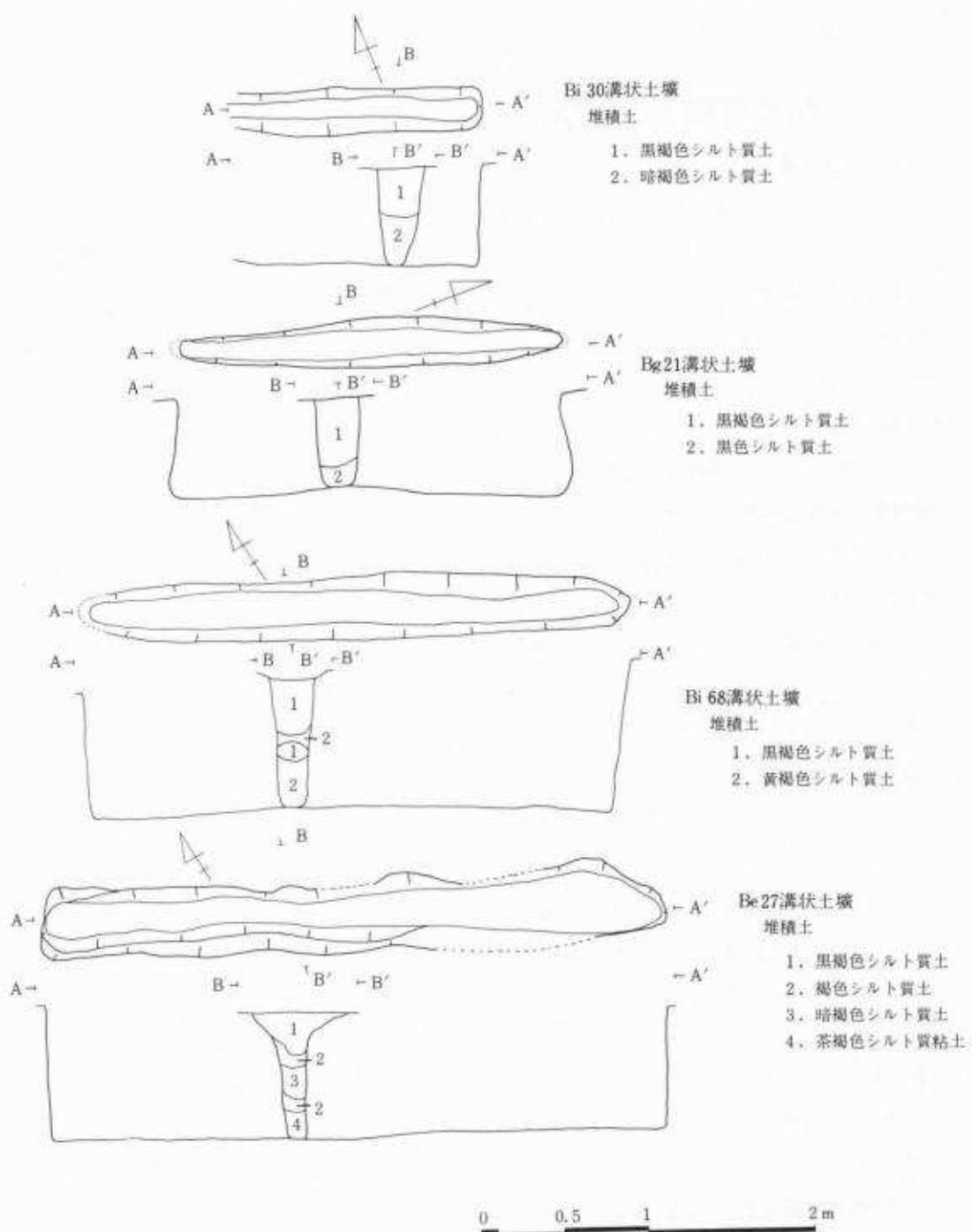
溝状土壌名	上縁 長軸×短軸 cm	壙底 長軸×短軸 cm	深さ cm	長軸方向	出土遺物
Bi30溝状土壌	(150)×27	(150)×11	60	N-69°-W	石鎚1
Bg21溝状土壌	230×30	240×17	55	N-20°-E	
Bi68溝状土壌	330×39	317×18	82	N-57°-W	
Be27溝状土壌	375×43	370×14	78	N-59°-W	

2. 溝（第3図）

南緩傾斜の地形で、北から南へ走る溝が多数ある。上流の北方グリッド名を溝名とした。これらの溝は自然にできたものであるが、中には人為的に排水用に掘られたと思われるものもある。溝の長さは種々あり、幅は40cm前後、深さ17cm前後の断面皿状の浅いものである。覆土は自然堆積土がほとんどであるが、人為埋土と考えられるものもあり、覆土に遺物が混入する。

Bc27溝：南西方向に走る溝で、Bf30グリッドから更に南西へ延びる。

Bb27溝：南方へ走っていた溝が、Bd21グリッド内で東方Be9グリッドへ走る溝に変わっている。



第4図 溝状土壤平面図・断面図

Bd21溝¹：本来はBb27溝の南方であったものが、Bd21グリッド内で切られている。この溝は南方のCc15グリッドまで延びる長いものであるが、浅いため途中部分的に切れている。Be24A・B建物、Bf21A・B建物、Bh27建物の柱掘り方により部分的に切られている。Ca21建物とも重複しているが前後関係は不明である。

Bd21溝²：当初はBb27溝がBd21グリッド内で二方向に分かれ、南東へ走るBd21溝²と南へ走る溝¹であったものである。この溝はBe15グリッドまでの短かいもので途中部分的に切れる。

Cc24溝：Cc24遺構の煙道に始まり、Ch27グリッドまで南走する溝で、南端に土師器長胴甕の口縁部（第22図84）を埋め込み、その中を水が流れるようにしてあり、人工の溝と考えられる。

Bf15溝：遺跡中央を蛇行しながら南のCg6グリッドまで走る最も長い溝である。Bf21A・B建物柱掘り方により溝の一部が切られている。覆土内出土遺物も非常に多い。

Bi53溝：Bi56溝が南西へ走っていた時の一部であったものがBi53グリッド内で切られてBj3住居煙道に始まる溝との接点までは人為的に埋め込まれ、その南東は黒褐色腐植土が堆積する。

Cb6グリッドでBf15溝に接続する。Bj50L形溝に切られる。

Bi56溝¹：北東から西南へ走る溝であったが、Bi53グリッド内で南東を埋め込み、Bj3住居北側を迂回して西方へ走る溝である。Bj6グリッドでBf15溝に接続する。出土遺物は多量。（32～39）

Bj50L形溝：ほぼ東西・南北方向にL字形に走る溝。Bi53溝、Bj3住居を切る。出土遺物なし。

Bi56溝²：非常に短かく南北に走る溝で、Ca56グリッドで終わる。溝西端は浅くなり消える。

第2表 溝一覧

溝名	方向	長さ m	上端幅 cm	底部幅 cm	深さ cm	堆積土	出土遺物（数字は破片数）
Bc27溝	北東～南西	11.0	70	30	18	黒褐色腐植土	土師器甕片少量
Bb27溝	北西～南東	19.4	65	48	17	黒褐色腐植土	
Bd21溝 ¹	北～南	27.5	56	50	6	黒褐色腐植土	
Bd21溝 ²	北西～南東	5.5	60	43	8	黒褐色腐植土	
Cc24溝	北～南	15.0	45	30	23	暗褐色シルト質粘土	土師器甕口縁部
Bf15溝	北～南	40.0	35	25	15	黒褐色腐植土	石器1 磨文6 朱塗環2 複合口縁1 脚台部1 内黒环6 土師器甕207 須恵器1
Bi53溝	北東～南西	14.0	45	30	23	黒褐色腐植土	石鐵1 土師器甕31
Bi56溝 ¹	東～西	14.2	50	32	25	黒褐色腐植土	石頭1 手握ね玉器1 非クロロ内黒环24 土師器甕98
Bj50L形溝	東西～南北	9.5	28	18	7	暗褐色シルト質粘土	
Bi56溝 ²	北～南	7.3	27	17	20	暗褐色シルト質粘土	土師器甕10
Bi59溝	北～南	19.5	41	32	10	暗褐色シルト質粘土	非クロロ内黒环1 土師器甕22 ロクロ内1 須恵器甕4
Cb59溝	北西～南東	15.3	38	29	30	黒褐色腐植土	土師器甕73
Cg62弧状溝	北東～南西	6.0	29	20	20	黒褐色腐植土	土師器甕31 ロクロ内2

— 西大畠遺跡 —

Bi59溝：南北に走る長めの溝で、Ce59グリッドで浅くなり消える。Cb59溝を切る。

Cb59溝：北西から南東のCe71グリッドまで走り浅くなつて消える。Bi59溝に切られる。Ce65建物と重複するが、新旧関係は不明である。

Cg62弧状溝：溝底部の高さは全て同じで、溝両端部上縁の高さが低くなる為に溝が浅くなり消えたもので、円形の周溝であったと思われる。南東部は削平された可能性が強い。

3. 壓穴住居跡

Cf 53住居跡（第5図）

（遺構の確認）調査区南東部の南緩斜面のCf53グリッド周辺で表土を除去した結果、地山の黄褐色シルト質土に達し、方形の黒味がかった暗褐色シルト質粘土の落ち込みを確認した。

（重複・増改築）認められない。

（平面形・方向）南北6.2m、東西6.0mで多少歪んでいるが、正方形に近い平面形である。床面積は約35m²である。方向は南一北。

（堆積土）住居内の堆積層は薄く、一層である。黒味がかった暗褐色シルト質粘土層で、黒褐色土、焼土、炭化物等が混入し、住居内全域に分布する。

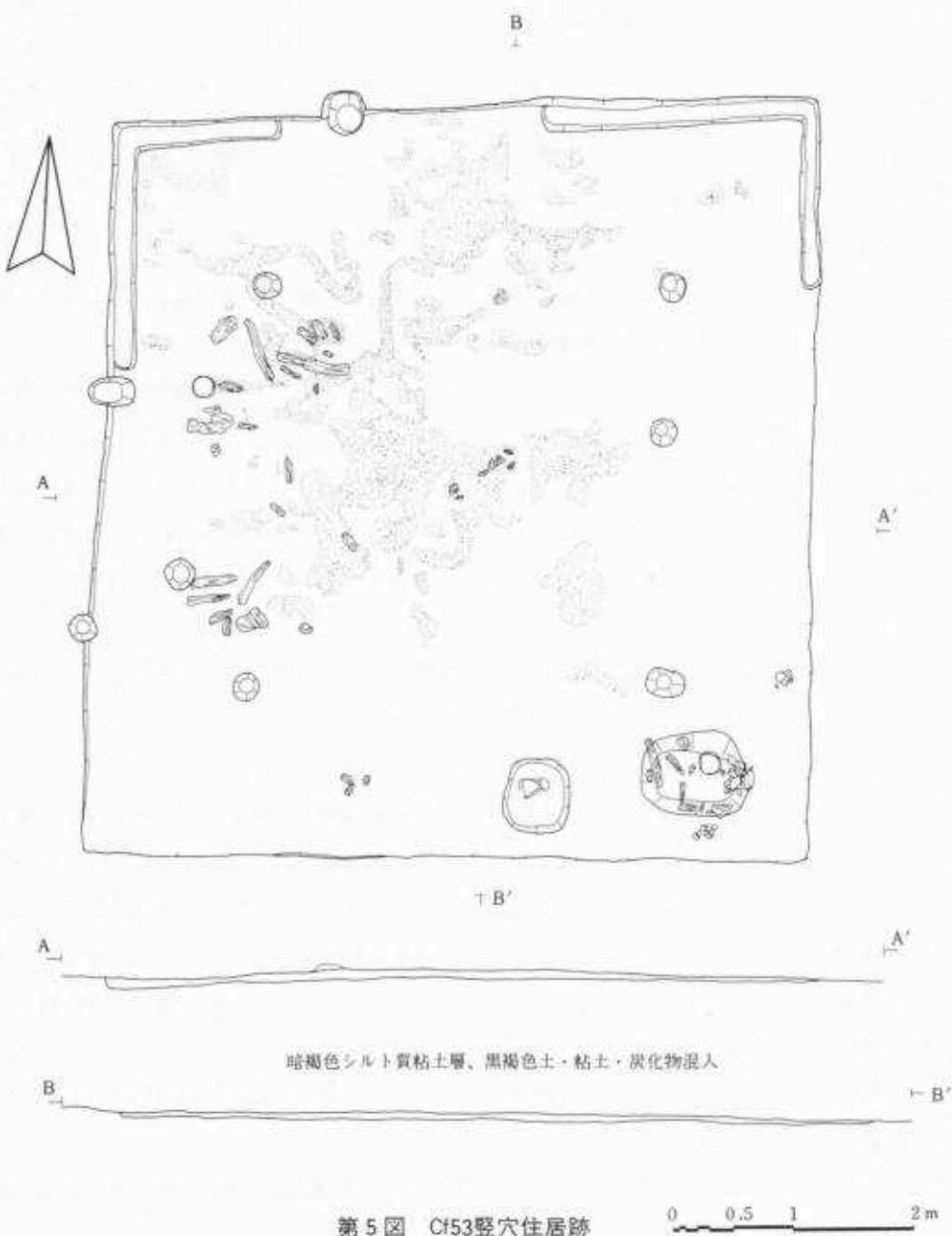
（床面）床面は多少の凸凹はあるがほぼ平坦で、あまり固い面をなしていない。床面全域に炭化材や焼土が分布しており、焼失家屋の跡と考えられる。壁は床面から垂直気味に立ち上がる。北東及び北西の隅に周溝がめぐる。炉は検出されなかった。貯蔵穴状ピットや柱穴と考えられるピットが検出された。床面下は地山の黄褐色シルト質土で、掘り方埋土は検出されなかった。

（柱穴）床面で確認されたピットは9個、竪穴の壁を切ってあるものが3個の合計11個のピットがある。この中で、柱痕と掘り方が識別できたものはなかった。竪穴の対角線上にのる形の方形に配置されたピットがP₁～P₆の4個であり、主柱穴と考えられる。ピットの直径は22cm位、深さは53cm位でほぼ垂直である。西壁中央付近の壁を切って2個のピットP₁・P₂があり、直径22cm、深さ28cm程で垂直であり、出入口の柱と考えられる。

（貯蔵穴）住居の南東隅に隅丸長方形のP₁₀・P₁₁がある。大きさはP₁₀が62×54cm、深さ28cm、P₁₁は90×68cm、深さ19cmである。P₁₀の内部には土師器球胴形の甕（第15図12）、砥石（第16図17）が入っており、P₁₁には土師器壺（第15図4・5）、土師器壺（第15図8）、土師器甕（第15図10・11）、土師器甕形無底式甕（第16図16）が入っていた。ピットの堆積土は暗褐色シルト質土で、炭化材や焼土が多量に入っていた。

（その他の施設）北東及び北西隅周辺で壁に沿って幅18cm、深さ7cm程の周溝がめぐる。

（年代決定資料）床面及び貯蔵穴状ピットから多量の遺物が出土している。（第15・16図1～18）これ等の遺物はその上に炭化材が覆つてあったもので、一括土器として住居の年代決定上重要な資料である。



第5図 Cf53竪穴住居跡

第3表 Cf 53 住居跡 ピット一覧表

Pit No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
深さ(cm)	26	30	52	56	53	51	29	39	20	28	19
土色	暗褐色	暗褐色									
土性	シルト質土	シルト質土									
備考						炭化物 多量混入				炭化材上器 貯蔵穴	炭化材土器 貯蔵穴

遺物（第15・16図1～18、第27表）

住居に伴なって出土した遺物は土師器の丸底壺7個体、壺1個体、甕7個体、瓶1個体、磁石1点、管玉1である。土器は全て破片であり、火熱を受けて器面がボロボロになっている。

1～7：1・2は丸底小形の壺で口縁が直立する。口縁は両面横ナデ、体部外面にハケメ痕が残る。3・4は内外面朱塗りの丸底壺で、4は口縁がわずかにくびれて外反する。4の口縁外面に横ナデ、体部に横位のナデ跡が見られる。5・6は比較的深い丸底壺である。5は体部上半から口縁部にかけての内面にハケメ痕が見られる。6は両面共に横位のナデによる調整がされている。7は丸底壺の底部破片のみで、両面共に朱塗りの大形のものである。内面は箆ミガキ、外面は箆ケズリされている。

8：小形の壺で、体部下半と底部を欠いている。内面は口縁部が箆ミガキ後朱塗りされ、体部は巻き上げ痕が残る。外面は箆ミガキ後朱塗りされている。

9～16：9は小形の長胴形甕で体部底部を欠失している。体部上端から頸部でややすぼまり、短い口縁が外反する。段或いは陵はつかない。口縁部外面に横ナデ痕が残る。16は長胴形甕の底部を欠いた形の無底式の瓶で口縁部を欠失している。器面は両面共に部分的に箆ミガキの跡が残る。10～15はやや大形の球胴甕の破片で、短い口縁が外反する。10は口縁部両面横ナデ、体部は内面ハケメ、外面が箆ミガキされている。11は体部内面ヘラナデ、外面は口縁部横ナデ、体部箆ミガキされる。12は器面風化磨滅著しく不明である。13は体部内面に箆ナデ痕が見られる。貯蔵穴状ピットP₁₀出土が12、同じくP₁₁出土が10・11・16である。

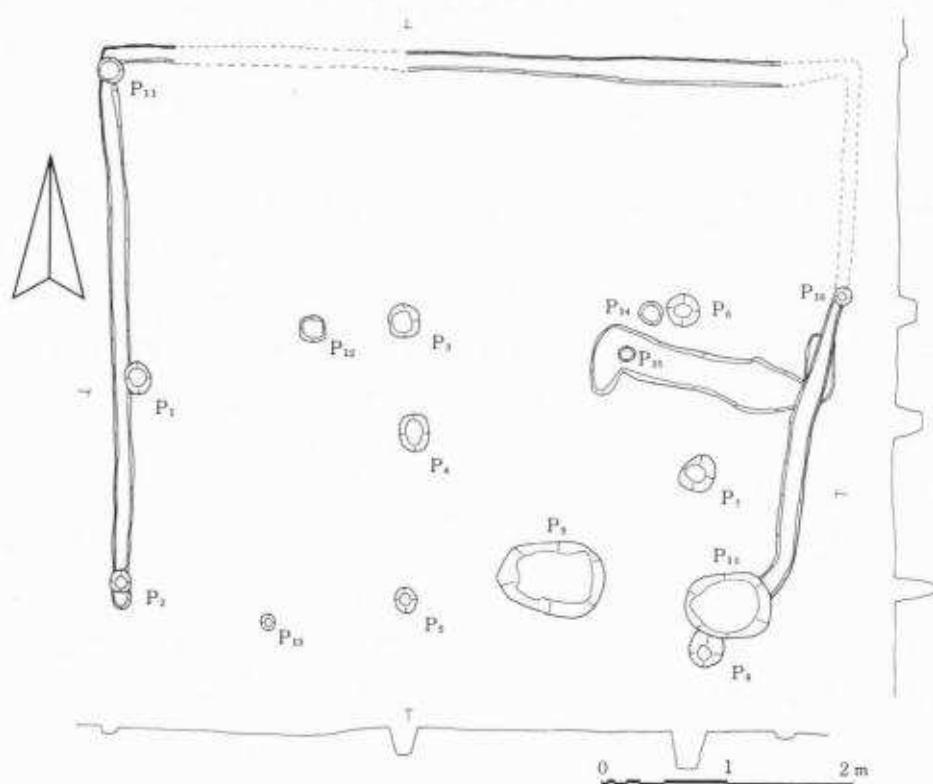
17：扁平楕円形の自然石の上下二面を砥磨面として使用した痕跡が残る。石材は細粒石質凝灰岩で、貯蔵穴状ピットP₁₁出土である。

18：蛇文岩製の小形の管玉で、長さ5mm、太さ(径)4.5mm、貫通孔径1.8mm、重量0.44gで、床面からの出土である。

Cb50住居跡（第6図）

(遺構の確認) 調査区中央の南緩斜面Cbグリッド周辺の表土除去をすると地山の黄褐色シルト質土層に達し、方形周溝状の掘り込みとピットにより確認される。

(重複・増改築) 不明



第6図 Cb50堅穴住居跡

第4表 Cb50 堅 穴 住 居 跡 ピット一覧

PitNo.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
深さ(cm)	24	29	16	22	33	27	29	24
土色	暗褐色							
土性	粘土質シルト							
備考								

PitNo.	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆
深さ(cm)	24	28	16	48	11	12	37	12
土色	黒褐色	黒褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色	暗褐色
土性	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト
備考	土師器壺細片 3片			炭化物含む				

— 西大畠遺跡 —

(平面形・方向) 東側と南側が削平されているため、正確な平面形は不明である。しかし北側及び西側に残存する溝とピットの配列から、1辺約6mの正方形に近い形と推定される。方向はほぼ南一北で、東西長は6m程、南北長は現存部分で4.5mある。現存する床面積は24.5m² (推定32m²) である。

(堆積土) 住居跡の南側は削平されて周溝が消えており、北側も周溝が残るだけで住居内外の高さが同じになっている。そのため住居内堆積土は不明であるが、周溝内は暗褐色シルト質土が堆積している。

(床面) 方形をした周溝内外の高さは同一になっており、床面は削平され、遺構検出面が床面より下がっていると思われる。炉は確認されない。方形周溝は部分的に残っている。保存のよい所で幅15cm、深さ6cm程度である。他の住居跡と比較すると明らかに住居に伴う周溝と思われる。ピットは16個検出された。

(柱穴) 16個のピットの中で柱痕と掘り方の識別できるものはなかったが、配置関係に規則性を見出せるのはP₃～P₈であり、この3対6個のピットが主柱穴であったろうと推定される。西側溝を切ってP₁とP₂の2個のピットがあり、他の住居跡の例から出入口の柱穴と思われる。

(貯蔵穴) 住居の南東部に橢円形状のP₉・P₁₀がある。大きさはP₉が85×60cm、深さ25cm、P₁₀が68×52cm、深さ30cmで、土師器甕体部の破片が数片出土している。埋土は周溝と同じ暗褐色シルト質土である。

(年代決定資料) 出土した遺物は貯蔵穴状ピットP₉からの土師器甕の細片だけで、遺構年代を決める上で適当な資料は少ない。

遺 物

貯蔵穴状ピットP₁₀から頸部に段のつかない土師器球甕の破片が少量出土した。

Ca21住居跡 (第7図)

(遺構の確認) 発掘区西側中央Ca21グリッド周辺で長方形の黒褐色土の落ち込みを発見した。遺構確認は表土下の黄褐色シルト質土層上面である。

(重複・増改築) 床面北部がCa21建物跡の柱掘り方P₂により切られており、更に南西隅床面が後世の掘り込みによって切られている。

(平面形・方向) 平面形は東西に長軸をもつ長方形で、長軸長は3.8m、短軸長は2.85mである。床面積は10.5m²である。

(堆積土) 積穴内堆積土は基本的に1層である。黒褐色シルト質粘土層で、黄褐色シルト小ブロックが混入し、又炭化物・焼土・土師器細片も少量混入する。住居内全域に分布する。

(床面) 比較的平坦な床面で、固くしまっている。壁高は最も保存のよい西壁で5cm程度であり、南壁・東壁は共に1cm位しかない。床面東側の北寄りに焼けた部分があり、炉と思われる。確

認されたピットは13個である。豊穴掘り方埋土は見られず、床面下は地山の黄褐色シルト質土層である。

(柱穴) 床面確認のピットは13個である。この中でP₉はCa21建物の柱掘り方であり、P₁₃は後世の掘り込みである。P₆・P₁₂は非常に浅い凹み程度のものと思われる。深さや配列関係に規則性の認められるのはP₁～P₃であり、この3個が主柱穴をなすものと思われる。南東の主柱穴はP₁₃により破壊されたものであろう。西壁際のP₄・P₅の2個のピットは出入口の柱穴かもしれない。

(炉) 床面東側に45×40cmの範囲に焼土が広がる。掘り込みや石組は見られないが、土師器丸底壺が焼土中から出土しており、地床炉と考えられる。

(貯蔵穴) 床面北側に楕円形状のP₁₀がある。大きさは40×35cm、深さは22cmで土師器の球胴形甕約1/3個体が入っており、貯蔵穴状ピットと考えられる。

(その他の施設) 検出されなかった。

(年代決定資料) 出土遺物は非常に少ない。この中で炉跡と思われる焼土中出土の土師器丸底壺(第16図19)と貯蔵穴状ピットP₁₀出土の土師器球胴甕(第16図21)が住居の年代を決定する上で最も有効な資料と思われる。

第5表 Ca21 豊穴住居跡 ピット一覧

PitNo.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
深さ(cm)	40-	24	58	12	27	8	23	35
土色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	暗褐色	黒褐色	黒褐色
土性	シルト質土							
備考				土師器甕片				ロクロ16 土師器甕破片

PitNo.	P ₉	P ₁₃	P ₁₀	P ₆	P ₁₂
深さ(cm)	38	33	45	5	75
土色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	暗褐色	塊乱土
土性	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質粘土
備考	Ca21建物柱掘り方	土師器球胴甕	柱掘り方		後世の掘り込み

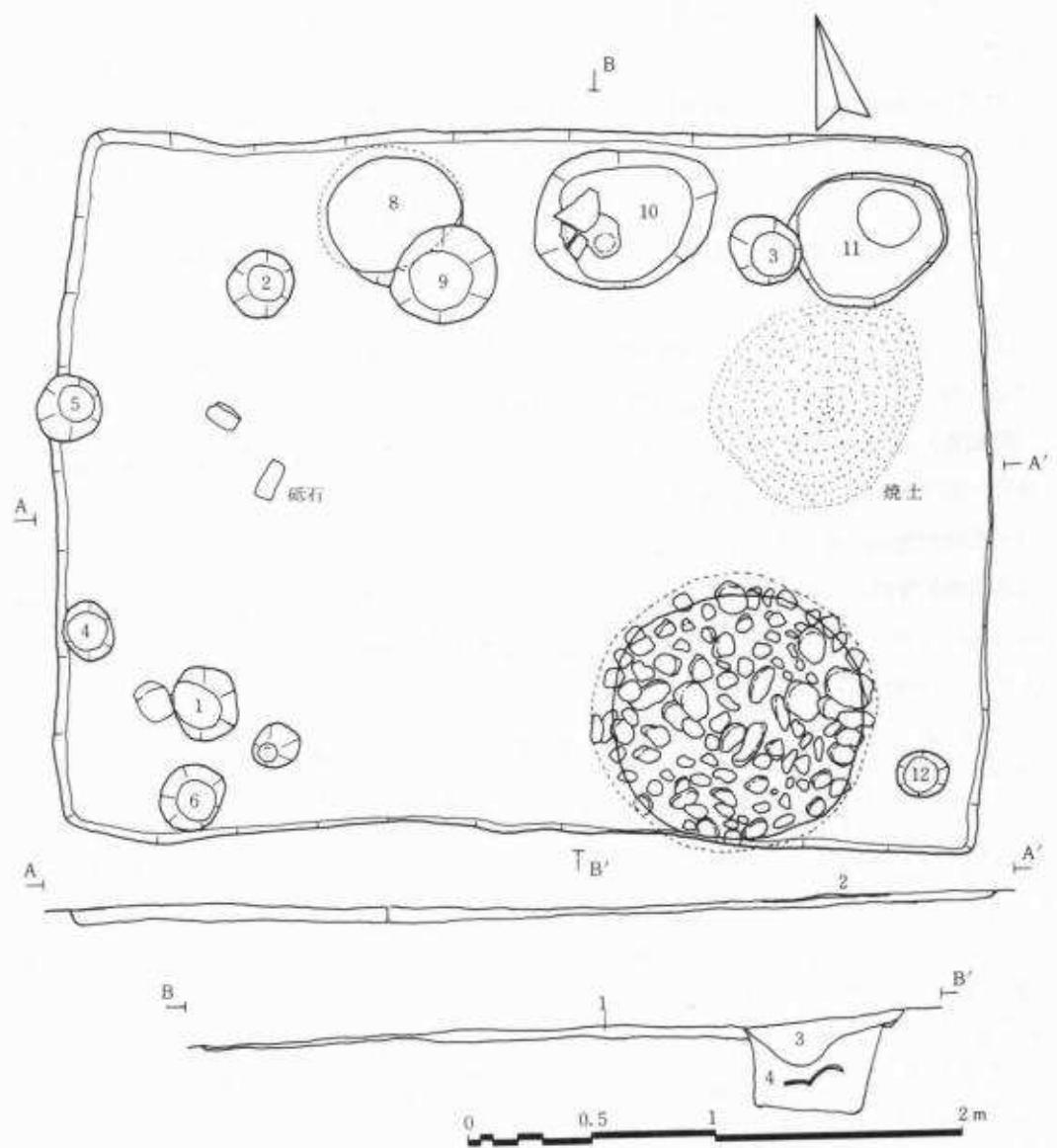
遺物(第16図19～21、第27表)

19：炉と考えられる焼土中とその周辺床面より破片状態で出土したものである。丸底・丸味を帯びた体部で口縁部が「く」の字状にくびれて外反する壺である。

20：床面南西部P₁西隣の床面出土の砥石で、板状の直方体の自然石上下二面を砥磨面としている。

21：貯蔵穴状ピットP₁₀から約1/3個体分が出土したもののうち、口縁部を欠いている。土師器球胴甕で、小さな底部がいく分か突出している。同一個体であるが接合不能な頸部の細片があり段は形成されていない。

— 西大畠遺跡 —



1. 黒褐色土と黄色シルトの混土層（含炭化物・焼土・土師細片）
2. 焼土層（含炭化物）
3. 黒褐色土層（黄色シルトブロック混り、含炭化物・土師細片）
4. 黒褐色土層（黄色シルトブロック少量混る。含炭化物・土師細片）

第7図 Ca21竪穴跡

Bf 30住居跡（第8図）

(遺構の確認) 調査区北西部の比較的平坦なBf30グリッド周辺で、長方形をした黒褐色土の落ち込みを確認した。遺構確認面は表土下の地山黄褐色シルト質土層上面である。

(重複・増改築) この周辺には多数のピットが分布する地域であり、竪穴の壁高も非常に低い事もあって、これ等多数のピットと重複し合っているが、前後関係はほとんど不明である。

(平面形・方向) 平面形は長方形を呈し、長軸は北東一南西方向で、長さは約2.9mである。短軸長は2.45mで、床面積は約6.44m²である。

(堆積土) 竪穴内堆積土は基本的には1層である。黒褐色腐植土層で、黄色シルト質土の小ブロックや、炭化物、土師細片が少量混入している。竪穴内全域に分布し、擾乱を受けている。

(床面) 少少の凹凸はあるが平坦な床面である。床面や壁を切って多数のピットがあり、またその他の擾乱も受けて床面の保存状態はよくない。北壁は多数のピットにより壊され、明確なものではない。壁の高さは最も保存のよい南壁で6cm程である。壁沿いの施設は検出されなかった。22個のピットが確認されたが、炉は発見されなかった。床面の下が地山の黄褐色シルト質土層である。

(柱穴) 発見されたピットは22個であるが、柱痕と掘り方の区別のつくものはない。P₁は2個のピットの切り合いであるが、新旧の区別はできなかった。埋土の中にロクロ使用の壊破片が入っていたが、これは竪穴以後の新しいピットに伴なうものと思われる。P₁～P₄は配列関係にやや規則性が認められ、深さも22cm前後で主柱穴と思われる。P₅・P₆は東壁際に並び、深さも約33cm位で他の住居跡にも見られ、出入口の柱であったと考えられる。以上P₁～P₆の6個のピットがこの竪穴に伴なうピットと推定される。

(炉) 検出されなかった。

(貯藏穴) 床面の北壁際にやや楕円形をしたP₇がある。大きさは40×35cmで、床面からの深さが22cmである。遺物は出土していないが、位置の形態等から貯藏穴状ピットと思われる。

(その他の施設) 検出されなかった。

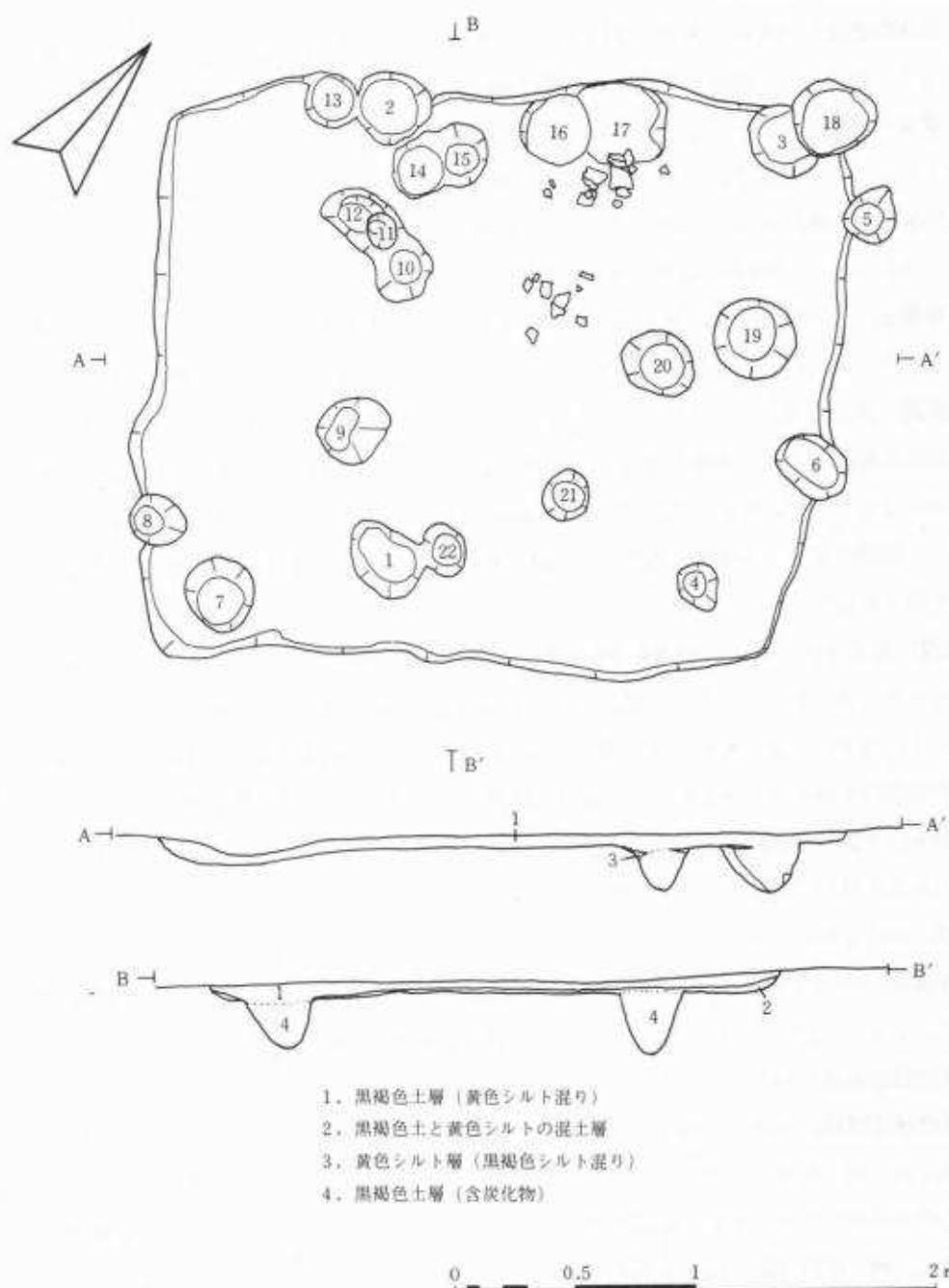
(年代決定資料) 遺物で実測図に書けたものは4点で、环（第21図59）土師器甕（同60～62）と少ない。他に細片として非ロクロ内黒环・高台环等の破片も出土しているがこの竪穴に伴なうものか不明である。床面・貯藏穴状ピット出土の遺物はなく、住居の年代決定が困難である。

遺 物（第21図59～62、第27表）

59：竪穴内北東部堆積土中出土のロクロ成形环である。体部下端と回転糸切痕を有する底部からなる破片がある。浅黄橙色の硬質な环で、胎土は緻密である。

60：竪穴内北東部表土下の土師器小形甕で、頸部と体部境に段を形成する。

61：竪穴内北東部堆積土中出土の土師器甕の底部が突出している。



第8図 Bf30整穴跡

62：竪穴内北東部表土下出土の土師器壺の体部下半から底部の破片である。底部は突出し、下面に木葉痕が見られる。

その他：堆積土やピット中から出土した土器細片は非クロ内黒環片、クロ内黒環片、クロ環片、土師器壺片、須恵器壺片、高台環片等種々である。

第6表 Bf 30 住居跡 ピット一覧

PitNo.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁
深さ(cm)	22	22	24	21	33	34	22	18	11	21	21
備考	接着土師器 壺クロ片					土師器壺片					

PitNo.	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	P ₂₀	P ₂₁	P ₂₂
深さ(cm)	16	21	25	22	34	22	65	17	23	31	34
備考					土師器壺 クロ片	貯藏穴	土師器壺 クロ片	土師器壺 クロ片 高台片			土師器壺

Bj 3 住居跡（第9図）

（遺構の確認）調査区中央やや北よりのBj 3グリッド周辺の表土を除去し、地山の黄褐色シルト質土層に達したところ方形をした黒褐色土の落ち込みを確認した。

（重複・増改築）北東より南西へ走る溝を切って住居を構築しており、その住居を新しい溝が切っている。

（平面形・方向）平面形は隅丸方形で、方向（カマドの方向を基準）は南北である。大きさは5.0×4.6mで、床面積は21.8m²である。

（堆積土）住居内の堆積土は基本的には3層である。

第1層：黄褐色シルト質粘土層で、黒褐色土が混じる。カマド関係を除き竪穴全域に分布する初期的な堆積層である。

第2層：黒褐色土層で、褐色シルトブロックが渴じる。煙道北部から煙出し部の上部堆積層である。

第3層：混土層で、黒褐色土、褐色土、焼土、炭化物等の混じり合った層で、煙道から煙出しまで続く。煙道部天井の崩落土その他の混合層と考えられる。

（床面）東壁北半の床面及び壁が溝により切られている。他は平坦である。あまり固い面をなしていない。壁は床面から急角度で立ち上がる。保存のよい西壁、北壁では14~15cmの壁高である。北壁中央にはカマドが、その東側に貯藏穴状ピットがある。この地区は緩傾斜で南へ下る地形をしており、北東から南西方向へ走る溝の北東部を埋め込んで床面としている。南西部の溝は煙道南半から南流する溝と接続し、埋土は黒褐色腐植土である。住居内排水用の溝と考えられる。その他の床面は地山の黄褐色シルト質土層である。13個のピットがある。

（柱穴）床面で確認できたピットは9個である。この中でP₁~P₄の4個のピットは竪穴の各辺

— 西大畠遺跡 —

に平行な方形に配置されており、主柱穴と考えられる。この柱穴ピットは直径16~20cmで、深さは34~45cmではほぼ垂直である。柱痕だけで、掘り方ではなく、打ち込み式の柱穴と考えられる。

(カマド) カマドは北壁中央を掘り込んでつくられている。カマドの袖の一部が残存している。この袖は竪穴構築の際に予め掘り残して袖にしたもので地山の黄褐色シルト質土からなる。右袖は長さ22cm、幅25cm、高さ12cm、左袖は長さ35cm、幅14cm、高さ15cmである。煙道南半より燃焼部を通じて南流する溝があり、溝の上を2個体の土師器甕の破片で覆って夫々床面としている。燃焼部は橢円形で浅い皿状を呈し、側壁が焼けて赤変し、甕がつぶれた形で残っていた。煙道は水平に北へ1m程延び、深く掘り下げられた煙出しへと続く。

(貯藏穴) カマドの東側に橢円形の皿状をしたピットがある。大きさは100×60cmで、深さ27cmである。内部には土師器甕破片が少量あり、暗褐色土が詰まっていた。

(年代決定資料) 煙道から燃焼部にかけて溝の上を覆っていた土師器甕2個体(23・24)、燃焼部出土の長胴甕形無底式甕1個体(25)、床面出土の内黒丸底坏(22)がある。

遺 物 (第17図22~25、第27表)

22: 非口クロ内黒丸底坏で、南西部床面出土である。底部内面は放射状に篦ミガキ後黒色処理されている。底部外面は風化により不明。

23~24: 土師器の非口クロ長胴形甕で、体部中央がやや膨らみ、頸部に段をもち、口縁部が外反する。煙道と燃焼部の溝を覆っていたもので、火熱を受けて赤変している。

25: 長胴甕形の無底式の甕で、頸部に段を有する。燃焼部出土。

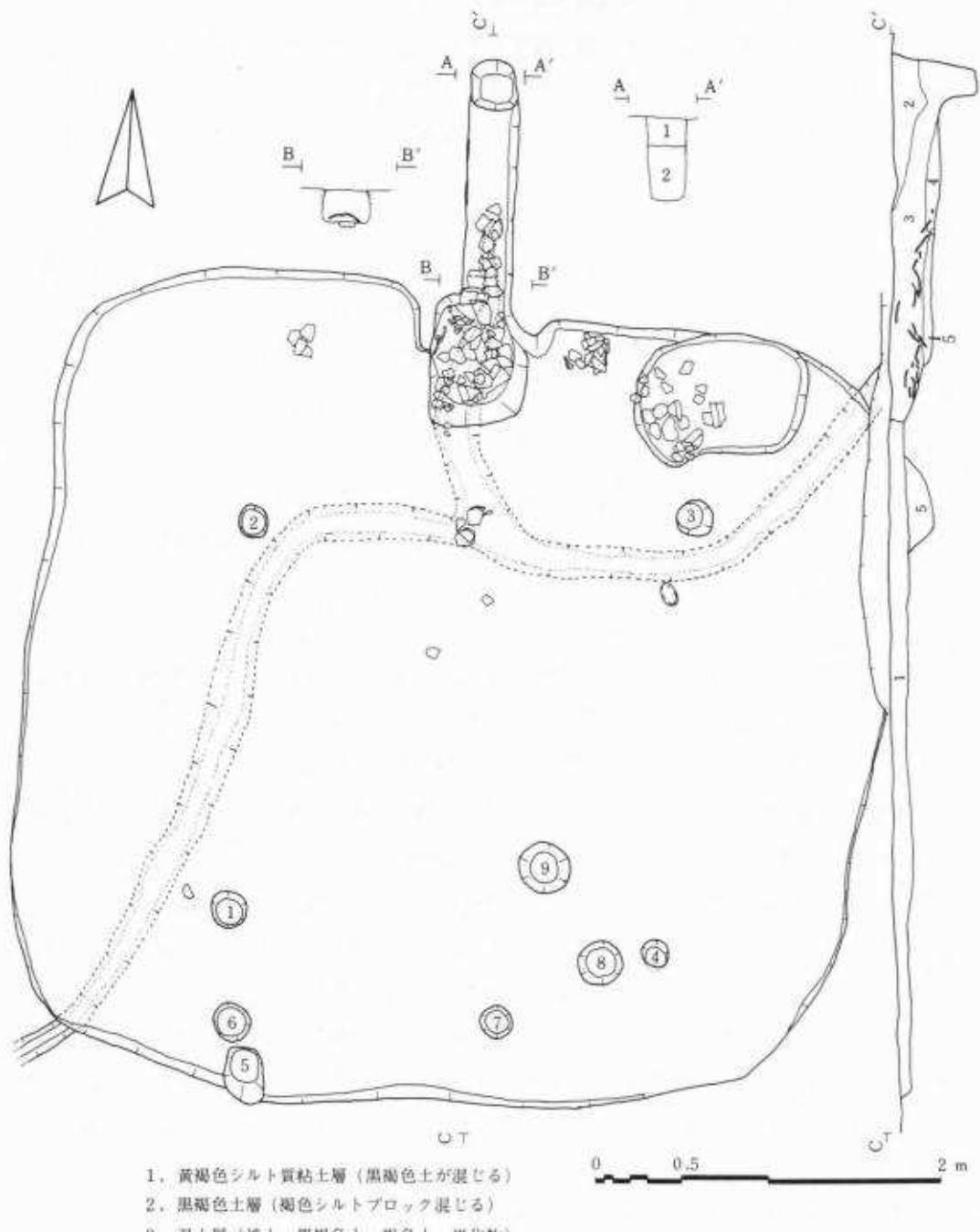
第7表 Bj 3 住居跡 ピット一覧

Pit No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
深さ(cm)	38	34	43	45	10	19	12	10	13
土色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	暗褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色
土性	シルト質土								
備考					炭化物焼土	土師器甕片			

Bj56溝1 (Bj 3住居跡北側溝、第3図)

北東から南西方向へ走る溝の上にBj 3住居を構築し、住居北東部溝で人為的に埋めて北側を西方で迂回させて掘り込んだ溝と考えられる。溝の幅は約50cm、深さ25cmである。この溝に廃棄されたものと推定される多量の完形に近い土師器が出土した。(第18図32~39)

32~35: ロクロを使用していない坏である。32は平底風の丸底内黒坏で、体部から口縁部へと内縁気味にたち上がる。内面篦ミガキ後黒色化し、外面底部は篦ケズリ後篦ミガキがされている。33・34は平底坏で、体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。両面共に入念な篦ミガキ後黒色化されている。35は丸底の底部から内縁する体部・口縁部へと続くもので、小形の皿状



第9図 Bj03住居跡

— 西大烟遺跡 —

である。内面竈ミガキ、外面底部は竈ケズリ後竈ミガキされる。

36～37：体部が球形で、体部と頸部境に段を有する土師器の甕がある。36は非常に小形で、口縁部横ナデ、体部内面ハケメ、外面はハケメ後部分的に竈ミガキされる。37は大形のもので、口縁部、底部共に欠失している。器面風化著しく調整不明である。体部内面に粘土接合痕が見られる。

38：土師器長胴形の甕である。底部は突出し、体部が上方に向かって開き、頸部境で段をなし外反する口縁部へと続く。内面、外面共に風化磨滅が著しい。口縁部横ナデ、体部は外面ナデ内面竈ミガキ痕が部分的に残る。両面共に巻き上げ接合痕が見られる。

39：土師器無底式の瓶で、長胴形甕の底部を欠いた形を呈する。口縁部欠失。内面横位のハケメ、外面縦位のハケメ痕が部分的に残るが、器面の風化磨滅が著しい。

Cc24住居跡（第10図）

（遺構の確認）調査区西側中央付近にて、Ca21住居跡の南西隣のCc24グリッド周辺にて方形をした黒褐色土の落ち込みを確認した。遺構検出面は表土下の黄褐色シルト質土層上面である。

（重複・増改築）住居の西側を南流する溝によって切られている。又床面が数個のピットにより切られている。

（平面形・方向）住居跡の西側及び南側がかなり削平されている。このため全体の形は明確でないが、残存している部分から隅丸方形と推定される。方向（カマドの方向を基準）はほぼ南北で、大きさは3.50×2.80mである。床面積は9.18m²位と推定される。

（堆積層）住居内堆積土は非常に薄く1層である。黒色に近い暗褐色シルト質粘土で広く分布する。住居廃絶後に掘られたピット類の埋土は黑色腐植土である。

（床面）床面の南西部分は削平されてほとんど残っていない。保存のよい北側は多少の凹凸はあるが平坦てしまっている。壁は床面から急角度でたち上がる。比較的保存状態のよい北壁や東壁では12～13cmの壁高であるが、南壁・西壁共にはほとんど残存しない。北壁の西寄りにカマドが構築されたものと思われ、その東側に貯蔵穴状ピットが検出された。床面はシルトと黑色腐植土の混土層が0.5cm位の厚さで部分的に残存しており、その下は地山の黄褐色シルト質土層である。掘り方理土はない。

（柱穴）住居内には13個のピットがある。この内P₃・P₅・P₁₁は非常に浅く単なる凹み程度のものと考えられる。P₆・P₇・P₁₀・P₁₂・P₁₃は竪穴堆積土上から確認されたもので、住居廃絶後のピットと考えられる。P₈は貯蔵穴状ピットであり、P₁₁はカマドに付属するものである。P₁とP₄は配置の上で柱穴と考えられるが、これらと組み合うピットがないので柱穴に関しては不明な点が多い。

（カマド）カマドと考えられるのは北壁西寄り部分であるが、燃焼部の痕跡は全くなく、P₈に

焼土が入っていた。壁外北方向に煙道部の底が長さ130cm、幅27cmで残っており、その先端に煙出しのピットP₁₁がある。P₁₁の深さは7cm程で底部が火熱を受けて3cm程の厚さで焼けており、その下は煙出し部の掘り方埋土がある。

(貯藏穴) 北壁中央寄りに円形のP₈がある。大きさは直径85cm位で深さ35cmである。内部には焼土と土師器壺の細片1点が入っていた。

(年代決定資料) 遺物は床面やピット内からかなり出土している。住居廃絶後のピットも多数あり、混入等も考えられる。P₁₀(第19図40)、P₉(同43)、P₁₁(同45)出土の遺物が住居の使用された年代を考える上で有効な資料と考えられる。

遺 物 (第19図40~49、第27表)

40・41：40は新しいピットP₁₀の埋土出土で、非ロクロ内黒平底の壺。内外両面共に範ミガキされている破片がある。41は床面出土の底部回転糸切の壺細片で、胎土は緻密であるが、赤橙色の軟質な焼成で、混入と考えられる。

42：床面出土土師器の球胴形壺の体部下半から底部にかけての破片である。体部が大きく膨らみ、底部がわずかに突出している。

43~49：土師器で頸部に段を有する長胴形の壺である。43・44は小形のもので、P₉・P₁₀の出土で、43底部には木葉痕が残る。45は煙出しのP₁₁、46はP₉出土で胴張りのする大形のもので、口縁部は大きく外反する。47~49は床面出土の底部破片である。

第8表 Cc24 住居跡 ピット一覧

PitNo.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
深さ (cm)	35	27	7	14	5	25	15	25	8	44	7	1	7
土色	黒褐色	暗褐色	暗褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色						
土性	シルト質土	シルト質土	シルト質土	シルト質土									
備考								貯藏穴 上部留置	煙出し 土師器壺	内黒壺	上部留置		

Cc24造構 (第10図)

(造構の確認) Cc24住居跡の西側に隣接して、同じCc24グリッドに黒褐色土の落ち込みを確認した。確認面は表土下の黄褐色シルト質土層上面である。

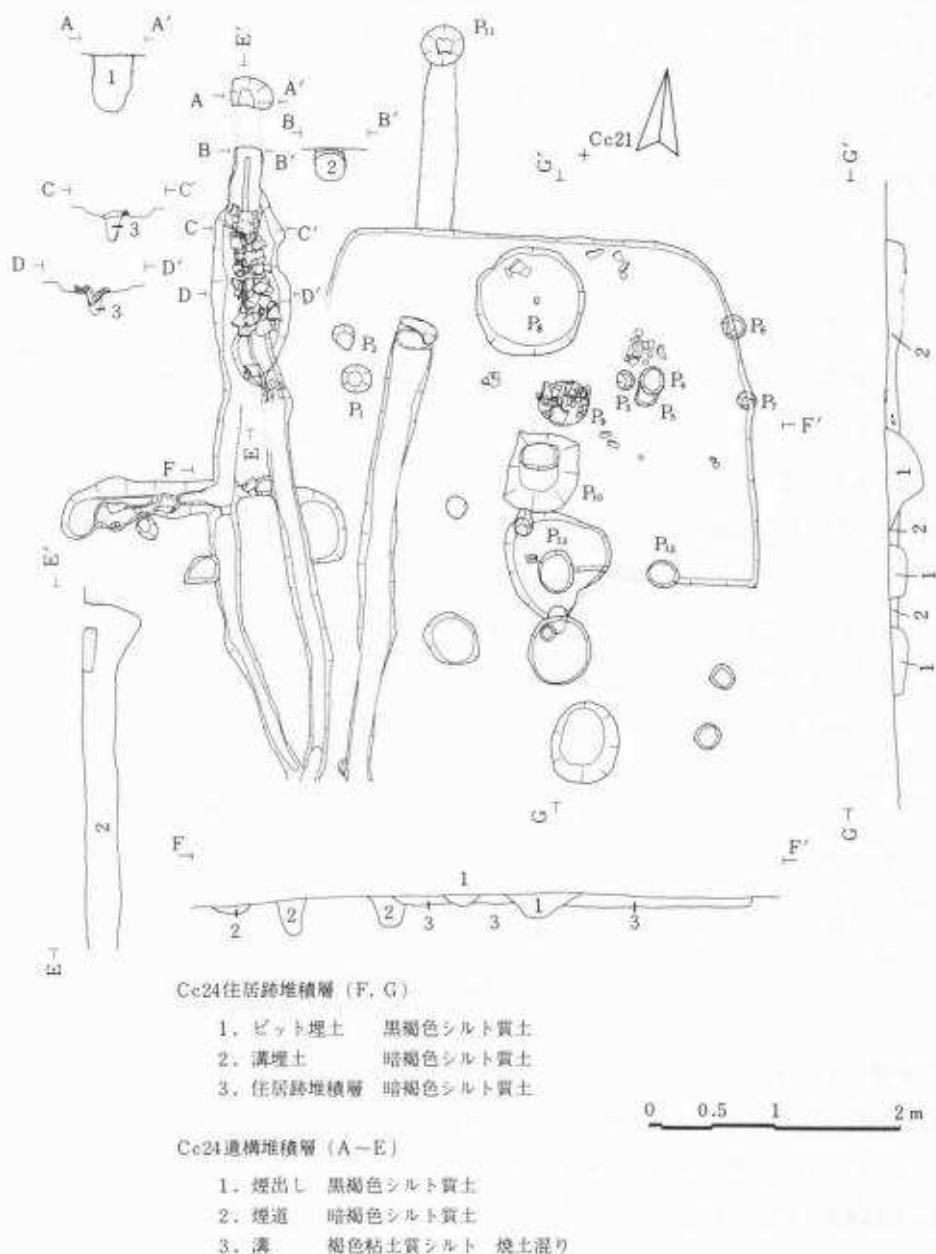
(重複・増改築) 不明である。

(平面形・方向) 南北方向の煙道と煙出しを残して他は失なわれている。竪穴住居のカマドに伴なう煙道と煙出しと考えられるが、その他は全て不明である。

(堆積土) 不明

(床面) 不明

(柱穴) 不明



第10図 Cc24遺構Cc24住居跡

(カマド) 南北に水平に延びる煙道と北端の煙出しだけが残る。煙道の南半は掘り込みによるものと思われ、底に溝を掘り、その上を土師器甕の破片で覆って煙道の底部としている。溝には焼土が堆積している。煙道の北半は地山の黄褐色シルト質土層をくり抜いて煙出しに続く。煙出しあは一段下がって深いピットとなり、焼土が堆積している。煙道・煙出し共に火熱を受けた痕跡が観察される。尚この煙道底部の溝はゆるく傾斜して南へ延びていく。煙道・住居内の排水を意図しての構築と考えられ、Bj 3住居跡とよく似ている。

(貯藏穴) 不明

(年代決定資料) 遺物がまとまって出土したのは煙道部からである。(第19・20・21図50~58) このうち51の回転糸切环細片は混入と考えられる。その他は人為的に溝の上部覆いに使用された土師器で、住居の使用された年代を考える上で最も有効な資料と考えられる。

遺 物 (第19・20・21図50~58, 第27表)

50・51: 50は煙道出土の非口クロ内黒丸底環の底部だけの破片である。器面は全て窓ミガキされている。51は煙道南寄りの出土糸切り底環底部 $\frac{1}{4}$ の破片で、胎土は緻密で橙色の軟質な焼成である。これは細片1片だけの出土で混入と考えられる。

52~58: 体部頸部境有段の土師器長胴甕で、煙道溝の覆いに使用されたものである。52は煙道中央付近、53は煙道の北部出土で、底部より口縁部に向かって開いていく深鉢様の小形の甕である。54は煙道北部、55は中央付近、56~58は南部付近出土で胴部中央が膨らみ、頸部がややすぼまつて段を形成する長楕円形状の大形の甕である。これらの甕は縦割りにした破片を溝の上に横位に据置かれていたものである。

Bj62住居跡 (第11図)

(遺構の確認) 調査区北東部Bj65グリッド周辺で表土を除去、黄褐色シルト質土の地山に達したところ三角形をした黒褐色土の落ち込みを確認した。

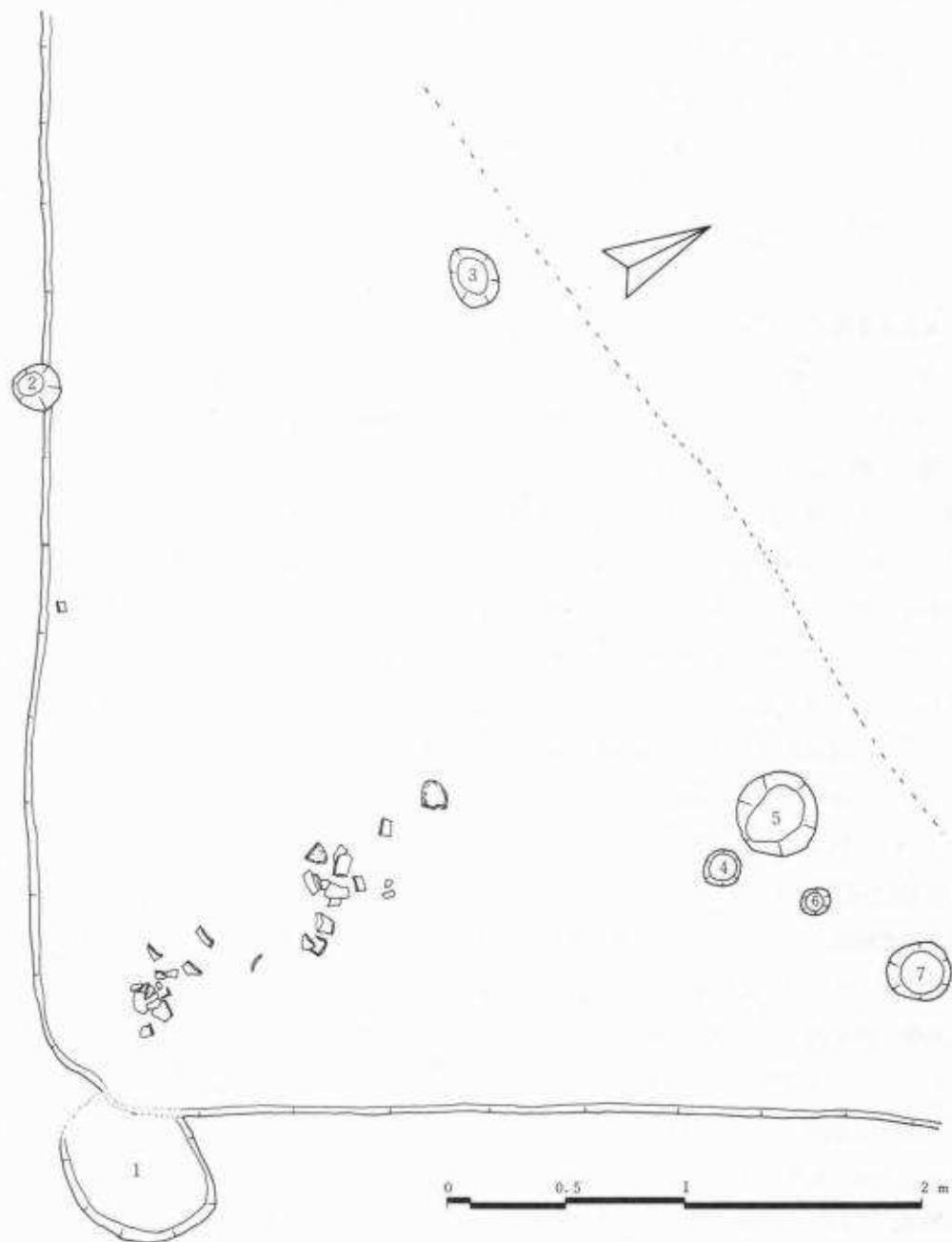
(重複・増改築) Bj68溝状土壤の北端を切って構築されている。現在の民家により北部が破壊されており、残存部もかなり攪乱を受けている。

(平面形・方向) 北部が破壊されて、南部が直角三角形状に4.5×3.8mの長さで残り、方形である。方向は北東一南西を示すものと推定される。

(堆積土) 堆積土は薄く、一層だけである。暗褐色シルト質粘土層で、竪穴残在部の全域に分布している。

(床面) 床面は平坦な面であるが、あまり固くない。床面から壁へは急角度で立ち上がり、壁高は10cm前後である。大小7個のピットが検出された。貯藏穴状ピットや炉ないしカマドは確認できなかった。床面と住居掘り方埋土の関係も不明である。

(柱穴) ピットは竪穴内外合わせて7個検出された。床面全面が検出されていないので、配列



第11図 Bi62住居跡

関係は検討する事が不可能で、柱穴に関しては明らかにする事ができなかった。

(その他の施設) 確認されなかった。

(年代決定資料) 床面南西部より土師器壺類が出土しているが、種々なものが混在しているように見受けられる。(第17図26~29) 土師器甕(第17・18図30~31)等も出土している。

遺 物 (第17・18図26~31)

26~29: 床面出土の土師器丸底壺4個体である。26は彩色されない壺で、丸底から内彎する体部へ続き、口縁部が「く」の字状に外反する。器面は両面共に磨滅著しい。27は丸底壺の底部破片で、内面にはハケメ痕が、外面はケズリやハケメ後に範ミガキして、朱塗りをする。28は内黒丸底の壺底部破片で、体部から口縁部にかけて大きく外反し、丸味をもった底部との境に段を形成する。外面は体部範ミガキ、底部範ケズリ、内面は丹念な範ミガキ後黒色処理している。29は内黒丸底壺の底部破片で、外面範ケズリ、内面範ミガキ後黒色処理している。

30: 床面出土土師器長胴甕破片である。体部下半から底部は欠く。胸部中央がやや膨らみ、頸部との境に段を有し、口縁部が大きく外反する。大形である。口縁部は両面横ナテ後内面を範ミガキする。体部上半は両面ハケメ調整される。

31: 体部が大きく球形に膨らみ、頸部ですばまり段を形成する大形の土師器甕である。両面共に入念な範ミガキがなされる。

第9表 Bi62 住居跡 ピット一覧

PitNo	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
深さ(cm)	20.5	30	10	5	14	5	20.5
土 色	暗褐色						
土 性	シルト質土						
備 考	土師器片 炭化物	土師器片					土師器片 炭化物

4. 掘立柱建物跡 (第12・13図、第10表~第14表)

発見された掘立柱建物跡は7棟である。4棟はほぼ同位置に重複し、建物の振れも同じであるが、規模においては2棟ずつが夫々近似するものと思われる。他の3棟は建物規模、振れ共に異なる。6棟は梁行と桁行が直角であるが、他の1棟は並んで平行四辺形に近い。

Be24 A・B建物跡 (第11表)

調査区北西部にある東西棟2間×4間の掘立柱建物であり、新旧2時期のものがほぼ同位置同規模に重複している。更にこの位置に規模は異なるがBi21 A・B建物跡が重複している。

Be24A建物跡は最も古い建物跡である。掘方の平面形は一辺約74cmの方形で、現存する深さは46cm程である。壁はほぼ垂直に近く掘り方の埋土は黒褐色土に黄褐色シルトブロックが混じったもので、埋土中から土器片が出土している。次に建てられたBe24B建物の掘り方によって

— 西大畠遺跡 —

かなり破壊されており、柱位置のわかるものもなく、柱間寸法は不明である。しかし Be24B 建物の全ての掘り方が Be24A の掘り方に含まれた状態で重複している事から、Be24B 建物の規模に近似するものと推測される。

Be24B 建物跡は Be24A 建物跡を切る。又南側柱列東から 3 個の掘り方は Bf21A・B 建物によって切られる。東西棟 2 間 × 4 間の建物で、東妻柱列の方向北で磁北より西へ 4°5' 振れている。柱間寸法は梁行で 6.3m = 3.15m × 2、桁行は 10m = 2.5m × 4 であり、0.30m 強を 1 尺とする 10.4 尺等間(梁行)、8.2 尺等間(桁行)の建物と推定される。掘り方は Be24A のそれよりやや小さく、1 辺 57cm 程の方形で、深さは約 57cm と Be24A よりやや深くなっている。掘り方底部の高さは殆んど不揃いである。柱あたりは直径 25cm 程である。掘り方埋土は Be24A とほぼ似ているが、黄褐色シルトブロックが小さくなり汚れている。掘り方埋土内からは非常に多量の土器片が出土しており、特に土師器甕、ロクロ坏、ロクロ内黒坏が多い。

Bf21A・B 建物跡 (第12表)

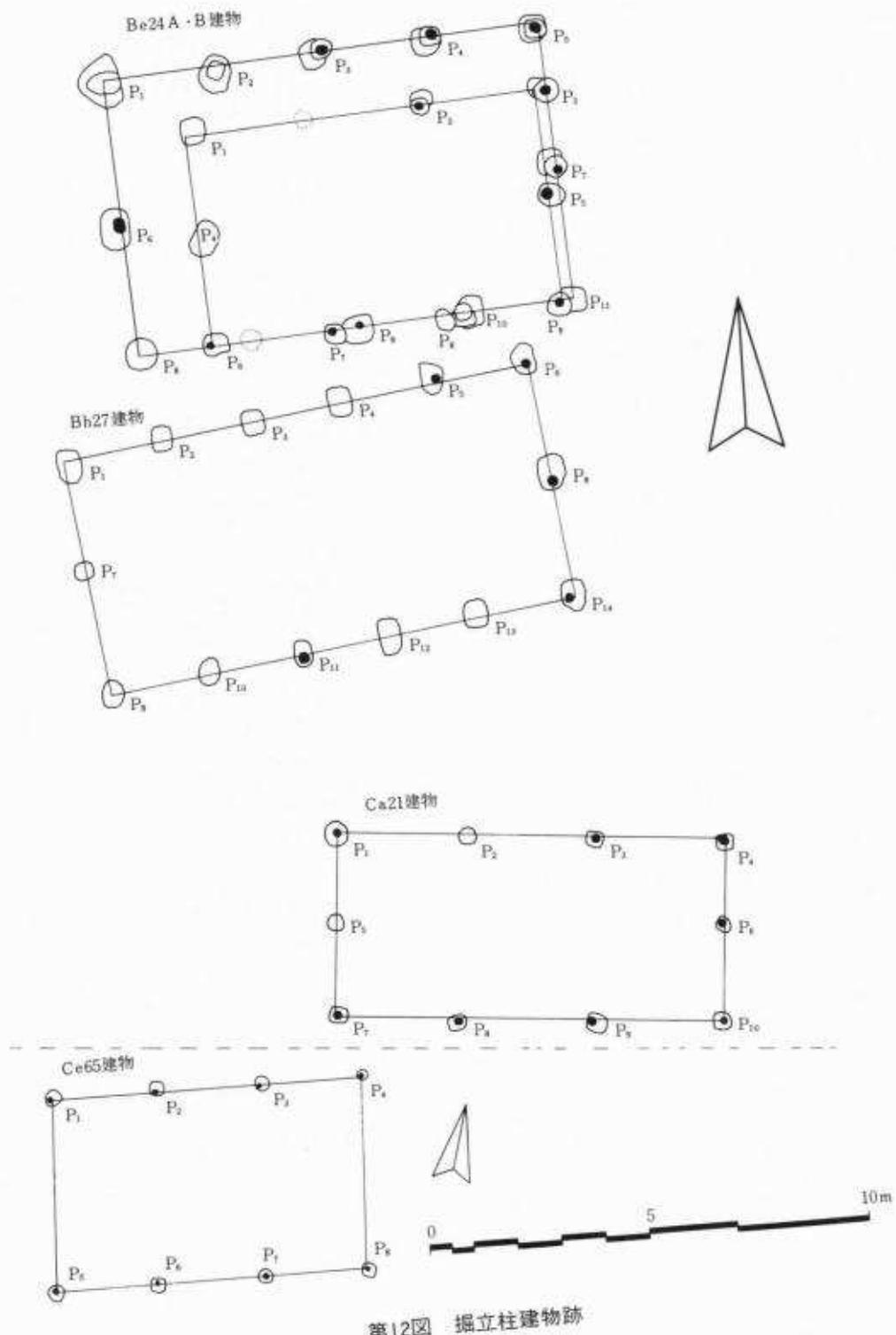
Bf21A・B 建物は Be24A・B 建物を切り、その中に入るやや規模の小さい掘立柱建物跡である。建物方向の振れは Be24B と全く同じで、南側柱列の柱筋は Be24A・B とすっかり重なる。東西棟 2 間 × 3 間で、新旧 2 時期のものがほぼ同位置に重複している。

Bf21A 建物跡はその古い建物跡である。柱の掘り方は Bf21B 建物の掘り方により殆んど壊されており、平面形は直径約 48cm 位の歪んだ円形状である。現存する深さは 22cm 程である。埋土は黒褐色土の中に黄褐色シルトの小ブロックが混入し、土器片も出土している。柱位置のわかるものがなく、柱間寸法も不明であるが、Bf21B の全ての掘り方が Bf21A のそれに含まれた状態で重複している事から、Bf21B の規模に近似するものと思われる。

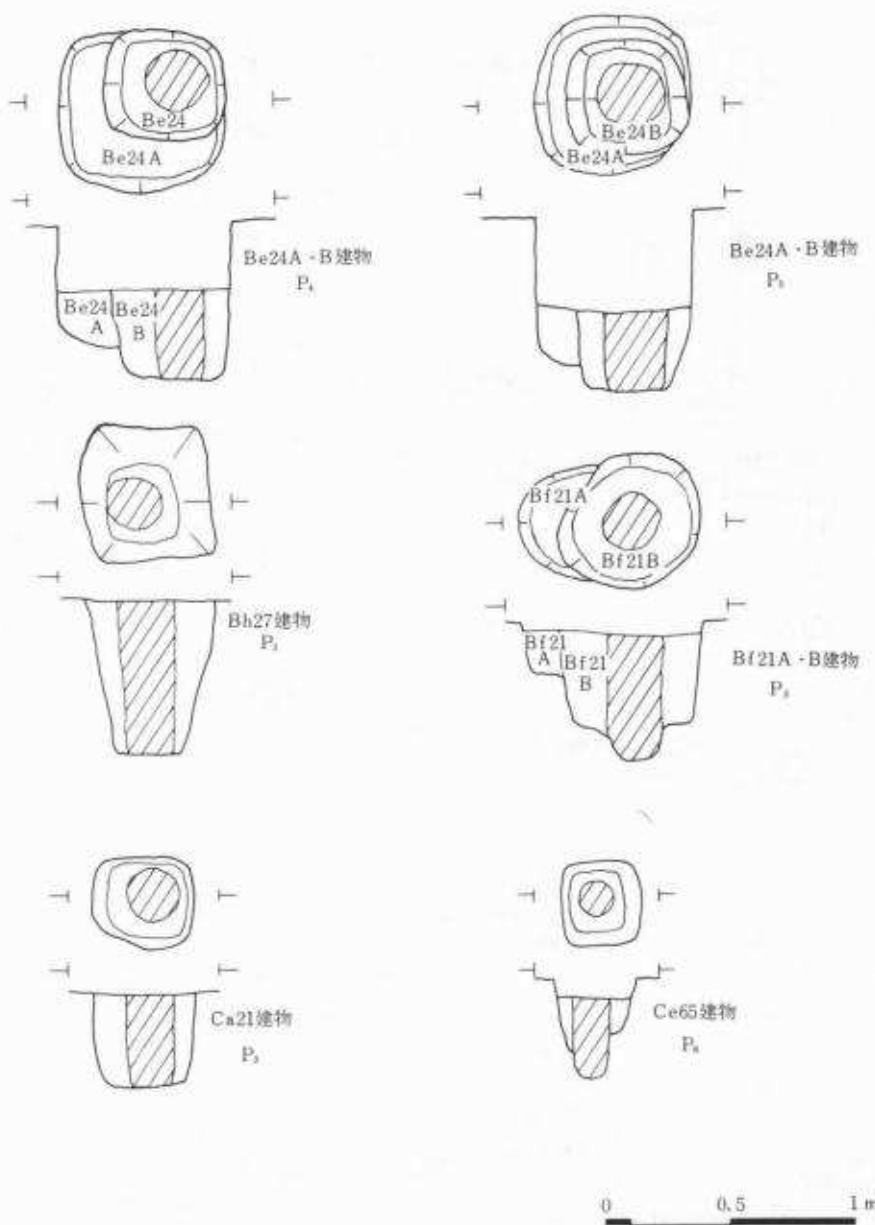
Bf21B 建物はこの 4 棟の中では最も新しいもので、東西棟 2 間 × 3 間の建物である。柱間寸法は梁行で 4.8m = 2.4m × 2、桁行では 7.99m = 2.66m × 3 であり、0.30m 強を 1 尺とする 7.9 尺等間(梁行)、8.8 尺等間(桁行)の建物と推定される。掘り方は一辺 57cm 程の方法のものと直径 52cm 程の円形のものがあり、深さは 48cm と Bf21A より深く、埋土は黒褐色土に黄褐色シルトブロックの混入したものを用いている。柱穴は直径 21.5cm 程の円形である。掘り方埋土は土師器甕片、ロクロ内黒坏、ロクロ坏片が多量に入っていた。

Bh27 建物跡 (第13表)

Be24 建物、Bf21 建物の南約 1.4m にある東西棟 2 間 × 5 間の掘立柱建物跡で、東妻方向で磁北に対し、北で約 7°5' 西へ振れている。柱間寸法は梁行で 5.4m = 2.7m × 2、桁行で 10.8m = 2.16m × 5 であり、0.30m 強を 1 尺とする 8.9 尺等間(梁行)、7.1 尺等間(桁行)であったろうと推定される。掘り方は一辺約 61cm の方形で、深さは 47cm である。掘り方底面高は大体同じである。柱穴は直径 22cm 程の円形である。掘り方埋土は黒褐色土に黄褐色シルトの小ブロックが混



第12図 挖立柱建物跡



第13図 挖立柱建物跡、掘方・柱穴

淆したものを使っている。埋土内出土遺物は土師器甕、口クロ内黒坏、口クロ坏、高台坏等の破片で、西妻及び北側柱列に特に多量に混入していた。

Ca21建物跡（第14表）

Bh27建物跡の南4.3m程にある東西棟2間×3間の掘立柱建物で、東妻方向で磁北に対し、北で約5°5'東へ振れている。Ca21竪穴住居跡を切って建てられている。柱間寸法は梁行で4.15m=2.075m×2、桁行で8.85m=2.95m×3であり、0.30m強を1尺とする6.8尺等間（梁行）、9.7尺等間（桁行）であったものと推定される。柱掘り方は一辺40cm程の方形のものと直径43cm程の内形のものがあり、深さは31cm程現存する。掘り方底面高は大体同じである。柱穴は直径21cm程の円形である。掘り方埋土は黒褐色土に黄褐色シルトブロックが混淆したものである。掘り方埋土内出土遺物は非常に少なく、土師器甕、須恵器坏の破片で、北側柱列より出土している。

Ce65建物跡（第10表）

調査区東端のやや南寄りにある東西棟1間×3間の掘立柱建物跡で、東妻方向で磁北に対し、北で約13°5'西へ偏している。この建物は梁行と桁行が直角でなくやや歪み、平行四辺形の形状である。柱間寸法は梁行は1間で4.4m(14.5尺)、桁行7m=2.33m×3であり、0.30m強を1尺とする7.6尺等間（桁行）の建物と推定される。柱掘り方は一辺33cm程の方形のものと直径35cm程の円形のものがあり、深さは40cm位現存する。掘り方底面高は種々である。柱穴は直径14cm位の円形で非常に小さい。掘り方埋土には暗褐色土に黄褐色シルトブロックの混淆したものが入っており、出土遺物は皆無である。建物跡の柱掘り方に囲まれた内側から土師器長胴甕4個体分（頸部有段、底部木葉痕、器面ハケメ・窓ミガキ）と球胴甕1個体分（器面ハケメ）が出士した。

第10表 Ce65 掘立柱建物跡柱掘り方一覧

Pit No.	上端標高 (m)	下端標高 (m)	深さ (cm)	柱掘り方 平面形	一辺・直径 (cm)	掘り方埋土	柱あたり 径 (cm)	掘り方埋土混入物 (数字は破片数)
P1	61.76	61.28	48	方形	40	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	14	
P2	61.71	61.21	50	方形	34	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	14	
P3	61.65	61.14	51	円形	35	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	13	
P4	61.55	61.09	46	方形	21	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	13	
P5	61.56	61.22	34	円形	37	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	14	炭化物少量
P6	61.49	61.06	43	方形	33	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	14	炭化物少量
P7	61.41	61.08	33	円形	34	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	14	
P8	61.30	61.09	23	方形	34	暗褐色土・黄褐色土の混淆土	14	

— 西大畠遺跡 —

第II表 Be24A.B掘立柱建物跡柱掘り方一覧

(A—旧、B—新、空白は不明)

Pit No	上端標高 (m)	下端標高 (m)	深さ (cm)	平面形	辺・径 (cm)	埋土	柱当り 径(cm)	埋土混入土器 (数字は破片数)				
P ₁ A	62.21	61.62	59	方形	105	黒褐色土質 褐色土混入		土師器底3、ロクロ内黒环2、須恵器环1				
P ₁ B	62.21	61.48	73	方形	65	"		土師器底3、ロクロ内黒环2、須恵器环1				
P ₂ A	62.24	61.56	68	方形	84	"						
P ₂ B	62.24	61.51	73	方形	43	"		土師器底2、ロクロ内黒环1、土師質环4				
P ₃ A	62.17	61.81	36	方形	70	"		土師器底2 ロクロ内黒环1	ロクロ使用 内黒环 3 須恵器赤燒环 2 土師器底 1 須恵器环 1 須恵器底 1			
A ₃ B	62.17	61.56	61	方形	49	"	31	土師器底2				
P ₄ A	62.10	61.60	50	方形	67	"		土師器底1	非ロクロ 土師器环 1 土師器底 4	ロクロ使用 内黒环 1		
P ₄ B	62.10	61.48	62	方形	44	"	25					
P ₅ A	62.10	61.50	60	方形	64	"		土師器底 7 須恵器环 1				
P ₅ B	62.10	61.40	70	方形	45	"	25					
P ₆ A								織文片 1 非ロクロ 内黒环 1 内黒环 3 土師器底 8 須恵器赤燒环 4 須恵器环 1				
P ₆ B	62.20	61.66	54	方形	92	"	33					
P ₇ A	62.14	61.89	25	方形	62	"		小形手捏ね 1 土師器底 6 須恵器环 4	非ロクロ 織文片 3 内黒环 8 小形手捏ね 1 須恵器环 1	ロクロ使用 内黒环 8 須恵器环 1		
P ₇ B	62.14	61.66	48	方形	47	"	20	非ロクロ 内黒环 2 土師器底 6				
P ₈ A												
P ₈ B	62.20	61.61	59	方形	70	"		非ロクロ 土師器环 2 土師器底 58	ロクロ使用 内黒环 55 須恵器环 55 須恵器底 4			
P ₉ A												
P ₉ B	62.25	61.78	47	方形	70	"	20	非ロクロ 土師器底 22	ロクロ使用 内黒环 9			
P ₁₀ A	62.20	61.92	28	方形	71	"		非ロクロ 土師器底 2	BF21建物P18と混合 非ロクロ ロクロ使用 内黒环 2 内黒环 12 土師器底 2 土師質环 9 土師器底 18 土師質高台环 1 須恵器底 2	BF21建物P9と混合 ロクロ使用 内黒环 1 内黒环 40 内黒环 1 土師質环 11 土師器底 41		
P ₁₀ B	62.20	61.74	46	方形	46	"		非ロクロ 土師器底 3 須恵器赤燒环 1				
P ₁₁ A												
P ₁₁ B	62.24	61.91	33	方形	58	"		非ロクロ 内黒环 2 土師器底 5				

第12表 Bf21 A.B掘立柱建物跡柱掘り方一覧 (A=旧、B=新、空白は不明)

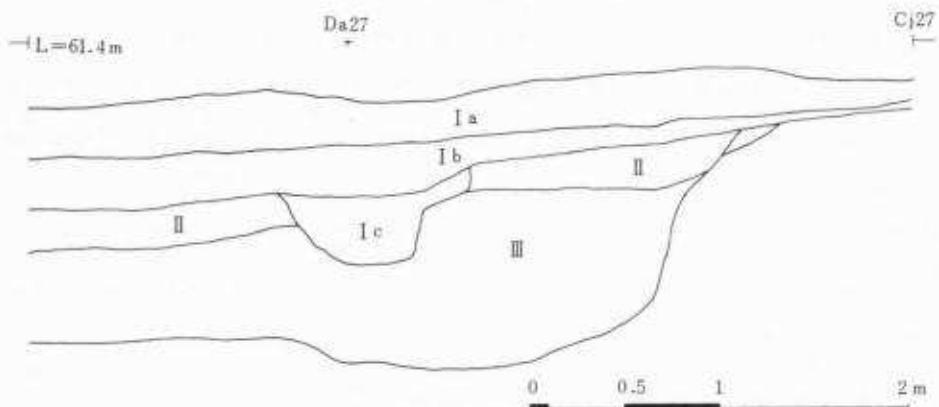
Pt No	上端標高 (m)	下端標高 (m)	深さ (cm)	平面形	辺・径 (cm)	埋 土	柱当り 径(cm)	埋土混入土器 (数字は破片数)
P ₁ A								
P ₁ B	62.22	61.60	62	方形	62	黒褐色土黄 褐色土混渣		非クロロ 土師器焼 2 ロクロ使用 内黒环 3 須恵系赤燒环 3
P ₂ A	62.25	62.00	25	円形	48	"		非クロロ 内黒环 1 土師器焼 3 ロクロ使用 内黒环 1 須恵系赤燒环 1 土師質环 1
P ₂ B	62.25	61.83	42	円形	42	"	22	ロクロ使用 内黒环 1 土師器焼 7 土師質环 1 ロクロ使用 内黒环 4 土師質环 1 須恵器环 1 土師質环 1
P ₃ A	62.24	62.04	20	円形				ロクロ使用 内黒环 1 土師器环 1 非クロロ 土師器環 1 ロクロ使用 内黒环 12 須恵系赤燒环 10
P ₃ B	62.24	61.82	42	円形	50	"	21	ロクロ使用 土師器环 1 ロクロ使用 土師器环 1 ロクロ使用 内黒环 1 土師器環 9 ロクロ使用 須恵器环 4
P ₄ A	62.22			円形				ロクロ使用 土師器環 1 内黒环 1 土師器環 1 ロクロ使用 土師質环 14 須恵器环 3 土師質环 9
P ₄ B	62.22	61.78	44	方形	58	"		
P ₅ A								
P ₅ B	62.17	61.81	36	円形	64	"	22	非クロロ 内黒环 1 土師器焼 9 ロクロ使用 須恵系赤燒环 4
P ₆ A								
P ₆ B	62.20	61.47	73	方形	60	"	18	非クロロ 土師器焼 13 ロクロ使用 内黒环 14 須恵器环 3 土師質环 9
P ₇ A								
P ₇ B	62.26	61.79	47	方形	48	"	21	非クロロ 内黒环 1 土師器焼 5 ロクロ使用 内黒环 10 土師質环 8
P ₈ A								Be24建物跡P10と混合
P ₈ B	62.24	61.81	43	円形	50	"	27	
P ₉ A								Be24建物跡P11と混合
P ₉ B	62.25	61.80	45	円形	55	"	20	非クロロ 土師器焼 9 ロクロ使用 内黒环 3 須恵系赤燒环 3

— 西大畠遺跡 —

表	Pit No.	上端標高 (m)	下端標高 (m)	深さ (cm)	平面形	辺・径 (cm)	埋土	柱当り 径(cm)	埋土混入土器 (数字は破片数)
第13表 Bh 27 掘立柱建物跡柱掘り方一覧表 (空白は不明)	P ₁	62.19	61.79	40	方形	75	黒褐色土黃褐色土混淆		非クロロ 土師器集 3 内黑环 2
	P ₂	62.13	61.79	34	方形	56	"		非クロロ 土師器集 16 ロクロ使用 須恵器环 8
	P ₃	62.19	61.55	64	方形	55	"	22	非クロロ 朱漆环 1 土師器集 23 ロクロ使用 内黑环 2
	P ₄	62.22	61.61	61	方形	65	"		非クロロ 内黑环 1 土師器集 38 朱漆环 1
	P ₅	62.23	61.75	48	方形	62	"	23	非クロロ 土師器集 10 ロクロ使用 土師器环 10 須恵器环 1 轔古环 1
	P ₆	62.24	61.73	51	方形	58	"	22	非クロロ 土師器环 1 内黑环 1 土師器集 2
	P ₇	62.19	61.70	49	円形	47	"		非クロロ 撲糸文 1 内黑环 4 土師器集 38 ロクロ使用 内黑环 3 土師器环 63 轔古环 4
	P ₈	62.15	61.72	43	方形	60	"	26	非クロロ 土師器集 8
	P ₉	62.18	61.84	34	方形	58	"	16	非クロロ 土師器集 9 ロクロ使用 内黑环 4 土師器环 2 須恵器环 1
	P ₁₀	62.21	61.81	40	方形	60	"		
	P ₁₁	62.25	61.62	63	方形	60	"	25	フレイ 2 1 土師器集 7 網文 2
	P ₁₂	62.20	61.75	45	方形	83	"		
	P ₁₃	62.24	61.77	47	方形	62	"		非クロロ 内黑环 1 朱漆环 1 土師器集 23 ロクロ使用 内黑环 3
	P ₁₄	62.24	61.79	45	方形	60	"	22	非クロロ 土師器集 5 ロクロ使用 須恵器环 1
第14表 Ca 21 掘立柱建物跡柱掘り方一覧表 (空白は不明)	P ₁	62.26	61.80	46	円形	52	黒褐色土黃褐色土混淆	19	
	P ₂	62.15	61.77	38	円形	44	"		非クロロ 朱漆环 1 土師器集 2
	P ₃	62.23	61.88	35	方形	41	"	22	
	P ₄	62.02	61.72	30	方形	40	"	27	非クロロ 土師器集 ロクロ使用 須恵器环 1
	P ₅	62.24	61.94	30	円形	36	"		
	P ₆	61.98	61.80	18	方形	32	"	20	
	P ₇	62.22	61.78	44	方形	43	"	23	
	P ₈	62.10	61.90	20	円形	42	"	21	
	P ₉	62.13	61.89	24	方形	42	"	23	
	P ₁₀	61.93	61.59	34	方形	42	"	20	

第15表 南西部遺物包含地出土遺物一覧表 (数字は破片数)

各層	剝片 石器	繩文 ・弥生	非 ロ クロ 内 黒 环	非 ロ クロ 内 黒 环	土 製 紡 錘	非 ロ クロ 土 師 器	須 恵 器 ・ 壺 ・ 長 頸 瓶	ロ ク ロ 高 台 环	ロ ク ロ 内 黒 环 B I類	ロ ク ロ 坏 B II類	計
I a		1		1		60	19	1		17	99 9 %
I				1		63	6			2	72 7 %
I b						30	23	1	7	14	75 7 %
II U		4		5	1	150	38	21	30	125	374 33 %
II	1	2		5		268	20	6	40	122	464 41 %
III L	1		3	2		21	7		1	3	38 3 %
計	2 0.2%	7 1 %	3 0.3%	14 1 %	1 0.1%	592 54 %	113 10 %	29 3 %	78 7 %	283 25 %	1122 100 %



第14図

層位	土色	土性	備考
I a (耕作土)	灰褐色	砂質土	粘性なし
I b	灰褐色	砂質土	よくしまり固い
I c (溝)	灰褐色	粘土質土	よくしまる
II	暗褐色	粘土質土	
III (地山)	褐色	粘土質土	

第14図 南西部遺物包含地層位図 (南北断面図)

5. 南西部遺物包含地（第14図・第15表）

南西部遺物包含地はCj33Da33～Cj27Da27グリッドの約50m²の範囲で、更に西方へ延びる。この地区は北の崖面を境にして北方の遺構構築面がある段丘縁部より1m程下がった沖積地の平坦地で、その南が更に崖となり一段下がる。新しい溝が東西に走るほかは遺構は皆無で、遺物だけが分布する。遺物包含層は第Ⅰ層から第Ⅲ層までで、第Ⅲ層は地山である。第Ⅰ層はIa・Ibの2つの層に細分される。Ia層は灰褐色砂質土の表土で、耕作を受けており、遺跡全体に分布している層である。Ib層はIa層と似ており、固くしまっているが基本的にはIa層と同一層である。Ic層は灰褐色粘土質土で新しい溝の堆積土である。Ⅱ層は暗褐色粘土質土である。Ib層・Ⅱ層はこの地区にのみ、南にゆるく傾斜して堆積している。

各層よりの出土遺物は第16表の如くで、縄文時代の遺物から平安時代のものまで総破片数にして1,122片である。第16表各層欄のⅠ層はIa層とIb層の中位を意味する。ⅡUはⅡ層の上位、ⅡLはⅡ層の下位を、Ⅱはその中間を意味する。

Ia層出土は縄文からロクロ使用の环まで99片で、全体の9%とごく少量である。この中では土師器の甕類の破片が60片で大半を占め、次に須恵器壺・長頸瓶19片、ロクロ环17片である。Ⅰ層出土は非ロクロ内黒环からロクロ环まで72片で、全体の約7%と少量であり、土師器甕が63片を占める。Ib層出土は土師器甕30片からロクロ环まで75片で7%と非常に少ない。Ia・I・Ib層と合わせると246片出土で全体の約22%である。

Ⅱ層上位のⅡU層出土は374片(33%)と多量で、土師器甕150片、ロクロ环125片、等である。中位のⅡ層出土は464片(41%)で、土師器甕が268片と約6割を占める。Ⅱ層下位のⅡL層出土は38片(3%)と最も少くなり、この中でも土師器甕が21片を占める。尚ⅡU・Ⅱ・ⅡL層全体では876片で80%である。

遺物包含地出土遺物1,122片の中で、最も多いのは土師器甕592片(54%)で半数以上を占め、次がロクロ环283片(25%)である。その他多量に出土しているものはロクロ使用による土器類である。

V 遺物包含地その他の出土遺物

1. 縄文・弥生土器片（第27図228～233、第16表）

調査区出土の縄文・弥生土器片は47片である。出土地は南西部遺物包含地7片、Bf15溝6片、Cc24住居内1片、Bf30住居内2片、北西部ピット群26片、表土5片である。遺構に直接伴なうものではなく、器面・断面共に風化磨滅した体部細片である。この中から比較的磨滅の少ない6片の拓影図をとり上げる。218は縄文の節が大きく、胎土に植物纖維が多量に含まれ、早期末から前期初頭頃のものと思われる。その他は地文に縄文が1点、燃糸文が3点である。228は口

縁部破片で、竪ミガキ後二条の平行沈線による連弧文を上段に、下段には半单位ずらして相対する形の連弧文を、頸部に二条の平行沈線がめぐり、佐倉河常盤遺跡出土のものに類似する。^①

① 伊藤信雄「岩手県佐倉河村発見の弥生式遺跡」(古代学第3卷第2号 昭29)

第16表 繩文・弥生土器片観察表 (第27図228~233)

図版	出土地	部位	外 面	内面	胎 土	焼 成	色 調	備 考
228	Bfg30 I	口縁部	二条平行沈線連弧文	ミガキ	緻密砂粒少量混入	やや硬質	にぶい褐色	弥生
229	Cj27Da27 II U	体 部	撚糸文(R)縦走	不 明	粗砂粒混入	やや軟質	灰 色	
230	Bhi24 I	体 部	撚糸文(R)縦走	ミガキ	砂粒少量混入	やや硬質	にぶい橙色	
231	Bf5溝	体部下半	撚糸文(R)斜走	不 明	砂粒少量混入	やや硬質	にぶい橙色	
232	不 明	体 部	単節繩文LR	不 明	緻密砂粒少量混入	やや硬質	褐 灰 色	
233	Cc24住床	体 部	単節繩文LR	不 明	織維含砂粒混入	やや硬質	橙 色	繩文

2. 剥片石器 (第27図217~227, 第17~19表)

当遺跡出土の石器は剥片石器で11点である。調査区西半に稀薄に分布しているもので、溝状土壤埋土中より石鎌1点、溝より4点、その他6点等である。Bj3住居跡北西部の溝よりは3点の出土である。石器の種類は、石鎌4点、石錐1点、不定形石器6点等である。217~219は二等辺三角形状の無茎石鎌で、220は柳葉形のものである。222~227は形態的特徴を捉えにくく、一括して不定形石器とした。222は先端に刃部としたもので石斧状石器に類似する。223~224は円形で多辺に刃部を有するもの、225~226は中軸で直交する縁辺に刃部を有するもの、227は下半を欠失した剥片石器である。223~227は削器や搔器に相当するものと思われる。

第17表 石 鎌 観 察 表 (第27図217~220)

図版	出土地	基 部 えぐり度	尖頭部ふくらみ度			尖頭部 先端角	大きさ (長さ×幅) (mm)	長幅指數	重 量 (g)	石 材
			R	L	平 壤					
217	Bj27Ca27 II	-12	7	14	10.5	44°	18×13	138	0.8	鉄石英
218	Cj27Da27 II L	12	2	2	2	33°	32×19	168	1.5	硬質凝灰質泥岩
219	Ch3溝	7	6	5	5.5	20°	48×20	240	3.9	硬質凝灰質泥岩
220	Bj30溝状土壤		3	3	3	23°	48×10	480	2.0	硬質頁岩

第18表 不定形石器観察表 (第27図222~227)

図版	出 土 地	打面調整	a 面調整	b 面調整	長 さ (mm)	幅 (mm)	重 量 (g)	石 材	備 考
222	Cc24溝	打面除去	全体調整	一辺調整	58	34	28.5	硬質凝灰質泥岩	
223	Bj6溝	打面 残	全体調整	無調整	23	23	4.4	黒耀石	
224	Cj33Da33 II	打面 残	一辺調整	一辺調整	36	29	5.9	泥質凝灰岩	
225	表 採	打面除去	一辺調整	一辺調整	26	35	9.2	黒耀石	
226	Bj27Ca27 I	打面 残	一辺調整	無調整	36	41	9.1	硬質凝灰質泥岩	周縁部分的破損
227	Bh6 I	打面 残	一辺調整	一辺調整	(35)	(35)	(10.9)	硬質頁岩	下半欠損

— 西大畠遺跡 —

第19表 石錐観察表

図版	出土地	錐部断面形	錐部角度	錐部長(mm)	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	石材	備考
221	B13溝	菱形	80°	6	35	26	12.3	黒曜石	

3. 土師器内黒双耳杯 (第21図72・73)

内黒双耳杯の耳部に杯体部の一部が付着した破片が2点出土している。遺物包含地のCj33グリッドII層(72)とDa30グリッドII層下位(73)からの出土で、隣接グリッドの同じ層からの出土である事から同一個体のものかもしれない。72の耳部は長さ2.3cm、幅2.5cm、厚さ0.9cm、73の耳部は長さ2.4cm、幅2.4cm、厚さ0.7cm、共に胎土は精良で砂粒少量混入し、やや硬質の焼成であり、色調は72が淡赤橙色、73が淡黄橙色である。杯体部内面は箆ミガキ後に黒色処理されているが、外面は不明である。耳部はハケメの痕跡が部分的に見られるが、磨滅により他は不明である。杯部と耳部の接合痕も観察される。

4. 土製紡錘車 (第26図213)

南西部遺物包含地Cj30 Da30グリッドII層上位より1個出土している。器面がかなり破損磨滅しているが、ついでに箆ミガキされた痕跡が部分的に残っている。形は円錐台形で、上径3.1cm、下径5cm、厚さ1.8cm、貫通孔は直径0.6cm程である。胎土は少量の砂粒が混じるが緻密でやや硬質な焼成であり、淡橙色をしている。

5. 直刀 (第26図215・216)

刀は2点の出土である。215は刀身部分の破片で、Bg27グリッド表土下よりの出土である。現存長は5.4cm、刀より棟までの長さ2.7cm、棟の厚さ3.5mmである。棟は角棟で、鎬が観察されないので平造りの直刀であったものと推定される。216は刀身と茎からなるもので、Bf30グリッドの表土下よりの出土である。刀身は鋒寄り部分が欠損し、現存長8.9cm、刃先より棟までの長さ2.2cm、棟の厚さ4mmである。215と同じく角棟で、鎬のない平造りの直刀である。茎は普通形で9cmあり、木質部が部分的に残っており、目釘穴(径5.5mm)も観察される。棟と茎の境に段のある棟区が観察できるが、刃区は鎬のため不明である。

6. 古銭 (第26図214)

古銭は永樂錢(銅錢)1枚がBプロック表土から出土した。表裏共に緑青が付着し、「通」字部分が欠損している。大きさは直径2.5cm、厚さ1.5mm、縁の幅1.5mm、郭幅0.5mm、穿は1辺5.5mmである。表面に他の古銭の破片が少量付着していた。

7. 杯とその分類

杯は成形、器形、調整、色調、硬度等の相違を特徴としてとらえ分類する。杯A類は成形・調整等にロクロを使用せず、底部は平底や丸底のものである。器面調整は仕上げに箆ミガキを行ない、その他に朱塗りや黒色処理されるものもある。軟質な焼成で淡黄橙色のものが多い。

坏B類はロクロ成形の坏で、BⅠ類はロクロ成形内面窓ミガキ後黒色処理の行なわれるものである。坏A類BⅠ類は硬度・色調共に土師器の焼成である。坏BⅡ類はロクロ成形非内黒の坏であり、硬度・色調等において種々であるので土師器・須恵器という表現を用いない。

A₁：丸底で、丸味をもった体部が口縁部まで立ち上がるるものや、口縁部がくびれてやや外反する坏。調整にはハケメやナデが施され、窓ミガキ仕上げのものや朱塗りのものもある。

A₂：丸底で、口縁が大きく開き、口縁部と体部境には棱線(段)がある。内面は窓ミガキ後黒色化される。外面は体部横ナデ後窓ミガキし、底部は窓ケズリされる。

A₃：丸底から体部口縁部まで丸味をもって立ち上がり、体部に沈線のめぐるものもある。内面窓ミガキ後黒色処理され、外面も窓ミガキで仕上げている。

A₄：平底で、体部から口縁部までが直線的に外傾する。器面は両面共窓ミガキされ、内面又は両面黒色化される。

A₅：小形の手捏ね土器であるが、ここに一括して入れた。底部は丸底風で、器形は鉢形である。口縁部に横ナデの痕跡が部分的に見られ、他は指頭でおさえながら器面を整えている。

BⅠa：ロクロ成形、内面窓ミガキ後黒色処理の坏で、底部下面が手持ち窓ケズリされる。

BⅠb：ロクロ成形、内面窓ミガキ後黒色処理し、底部回転糸切り無調整の坏。

BⅡa：ロクロ成形、非内黒の坏で、色調は灰色や灰白色を呈し、硬質な焼成である。底面は窓切と糸切りのものがある。

BⅡb：BⅡaの中で、軟質なものであり、窓切りと糸切りのものがある。

BⅡc：ロクロ成形、非内黒の坏で、にぶい橙色や淡橙色の硬質なものである。底面は手持ち窓ケズリ、窓切り、糸切り等のものがある。

BⅡd：BⅡcの中で軟質な焼成のもので、全て糸切りである。

BⅡe：ロクロ成形、非内黒の坏で、焼成は浅黄橙色の軟質なもの。全て糸切りである。

遺物包含地その他出土A類坏 (第21図63~71)

非ロクロの坏で住居跡外出土の9点である。65は内黒高坏であるが1点だけなのでここに入れた。この高坏は溝埋土中出土で、体部に軽い段を有し、脚部の裾を欠いている。63は小形手捏ねの土器であり、64は両面朱塗りの丸底坏で接合により完形に近いものである。66~71は内黒丸底坏で、体部に段や沈線状の棱を有するもの。器面調整は種々であるが、大半は両面窓ミガキ仕上げである。65の高坏を除く他の8点は調査区西寄りからの出土で、遺物包含地から3点出土する。64を除くと全て破片であり、反転復元実測したものである。

遺物包含地その他出土BⅠ類坏 (第23図110~119)

ロクロ使用、内面黒色処理の坏で、実測図に書けたものは10点である。いずれも破損品で、住居跡出土のものは皆無である。口縁部から底部まで実測できたもの3点、他の7点は口縁部

— 西大畠遺跡 —

或いは底部欠損のものである。出土地区別に見ると7点が遺物包含地出土で、器面・断面共に磨滅、黒色の脱色等があり、廃棄後幾度も動かされたものと思われる。3点は北西部ピット群中のピット内出土である。これ等の壺の器高は4.6~4.8cm、口径は12~13.5cm、底径は4.8~6.9cmの範囲内にある。底部下面は手持ち窪ケズリ4点、糸切り3点であり、他は不明。

遺物包含地その他出土BⅡ類壺 (第24・25図120~196)

ロクロ成形、非内黒壺類で破片が大半を占め、77点の実測図を作製。住居跡に伴なつての出土は皆無である。南西の遺物包含地より62点(81%)が集中して出土し、各層よりの出土はIa層3点、Ib層4点、Ⅱ層上位35点、Ⅱ層中位12点、Ⅱ層下位8点である。Ⅱ層全体出土は55点である。北西地域のピット群中より14点(19%)が出土、この内訳は表土3点、ピット埋土中11点である。これ等の壺は全てロクロ右廻しによる成形であり、底部切り離し技法は回転糸切り66点(86%)回転窪切り8点(10%)で、手持ち窪削りにより不明2点(3%)磨滅により不明1点(1%)である。

第20表 日Ⅱ類壺図版説明集計表

類	出土点数	底部下面	底径(cm)
BⅡa	12点(118~129) 15%	回転窪切り 回転糸切り	1点 11点
BⅡb	12点(130~141) 15%	回転窪切り 回転糸切り	3点 9点
BⅡc	17点(142~158) 23%	手持ち窪削り 回転窪切り 回転糸切り	1点 5点 11点
BⅡd	13点(159~171) 17%	回転糸切り 不明	12点 1点
BⅡe	23点(172~194) 30%	回転糸切り	23点
			4.0~6.4 (4.0~5.0に集中)

第21表 遺物包含地壺B類各層出土状況 (実測図に書けたもの)

各層	壺BⅠ (ロクロ成形内黒) 呑(70%)	壺BⅡa (ロクロ成形非内黒) 呑(75%)	壺BⅡb (ロクロ成形非内黒) 縫(100%)	壺BⅡc (ロクロ成形非内黒) 縫(71%)	壺BⅡd (ロクロ成形非内黒) 呑(54%)	壺BⅡe (ロクロ成形非内黒) 縫(96%)
Ia		回転糸切り 2				回転糸切り 1
I						
Ib	手持ち窪削り 1 不明 1		回転糸切り 1		回転糸切り 1	回転糸切り 2
ⅡU	手持ち窪削り 1 回転糸切り 1 不明 1	回転糸切り 2	回転糸切り 2 回転糸切り 5	回転窪切り 1 回転糸切り 4	回転糸切り 4	回転糸切り 17
Ⅱ	回転糸切り 2	回転窪切り 1 回転糸切り 3	回転糸切り 1	手持ち窪削り 2 回転窪切り 1	回転糸切り 2	回転糸切り 2
ⅡL		回転糸切り 1	回転窪切り 1 回転糸切り 2	回転窪削り 2 回転糸切り 2		

第22表 遺物包含地・その他出土环A類・環B1類図版説明

出土地	実測番号	写真番号	分類号	調査																			
				口	縁	部	体	部	上	半	外	面	内	面	下	平	底	部	器高	口径	底径	付記	
表	63	49	A5	横ナテ横ナテ	横ナテ横ナテ後	横ナテ横ナテ後	ヘラミガキ	3.4	9.0	丸底	小形手提げ												
Ce 9 地山Ⅱbみ	64	50	A1	横ナテ	横ナテ	横ナテ	ヘラミガキ	6.1	15.8	丸底	両面朱漆												
C162 潟	65	51	Au	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナデ後	ヘラミガキ	7.0	11.5	(4.6)	内黒窓												
Cj33Da33II	66	Au	ナデ後	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(4.3)	15.0	丸底	内 黒	
Bed27 I	67	Au					ヘラミガキ	9.底	内 黑														
Cde24 I	68	52	Ax																(4.7)				
Cj33Da33II	69	53	Ax	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ハ テ	ヘラミガキ	(2.1)			丸底												
Cj33Da33II	70	54	Ax	ヘラミガキ	横ナテ後	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(4.3)	15.0	丸底	内 黑	
Cfg30 I	71	A1	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不	明	ヘラミガキ	(2.9)	9.4	(丸底)	内 黑										
Cj27Da27 I b	110	93	B1a																	2.9	12.0	9.4	内 黑
Be18P1	111	94	B1a	ヘラミガキ	ロクロ瓶	ヘラミガキ	ロクロ瓶	ヘラミガキ	(4.3)	15.0	丸底	内 黑											
Be21P%	112	95	B1a																	(2.9)	9.4	(丸底)	内 黑
Cj30Da30II U	113	96	B1a																				
Cj27Cj30II	114	97	B1b																				
Cj30Da30II U	115	98	B1b																				
Cj33Da33II	116	99	B1b																				
Bg15P%	117	100	B1	ヘラミガキ	ロクロ瓶	ヘラミガキ	ロクロ瓶	ヘラミガキ	ロクロ瓶	ヘラミガキ	ロクロ瓶	ヘラミガキ	ロクロ瓶	ヘラミガキ	ロクロ瓶	ヘラミガキ	ロクロ瓶	ヘラミガキ	(3.5)	12.0		内黒B721建物 柱振り方	
Da33HU	118	101	B1	不	明	ロクロ瓶	不	明	ロクロ瓶	不	明	ロクロ瓶	不	明	ロクロ瓶	不	明	ロクロ瓶	(3.5)	13.5	5.2	内 黑	
Cj27Da27 I b	119	102	B1																(2.7)	6.8	内 黑		

第23表 | 遺物包含地・その他出土坏BII類図版説明表

出 土 地	実測図 番 号	写 真 番 号	分 類 記 号	調 体 部				器 高 cm	口 径 cm	底 径 cm	胎 土	硬 度	色 調
				口 線 面	内 面	外 面	底 部						
Cj27Da27II	120	103	B IIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(2.5)	6.3	砂粒少量混入	硬質	灰白色	
Cb12P ₁	121	104	B IIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(0.8)	6.0	砂粒少量混入	硬質	灰白色	
Cj30Da30II	122		B IIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(1.2)	6.0	砂粒少量混入	硬質	灰白色	
Cj30Da30III	123		B IIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(1.4)	6.2	砂粒多量混入	硬質	灰白色	
Da30III	124	105	B IIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	4.3	6.2	砂粒少量混入	硬質	灰白色	
Cj30Da30II	125		B IIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(2.3)	6.4	織	泥	灰色	
Cj30Da30Ia	126		B IIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(1.6)	6.5	砂粒少量混入	硬質	灰白色	
Cj27Da27II	127	106	B IIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(1.8)	6.6	砂粒少量混入	硬質	灰白色	
Bj15P ₂	128		B IIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(2.4)	6.6	砂粒少量混入	硬質	灰白色	
Cj30Da30Ib III	129	107	B IIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(2.8)	6.6	石英粒多	硬質	灰白色	
Bg15P ₂	130		B IIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(0.9)	6.8	砂粒少量混入	軟質	灰褐色	
Cj27Da27Ia	131		B IIa	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(1.5)	6.8	織	泥	灰色	
Cj30HU	132	108	B IIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(3.9)	13.6	6.4	砂粒少量混入	軟質	灰白色
Da30HU	133		B IIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(2.7)	6.6	織	泥	明褐色	
Cj30HU Cj33Da33II	134	109	B IIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	4.1	13.5	7.4	砂粒少量混入	軟質	明褐色
Cj33Da33II	135	110	B IIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	4.1	13.6	4.8	織	泥	やや軟質
Cj33HU	136	111	B IIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(1.8)	5.2	砂粒少量混入	軟質	淡黄色	
Da33HU	137	112	B IIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	(1.7)	5.9	砂粒少量混入	軟質	灰白色	
Cj30HU	138	113	B IIb	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕	ロクロ痕 回転糸切り	3.8	12.4	6.0	砂粒少量混入	軟質	灰白色

第23表2 遺物包含地・その他出土環BII類図版説明2

出 土 地	実測図 番 号	写 真 番 号	分 類 記 号	調 潤 部 体 部				底 部		口 径 cm	底 径 cm	土	硬 度	色 調	
				内 面	外 面	上 面	下 面	砂 粒 cm	砂 粒 量混入						
Da33H <small>U</small>	139	114	B IIb	口クロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)	(1.4)	6.0	砂粒少量混入	軟	質	浅黄褐色	
Da30H <small>L</small>	140	115	B IIb	口クロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)	3.7	12.4	6.2	砂粒少量混入	軟	質	灰白色
Cj30Da30H <small>U</small>	141	116	B IIb	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)	(1.3)	6.4	シルト質土	やや軟質	土	白色	
Cj30Da30H <small>b</small>	142	117	B IIb	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)	(1.8)	6.6	砂粒少量混入	やや軟質	土	浅黄褐色	
Cj30Da30H <small>L</small>	143	118	B IIb	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)	3.4	12.5	6.8	鐵	密	灰白色	
Cj33Da33H	144	119	B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(手持ちヘラ削り)	4.8	16.2	6.8	砂粒少量混入	硬	質	浅黄褐色
Cj30Da30H <small>a</small>	145	120	B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転ヘラ削り)	3.7	12.7	6.2	シルト質土	硬	質	にぶい橙
Da30H <small>L</small>	146	121	B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転ヘラ削り)	3.9	14.0	6.6	鐵	密	灰白色	
Cj30Da30H <small>L</small>	147		B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転ヘラ削り)	(1.6)	6.8	鐵	密	灰	浅黄褐色	
Cj27Cj30H	148		B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転ヘラ削り)	(0.8)	7.0	鐵	密	灰	浅黄褐色	
Cj30Cj33H	149	122	B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(手持ちヘラ削り)	4.7	15.0	8.2	砂粒混入	硬	質	にぶい橙
Cj33Da33H			B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)	(3.4)	4.4	鐵	密	灰	にぶい橙	
Dbc33H <small>L</small>	151	124	B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)	3.6	12.8	4.8	鐵	密	硬	質
Cj33Da33H <small>L</small>			B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)	(3.0)	5.0	砂粒少量混入	硬	質	浅黄褐色(内面朱)	
Cd21P <small>j</small>	152	125	B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)	(1.6)	5.0	砂粒少量混入	やや軟質	土	浅黄褐色	
Bg21T	153	126	B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)	(1.5)	5.0	砂粒少量混入	硬	質	にぶい橙	
B4e21	154	127	B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)	(1.5)	5.0	砂粒少量混入	硬	質	黄褐色	
Bd30P <small>b</small>	155	128	B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)	(1.5)	5.0	砂粒少量混入	硬	質	黄褐色	
Bf27+30I			B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)	4.4	12.5	5.6	砂粒混入	やや軟質	土	浅黄褐色
Cj33Da33H <small>U</small>	156	129	B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)	4.2	13.0	6.0	砂粒少量混入	硬	質	にぶい橙
Cj30Da30H <small>L</small>	157		B IIc	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	(回転糸切り)							

第23表3 遺物包含地・その他出土環BIII類図版説明3

出 土 地	実測図 番 号	写 真 番 号	分 類 記 号	調 部				整 部				器 高 cm	口 径 cm	底 径 cm	胎 土	硬 度	色 調
				内 面	外 面	部 体	部 下 面	回転系切り	(2.1)	6.6	硬						
B15P	158	B1e	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	(2.1)	6.6	硬	密	硬	質	に し い 植		
Cj30H	159	B1e	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	4.3	12.6	7.0	シルト質	硬	質	に し い 植		
Cj30Da30H	160	B1e	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	5.6	16.0	7.2	シルト質	硬	質	に し い 植		
Da30H	161	B1d	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	(1.0)	4.6	硬	密	硬	質	浅 黄 橙		
Bg30H	162	B1d	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	(1.8)	4.6	砂粒少量混入	やや軟質	浅 黄 橙				
Bg27P	163	B1d	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	(1.8)	4.6	砂粒少量混入	やや軟質	浅 黄 橙				
Cj30Da30H	164	B1d	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	(2.0)	4.7	砂粒少量混入	やや軟質	浅 黄 橙				
不 明	165	B1d	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	(1.0)	5.0	砂粒少量混入	軟	質	浅 黄 橙			
Cj27Cj30H	166	B1d	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	(1.7)	5.2	砂粒混入	板	質	橙			
Cj30Da30H	167	B1d	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	(1.2)	5.4	砂粒混入	板	質	橙			
Cj33Da33H	168	B1d	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	不 明	(1.7)	5.6	シルト質	板	質	に し い 植			
Bg27P	169	B1d	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	4.7	15.0	5.6	被	密	板	質	浅 黄 橙	
Cj27Da27I	170	B1d	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	(2.0)	5.8	被	密	板	質	浅 黄 橙		
B3e30H	171	B1d	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	4.4	12.4	6.0	砂粒少量混入	やや軟質	質	橙		
Cj21P	172	B1d	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	4.0	13.2	5.4	砂粒少量混入	板	質	橙		
Da27H	173	B1d	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	(2.1)	7.0	被	密	板	質	浅 黄 橙		
Da33H	174	B1e	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	(1.0)	4.0	砂粒混入	板	質	浅 黄 橙			
Cj30Da30H	175	B1e	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	(1.0)	4.0	砂粒混入	板	質	浅 黄 橙			
Da30H	176	B1e	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	ロクロ瓶	回転系切り	(1.0)	4.0	砂粒混入	板	質	浅 黄 橙			

第23表4 遺物包含地・その他出土品BII類図版説明4

出 土 地	実測図番号	写 真 番 号	分 類 記 号	調 濃				整 形				硬 度	色 調	
				内 面	外 面	口 端 部 体 部	底 部	口 端 cm	底 面 cm	胎 土				
Da30IIIU	177	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(0.9)	4.2	砂 粒 混 入	軟	質	浅 黄 橙	
Da33IIIU	178	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(1.7)	4.3	砂 粒 混 入	軟	質	浅 黄 橙	
Da30IIIU	179	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(1.2)	4.4	砂 粒 混 入	軟	質	浅 黄 橙	
Cj33Da33Ia	180	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(0.8)	4.4	砂 粒 混 入	軟	質	浅 黄 橙	
Da33IIIU	181	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(0.8)	4.4	砂 粒 混 入	軟	質	浅 黄 橙	
Da33IIIU	182	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(1.2)	4.4	砂 粒 混 入	軟	質	浅 黄 橙	
Da33IIIU	183	140	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	2.6	10.0	4.5	砂 粒 混 入	軟	質	浅 黄 橙
Da33IIIU	184	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(1.2)	4.6	砂 粒 混 入	軟	質	浅 黄 橙	
Cd21P ₁	185	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(1.0)	4.8	砂 粒 混 入	軟	質	浅 黄 橙	
Cj33II	186	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(1.3)	5.0	砂 粒 混 入	軟	質	浅 黄 橙	
CjDa33IIIU	187	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(1.4)	5.3	織	織	質	浅 黄 橙	
Da33IIIU	188		BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(1.0)	5.4	砂 粒 混 入	軟	質	浅 黄 橙	
Da30IIIU	189	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(1.4)	5.5	織	織	質	浅 黄 橙	
Da33IIIU	190	141	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	2.0	9.7	5.7	砂 粒 混 入	軟	質	浅 黄 橙
Cj30Da36IIIU	191		BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(1.8)	6.0	砂 粒 混 入	軟	質	浅 黄 橙	
Da33IIIU	192	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(2.0)	6.0	砂 粒 混 入	軟	質	浅 黄 橙	
Cj30Da36IIIU	193	142	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(2.4)	6.2	織	織	質	浅 黄 橙	
Da33IIIU	194	143	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(1.5)	4.8	織	織	質	浅 黄 橙	
Da33Ib	195	144	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(2.4)	5.6	ジ ル バ	質	質	灰 白 色	
Da27IIIU	196	145	BIIe	□クロ板	□クロ板	□クロ板	□クロ板	(4.5)	13.0	6.4	織	織	質	

8. 土師器壺・甕・瓶とその分類

壺の口縁部及び体部の器形により A・B の 2 類に分類する。全てロクロは使用していない。

壺 A：口縁部が粘土貼付により折り返し状の段がつき、外面に稜がめぐる複合口縁のもの、口縁部は外傾し、頸部は外傾気味かやや直立する。体部以下は接合資料がなく不明であるが、頸部のすぼまり方から球形と推定される。口縁部に横ナデの痕跡が残る。

壺 B：単純口縁で短かい口縁部が「く」字状に屈曲して外傾する。体部は球形であるが、体部下半を欠く。外面と口縁部内面は入念な箆ミガキの後朱塗りされている。

甕は器形上の特徴から A～C の 3 類に大別される。頸部の段・大きさ・最大径の位置・器面調整等により細分される。全てロクロは使用していない。

甕 A：台付甕で 1 点だけの出土。脚台の部分のみで他は欠失している。内面に指頭ナデ痕。

甕 B：口縁部外反し、体部球胴形の甕。大小・頸部段の有無により細分する。

B₁：頸部に段のない大形の甕。口縁部横ナデ、体部箆ミガキされる。

B₂：頸部に段のある大形の甕。口縁部横ナデ、体部箆ミガキされる。

B₃：頸部に段のある小形の甕。口縁部横ナデ、体部ハケメ後横ナデされる。

甕 C：口縁部外反し、体部が長胴形の甕。頸部段の有無、最大径の位置により細分する。

C₁：頸部に段がなく、頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反する小形の甕。

C₂：頸部に段を有し、最大径が口縁部にある大形小形の甕。口縁部横ナデ、体部箆ミガキ。

C₃：頸部に段を有し、最大径が体部中央にある大形の甕。口縁部横ナデ、体部箆ミガキ。

瓶は長胴形大形甕の底部を欠いた形の無底式のもので、ハケメ調整のものと箆ミガキ調整のものがある。

満その他出土土師器壺・甕（第22図74～88）

これら 15 個体の土器は調査区北西部よりの出土で、全て破片であり、器面・断面の風化磨滅が著しい。出土地は溝埋土中より 7 個体、表土より 4 個体、Pit 中 3 個体その他 1 個体で、溝埋土中出土が約半数を占める。壺 A 類は当遺跡内から 3 個体 (74～76) だけの出土で、複合に縁をもつものであるが、74 は瓶かもしれない。77 は台付甕の脚台部だけで上部は不明であるが、74～77 の 4 点は B₁ 3 住居跡の北西部溝とその付近出土であり、胎土・焼成・色調共に似ている。78 は内湾気味の口縁部と体部上端からなる破片で、比較的硬質なものである。79～82 は底部と外方に開く体部下端からなる破片で球胴形の甕である。81 の底部下面には木葉痕が残る。83～88 は長胴形の甕である。83 は直立気味の口縁と胴膨みの体部上半からなる破片で、84 は大きく外反する口縁と膨んでいく体部上半からなる破片で、共に頸部体部境に段を有する。85～88 は長胴形甕の体部下半と底部破片で、器面はナデやハケメ後に部分的に箆ミガキされている。85 と 88 の底部下面に木葉痕が見られる。

第24表 溝・その他出土土師器・壺・甕図版説明一覧表

出 土 地	実測図 番 号	写 真 番 号	分 類 記 号	調				體				體				體				體				體					
				口 面	林 部	部	上 半	内 面	外 面	部	上 半	内 面	外 面	部	上 半	内 面	外 面	部	上 半	内 面	外 面	部	上 半	内 面	外 面	部			
Ca.9 I	74	57	壺 A	不 明	ハ ケ メ	ノ																							
Ca6-Ca9溝	75	58	壺 A	横ハケメ	不 明																								
Bi.6 I	76	59	壺 A	不 明	横 ナ テ																								
Ca.9溝	77	60	壺 A																										
Bf.12溝	78	61	甕 B ₃	横 ナ テ	タ ハ タ メ	後	横 ナ テ	タ ハ タ メ																					
Bi.15P ₂	79	62	甕 B																										
Be.30P ₁	80	63	甕 B																										
Bb.15P ₁	81	64	甕 B																										
Cf.24I	82	65	甕 B																										
Bf.12溝	83	66	甕 C ₃	横 ナ テ	横 ナ テ	不 明	横 ナ テ	ハ ケ メ	後	横 ナ テ	ハ ケ メ	後	横 ナ テ	ハ ケ メ	後	横 ナ テ	ハ ケ メ	後	横 ナ テ	ハ ケ メ	後	横 ナ テ	ハ ケ メ	後	横 ナ テ	ハ ケ メ	後		
Ch.27溝	84	67	甕 C ₃	横 ナ テ	横 ナ テ	横 ナ テ	横 ナ テ	不 明																					
Cc.62I	85	68	甕 C																										
Bf.12溝	86	69	甕 C																										
Bf.30I	87	70	甕 C																										
Bi.5溝	88	71	甕 C																										

() は現存部分の計測値、空白は欠測値

9. 高台壺と分類（第23図89～109）

ロクロ成形で付高台であるが、焼成は軟質で灰白色や浅黄橙の色調の土師質のものである。胎土は石英粒・砂粒等若干含むが一般に緻密である。軟質なため残存状態は非常に悪く、器面断面共に磨滅しており、壺底部と高台部の残存するものが大部分で実測図に書けたものは21個体分である。北西部ピット群中のピット内から5点(24%)、南西部遺物包含地のDaグリッド附近から16点(76%)の出土である。遺物包含地出土状態はIa層1点、II層上位12点、II層中位3点で、凡そ高台壺はII層の上層部出土と考えられる。高台の高さは0.7cm～2.5cmの範囲内にあるが、0.7～1.6cmの範囲のものが多い。高台底径は4.3～9.2cmの範囲にあるが、5.0～6.2cmの範囲に集中する。高台端部及び色調、硬度等を特徴として分類する。遺構伴出は皆無である。

Ia：高台端部が丸味を帯び、色調は灰白色や浅黄橙色、軟質な焼成である。(89～100)

Ib：高台端部はIaと同じであるが、色調はにぶい橙色で、焼成不良のやや軟質なもの。(101)

IIa：高台端部が肥厚して面をなし、色調は浅黄橙で焼成不良の軟質である。(102・103)

IIb：高台端部はIIaと同じで、色調は橙色であるが朱塗りされ、やや硬質な焼成。(104)

IIIa：高台端部欠損不明のもので、灰白色や浅黄橙色で焼成不良の軟質なもの。(105～107)

IIIb：高台端部欠損不明のもので、橙色や浅黄橙色でやや硬質な焼成である。(108・109)

10. 須恵器壺・鉢・長頸瓶（第26図197～212）

調査区出土の須恵器壺・鉢・長頸瓶は16個体分であるが、全て破片である。遺構に直接伴なう出土は皆無であり、包含層出土だけである。最も多いのは南西部遺物包含地のII層の上位出土で12個体分(75%)であり、他は北西部包含層出土である。

これ等の須恵器の胎土は砂粒少量混入するが緻密である。208は灰白色で焼成不良の軟質なものであるが、他は灰色12点、にぶい橙色3点で全て硬質である。

口縁部破片から反転復元実測したもので、器種・口縁等は全て推定である。口縁端部の形状により分類する。

壺I：口縁が外反し、口縁端部が上下に挽き出されているもの。(197～201)

壺II：やや直立気味の頸部から外傾する口縁部へ続き、口縁端部が丸味を帯びて下方に挽き出されているもの。(202)

その他：口縁部欠損し、橢円形状の体部と底部からなり、ロクロ調整後に部分的に種々の調整がなされ、外面に緑灰色の自然釉がかかる。(203)

鉢：浅鉢状の鉢と推定されるもので、体部上半から口縁部へと外傾し、口縁部外面に粘土貼付により、一条の稜帶がめぐる。(204)

長頸瓶I：口縁部が外反し、口縁端部が上下に挽き出されているもの。(205～209)

長頸瓶II：口縁部が外反し、口縁端部が丸味を帯びて上方に挽き出される。(210～212)

第25表

遺物包含地その他出土高台坏図版説明一覧

()は現存部分の計測値 空白は欠損部

出土地	実測図番号	写真番号	分類記号	器面調整	器高(cm)	口径(cm)	高台高(cm)	高台径(cm)	胎土	硬度	色調	付記
Da33ⅡU	89	72	I a	ロクロ痕(1.4)		0.7	4.4	精良・石英粒・砂粒少量混入	軟質	灰白色		
Da33ⅡU	90	73	I a	ロクロ痕(2.2)		1.1	5.0	精良・石英粒・砂粒少量混入	軟質	浅黄橙	环底部下面回転糸切痕	
Da33Ⅱ	91	74	I a	ロクロ痕(2.4)		1.8	5.0	精良・石英粒少量混入	軟質	灰白色		
Da33ⅡU	92	75	I a	ロクロ痕(2.2)		1.5	5.2	精良・石英粒少量混入	軟質	灰白色		
Da33ⅡU	93	76	I a	ロクロ痕(2.3)		1.6	5.3	精良・石英粒少量混入	軟質	灰白色		
Cj30Da30Ia	94	77	I a	ロクロ痕(1.7)		0.8	5.6	精良・石英粒少量混入	軟質	浅黄橙		
Da33ⅡU	95	78	I a	ロクロ痕(2.7)		1.5	5.6	精良・石英粒少量混入	軟質	灰白色	环底部下面回転糸切痕	
Da33ⅡU	96	79	I a	ロクロ痕(2.1)		1.5	6.2	精良・石英粒少量混入	軟質	浅黄橙		
Bcd27I	97	80	I a	ロクロ痕(2.4)		1.1	7.6	良・石英粒・砂粒混入	やや軟質	灰白色		
Be27Ps	98	81	I a	ロクロ痕(1.5)		1.0	8.0	精良・石英粒少量混入	軟質	浅黄橙		
Da33ⅡU	99	82	I a	ロクロ痕(1.8)		1.2	8.2	精良・石英粒少量混入	軟質	浅黄橙		
Da33Ⅱ	100	83	I a	ロクロ痕(2.2)		2.2	8.2	精良・石英粒少量混入	軟質	浅黄橙		
Da30ⅡU	101	84	I b	ロクロ痕(3.8)		2.4	9.2	精良・石英粒少量混入	やや軟質	にじみ橙		
Da33ⅡU	102	85	II a	ロクロ痕(2.3)		1.1	5.6	精良・石英粒・砂粒混入	硬質	浅黄橙		
Bf27Ps	103	86	II a	ロクロ痕(1.5)		1.5	7.0	精良・砂粒少量混入	軟質	浅黄橙		
Bg21Ps	104	87	II b	ロクロ痕(2.6)		1.0	7.6	精良・石英粒・砂粒少量混入	硬質	橙	环外面・高台部両面朱塗	
Da33ⅡU	105	88	III a	ロクロ痕(1.2)		(0.6)	4.3	精良・石英粒少量混入	軟質	灰白色		
Bh27Ps	106	89	III a	ロクロ痕(2.1)		(1.0)	(5.3)	精良・石英粒・砂粒少量混入	軟質	浅黄橙		
Cj33Da33Ⅱ	107	90	III a	ロクロ痕(2.1)		(0.6)	(6.2)	精良・石英粒少量混入	やや軟質	浅黄橙	环底部下面回転糸切痕	
Da33ⅡU	108	91	III b	ロクロ痕(4.1)	17.5	(0.7)	(6.1)	精良・石英粒・砂粒少量混入	やや軟質	橙		
Da33ⅡU	109	92	III b	ロクロ痕(6.0)	17.2	(0.7)	(8.0)	精良・石英粒少量混入	やや軟質	浅黄橙		

第26表 遺物包含地その他出土須恵器壺・鉢・長頸図版説明一覧

出土地	実測図 番号	写真 番号	器種	内		外		体部		上半		下半		縫隙			
				内面	外面	内面	外面	前面	背面	前面	背面	前面	背面	縫高	口径	縫深	縫幅
C127Da27Ib Da27IIU	197	146	壺I	ロクロ	直筒	タテハナメ後 ロクロ	直筒	あて工具 ロクロ	直筒	平行叩き後 ロクロ	直筒	平行叩き後 ロクロ	直筒	(12.8)	22.4	18.5	(37.6)
C133Da33IIU	198	147	壺I	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(2.8)	20.0		
C133IIU	199	148	壺I	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(2.5)	17.0		
C130Da30Ib	200	149	壺I	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(1.5)	15.0		
Chi30I	201	150	壺I	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(5.3)			
C127Da27Ib	202	151	壺II	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(3.4)			
C130Da30Ib IIU・IIU	203	152	壺II	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(24.3)			
Cc24Ba26 床面Pit	204	153	杯	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(3.5)	20.0		
C133Da33IIU C133Da33Ia	205	154	長頸壺I	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(9.0)	10.6	6.0	
C137C130II	206	155	長頸壺I	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(1.9)	12.4		
C133Da33Ia	207	156	長頸壺I	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(1.5)	11.3		
C127C130II	208	157	長頸壺I	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(2.0)			
C133Da33IIU	209	158	長頸壺I	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(2.5)			
Ca9溝	210	159	長頸壺I	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(1.7)	14.0		
不明	211	160	長頸壺I	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(2.1)			
不明	212	161	長頸壺I	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	ロクロ	直筒	(4.4)			

第27表1 穴穴住居跡出土遺物一覧

出土地	実測図 番号	写真 番号	器種	周		縦				横				参考	
				口		縁	底	部	上	半	体	部	下		
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	外	面	上	面		
C153住床	1	1	H.A. ₁	ナ	不	明	不	明	不	明	ハ	テ	メ	(3.6) 12.0	
C153住	2	2	H.A. ₁	ヨ	コ	ナ	デ	不	明	ハ	テ	メ	(4.0) 12.3	丸底	
C153住	3	3	H.A. ₁	不	明	不	明	不	明	ハ	テ	メ	(3.3) 13.0	丸底	
C153住Pn	4	4	H.A. ₁	不	明	ヨ	コ	ナ	デ	チ	ナ	ア	(5.8) 14.0	丸底	
C153住Pn	5	5	H.A. ₁	ハ	ケ	メ	不	明	ハ	ケ	メ	ナ	(6.1) 14.6	丸底	
C153住	6	6	H.A. ₁	ヨ	コ	ナ	デ	ヨ	コ	ナ	デ	不	(7.0) 14.4	両面煤	
C153住	7	7	H.A. ₁										(3.1)	丸底	
C153住Pn	8	7	表B	ヘラミガキ	ヘラミガキ	指巻きササエ	指巻きササエ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	指巻きササエ	ヘラミガキ	ケズリ	(9.9) 7.0	両面朱	
C153住	9	8	裏C ₁	不	明	ヨ	コ	ナ	ア	不	明	明	(5.3) 15.0	外面部	
C153住Pn	10	9	裏B ₁	ヨ	コ	ナ	デ	ヨ	コ	ナ	ア	ハ	ケ	メ	ヘラミガキ
C153住	11	10	裏B ₁	不	明	ヨ	コ	ナ	デ	ヨ	コ	ナ	ア	ヘラミガキ	(22.0) 17.6
C153住Pn	12	11	裏B ₁	不	明	ハ	タ	メ	テ	ラ	ミ	ガ	キ	(7.2) 16.2	13.2 (20.2)
C153住床	13	12	裏B ₁												25.6
C153住	14	12	裏B ₁	不	明	ハ	タ	メ	テ	ラ	ミ	ガ	キ	(2.0)	13.7 25.6
C153住	15	13	裏B ₁												
C153住Pn	16	13	軸												
C153住Pn	17	14	砥石	扁平橢円形	上下二面砥滑面	長さ13.1cm	幅7.7cm	厚さ3.9cm	重量0.51kg	石材	一塊粒石質鍛瓦岩				
C153住床	18		管玉	長さ5mm、太さ(径)4.9mm、質地白径1.8mm、重さ0.44g	石材蛇紋岩										
Ca21住 ^壁	19	15	H.A. ₁	ヨコハナメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(6.2) 14.4	丸底	
Ca21住 ^壁	20	16	砥石	板状直方体・上下二面砥滑面、長さ16.6cm、幅6.1cm、厚さ2.1cm、重量0.44kg	石材	一塊粒石質鍛瓦岩									

第27表2 積穴住居跡出土遺物一覧

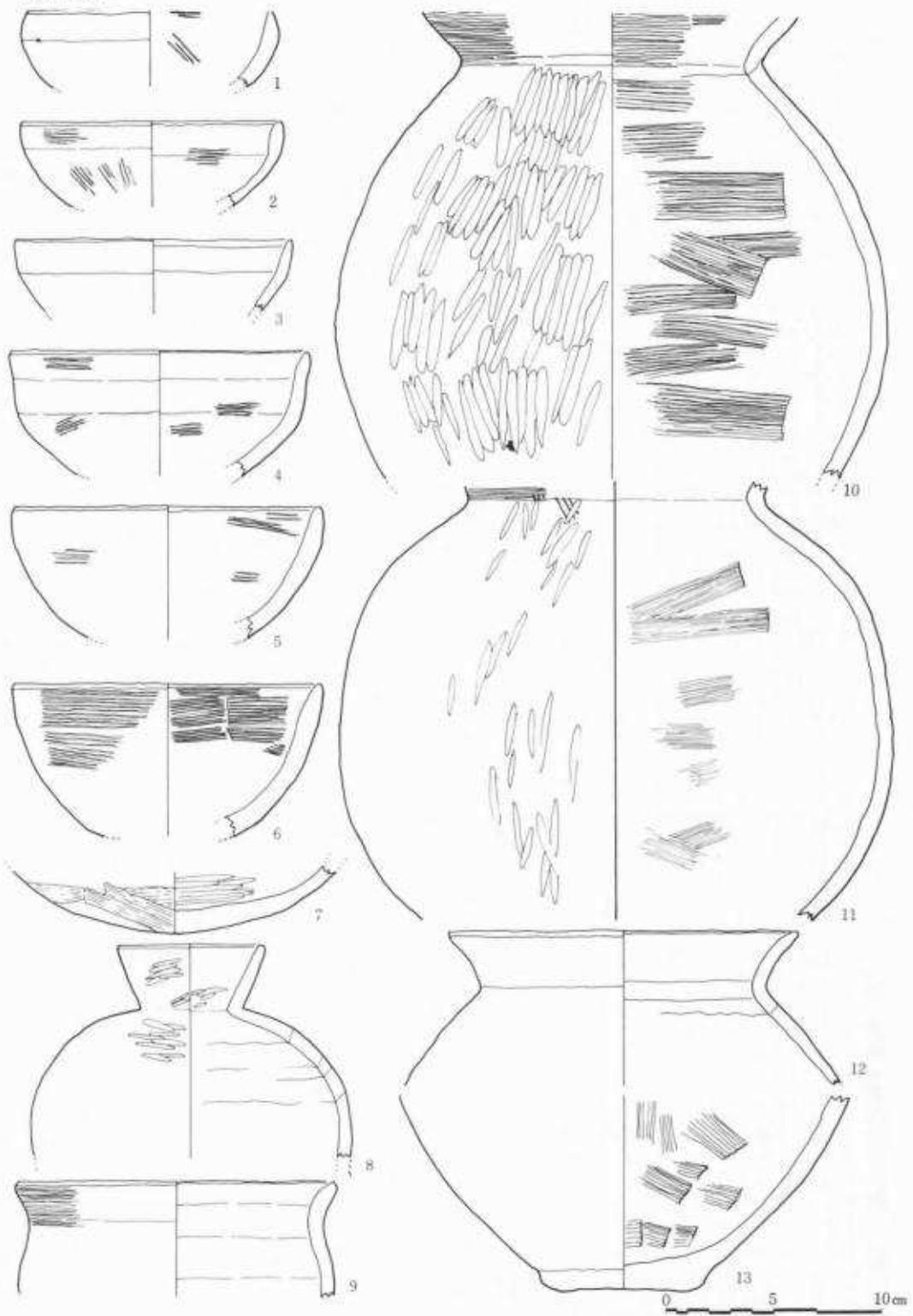
出土地	玉器番号	写真番号	器種	内面		外面		体部		上半		下半		體部		F半		E半		底盤		縫隙		網査	
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面												
Ch21住Pn	21	17	蝶B1																						
B13住床	22		蝶A																						
B13住北溝	23	18	蝶C1	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不	明	ヘラミガキ	ヘラミガキ					(23.5)	30.0	16.2	19.0				
B13住北溝	24	19	蝶C2	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ハ	テ	メ	ヘラミガキ					(25.2)	21.4	16.5	19.6				
B13住北溝(1)	25	20	蝶	ヨコハケメ	ヨコハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ										26.5	21.5	18.6	20.2	9.0	無底式	
B162住	26		蝶A	不	明	不	明	不	明										(4.3)	15.0				丸底	
B162住	27		蝶A																						丸底
B162住	28	21	蝶A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	不	明	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ハ	ケ	メ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	2.8			外面部	
B162住	29		蝶A																						丸底
B162住	30	22	蝶C1	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ハ	ケ	メ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丸底	
B162住	31	23	蝶B	不	明	ヨコナデ	ヨコナデ	ハケメ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丸底									
B13住北溝	32	24	蝶A	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丸底											
B13住北溝	33	25	蝶A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丸底															
B13住北溝	34		蝶A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丸底															
B13住北溝	35	26	蝶A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丸底															
B13住北溝	36	27	蝶B1	不	明	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハケメ	ヨコハケメ	ハ	ケ	メ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丸底
B13住北溝	37	28	蝶B2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	不	明	ハ	ケ	メ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丸底
B13住北溝	38	29	蝶C2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ナ	ア	メ	ハケメ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	丸底	
B13住北溝	39	30	蝶																						
Ce24住Pn	40		蝶A	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	内黒																
Ce24住床	41		B11d																					5.6 (提人)	
Ce24住床	42	31	蝶B																						

()は現存部分の計測値 空白は欠損部

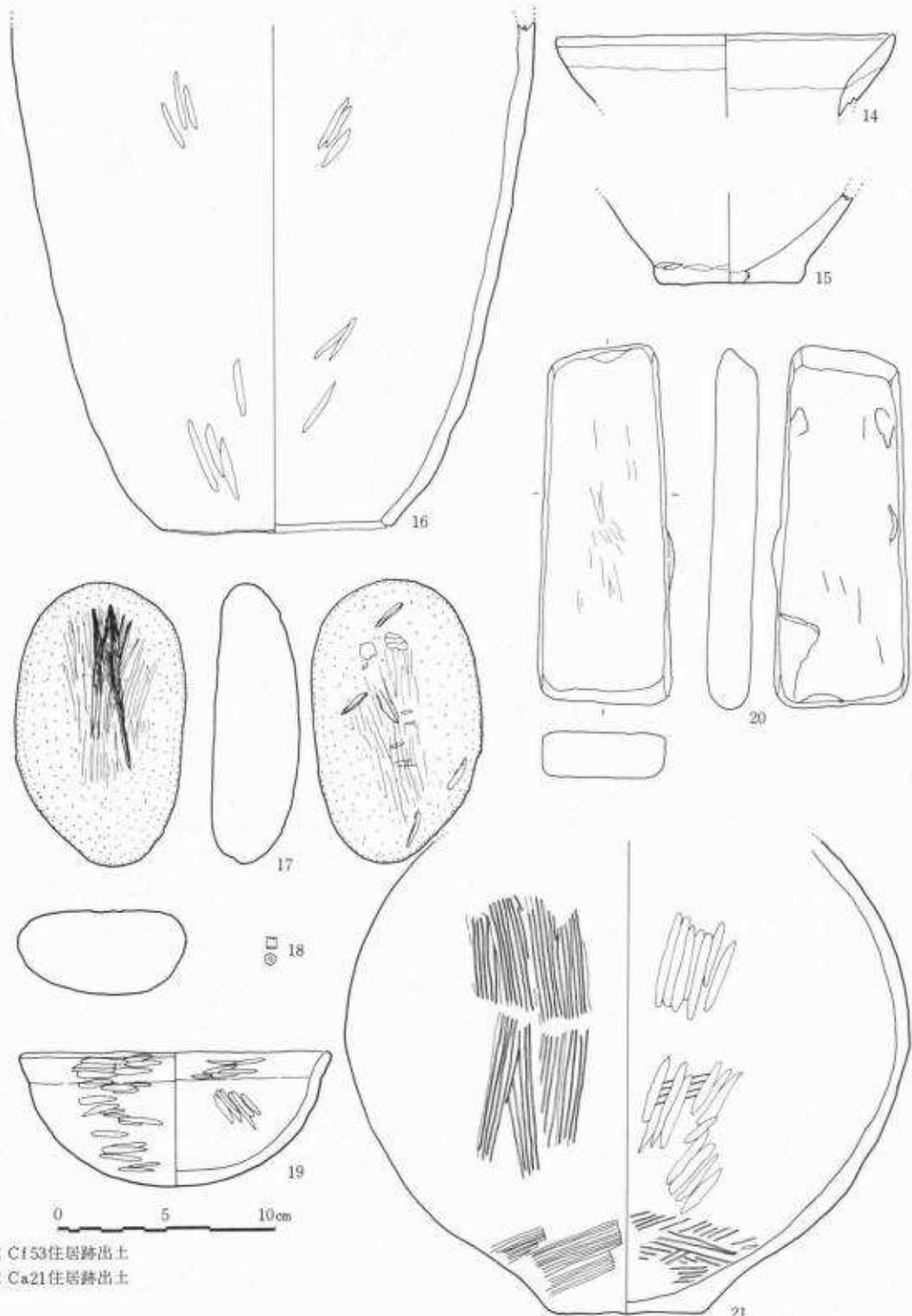
第27表3 穂穴住居跡出土遺物一覧

出土地 番号	実測圖 番号	写真 番号	器種	調				體				部				備考	
				内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	下部	上部	下面	上面		
Ce24E床 P _b	43	32	變C ₂	ハケテメテヨコナテ	木葉根	15.3	12.0	10.5	12.0	6.8							
Ce24E床P _b	44	33	變C ₂	不	明	不	明	不	明	ハケテメテヨコナテ	ハケテメテヨコナテ	木葉根	(5.4)	14.0	12.6	12.7	
Ce24E床 出	45	34	變C ₂	ハケテメテ後	木葉根	(11.6)	17.6	15.5	18.0								
Ce24E床P _b	46	35	變C ₂	ハケテメテ後	木葉根	(10.2)	19.6	15.0	16.0								
Ce24E床	47	36	變C									木葉根	(3.7)	不	明	7.0	
Ce24住	48		變C									木葉根	(1.9)	不	明	7.0	
Ce24住床	49	37	變C									木葉根	(2.0)			8.0	
Ce24通槽 鉢道	50	38	H.A									木葉根	(1.9)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	内黒	
Ce24通槽 鉢道	51	16	B.II _a									木葉根	(1.7)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	内黒	
Ce24通槽 鉢道	52	39	變C ₂	ハケテメテ後	木葉根	(9.2)	15.8	14.6	14.6								
Ce24通槽 鉢道	53	40	變C ₂	不	明	ハケテメテ後	ハケテメテ後	ハケテメテ後	ハケテメテ後	ハケテメテ後	ハケテメテ後	木葉根	(7.3)	18.0	14.8	15.0	
Ce24通槽 鉢道	54	41	變C ₂	ヨコナテ後	木葉根	(22.3)	17.2	20.0									
Ce24通槽 鉢道	55	42	變C ₂	ヨコナテ後	木葉根	(20.6)	19.2	20.4									
Ce24通槽 鉢道	56	43	變C ₂	ハケテメテ後	木葉根	(22.3)	20.5	18.0	19.6								
Ce24通槽 鉢道	57	44	變C ₂	ハケテメテ後	木葉根	(20.5)	19.5	14.8	24.0								
Ce24通槽 鉢道カット	58	45	變C ₂	ハケテメテ後	木葉根	(30.8)	20.0	16.6	22.4								
Bf30E壁 上	59	16	B.II _c									木葉根	(1.4)			4.6	
Bf30E壁 土下	60	46	變C ₂	ハケテメテ後	木葉根	(9.5)	15.0	13.4	13.8								
Bf30E壁 上	61	47	變C									木葉根	(1.9)			7.6	
Bf30E壁 土下	62	48	變C									木葉根	(8.0)	(15.0)	7.3		

— 西大畠遺跡 —



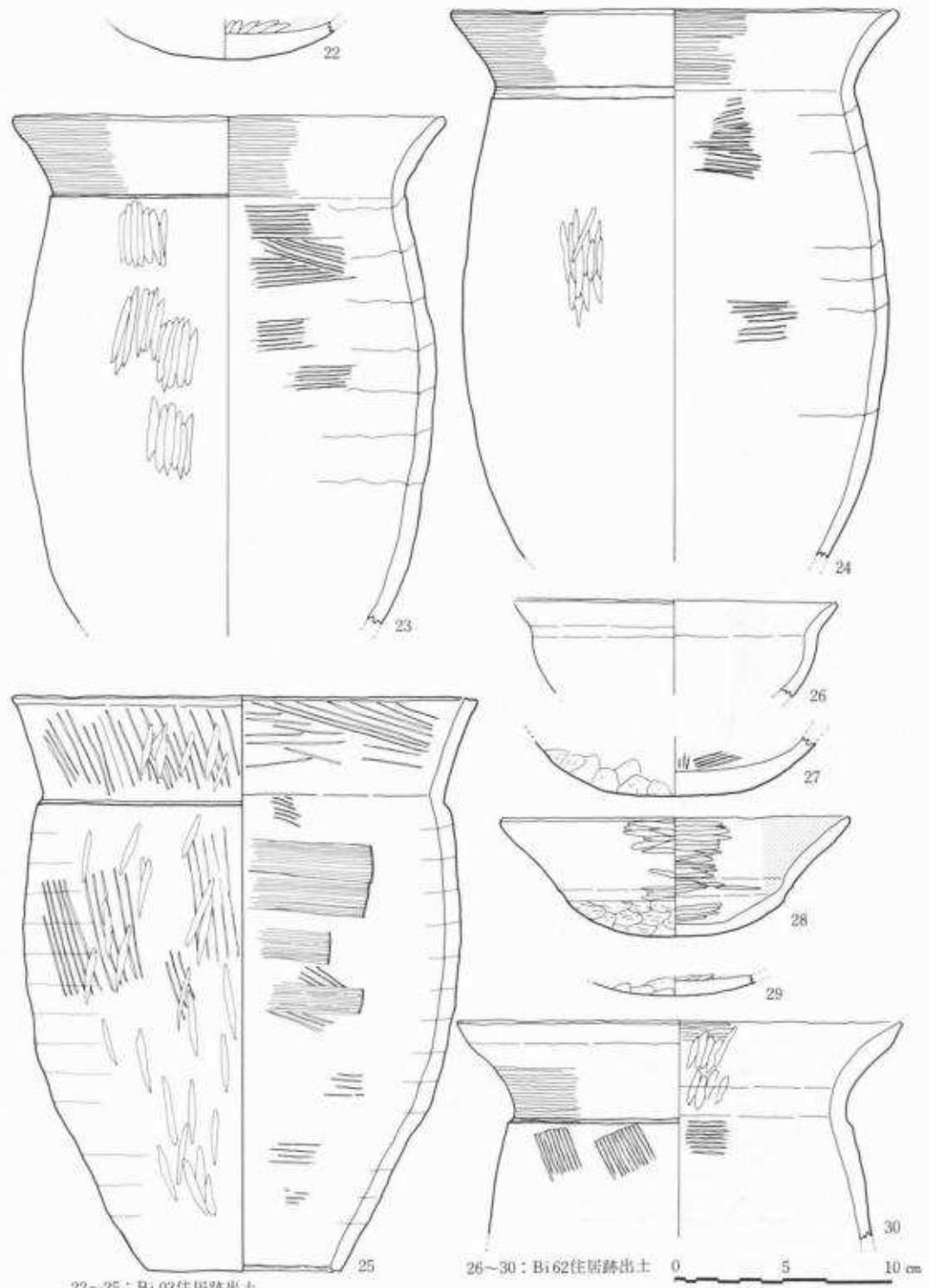
第15図 Cf53竪穴住居跡出土遺物



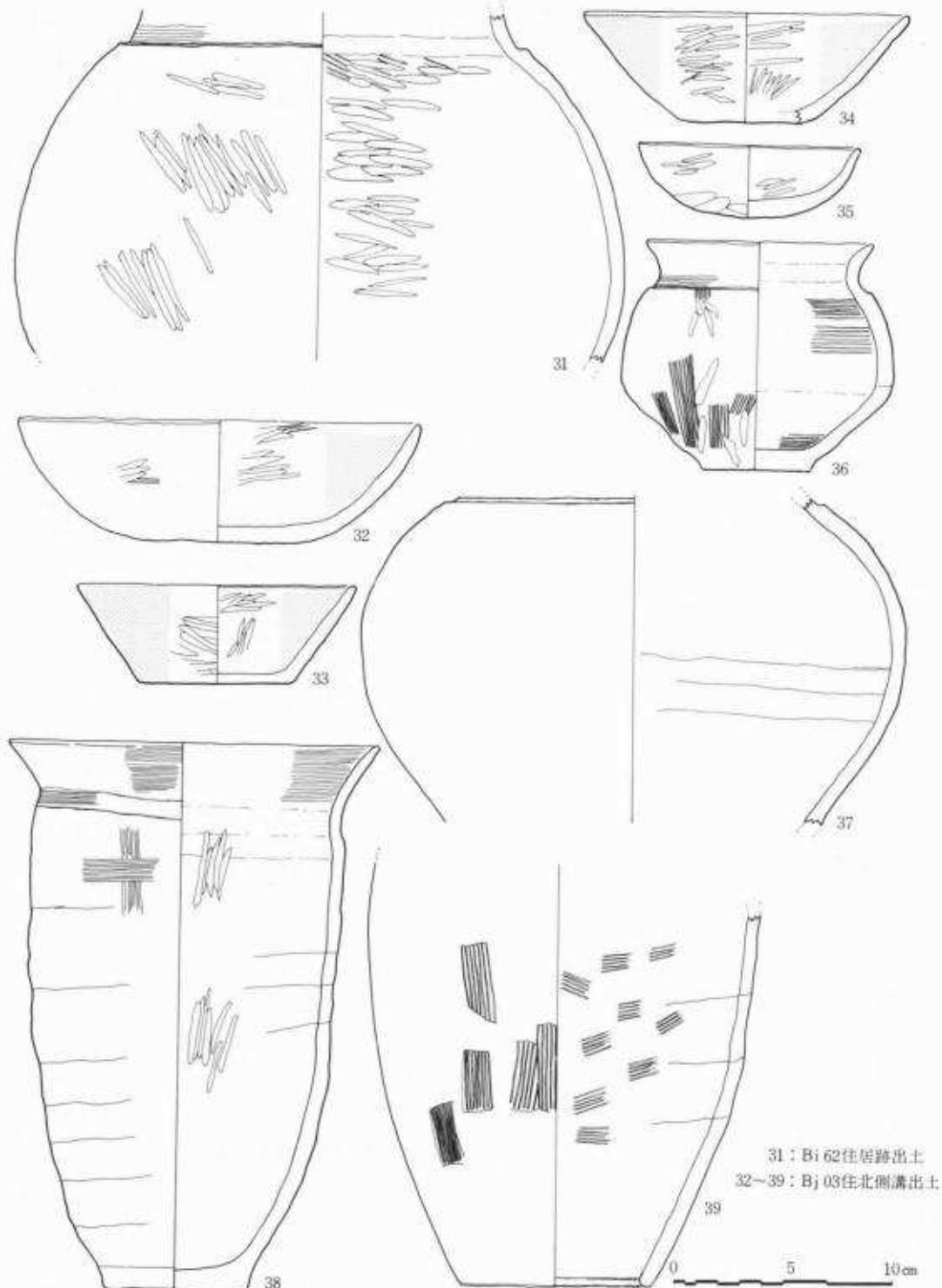
14~18 : Cf53住居跡出土
19~21 : Ca21住居跡出土

第16図 Cf53住・Ca21住出土遺物

— 西大畠遺跡 —

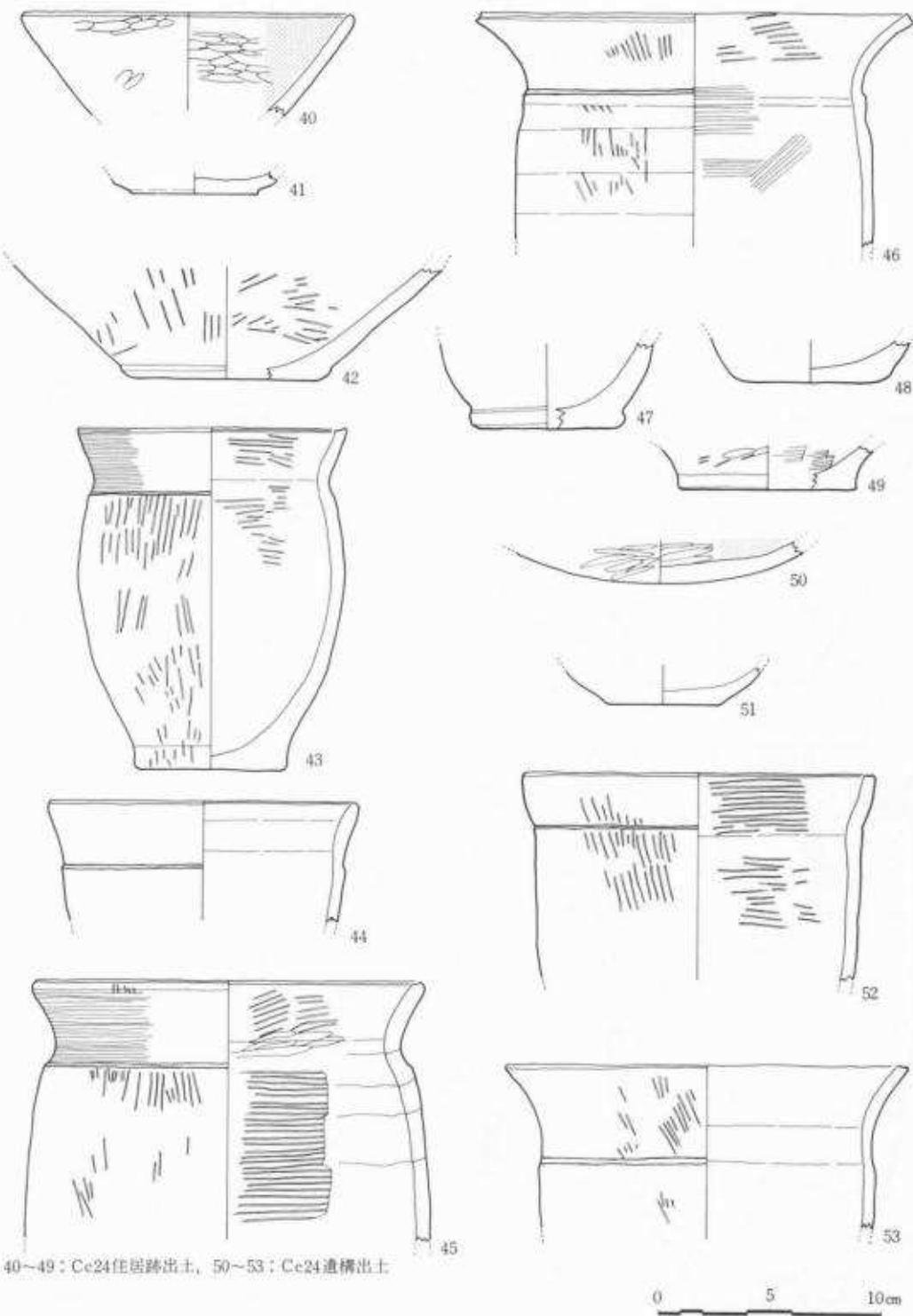


第17図 Bj03住・Bj62住出土遺物



第18図 Bi62住, Bj03住北側溝出土遺物

— 西大畠遺跡 —

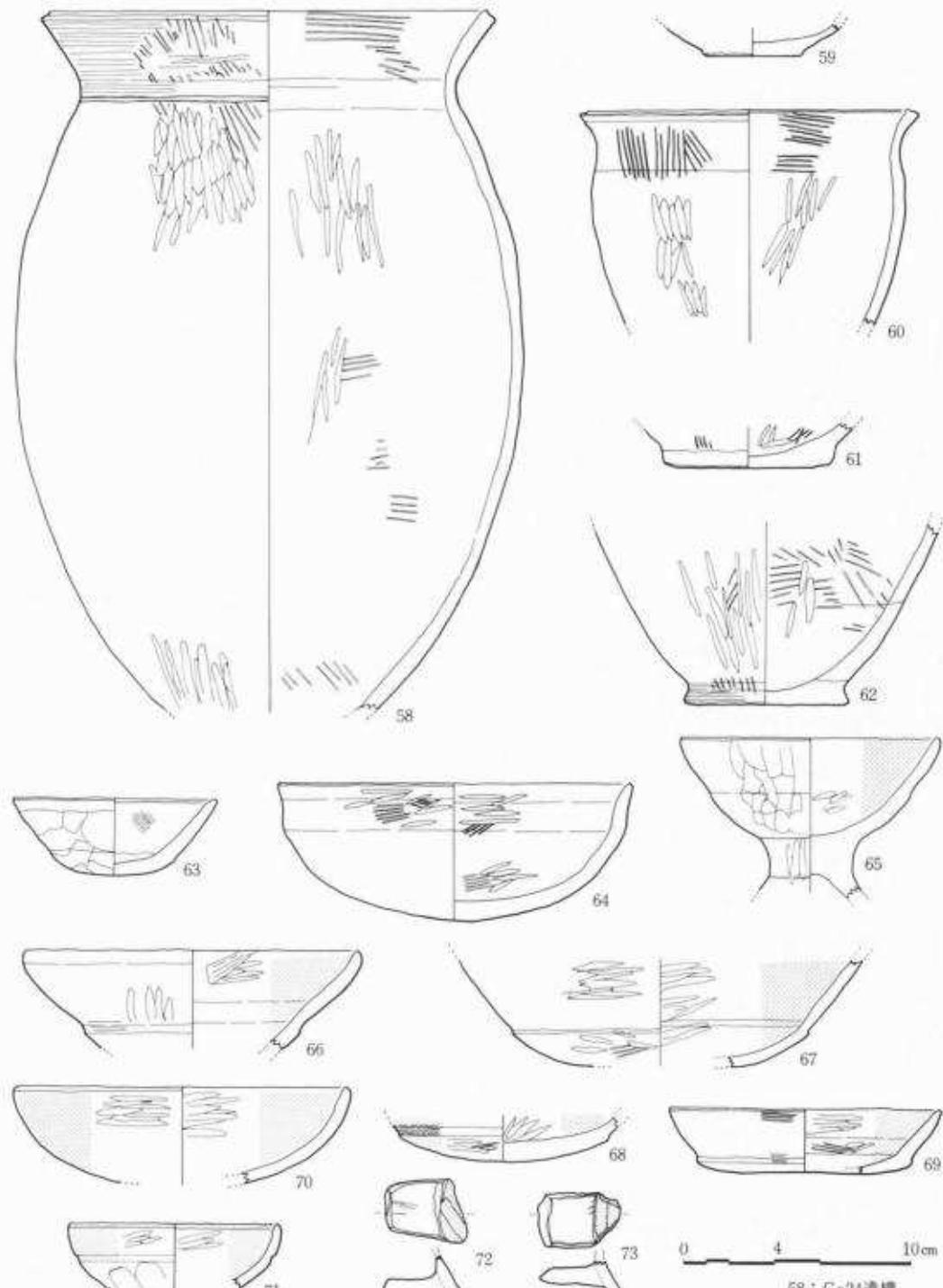


40~49: Cc24住居跡出土、50~53: Cc24遺構出土

第19図 Cc24住・Cc24遺構出土遺物

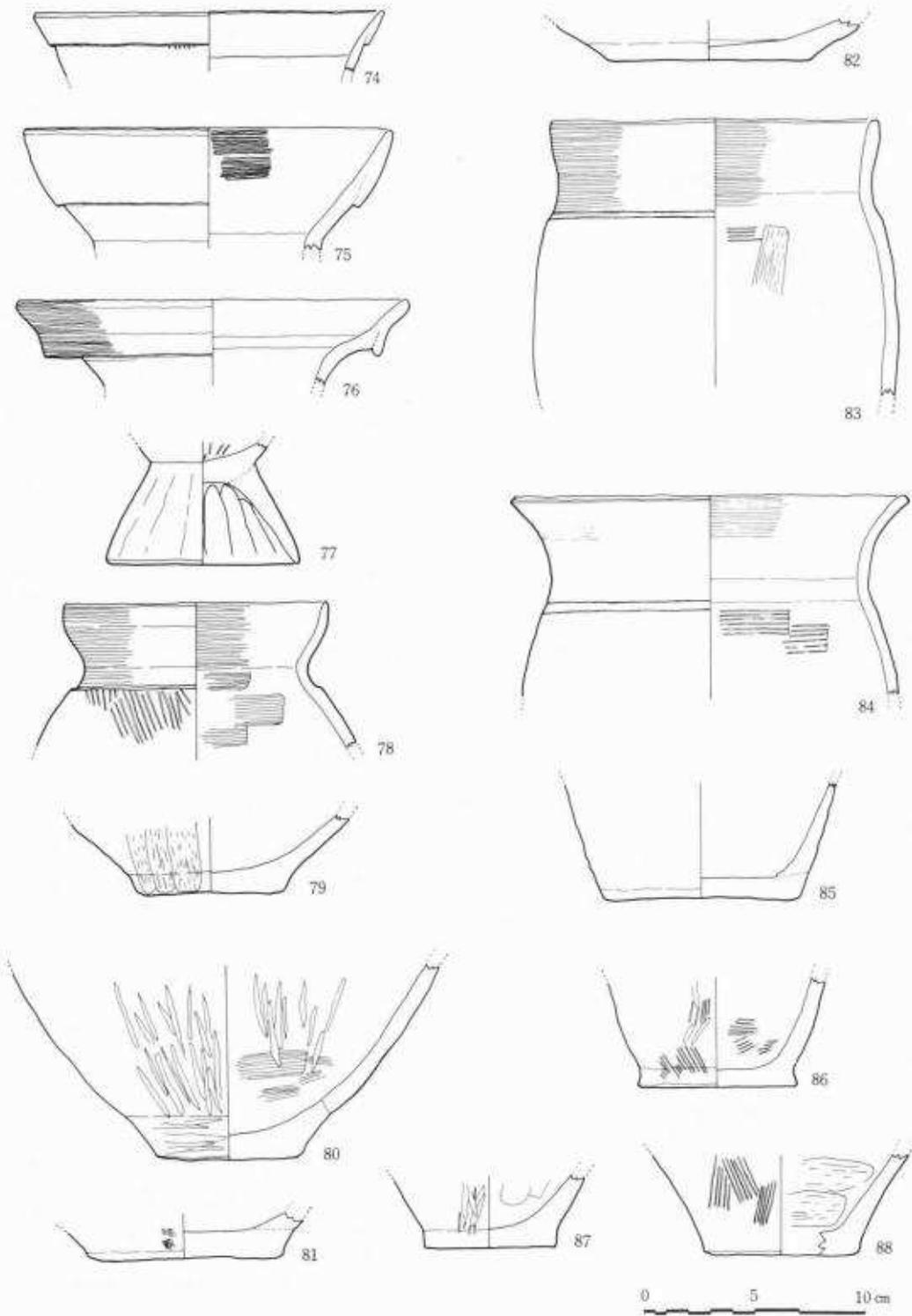


第20図 Cc24遺構出土遺物



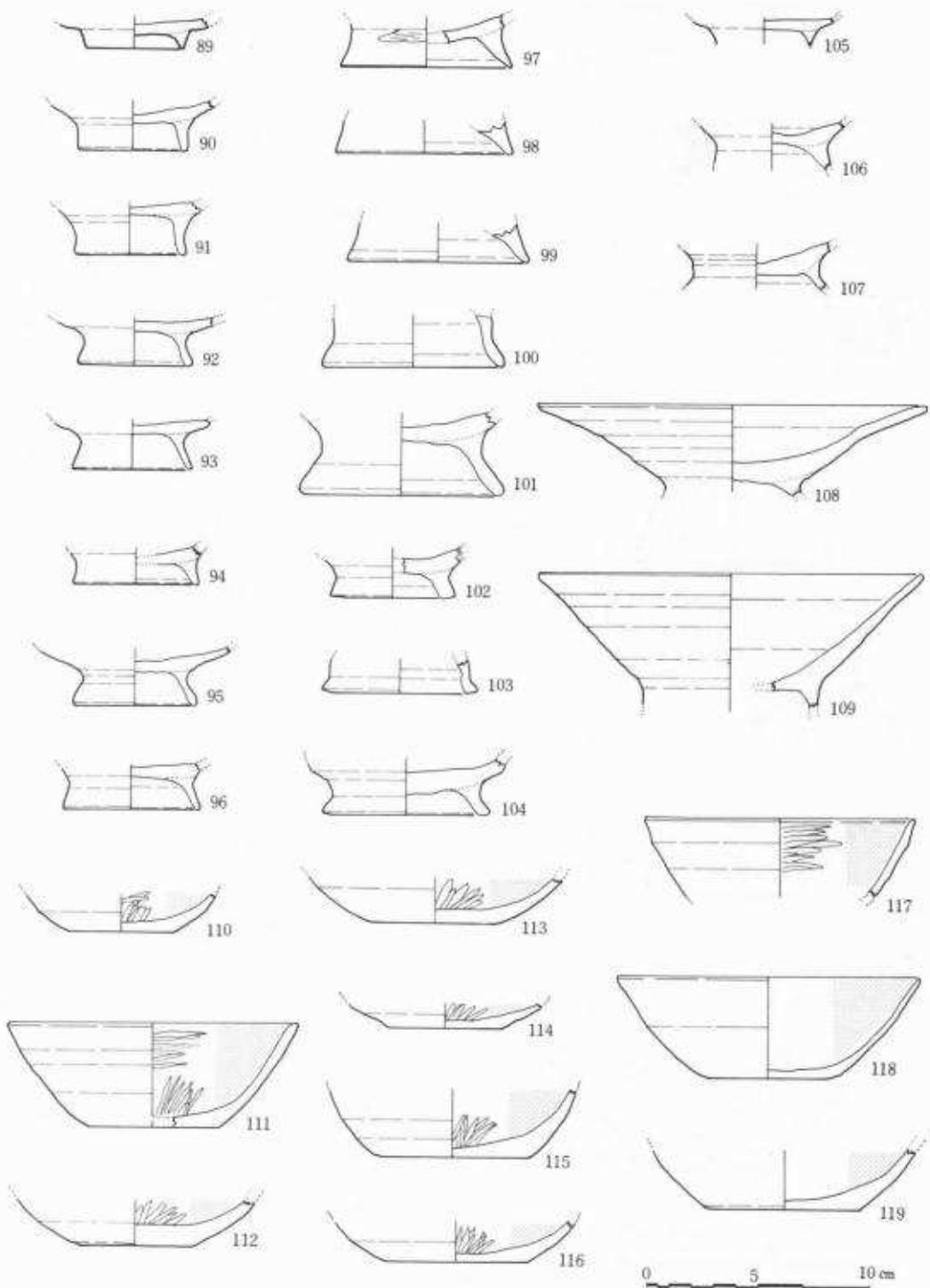
58 : Cc24遺構
59~62 : Bf30住居跡出土
63~73 : 溝、その他出土

第21図 Cc24遺構・Bf30住居跡・溝その他出土遺物

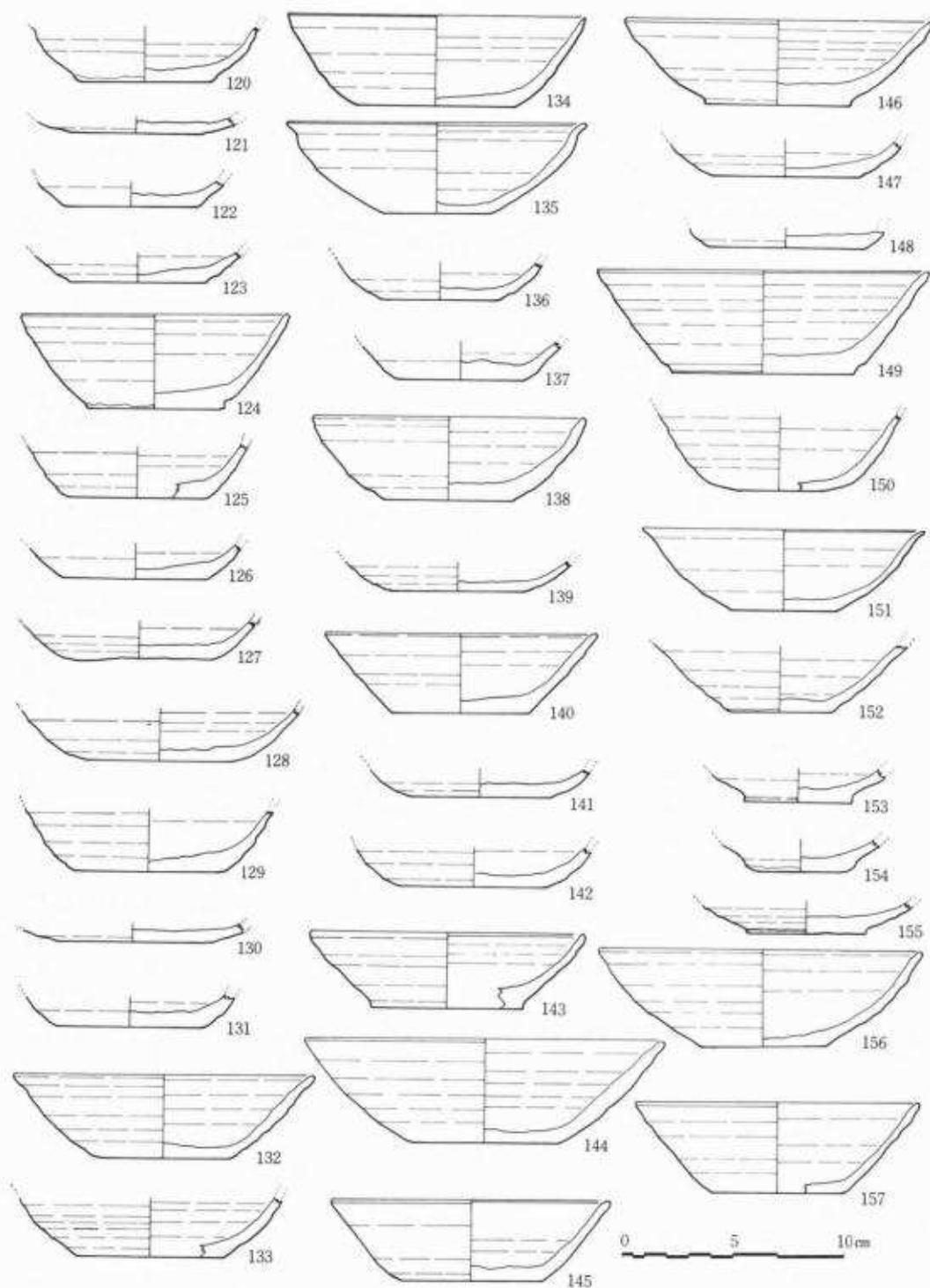


第22図 溝その他出土遺物

— 西大畠遺跡 —

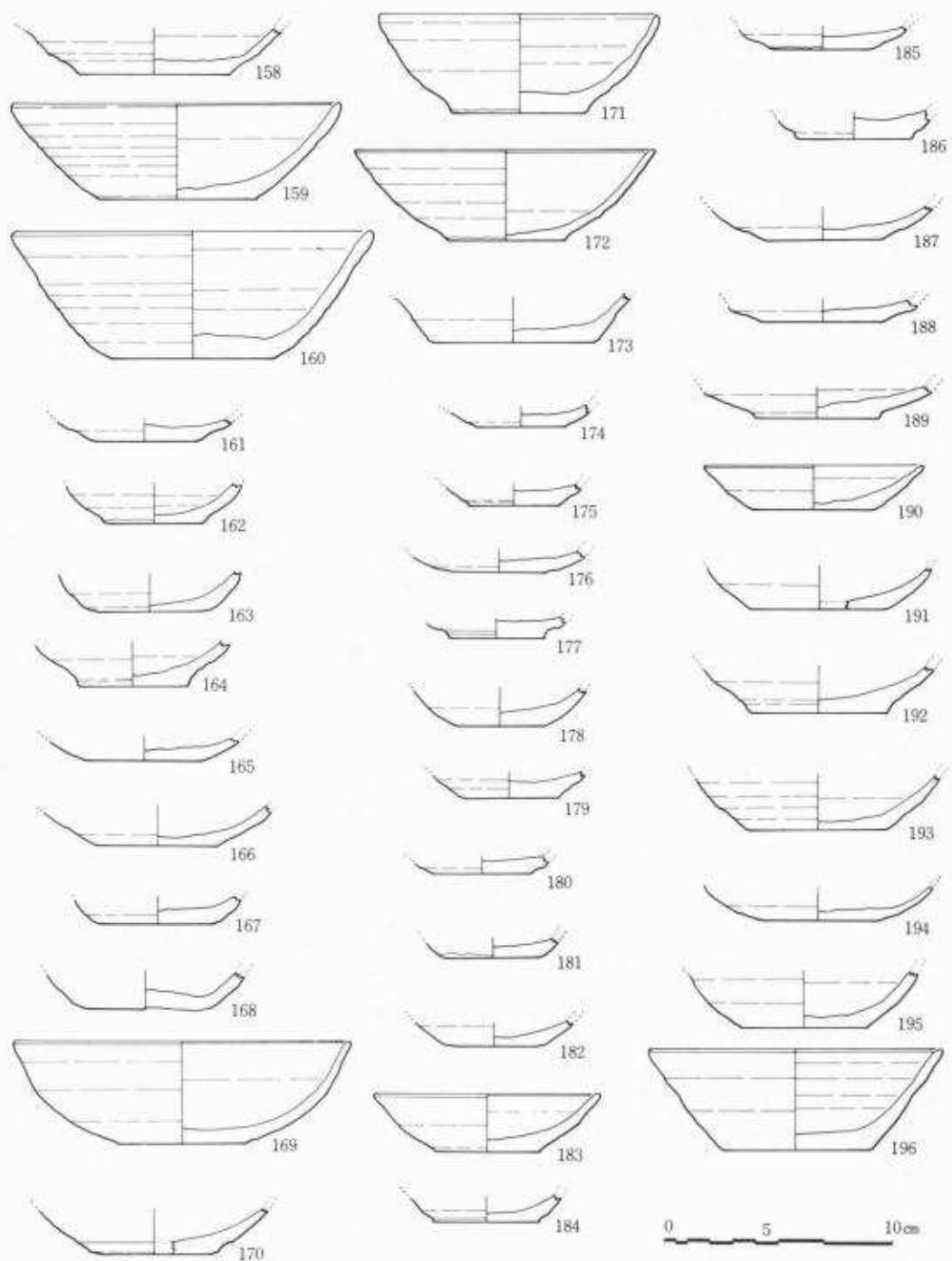


第23図 遺物包含地その他の遺物

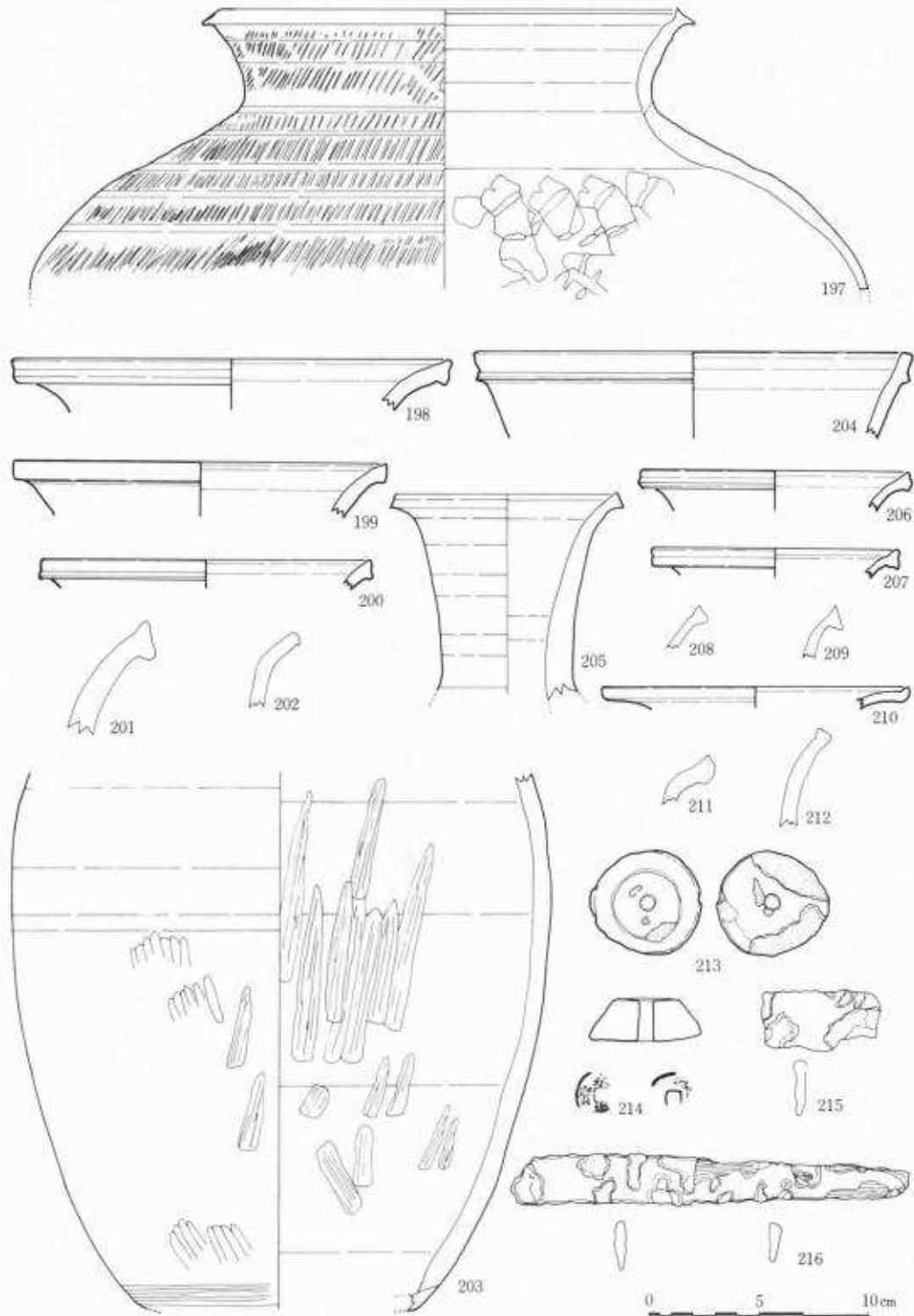


第24図 遺物包含地その他の遺物

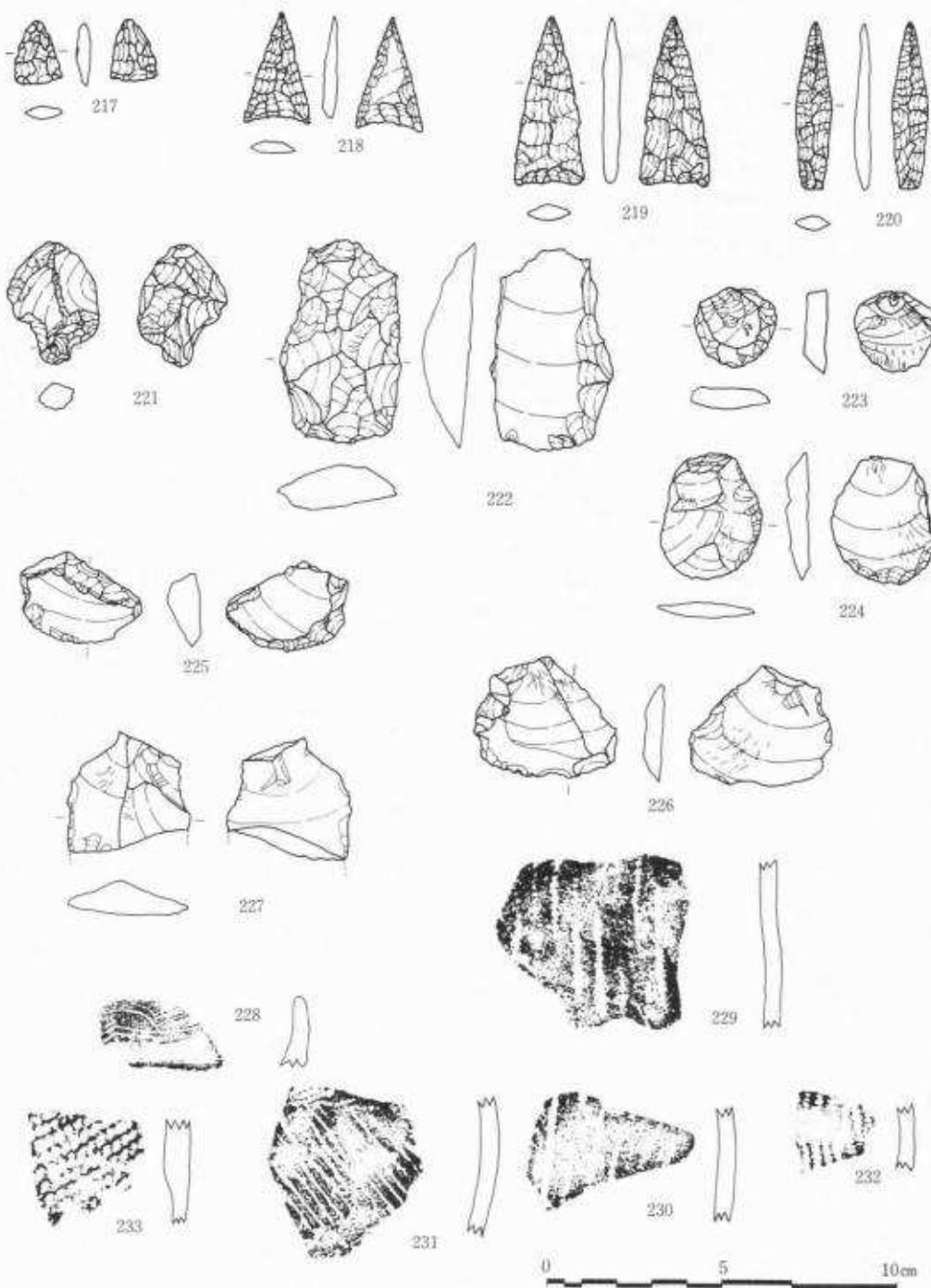
— 西大畠遺跡 —



第25図 遺物包含地その他の遺物



第26図 遺物包含地その他の遺物



第27図 遺物包含地その他出土遺物

VI 考察とまとめ

溝状土壌

段丘縁部微高地のやや平坦地に構築され、広範囲にまばらに分散して分布する。分布状態や配置の規則性等については限られた範囲の調査であり、4基だけの検出なので不明である。規模において多少の相違はあるが、いずれも同じ形態である。即ち開口部は狭小の溝状、底部は更に狭小の溝状を呈し、下に行く程せばまる。土壌内埋土は自然堆積であり、石鎚1点だけの出土である。周辺には多量の土師器・須恵器等の破片が分布するが、土壌内への混入は皆無であり、土器分布以前に埋没したものと思われる。竪穴住居跡や掘立柱建物跡により一部が切られている。形態や占地・出土遺物等より、縄文時代に構築された、けもの捕獲のための落し穴と思われる。

この土壌の名称は種々に仮称されており、又性格についても種々な説があるが、ここではその形態から溝状土構と仮称し、平面形・断面形・堆積土等から落し穴と思われる。県内各所より検出されており、都南村湯沢遺跡では「陥し穴状遺構」と呼称し、縄文中期末～後期初頭に位置づけている。久慈市三崎(Ⅲ)遺跡では「楕円形土壌」とし、伴出した炭化材の年代測定結果によれば縄文後期末～晩期初頭に属するものようである。

出土土器

当遺跡調査区内出土の土器を各器種の分類や出土状況等により、従来の土器型式等との比較検討をする。

- ① 複合口縁の壺Aや台付の甕A等はBj 3住居跡西方の溝とその周辺出土で、器面はかなり磨滅し調整は不明な点が多いが、器形上の特徴から古墳時代前期の土師器塙釜式期のものに近似する。尚この段丘縁部が統く西方400m程に古墳時代前期の高山遺跡がある。
- ② 非クロロ内黒丸底の壺A₁類、単純口縁で体部球形の小形壺B、体部球胴形で頸部に段を形成しない甕B₁、頸部に段のない長胴の甕C₁等は各住居跡で共伴し、その器形・器面調整等の特徴から古墳時代中期の南小泉式の土師器に類似するものと思われる。
- ③ 非クロロ内黒の丸底或いは平底の壺A₂～A₄、体部が球胴形で頸部に段を形成する甕B₂B₃、長胴形で頸部に段を形成する甕C₂C₃の一部は夫々各住居跡から共伴して出土し、その特徴から古墳時代末期から奈良時代前半の栗圓式の土師器に類似するものである。
- ④ 掘立柱建物跡や南西部遺物包含地に集中して多量に分布する遺物は共伴関係にある可能性が強いものと思われ、次のようなものがある。非クロロ土師器で、頸部有段の長胴甕C₂C₃・土師器ロクロ内黒の壺で、底部外面にケズリ調整のあるBIa、糸切無調整のBIb等は従来表杉ノ入式といわれるもので、9世紀中頃から11世紀中葉頃までと推定されている。ロクロ内黒の壺には、灰色・灰白色・にぶい橙色・淡橙色等の色調で、硬質・軟質があり、窪切り・

— 西大畠遺跡 —

糸切り・ケズリ調整等のあるBIIa～BIIcで須恵器といわれているものである。9世紀～11世紀初頭と推定される。又、坏BIId～BIIeはにぶい橙色や淡橙色・浅黄橙色の軟質なもので、全て糸切り無調整で底部が小さい。これは須恵系土器や土師質土器に相当するものと思われ、11世紀～12世紀末頃と言われている。高台坏は坏BIIeと胎土・焼成・色調等が類似し、遺物包含地でも坏BIIeと混在して出土している。この高台坏も須恵系土器や土師質土器に相当するもので、この中には器形的には高台皿に相当するものも一括した。須恵器壺・鉢・長颈瓶も全て破片であり、口縁部破片からの推定で壺7個体、鉢1個体、長颈瓶8個体の出土で、遺物包含地ではII層の上位出土である。尚ロクロ内黒坏、ロクロ坏、高台坏、須恵器壺・鉢・長颈瓶は伊沢城出土のものと近似するものようである。これらロクロ成形・調整の土器は平安時代に属するもので、非ロクロ土師器甕もこれらに共存するものと思われる。

豎穴住居跡（第28・29表）

豎穴住居跡は8棟の検出で、調査区の段丘縁部全域に分布する。豎穴の構造・伴出遺物等の特徴から大きく2つに分けられる。

第1類：豎穴平面形が方形で、カマドをもたないもの。これには平面形がやや正方形に近い大形のもので、各辺が夫々東西・南北方向に沿い、壁際に部分的に周溝がめぐる Cf53住居跡、Cb50住居跡と平面形が長方形をした小形のもので、方向がばらばらな Ca21住居跡・Bf30住居跡がある。4個の主柱穴と壁際に2個の柱穴を有する。Ca21住居跡ではがが確認されたが、他は削平や攪乱等により不明である。

伴出土器は全て非ロクロ土師器で、須恵器を伴なわない。坏は非ロクロ非内黒丸底の坏A₁類で、ハケメやミガキ等の調整痕があり、朱塗りのものもある。甕は球胴形頸部無段の甕Bi類と長胴形頸部無段の甕C₁類で、ハケメやミガキが施される。盤は長胴形甕の底部を欠いた形の無底式で、ミガキが加えられる。その他小形壺や砥石が伴出する。これらの特徴は南小泉式の土器に類似すると思われ、古墳時代中期頃の豎穴住居跡と推定される。

第2類：平面形が隅丸方形で、カマドを有する豎穴。Bj3住居跡、Cc24住居跡、Cc24遺構等は方向がほぼ南北で、北壁にカマドを有し、煙道から南流する溝をもつ。Bi62住居跡はこれ等3棟とは方向が異なり、全掘していないので規模やカマド等不明であるが、伴出土器が共通するのでここに入れた。豎穴第2類の伴出土器は全て非ロクロで、須恵器を伴なわない。坏は非ロクロ内黒坏A₂～A₄類である。甕は頸部有段の球胴甕B₂類や長胴甕C₂C₃類である。坏や甕の特徴は栗田式に類似するものであり、カマドが普遍的にある事から末期古墳から奈良時代初期にかけての豎穴住居跡と思われる。

掘立柱建物跡（第30表）

北西部微高地に6棟の掘立柱建物跡がある。北の4棟は柱掘り方の重複関係から、Be24A・

Be24B・Bf21A・Bf21Bの順に建てられたものであり、各建物の磁北に対する振れが同じで、南側柱列が重なる事から建て替えが行なわれたものと思われる。柱掘り方混入土器や周辺分布土器で多量なのは非クロ土師器甕、須恵器壺・鉢・長頸瓶、ロクロ内黒坏、ロクロ坏、高台坏等で破片であり、建物内で使用されたものと考えられる。

Bh27建物跡は前記4棟の南に隣接し、柱筋で最も接近している所では1.4m、建物の磁北に対する振れも異なり、同時存在とは考えられない。Be24A・B、Bf21A・B建物跡に接近している北側柱列の柱掘り方に土器片が多く混入しており、北の4棟より後に建てられたものであろう。建物周辺にも土器片が多く分布し、この建物内では使用されたものと思われる。

Bh27建物跡の南4.3m程にCa21建物跡がある。建物の磁北に対する振れが異なる。東妻北柱掘り方にロクロ坏、非クロ土師器甕の破片が各1点ずつ混入しており、北からの流れ込みと考えられ、6棟の中では最も新しいかも知れない。建物周辺には多量の土器片が分布するが、柱掘り方に入っておらず、この事はこの建物内でこれ等の土器が使用されたものと思われる。

以上6棟の掘立柱建物跡は、占地・規模・使用されたと思われる土器類に共通するものがあり、前後はあるが、ある限られた期間に継続して建てられたものと思われる。これら建物の伴出土器と考えられるものの内、ロクロ内黒坏、ロクロ坏、高台坏、須恵器甕・鉢・長頸瓶等は明らかに平安時代に属するものである。限られた範囲内の調査ではあるが、この時期の竪穴住居跡は検出されず、掘立柱建物跡だけの検出であり、伴出土器が胆沢城出土のものと類似する事等から、何か特殊な施設としての建物であった可能性も考えられる。

調査区南東のCe65建物跡は前期6棟とはかなり異なる点が多い。これらの建物とは離れた低地にあり、建物の磁北に対する振れが異なり、東西両妻中柱の掘り方がない。等間ではあるが、梁行と桁行が直角でなく、平行四辺形に近い形の建物と思われる。柱掘り方が小さく、埋出土遺物は皆無であり、柱穴も14cmと小さい。周辺分布遺物は肩部有段、ハケメ後ミガキ痕のある土師器長胴甕4個体分、球胴甕1個体分だけであり、柱掘り方に1片も混入していないので、建物内で使用されたものかも知れない。これ等の甕は渠開式のものに近似すると思われ、7～8世紀の建物跡であるかも知れない。

南西部遺物包含地

南西部遺物包含地は崖を境にして北の段丘縁部より1m程下がって低湿地の沖積地にあり、遺構は認められず、土器片が集中して分布している。多量に出土したのは非クロ土師器甕、ロクロ坏、須恵器壺・鉢・長頸瓶、ロクロ内黒坏、高台坏等の破片で、これ等は掘立柱建物跡周辺分布の土器と同類のものである事から、掘立柱建物で使用された土器が人為的に廃棄されたものであり、廃棄場所であったものと思われる。土器廃棄が行なわれたのはⅡ層の下位がある程度堆積した頃で、掘立柱建物使用時期の平安時代と思われる。

— 西大畠遺跡 —

以上の事からこの段丘縁部は縄文時代から種々に利用されてきた事がうかがえる。

縄文時代：竪穴住居跡は検出されなかったが、少量ではあるが土器片、石器等が分布する事から生活が営まれた可能性もある。遺構としては落し穴と思われる溝状土壤の検出があり、狩猟の場として利用されたものと思われる。

弥生時代：遺構は検出されなかったが、少量の土器片出土から生活が営まれたかもしれない。

古墳時代～奈良時代前半：多量の出土遺物、竪穴住居跡の検出があり、集落が営まれていたものと思われる。

平安時代：多量の土器出土があり、掘立柱建物跡が検出されたが、竪穴住居跡は検出されない事から何か特殊な施設が置かれていたものかもしれない。

《注記》

- (1) 岩手県埋蔵文化財センター「都南村湯沢遺跡」(1978)
- (2) 久慈市教育委員会「三崎(Ⅲ)遺跡発掘調査報告書」(1978)
- (3) 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史第14輯』(1957)
- 圓田茂弘・桑原滋郎「多賀城周辺における古代环形土器」『研究紀要』宮城県多賀城跡調査研究所 (1974)
- (4) 新田賢「高山遺跡」岩手県水沢市文化財報告書第1集 (1978)
- (5) 水沢市教育委員会「胆沢城」(1977)

第28表 積穴住居跡一覧表

住居跡名	遺構確認面	平面形	大きさ (床面積)	方向	床面構造	柱穴の配置	炉またはカマド	貯藏穴状況
C153E住跡	表土下黄褐色 シルト質土	正方形	6.2×6.0m (35m ²)	南—北	床面下に掘り方なし	壁穴内に規則正しく 方形に4個配置	不 明	圓丸方形 (62×54×28cm) (90×68×19cm)
Cb50E住跡	表土下黄褐色 シルト質土	正方形 (推定)	5.7×(4.5)m (推計23.1m ²)	南—北	床面下に掘り方なし	壁穴内に3対の配置	不 明	焼 円 形 (85×60×25cm) (68×52×30cm)
Ca21E住跡	表土下黄褐色 シルト質土	長方形	3.8×2.85m (10.5m ²)	東—西	床面下に掘り方なし	壁穴内に方形に4個 配置	床面の東壁寄りが焼け ている。 (45×40cm)	焼 円 形 (78×58×33cm)
Bf30E住跡	表土下黄褐色 シルト質土	長方形	2.9×2.45m (6.44m ²)	北東—南西	床面下に掘り方なし	壁穴内に方形に4個 配置	不 明	焼 円 形 (40×35×22cm)
Bf31E住跡	表土下黄褐色 シルト質土	圓丸方形	5.0×4.6m (21.8m ²)	南—北	床面下に掘り方なし	壁穴内に規則正しく 方形に4個配置	北壁中央にカマド設置、 煙道部、煙出し部残存 し部に分かれれる。	不 燒 形 (102×70×27cm)
Ce24E住跡	表土下黄褐色 シルト質土	圓丸方形 (推定)	3.5×2.8m (9.18m ²)	南—北	床面下に掘り方なし	不 明	北壁寄りにカマド。 煙道部、煙出し部残存	円 形 (85×85×25cm)
Bf62E住跡	表土下黄褐色 シルト質土	方形 (推定)	(4.7)×(3.7)m (残存部8.32m ²)	北東—南西	床面下に掘り方なし	不 明	不 明	不 明

第29表 壓穴住居跡出土遺物一覽

住居跡	器種	個體數	器形	分類	類別	均是夷調圓音弓
Cf53住居跡	环	7	HKA ₁ 類(1·2·3·4·5·6)	HKA類(7)		
	盞	1	羣B類(8)			
	甌	7	羣B ₁ 類(10·11·12·13·14·15)	羣C ₁ 類(9)		
	瓶	1	長脣豐形無底式(16)			
Cb50住居跡	砾石	1	(17)			
	管	1	(18)			
Ca21住居跡	甌	1	羣B ₁ 類			
	环	1	HKA ₁ 類(19)			
	甌	1	羣B ₁ 類(21)			
Bf30住居跡	砾石	1	(20)			
	环	1	HKB II c類(59)			
Bj 3住居跡	甌	3	羣C ₂ 類(60) 羣C類(61·62)	羣C類(61·62)	攪亂混入	
	环	1	HKA類(22)			
	甌	2	羣C ₂ 類(23·24)			
Cc24住居跡	饭	1	(25)			
	环	2	HKA類(40)	HKB II d類(41·混入)		
Cc24遺構	甌	8	羣B類(42)	羣C ₂ 類(43·44·46)	羣C ₃ 類(45)	羣C類(47·48·49)
	环	2	HKA類(50)	HKB II d類(51)		
	甌	7	羣C ₂ 類(52·53·56)	羣C ₃ 類(54·55·57·58)		
B162住居跡	环	4	HKA ₂ 類(28)	HKA類(27·29)		
	甌	2	羣B ₂ 類(31)	羣C ₂ 類(30)		

第30表 堀立柱建物跡一覧表

A—日樟，B—野樟。空几口不雨、1尺—约30.3cm

數字注破片數

南矢中遺跡

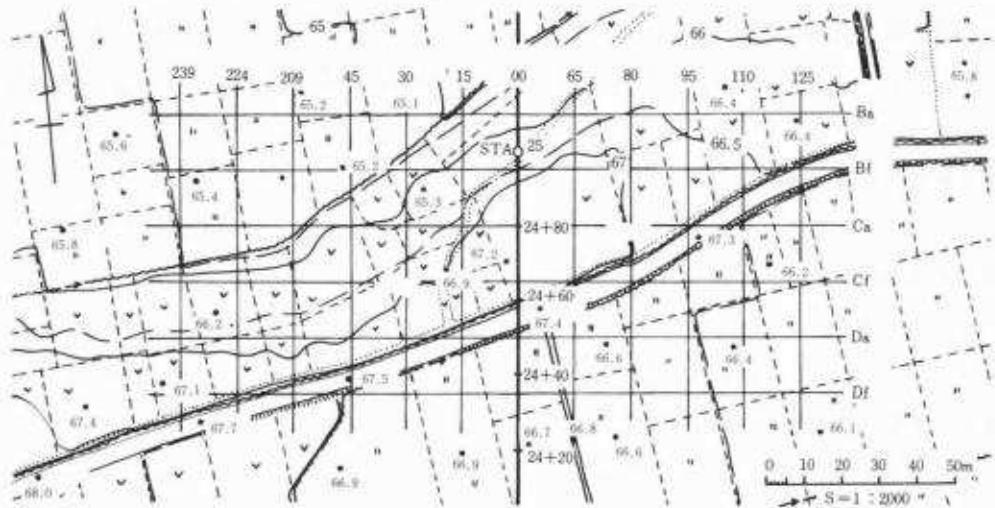
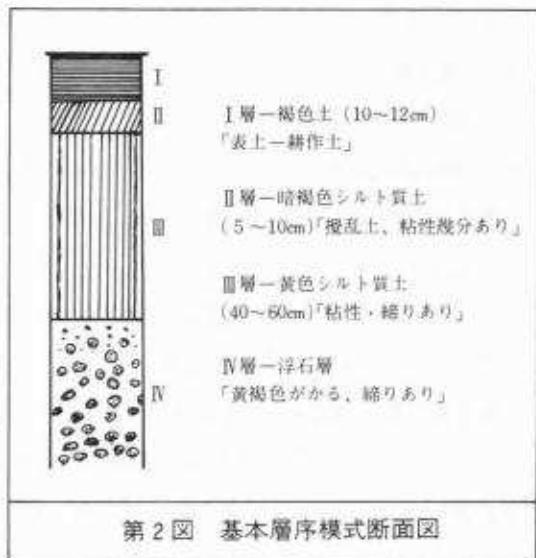
1. 遺 跡 名 南矢中遺跡 (MYN74・75)
2. 所 在 地 岩手県水沢市福原字南矢中
3. 調 査 主 体 岩手県教育委員会・日本道路公団
4. 調 査 担 当 岩手県教育委員会
5. 調 査 期 間 昭和49年10月29日～12月9日
昭和50年6月9日～9月6日
6. 調査対象面積 5800m²
7. 発掘調査面積 3820m²

I 位置と立地 (第1図、写真1図)

本遺跡は東北本線水沢駅西方約2.3kmの中位段丘最下段（胆沢段丘福原面）の北縁にあたり、東西に長く延びる段丘平坦面及び緩斜面に遺跡が立地する。海拔約66mで原状は畠地、水田宅地であった。調査範囲は工事用道路分、本線分及び県道付替えのための用地分であるが遺跡範囲としては東西に更に延びると思われる。周辺の遺跡としては鶴田の古墳群が西方に、東方に駿上の遺跡、南方には本調査関連の前谷地、北東には梨畠遺跡がある。

II 遺物包含層

1 [基本層序] 段丘形成後、自然営力及び人為的作用により地形及び層序の変化があった。右記の模式断面図は現状におけるものであるがIV層は周辺火山の噴出物に由来する村崎野浮石層である。歴史時代に於ける火山噴出物については、秋田焼山や十和田火山に由来するものが周辺の遺跡に見られる様であるが、本遺跡にてば、その存在を確認出来なかった。



第1図 南矢中遺跡 (地形及びグリッド配置図)

2 【遺物包含層】 分布調査にて土師器片の表面採取が行なわれた。出土物全体から見ると何らかの形で遺構との関わりを持つものが多く、層単独にて出土している遺物は少ない。また時代毎に成層状態を示すものは無く、単一層である。時期及び種類等は、縄文早期土器片及び石器等があり、寛永通宝らしき古銭に及ぶ。包含部位は基本層序の第Ⅰ・Ⅱ層である。

III 検出された遺構と遺物(第3図遺構配置図、写真1図)

本遺跡には縄文時代の陥し穴状遺構(楕円形状・溝状の二種)や平安時代の竪穴式住居跡及び方形の溝、小溝跡等があり、そのそれぞれの時代に応じる遺物が出土している。

1 縄文時代

(陥し穴状遺構)

イ、楕円形状遺構(この形式のものは底面に柱穴状のものをもつ。1号より6号まである。)

第1号土壙(Bc 71)(第16図、第1表)

平安期住居のカマドにて切られている。底面長軸方向に対しても直角の東西に2柱穴が設けられている。この柱穴の深さは約30cm程である。堆積層は壁上部の崩落土を含み、自然流入を示している。断面形は長方形であったろうと思われる。

第2号土壙(Bh 53)(第4図・第1表以下同)

平面形に比して、浅いのは表土の削平によるものと考えられる。底面の2柱穴は本土壙のほぼ長軸方向に配列している。それそれは底面より北側55cm、南側42cmと深く落込んでいる。また2柱穴の断面は下部ほど細くなっている。抗等を差し込んだものと考えられる。埋土の状況より本来の断面は方形を成したと思われる。埋土の最下底は踏込まれた感じの褐色土である。

第3号土壙(Cb 18)

円筒形の落込みで底面に2柱穴が(東側)34.8cm、(西側)39.5cmの深さを持ち検出された。埋土の状況は不明であるが断面形は方形を成していたと思われる。

第4号土壙(Ci 215)

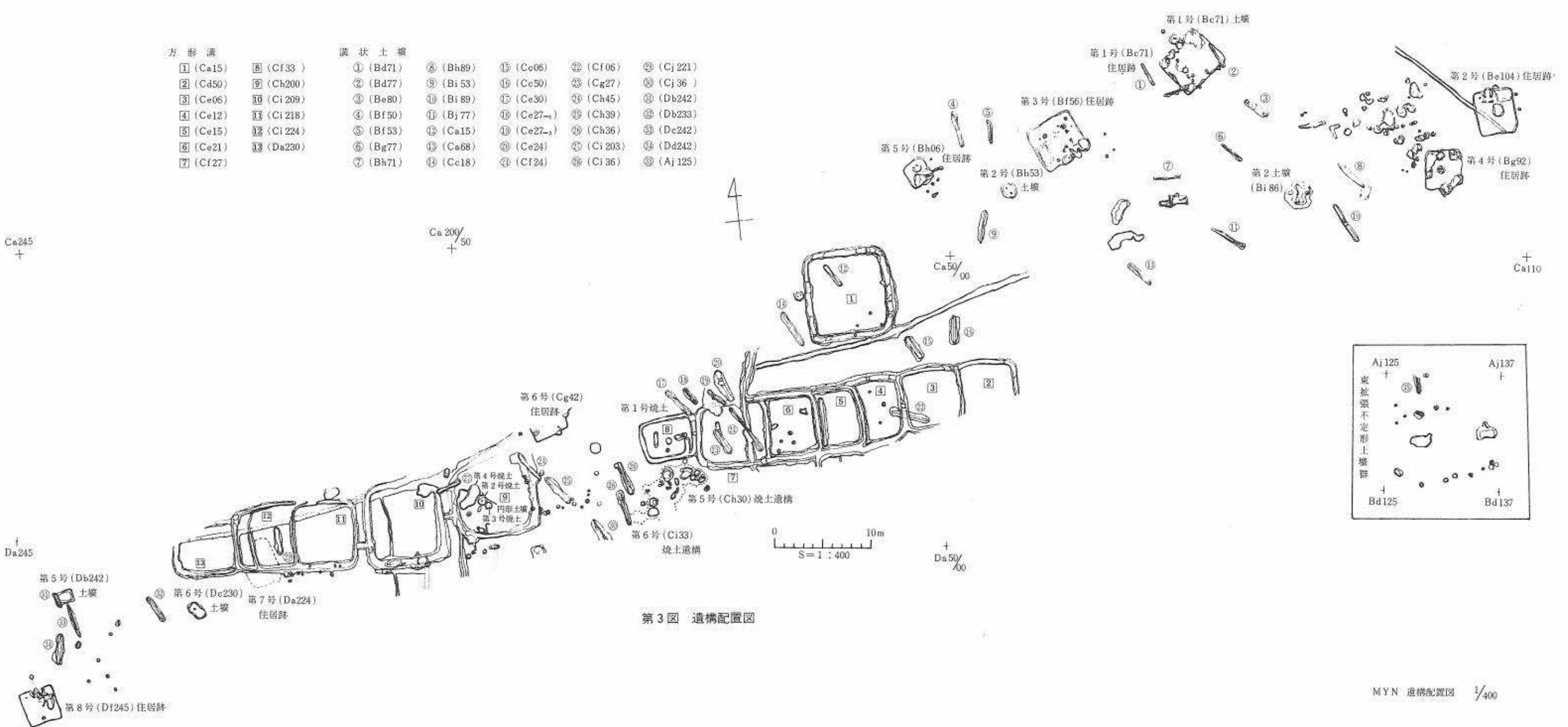
平面形が楕円に近い。明確に施設を持たぬ性格不明のものである。方形溝の傍に位置する。

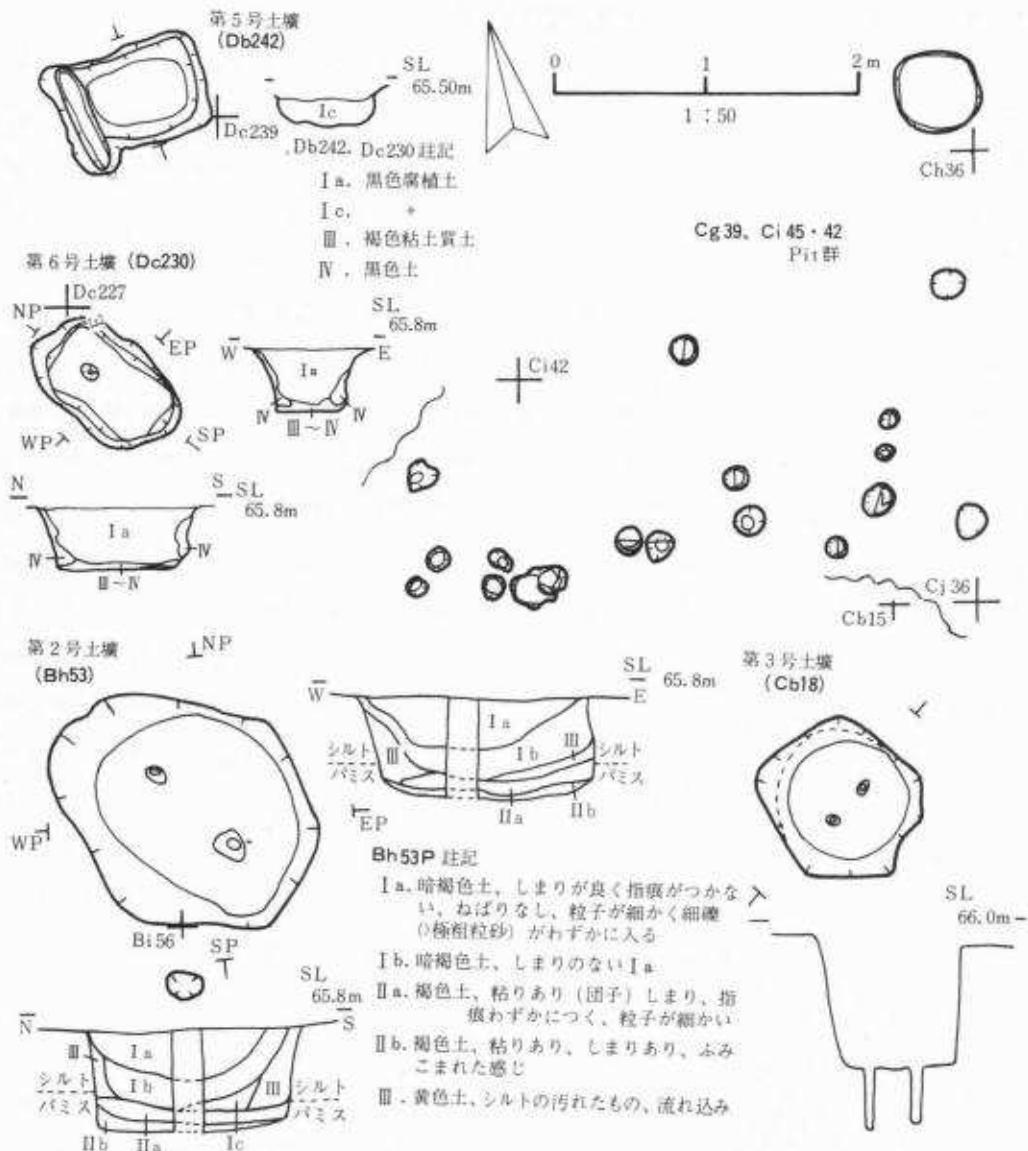
第5号土壙(Db 242)

平面形は隅丸方形に近い。西端を第33号溝状土壙にて切られている。底面に柱穴等見られない。検出埋土は一層で一気に埋没したものと思われる。他の土壙と異なった機能を考えられる。

第6号土壙(Dc 230)

底面形は隅丸の長方形である。北寄りに深さ約47cmの柱穴があるがこの断面形は下部程細くなる。埋土の状況よりは断面壁は直に立って居り、平面形も隅丸方形であったと思われる。





第4図 第2・3・4・5・6号土壤

(第1表)	剖面番号	位置番号	株立面積 m ²	底面積 m ²	方位	突出平面形	突出断面形	その他の	堆土状況	作物種類	地質構造との関連	備考
第1号 土壤 (Bz71)	16	13	1.40 × 1.25	0.9 × 1.0	1.05< N	不整円形	ビーカー形	底面に2小土塊	4層 自然堆積	なし	第1号 布穴式住居跡	カマドにて切られた
2 (Bh53)	4	2-1	1.50 × 1.80	1.1 × 1.5	0.65 NSEW	横 円 形	方 形	底面	3層	なし		
3 (Cb18)	4	2-3	1.1 × 1.1	0.85 × 0.6	0.60 NWNE	不整円形	四角形	底面	2層	なし		断面等の記錄なし
4 (Cj36)	3	25-1	1.6 × 1.3	1.4 × 1.0	0.52 NEE	不整円形	—	—	—	—	第11号 Cj36(8)方形溝北	断面等の記録なし
5 (Db242)	4	2-5	1.7 × 1.3	1.3 × 0.87	0.43 NWNE	左 斜 形	半円形	中面をもつ	1層 自然堆積	なし	第3号 布穴式住居跡に接する	
6 (Dc239)	4	2-4	1.2 × 1.1	0.8 × 0.7	0.46 NWNE	不整円形	方 形	底面に小土塊	3層	なし	底さ46cmの小土塊	
(内割土壤 Ch36)	39		1.05 × 1.05	0.7 × 0.7	1.29	—	長方形	底面に2小土塊	3層	あり	南北の高い小土塊と接す	底面に底さ20cmの小土塊

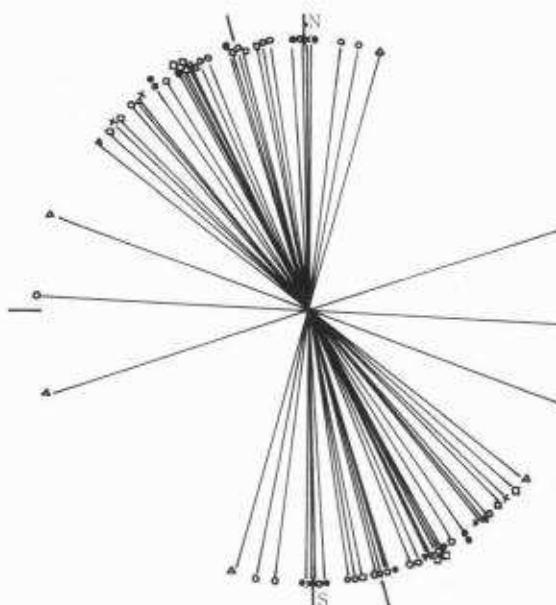
— 南矢中遺跡 —

口. 溝状土壤遺構 (第7~14図・第2表、写真3~6図)

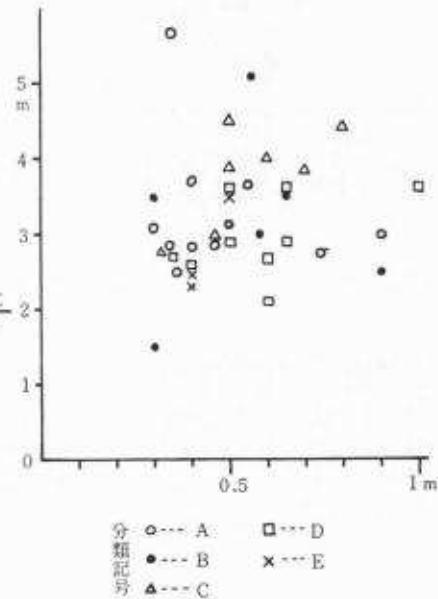
検出された総数は35基、その形状により5型式に区分して見た。それについては遺構配置順に図示し、一覧表にては区分した型式毎にまとめた。型式区分の規準は…A—底部が直線的で上場より狭い、B—底部は直線的で一端が壁より中にもぐる、C—底部両端が壁より中にもぐり膨らむ、D—底部両端平面形開く、E—Dより両端平面形更に開く (A11基、B5基、C7基、D9基、E3基) の以上である。各型式と埋土の関係についてはそれぞれ断面図中に示してあるが、縦断面の記録は少い。大半のものは自然流入による堆積であるが第4号遺構 (Bf50) のみ人為的に投げ込まれた形跡がある。断面図及び埋土註記を欠くものはほぼ他例に順する。それぞれの型式についての共通点は以下の通りとなる。(掘り下げ到達層) 基本層序IVの浮石層。(平面形) 軸方向の長短は見られるが復元形として隅丸の長方形である。(横断面形) 検出形は下端の平らな楔状を呈する。(縦断面形) 検出形は型式分類基準で示したごとの5形態の区分が出来る。(方位) 下図に示すごとく N40°W付近への振れの集中が見られる。(配列) 同一型式のものがまとまりを見せ平行に配置し、地形等高線にもほぼ平行である。(使用目的) 陥(注1) 穴説を本遺跡にても採用する。この使用目的において形態の5型式がどの様な意味を持つかについては今後の検討に待つ所であるが、その為の資料の一つとしては縦断面上層図が必要であろう。(遺構の年代等) 年代を判定する資料遺物を伴出しないので決定出来ないが、ほぼ縄文時代後期までのものと考えられる。

(注1) 本調査関連報告書第1集 高屋敷、大久保、大綾、高柳遺跡文中

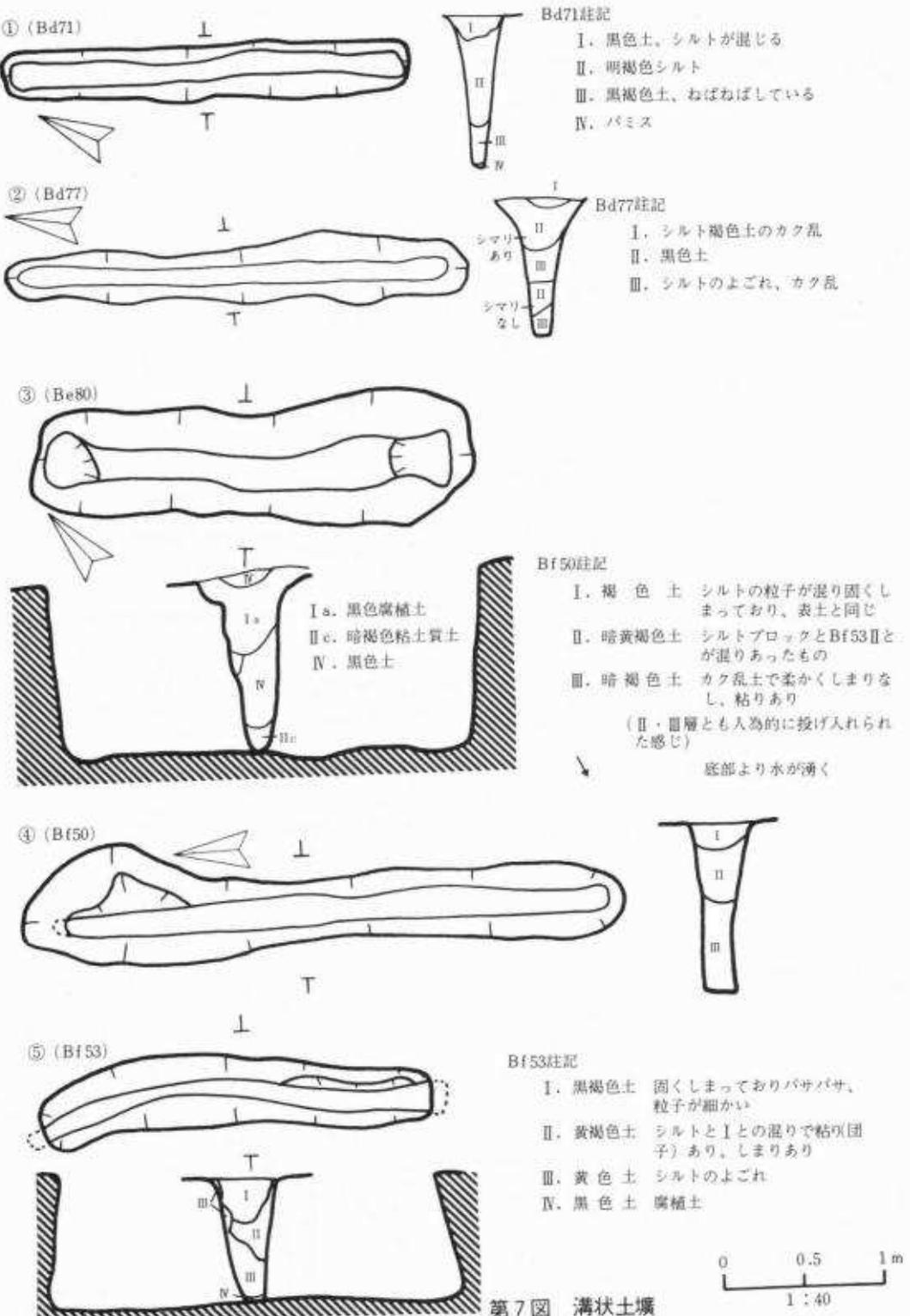
(注2) 岩手県(財)埋文センター調査報告書第2集 湯沢遺跡(昭和52年度)



第5図 方位集積図

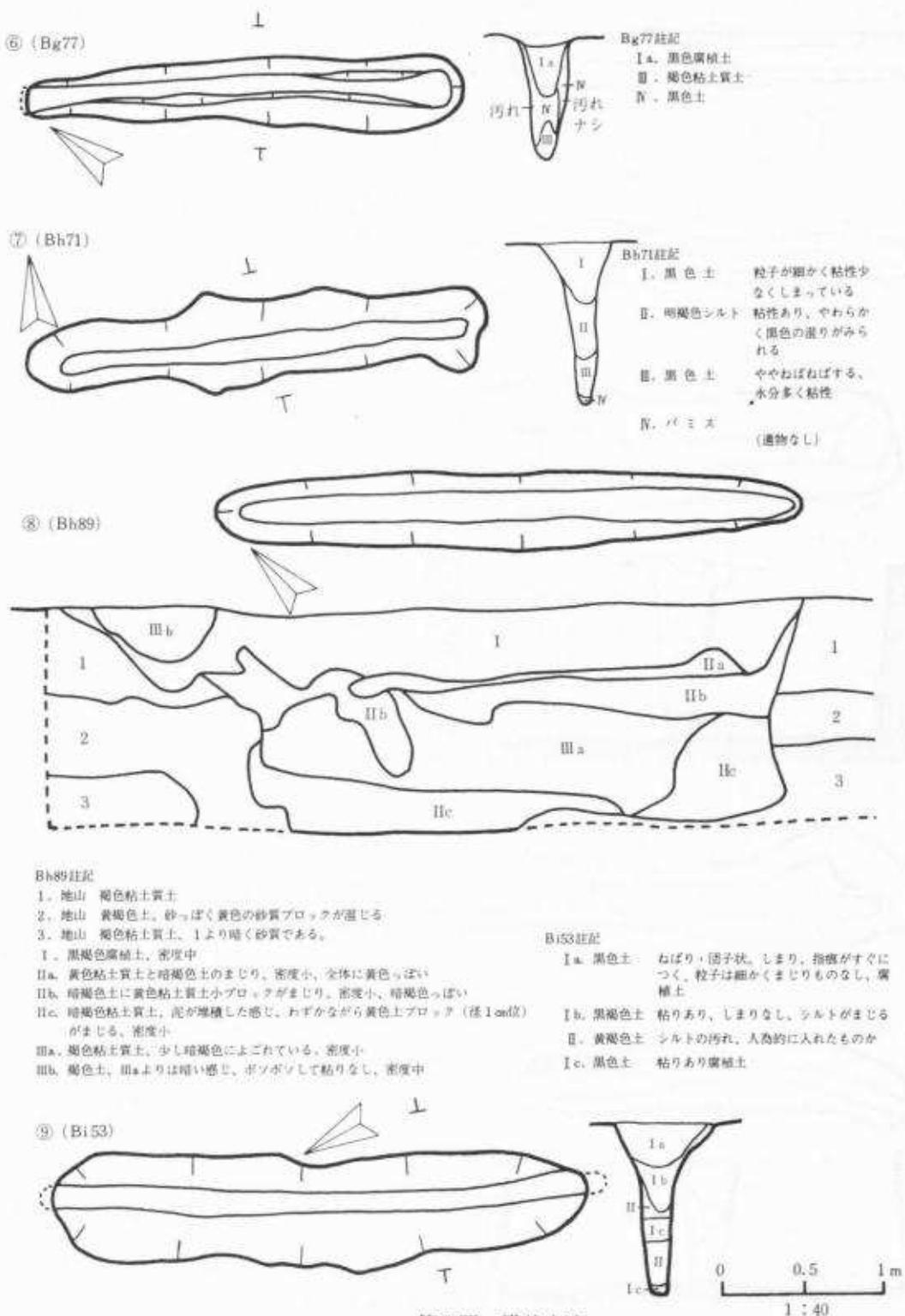


第6図 規模集積図

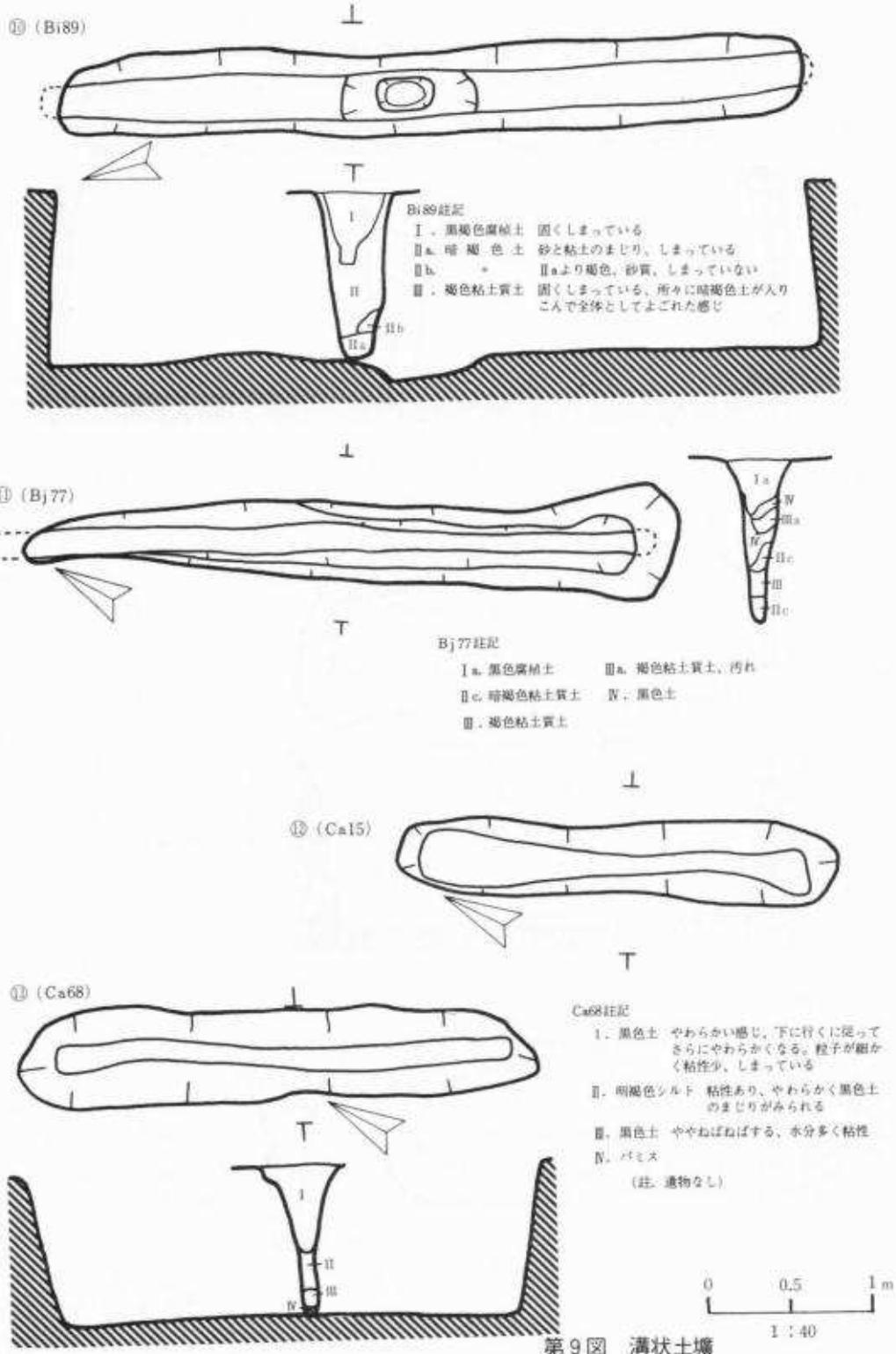


第7図 溝状土壤

— 南矢中遺跡 —

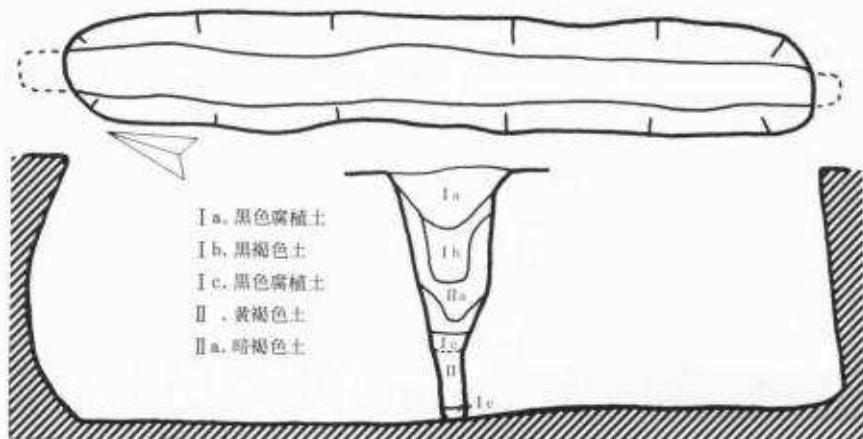


第8図 満状土壤

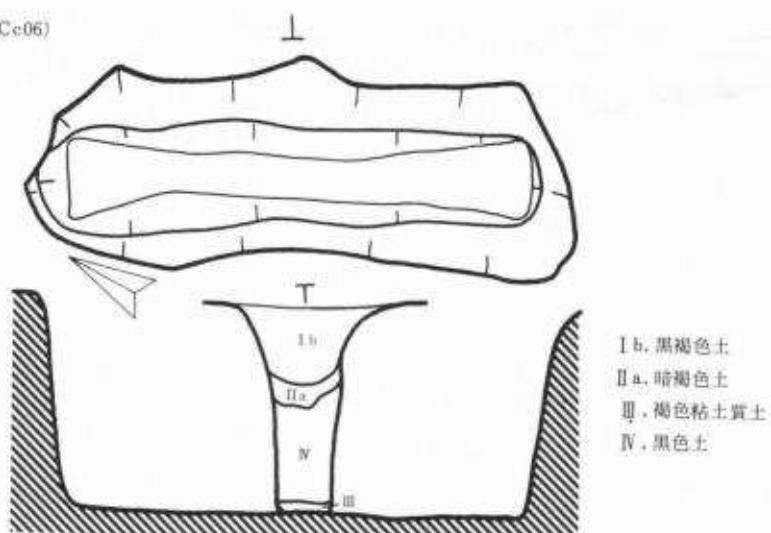


— 南矢中遺跡 —

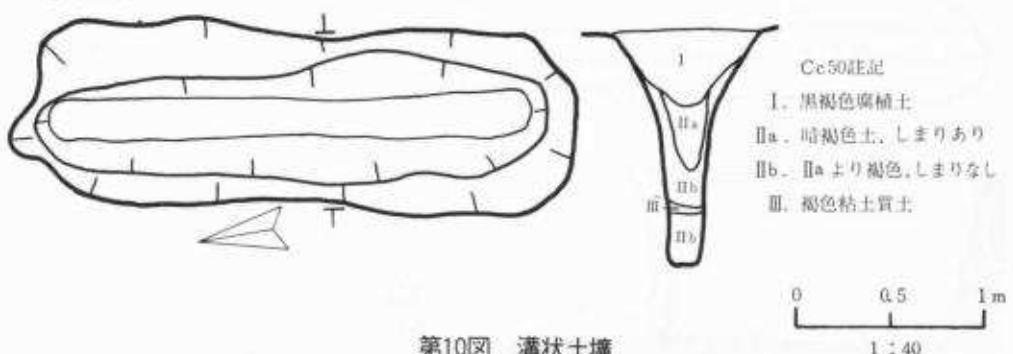
⑩ (Cc18)



© (Ce06)

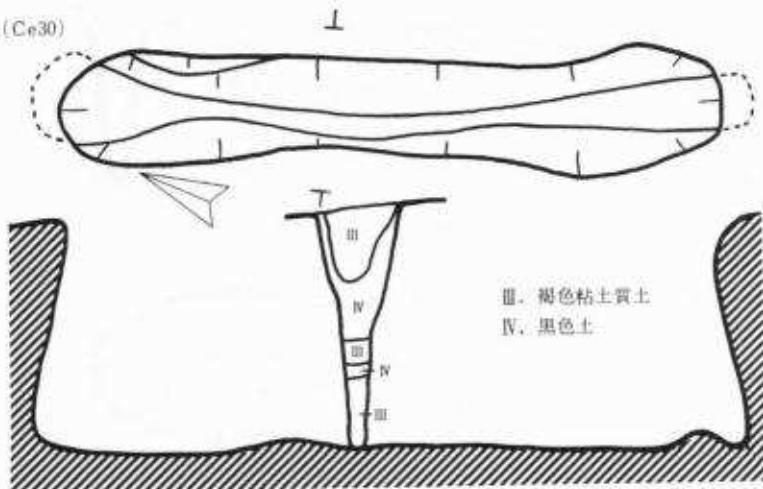


⑩ (Ce50)

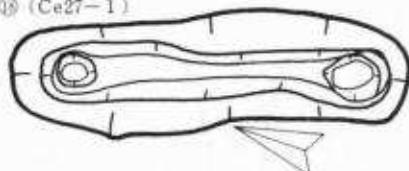


第10図 溝状土壤

⑦ (Ce30)



⑧ (Ce27-1)



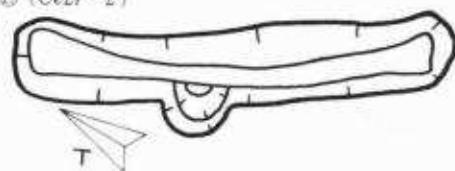
Ce27註記

I a. 暗褐色で粘り少なくまじりものなし

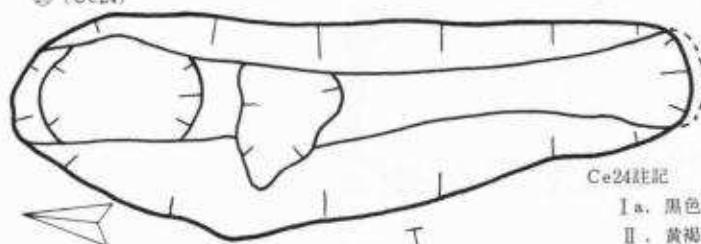
II c. 黒褐色土。シルトが多くまじり、やや黄色を呈す。しまりなく粘りあり

III~IV. 黒色土（黄色を呈す）純粹のⅢ層ではなくシルトとのカク岳である。しまりなく、水分多く含み、粘りあり

⑨ (Ce27-2)



⑩ (Ce24)

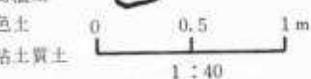


Ce24註記

I a. 黒色腐植土

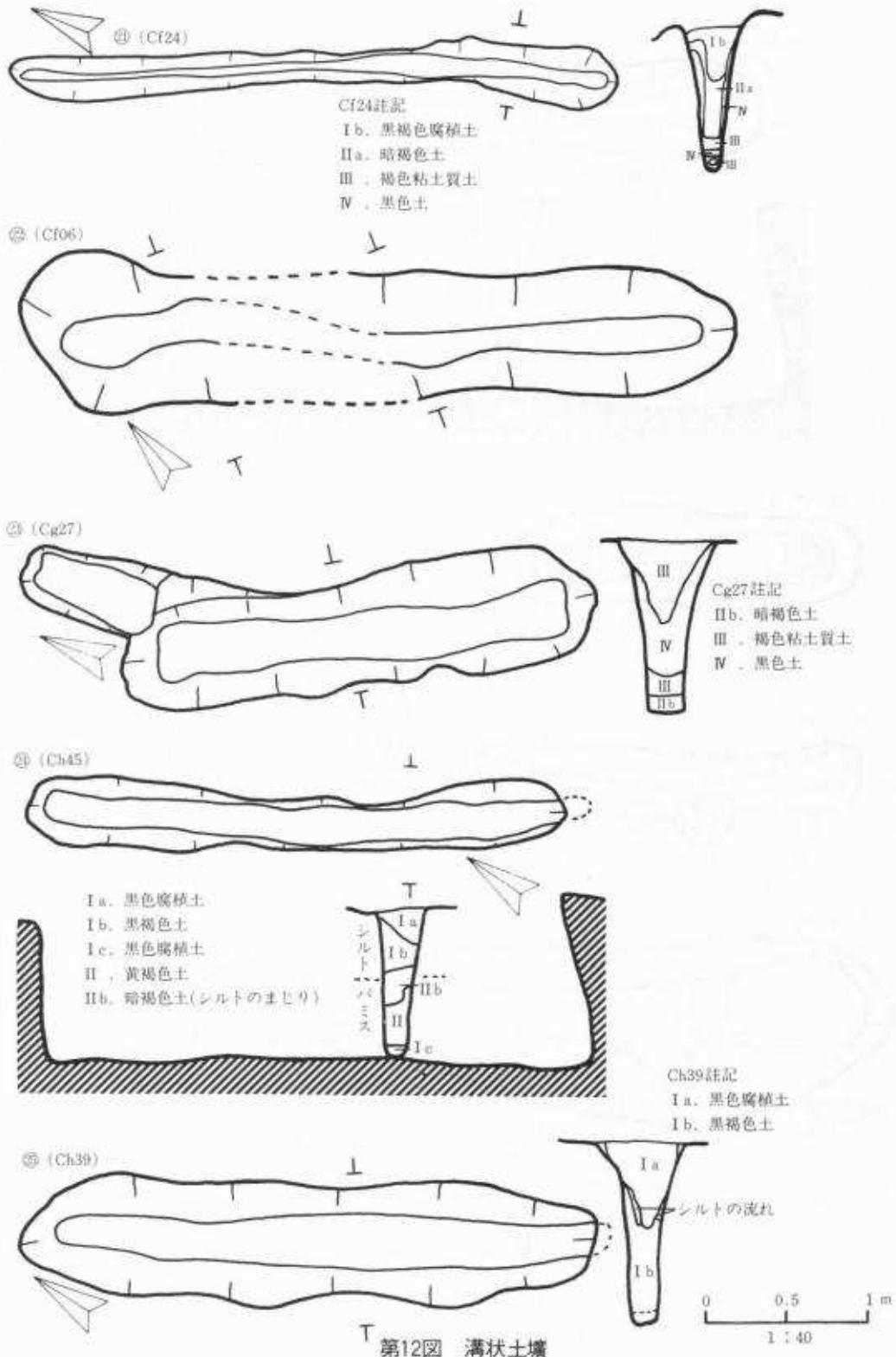
II. 黄褐色土

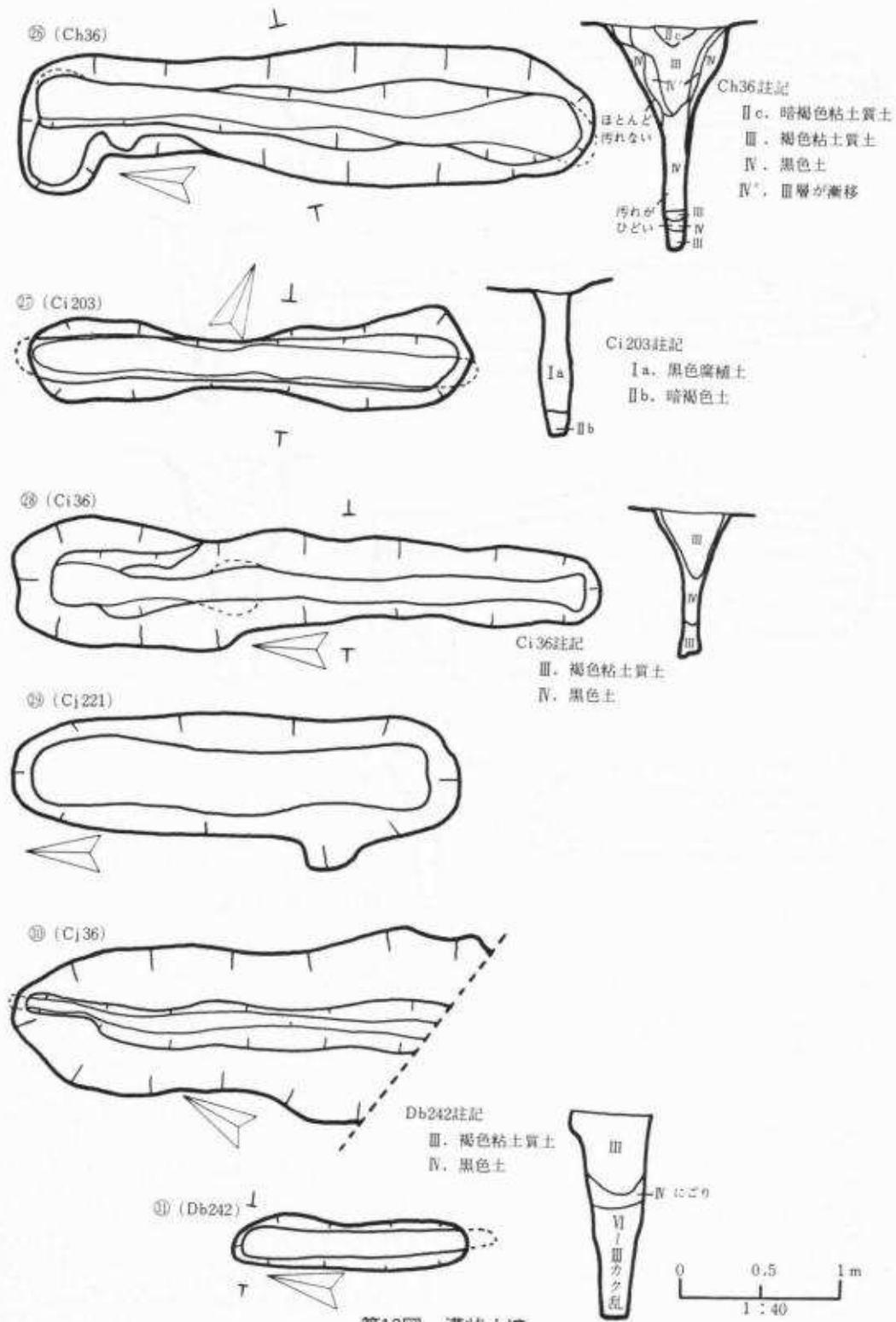
III. 褐色粘土質土

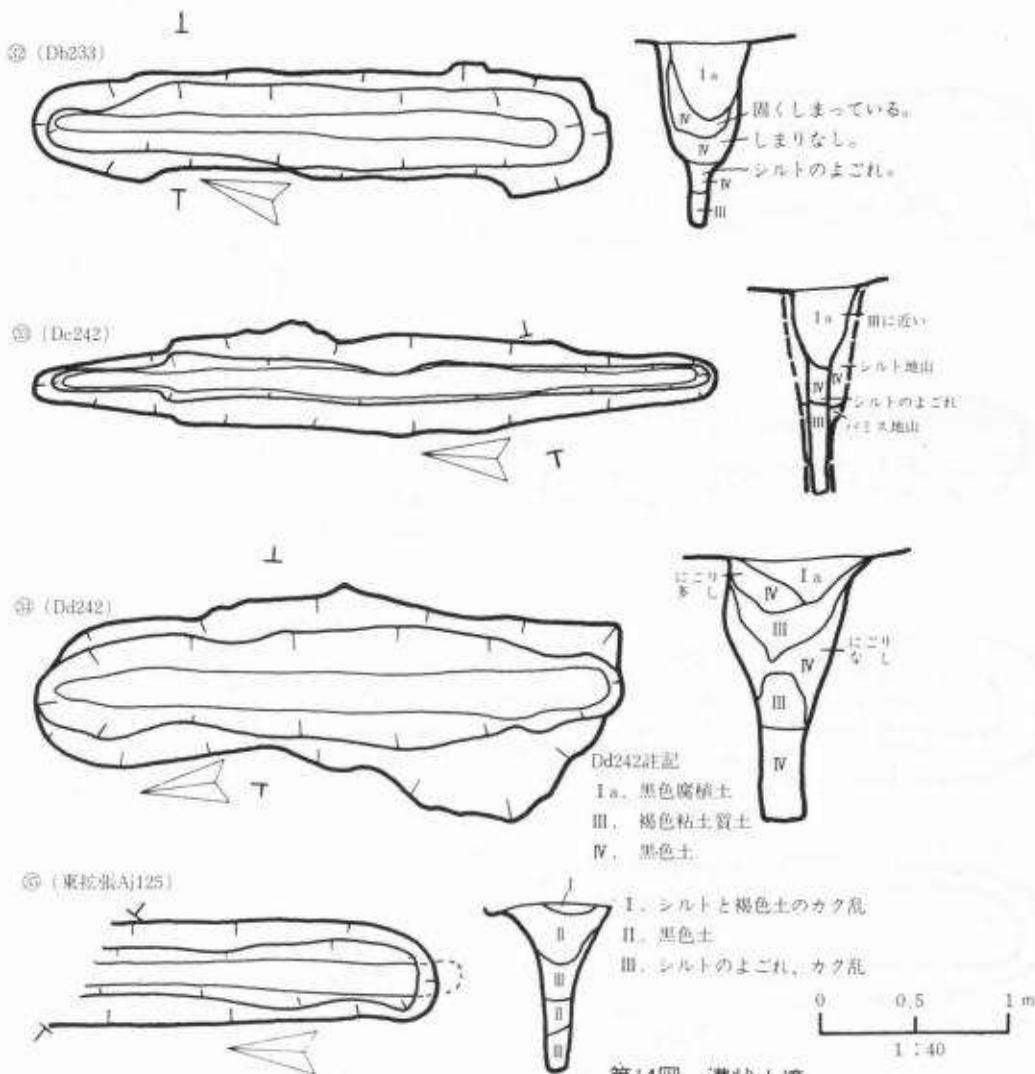


第11図 溝状土壤

— 南矢中遺跡 —







第14図 溝状土壤

(第2表)	2号Dg27	1号Dg51	4号Dg51	7号Dg67	13号Cg68	20号Cg50	21号Cg74	29号Cg74	32号Dg30	33号Dg30	34号Dg30	35号A125	Cg1515	24号Ch45	25号Ch45	30号Cg30	31号Dg40	4号Dg40
回 売 月	7-8	7-1	7-4	8-2	9-12	10-16	12-21	13-29	14-32	14-20	14-34	14-35	12-24	12-25	13-30	13-31	8-8	
引 在 量 t	15-	18-	-	-	-	4-1	3-1	-	6-1	6-2	6-4	-	3-4	-	3-8	-	-	
引 輸 量 t	2.86	2.50	3.70	2.86	3.13	3.00	5.43	3.78	2.86	2.65	2.01	(3.0)	3.01	3.50	3.50	2.50	3.50	
引 輸 率 %	0.34	0.36	0.40	0.45	0.50	1.90	0.35	0.74	0.40	0.35	0.36	0.36	0.30	0.65	0.96	0.30	0.45	
深 度 m	0.45	0.94	1.60	1.00	0.91	1.28	0.95	-	1.03	1.18	1.07	0.90	-	0.87	1.11	1.30	1.47	1.31
形 式 A 地 方	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地
形 式 B 地 方	N27°W	N27°W																
地 形	山 地 自然	山 地 自然																
開 采 作 業	1月6日7時	1月6日7時	なし	なし														
施 工 法	手 労	手 労	手 労	手 労	手 労	手 労	手 労	手 労	手 労	手 労	手 労	手 労	手 労	手 労	手 労	手 労	手 労	手 労
施 工 付 合	10月5日8時																	
回 売 月	8-10	8-9	9-11	10-24	12-22	13-22	7-3	8-9	9-12	10-15	11-19	11-20	12-20	10-20	13-28	7-3	11-17	11-18
引 在 量 t	3-5	3-4	3-6	3-8	4-8	-	3-1	3-3	3-8	-	4-2	4-2	5-3	3-5	3-7	3-2	4-6	4-4
引 輸 量 t	4.50	3.85	3.90	4.00	4.40	2.75	2.20	2.70	2.60	2.90	2.01	3.69	2.95	3.60	3.60	2.45	3.30	3.30
引 輸 率 %	0.56	0.70	0.59	0.60	0.5	0.32	0.80	0.35	0.40	0.50	0.91	1.00	0.85	0.65	0.50	0.46	0.50	0.40
深 度 m	0.98	1.02	1.28	0.72	1.11	0.87	0.67	1.26	1.08	1.28	1.07	1.34	1.23	0.94	0.75	1.26	0.96	1.26
形 式 C 地 方	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地	山 地
形 式 D 地 方	N27°W	N27°E	N27°W	N27°W	N27°E	N27°W	N27°W											
地 形	山 地 自然	山 地 自然																
開 采 作 業	なし	なし																
施 工 法	泥漿注入	泥漿注入																
施 工 付 合	1月6日7時	1月6日7時																

(遺物)

〔土器〕 図示破片資料 5 点 (15図 1~5、第3表、写真第1図)

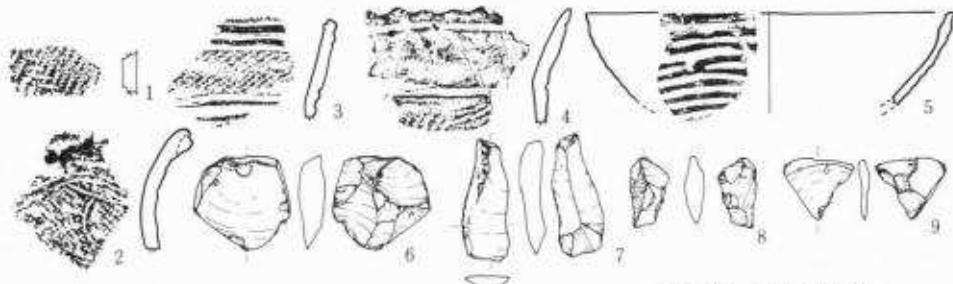
1) 図示の 1 片のみで遺物中一番古い。 2) 古代住居跡への流れ込みか重複関係かは明確でない。 3) 粗砂も含み磨きは粗末である。口縁帶状地文部は沈線にて区画され頸部下に沈線による文様帯が続くと思われる。 4) 全体的に磨滅し地文も不鮮明であるが羽状施文である。胎土中の雲母も黒味を残している。 5) 口唇内面を周る隆帯が付されその表面は丁寧に磨かれている。内面等の黒変は内容物の浸み付きか廃棄後のものか不明である。一部に酸化鉄様色調を示す物質が付着している。輪積痕が凸凹段の下部に認められる。 6) 粗雑な作りの感がある。含まれる雲母は上記 5) より大きく比較的量も多い。以上縄文土器片は早期 1)、中期 2) 3)、晩期 5) 6) と年代が推定出来る。

〔石器〕 (第15図 6~7、第3'表、写真 1 図)

少量の出土で器種としても少い。 1) は支持面が自然面である。刃は最下端に付されその両端縁には使用による剝離が逆向きに生じている。 2) は一面に陵を残し不整形であるが 2 個縁には使用痕が認められる。先端部は対称形に調整が試みられている。上部側縁の抉りを行えば石匙の形態となる。 3) 意図的な調整の認められない剝片である。巾の狭い端の使用痕は他端より幾分明確である。 4) 使用痕は極少部分である。淡桃色を呈し古代住居跡より出土しているが 3) と同様伴出との判定は出来ない。

〔第3表〕 国番号 分類名 出土位置 断面 形状 色調 大きさ 調査者 (内部) 清水・施主等 (外部) 備考									
1	15-1	1-1	A166 日暦 脚付 脚付	脚付 脚付	褐色 褐色	約4.5cm 約4.5cm	横 横	11.7cm(火文+7.5) 11.7cm(火文+7.5)	縄文早期から中期初期 住居内出土標本 中古中期(大8.8)
2	-	2	1-2	4号室 壁上	脚付 脚付	褐色 褐色	小破壊	地文L-片 地文L-片	縄文後期(火文)、口付断片、口縁部火文 住居内出土標本、手造れ
3	-	3	1-3	C109 日暦 脚付	脚付 脚付	褐色 褐色	脚内有食入 脚内有食入	地文L-片 地文L-片	外壁に無清部、手造れ 住居外付石(時期不明)
4	-	4	1-6	C130 壁上	脚付 脚付	褐色 褐色	小破壊	地文L-片 地文L-片	住居外付石(時期不明)
5	-	5	1-4	東北土器 壁上	脚付 脚付	褐色 褐色	脚内有食入 脚内有食入	地文L-片 地文L-片	外壁足付石(火文)、縄文中期(大8.8)
6	-	6	1-5	-	火文L-片	-	火文褐色 火文褐色	火文L-片 火文L-片	外壁有 火文中期(大8.8) (火文L-片)

〔第3'表〕 国番号 分類名 出土位置 断面 形状 長さ cm 幅 cm 厚さ cm 重量 g 材質 備考									
1 (不定形)	15-6	1-7	A166 日暦	脚付	5.1	5.3	1.4	37.3	粘質灰岩 (化ら食有)
2 破片	-	7	1-8	東北山部毛土層	0.3	2.3	1.1	16.0	粘質灰岩 調整部は缺く少い
3 刃 石	-	8	1-9	第8号室(D1245)壁上	3.8	2.2	1.0	6.2	粘質灰岩 (両端に使用痕有)
4 刃 石	-	9	1-10	第8号室壁上標本	3.4	3.6	0.5	3.5	粘質灰岩 (交換、一端に使用痕有)



第15図 縄文土器等 S=1:4

〔2〕古代の遺構と遺物

1. 穴式住居跡

第1号住居跡 (Bc 71) (第16図、写真10~12図)

〔遺構〕 [確認面] Ⅲ層上面にて行う。掘込面は耕作等による擾乱にて不明（以下同様）

〔保存状況〕 残存部壁高15cm内外、それより上部は耕作等による擾乱を受く（以下同様）

〔平面形・規模・カマド方位〕 謎丸方形を呈し、東西約5.8m、南北5.0mの広さである。N35°Wの方向にカマドは向く。

〔堆積土〕 黒褐色土中に明褐色シルト質が粒状に入り、炭化物及び土器片も混入している。

〔壁〕 部分的には深さ20cm程の残存部も有る。東側程残っている。

〔床面〕 中心部が固められている。南東・南西隅にて溝状土壤を切っている。

〔柱穴〕 P₁~P₅が柱穴と思われるが断定出来ない。P₁径30cm、深さ35cm、P₂径25cm、深さ35cm、炭化物土師片混入、P₄径55cm、深さ18cm、混入物P₂と同じ。これ等の埋土は黒褐色土である。

〔カマド〕 北壁中央東寄りに壁を削り込み構築、燃焼部焼土は焼け締っている。北東部に焼土混在の落込み、南西部のものは土師器も出土する。第1号土壤 (Bc 71) を煙道等で切る。

〔出土遺物〕 (須恵器壺7点、甕3点、土師器壺2点、甕12点、砥石2点)(第17図、第4表)

〔須恵器〕 : 壺 (完形図上復元した物6点、破片1点)

回転窓切底が目につく。回転糸切底も窓による削りや撫で調整している。器面の凹凸目立つ。

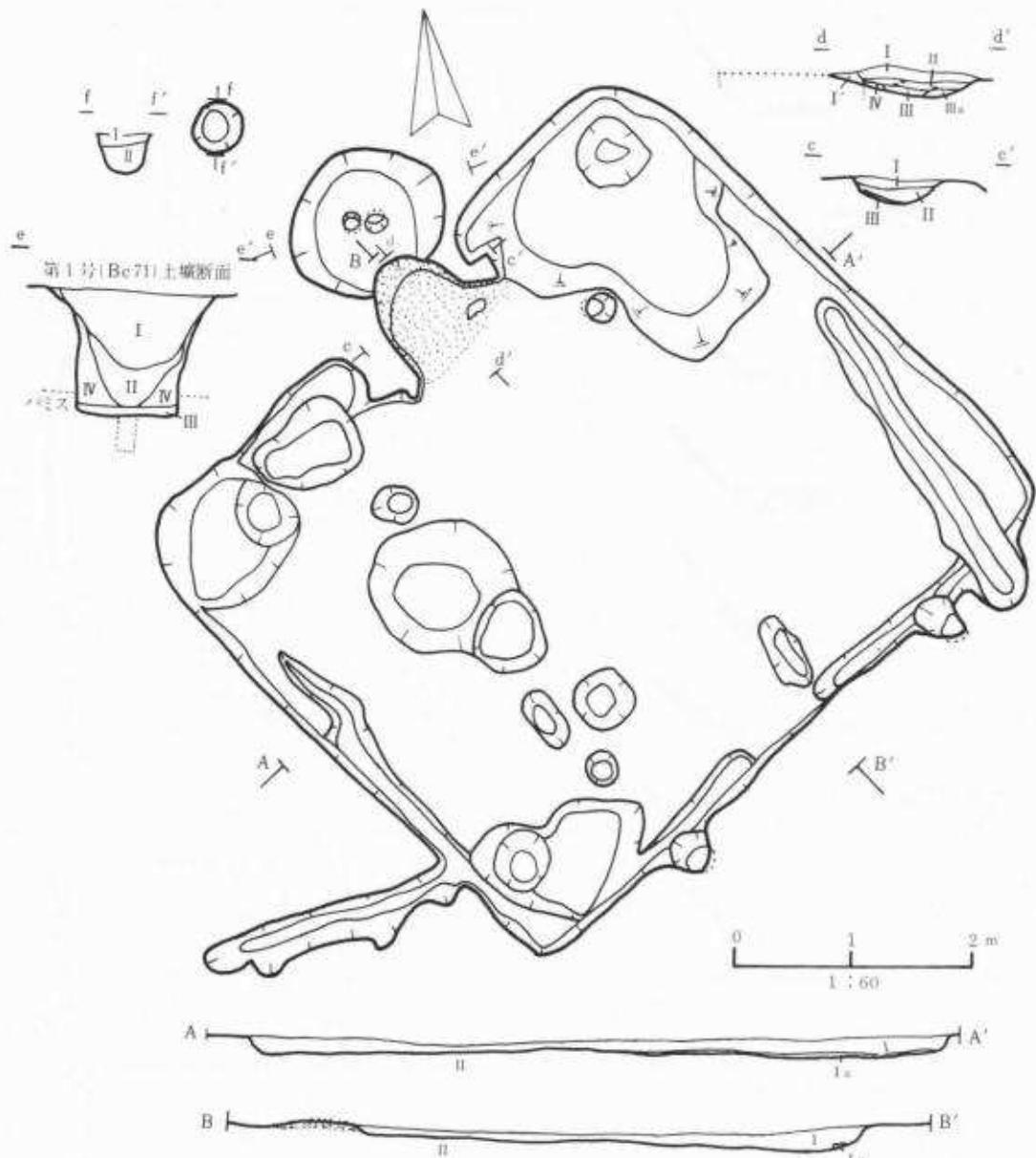
: 甕 (破片2点) (17図1、写真10図11~13) 1)には自然縫が垂れ、2)は表面に鈍い光沢を有する。破片断口部を砥石としているものは叩目を有する。

〔土師器〕 : 壺 (17図9、写真10図6) 回転窓切底と回転糸切底のそれぞれ1である。(1)の大き目の内黒処理したものは最後に横方向に磨いてある。

: 甕 (17図10~17、18図1~12、写真10~11図) 大半が口縁部から胴部にかけてのものである。最大胴径については表中の底径の欄に()にて示したものもある。床面出土のものは、図示したうちの3点である。焼土及び小土壤中より出土したものは埋設過程での変化の為か焼成胎土等不良である。

: その他の出土遺物 (17図18~19、18図13~14) (砥石2、刀子1、石玉1)

砥石 (凝灰岩を使用したものと前述の須恵片を利用したものであるが、前者は比較的大きく使用面も2面である。その1面はまだ平滑でなく刻線様の傷も有る。またこれは北西の小土壤より出土している。) 刀子 (奥先より刀身の部分である。銛により形態等不明確である。)



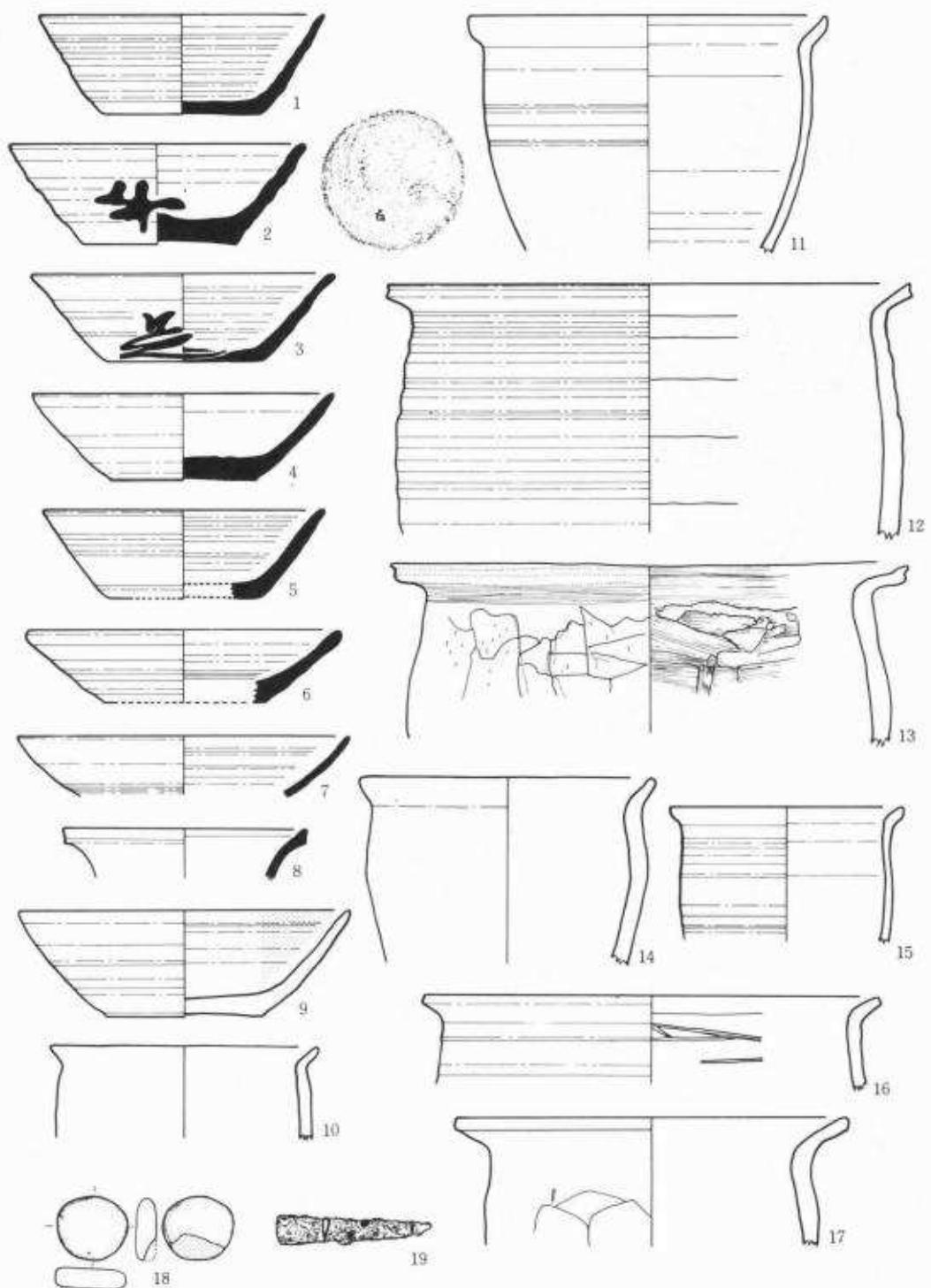
A. I. 黒色土。炭化物及び土器片のみ。
B. 人がみられる。しまっているが特にQではカマドの近くは固くなっている。
Ia. 黒色土。固くしまっている。
II. 明褐色土。固くかためられている。
f. I. 炭化物まじり(壁上も)明褐色土柄があり
II. シルトまじり明褐色土。ボサボサ(土跡跡片出土)

c. I. 黒色土に炭化物が混じる。
d. I'. 黒色土。土に比べてやややわらかい。
II. 黒土に褐色土が若干混じる。土器片が混在。
III. 黑土に黄褐色土が混じる。固い。
IIIa. 黑土(赤)のみで固くしまっている。
IV. 明黄色土。非常に固くしまっている。

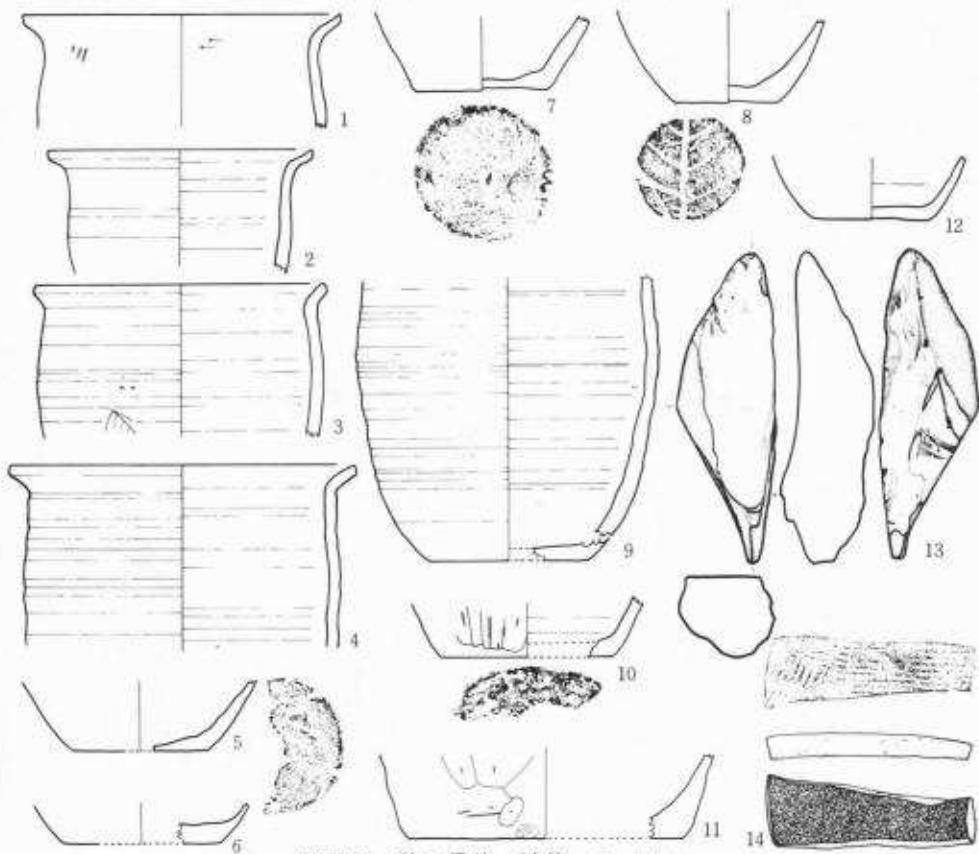
e. I. 黒色土。しまり、なびきあり。粒子が細かく上面にはBc71付のカマド焼土の小ブロックが入る。上部ほどしまる。
II. 明褐色土。黒色土とシルトの搅乱でしまりはない。粘りあり。炭化物等はみられない。
III. 明褐色土。しまりありつき固めた様な感じとする。粒子が細かくねばりあり。炭化物等は見られない。
IV. 明褐色土。シルト内にごり。壁柱穴の埋土は目割である。バミ古を掘り込んでいる。

第16図 第1号 (Bc71) 住居跡

— 南矢中遺跡 —



第17図 第1号住・遺物 S=1:3



第18図 第1号住・遺物 S=1:4

— 南矢中遺跡 —

第2号住居跡 (Be104) (第20図、写真14図)

〔遺構〕 [保存状況] 残存部壁高20cm内外である。

〔平面形・規模・カマド方位〕 隅丸の長方形を呈し長軸長5m、短軸長4.3mの広さである。長軸・カマドはほぼ北向きである。

〔堆積土〕 上位の暗褐色土は幾分締まり焼土ブロック炭化物等を少量含む。下位は黒褐色土であり、以上の2層に大別出来る。

〔壁〕 西・南壁が多く残り、高さ約25cmである。後世の溝によって北西部が切られている。

〔床面〕 下部堆積土程締っていない。中央部に落込みがあり炭化物が極少量含まれる。北東部の落込み内部西側に焼土ブロックが多い。

〔柱穴〕 床面上に検出出来ない。東壁外部に2つの柱穴様小土壙が認められる。この2小土壙の平面形は方形である。

〔カマド〕 北壁中央寄りに新(西側)、旧(東側)の2つが検出された。古い方は壁面より更に地山を削り込み構築している。

〔遺物〕 (須恵器坏1・甕1、土師器坏6・甕4) (第19図・写真14図・第5表)

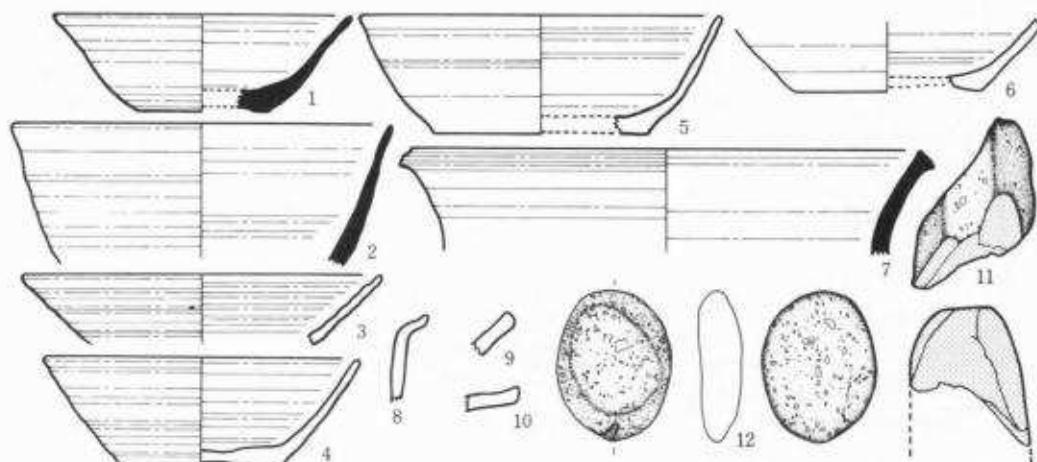
〔須恵器〕 : 坏 底部内面に沈線様の凹線が円形に周る。

: 甕 (同図7) 直口氣味の口縁を有するものと思われる。

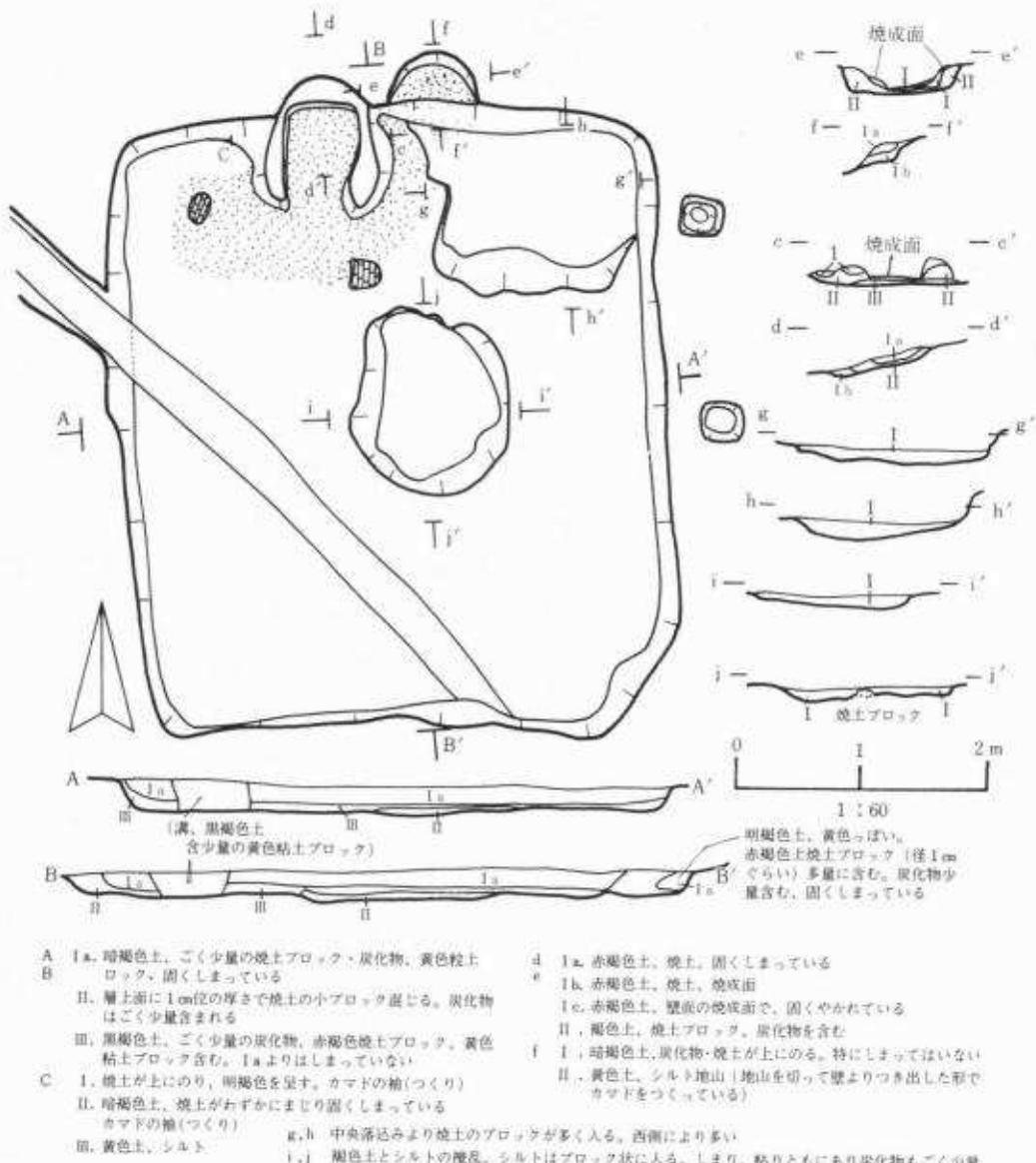
〔土師器〕 : 坏 (19図3~6) 内黒様のものが大半でロクロ仕様である。2)は須恵質である。

: 甕 (19図8~10) ロクロ調整で大半が複合口縁である。

〔石製品〕 : 磁石 (安山岩製欠損品) : 磨石 (風化している。床面出土)



第19図 第2号住・遺物 S=1:3



第20図 第2号(Be104)住居跡

(第5表)	試験番号	引抜番号	泥土質	法算面積	口徑	底径	厚さ	形	地	成形	粘土	火候	鉢形	外	内	壁	底	構成	備考
第2号	1	10-1	10-1	褐	上	12.0	3.0	3.0	外輪火候	海綿質	ローリ	鉢形	直	-	-	-	薄火	不真	黒褐色土(赤褐色土と複合)
	2	-2	10-2	褐	下	11.4	-	-	外輪火候	ローリ	ローリ	-	直	-	-	-	火	真	幾々火候あり
第2号	3	10-3	10-3	褐	上	12.4	-	-	海綿質	-	-	-	直	-	-	-	火	真	自然物少量、瓦片断片混入
	4	10-4	10-4	褐	上	10.8	7.7	-	外輪火候	平	平	-	有	-	-	-	火	真	自然物混入
	5	10-5	10-5	褐	上	10.2	-	-	外輪火候	平	平	-	有	-	-	-	火	真	内輪火候、軟質
	6	10-6	10-6	褐	下	12.8	8.6	4.3	外輪火候	平	平	-	平	角質目	-	-	火	真	細理有り
	7	10-7	10-7	セナ	上	4.9	-	-	-	-	-	-	有	-	-	-	火	真	向里火候(火候薄)
	8	10-8	10-8	褐	上	14.4	-	-	褐	直	-	ニタリ	-	有	-	-	火	真	内輪火候
	9	10-9	10-9	褐	上	7.4	-	-	平	直	ローリ	-	直	有	-	-	火	真	内燃、濃火
	10	10-10	10-10	褐	上	16.0	-	-	直	合	ローリ	-	直	有	有	-	火	真	薄手燒紅(熱面西)
	11	10-11	10-11	褐	上	10.4	-	-	-	-	ローリ	-	直	有	-	-	火	真	厚手燒紅(向北)
	12	10-12	10-12	褐	上	29.0	-	-	-	-	-	-	直	有	-	-	火	真	薄手燒紅
	13	10-13	10-13	褐	上	7.0	-	-	平	直	ローリ	-	平	有	有	-	火	真	粗面有り(燒上半部)
	14	10-14	10-14	褐	上	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	火	真	-

第3号住居跡 (Bf56) (第21図、写真15図)

〔遺構〕 〔保存状況〕 残存部壁高15cm内外。

〔平面形・規模・カマド方位〕 溝丸方形一辺約5mである。カマドはS22°Eの方向を向く。

〔堆積土〕 暗褐色土と黄褐色土であり自然流入と思われる。

〔壁〕 西壁の残存高は5cmである。崩壊により床と壁面は直角でない。

〔床面〕 中央部程固く締っている。炭化材(年代測定資料)がある。4柱穴が考えられる。

〔カマド〕 南壁南東隅にあり、袖部には構築に使用したと思われる石が散乱している。

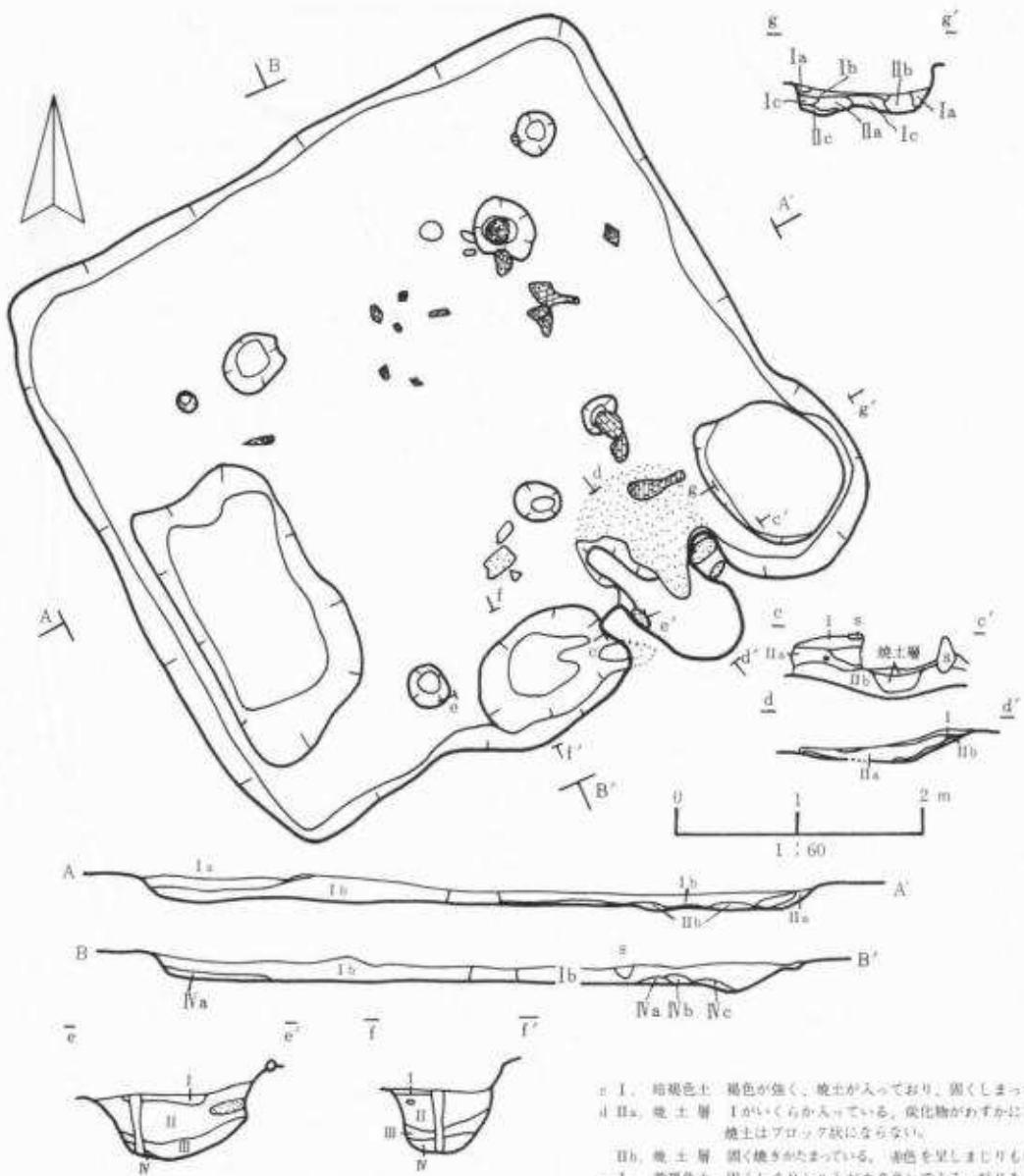
〔貯藏穴〕 カマド西側のものは50cm程の深さで焼土炭化物粒を埋土中に含む。東側のものも浅い。

〔遺物〕 (須恵器坏5・甕1、土師器坏6・甕12)

〔須恵器〕 :坏(第22図1~3、写真15図1~3) 1)は歪みを持ち小振りである。2)は重ね焼の跡がある。ロクロ仕様で直口が多い。:甕(22図16、写真15図4)自然釉あり。

〔土師器〕 :坏(第22図1、写真15図6~10) 1)は器壁が半ば立ち上がる。ロクロ仕様回転糸切無調底のものが大半である。:甕(22図5~15、写真16図1~12)ロクロ調整が大半である。1)は叩目を有する。1)2)9)はBf27溝遺物と接合している。

(第6表)	印番 番号	万枚 番号	出上 京	法 基 地 理 的 的 位 置	1) 様 式 及 び 特 徴	2) 様 式 及 び 特 徴	3) 様 式 及 び 特 徴	4) 様 式 及 び 特 徴	5) 様 式 及 び 特 徴	6) 様 式 及 び 特 徴	7) 様 式 及 び 特 徴	8) 様 式 及 び 特 徴	9) 様 式 及 び 特 徴	10) 様 式 及 び 特 徴	11) 様 式 及 び 特 徴	12) 様 式 及 び 特 徴	13) 様 式 及 び 特 徴	14) 様 式 及 び 特 徴	15) 様 式 及 び 特 徴	16) 様 式 及 び 特 徴	17) 様 式 及 び 特 徴	18) 様 式 及 び 特 徴	19) 様 式 及 び 特 徴	20) 様 式 及 び 特 徴	21) 様 式 及 び 特 徴	22) 様 式 及 び 特 徴	23) 様 式 及 び 特 徴	24) 様 式 及 び 特 徴	25) 様 式 及 び 特 徴	26) 様 式 及 び 特 徴	27) 様 式 及 び 特 徴	28) 様 式 及 び 特 徴	29) 様 式 及 び 特 徴	30) 様 式 及 び 特 徴	31) 様 式 及 び 特 徴	32) 様 式 及 び 特 徴	33) 様 式 及 び 特 徴	34) 様 式 及 び 特 徴	35) 様 式 及 び 特 徴	36) 様 式 及 び 特 徴	37) 様 式 及 び 特 徴	38) 様 式 及 び 特 徴	39) 様 式 及 び 特 徴	40) 様 式 及 び 特 徴	41) 様 式 及 び 特 徴	42) 様 式 及 び 特 徴	43) 様 式 及 び 特 徴	44) 様 式 及 び 特 徴	45) 様 式 及 び 特 徴	46) 様 式 及 び 特 徴	47) 様 式 及 び 特 徴	48) 様 式 及 び 特 徴	49) 様 式 及 び 特 徴	50) 様 式 及 び 特 徴	51) 様 式 及 び 特 徴	52) 様 式 及 び 特 徴	53) 様 式 及 び 特 徴	54) 様 式 及 び 特 徴	55) 様 式 及 び 特 徴	56) 様 式 及 び 特 徴	57) 様 式 及 び 特 徴	58) 様 式 及 び 特 徴	59) 様 式 及 び 特 徴	60) 様 式 及 び 特 徴	61) 様 式 及 び 特 徴	62) 様 式 及 び 特 徴	63) 様 式 及 び 特 徴	64) 様 式 及 び 特 徴	65) 様 式 及 び 特 徴	66) 様 式 及 び 特 徴	67) 様 式 及 び 特 徴	68) 様 式 及 び 特 徴	69) 様 式 及 び 特 徴	70) 様 式 及 び 特 徴	71) 様 式 及 び 特 徴	72) 様 式 及 び 特 徴	73) 様 式 及 び 特 徴	74) 様 式 及 び 特 徴	75) 様 式 及 び 特 徴	76) 様 式 及 び 特 徴	77) 様 式 及 び 特 徴	78) 様 式 及 び 特 徴	79) 様 式 及 び 特 徴	80) 様 式 及 び 特 徴	81) 様 式 及 び 特 徴	82) 様 式 及 び 特 徴	83) 様 式 及 び 特 徴	84) 様 式 及 び 特 徴	85) 様 式 及 び 特 徴	86) 様 式 及 び 特 徴	87) 様 式 及 び 特 徴	88) 様 式 及 び 特 徴	89) 様 式 及 び 特 徴	90) 様 式 及 び 特 徴	91) 様 式 及 び 特 徴	92) 様 式 及 び 特 徴	93) 様 式 及 び 特 徴	94) 様 式 及 び 特 徴	95) 様 式 及 び 特 徴	96) 様 式 及 び 特 徴	97) 様 式 及 び 特 徴	98) 様 式 及 び 特 徴	99) 様 式 及 び 特 徴	100) 様 式 及 び 特 徴	101) 様 式 及 び 特 徴	102) 様 式 及 び 特 徴	103) 様 式 及 び 特 徴	104) 様 式 及 び 特 徴	105) 様 式 及 び 特 徴	106) 様 式 及 び 特 徴	107) 様 式 及 び 特 徴	108) 様 式 及 び 特 徴	109) 様 式 及 び 特 徴	110) 様 式 及 び 特 徴	111) 様 式 及 び 特 徴	112) 様 式 及 び 特 徴	113) 様 式 及 び 特 徴	114) 様 式 及 び 特 徴	115) 様 式 及 び 特 徴	116) 様 式 及 び 特 徴	117) 様 式 及 び 特 徴	118) 様 式 及 び 特 徴	119) 様 式 及 び 特 徴	120) 様 式 及 び 特 徴	121) 様 式 及 び 特 徴	122) 様 式 及 び 特 徴	123) 様 式 及 び 特 徴	124) 様 式 及 び 特 徴	125) 様 式 及 び 特 徴	126) 様 式 及 び 特 徴	127) 様 式 及 び 特 徴	128) 様 式 及 び 特 徴	129) 様 式 及 び 特 徴	130) 様 式 及 び 特 徴	131) 様 式 及 び 特 徴	132) 様 式 及 び 特 徴	133) 様 式 及 び 特 徴	134) 様 式 及 び 特 徴	135) 様 式 及 び 特 徴	136) 様 式 及 び 特 徴	137) 様 式 及 び 特 徴	138) 様 式 及 び 特 徴	139) 様 式 及 び 特 徴	140) 様 式 及 び 特 徴	141) 様 式 及 び 特 徴	142) 様 式 及 び 特 徴	143) 様 式 及 び 特 徴	144) 様 式 及 び 特 徴	145) 様 式 及 び 特 徴	146) 様 式 及 び 特 徴	147) 様 式 及 び 特 徴	148) 様 式 及 び 特 徴	149) 様 式 及 び 特 徴	150) 様 式 及 び 特 徴	151) 様 式 及 び 特 徴	152) 様 式 及 び 特 徴	153) 様 式 及 び 特 徴	154) 様 式 及 び 特 徴	155) 様 式 及 び 特 徴	156) 様 式 及 び 特 徴	157) 様 式 及 び 特 徴	158) 様 式 及 び 特 徴	159) 様 式 及 び 特 徴	160) 様 式 及 び 特 徴	161) 様 式 及 び 特 徴	162) 様 式 及 び 特 徴	163) 様 式 及 び 特 徴	164) 様 式 及 び 特 徴	165) 様 式 及 び 特 徴	166) 様 式 及 び 特 徴	167) 様 式 及 び 特 徴	168) 様 式 及 び 特 徴	169) 様 式 及 び 特 徴	170) 様 式 及 び 特 徴	171) 様 式 及 び 特 徴	172) 様 式 及 び 特 徴	173) 様 式 及 び 特 徴	174) 様 式 及 び 特 徴	175) 様 式 及 び 特 徴	176) 様 式 及 び 特 徴	177) 様 式 及 び 特 徴	178) 様 式 及 び 特 徴	179) 様 式 及 び 特 徴	180) 様 式 及 び 特 徴	181) 様 式 及 び 特 徴	182) 様 式 及 び 特 徴	183) 様 式 及 び 特 徴	184) 様 式 及 び 特 徴	185) 様 式 及 び 特 徴	186) 様 式 及 び 特 徴	187) 様 式 及 び 特 徴	188) 様 式 及 び 特 徴	189) 様 式 及 び 特 徴	190) 様 式 及 び 特 徴	191) 様 式 及 び 特 徴	192) 様 式 及 び 特 徴	193) 様 式 及 び 特 徴	194) 様 式 及 び 特 徴	195) 様 式 及 び 特 徴	196) 様 式 及 び 特 徴	197) 様 式 及 び 特 徴	198) 様 式 及 び 特 徴	199) 様 式 及 び 特 徴	200) 様 式 及 び 特 徴	201) 様 式 及 び 特 徴	202) 様 式 及 び 特 徴	203) 様 式 及 び 特 徴	204) 様 式 及 び 特 徴	205) 様 式 及 び 特 徴	206) 様 式 及 び 特 徴	207) 様 式 及 び 特 徴	208) 様 式 及 び 特 徴	209) 様 式 及 び 特 徴	210) 様 式 及 び 特 徴	211) 様 式 及 び 特 徴	212) 様 式 及 び 特 徴	213) 様 式 及 び 特 徴	214) 様 式 及 び 特 徴	215) 様 式 及 び 特 徴	216) 様 式 及 び 特 徴	217) 様 式 及 び 特 徴	218) 様 式 及 び 特 徴	219) 様 式 及 び 特 徴	220) 様 式 及 び 特 徴	221) 様 式 及 び 特 徴	222) 様 式 及 び 特 徴	223) 様 式 及 び 特 徴	224) 様 式 及 び 特 徴	225) 様 式 及 び 特 徴	226) 様 式 及 び 特 徴	227) 様 式 及 び 特 徴	228) 様 式 及 び 特 徴	229) 様 式 及 び 特 徴	230) 様 式 及 び 特 徴	231) 様 式 及 び 特 徴	232) 様 式 及 び 特 徴	233) 様 式 及 び 特 徴	234) 様 式 及 び 特 徴	235) 様 式 及 び 特 徴	236) 様 式 及 び 特 徴	237) 様 式 及 び 特 徴	238) 様 式 及 び 特 徴	239) 様 式 及 び 特 徴	240) 様 式 及 び 特 徴	241) 様 式 及 び 特 徴	242) 様 式 及 び 特 徴	243) 様 式 及 び 特 徴	244) 様 式 及 び 特 徴	245) 様 式 及 び 特 徴	246) 様 式 及 び 特 徴	247) 様 式 及 び 特 徴	248) 様 式 及 び 特 徴	249) 様 式 及 び 特 徴	250) 様 式 及 び 特 徴	251) 様 式 及 び 特 徴	252) 様 式 及 び 特 徴	253) 様 式 及 び 特 徴	254) 様 式 及 び 特 徴	255) 様 式 及 び 特 徴	256) 様 式 及 び 特 徴	257) 様 式 及 び 特 徴	258) 様 式 及 び 特 徴	259) 様 式 及 び 特 徴	260) 様 式 及 び 特 徴	261) 様 式 及 び 特 徴	262) 様 式 及 び 特 徴	263) 様 式 及 び 特 徴	264) 様 式 及 び 特 徴	265) 様 式 及 び 特 徴	266) 様 式 及 び 特 徴	267) 様 式 及 び 特 徴	268) 様 式 及 び 特 徴	269) 様 式 及 び 特 徴	270) 様 式 及 び 特 徴	271) 様 式 及 び 特 徴	272) 様 式 及 び 特 徴	273) 様 式 及 び 特 徴	274) 様 式 及 び 特 徴	275) 様 式 及 び 特 徴	276) 様 式 及 び 特 徴	277) 様 式 及 び 特 徴	278) 様 式 及 び 特 徴	279) 様 式 及 び 特 徴	280) 様 式 及 び 特 徴	281) 様 式 及 び 特 徴	282) 様 式 及 び 特 徴	283) 様 式 及 び 特 徴	284) 様 式 及 び 特 徴	285) 様 式 及 び 特 徴	286) 様 式 及 び 特 徴	287) 様 式 及 び 特 徴	288) 様 式 及 び 特 徴	289) 様 式 及 び 特 徴	290) 様 式 及 び 特 徴	291) 様 式 及 び 特 徴	292) 様 式 及 び 特 徴	293) 様 式 及 び 特 徴	294) 様 式 及 び 特 徴	295) 様 式 及 び 特 徴	296) 様 式 及 び 特 徴	297) 様 式 及 び 特 徴	298) 様 式 及 び 特 徴	299) 様 式 及 び 特 徴	300) 様 式 及 び 特 徴	301) 様 式 及 び 特 徴	302) 様 式 及 び 特 徴	303) 様 式 及 び 特 徴	304) 様 式 及 び 特 徴	305) 様 式 及 び 特 徴	306) 様 式 及 び 特 徴	307) 様 式 及 び 特 徴	308) 様 式 及 び 特 徴	309) 様 式 及 び 特 徴	310) 様 式 及 び 特 徴	311) 様 式 及 び 特 徴	312) 様 式 及 び 特 徴	313) 様 式 及 び 特 徴	314) 様 式 及 び 特 徴	315) 様 式 及 び 特 徴	316) 様 式 及 び 特 徴	317) 様 式 及 び 特 徴	318) 様 式 及 び 特 徴	319) 様 式 及 び 特 徴	320) 様 式 及 び 特 徴	321) 様 式 及 び 特 徴	322) 様 式 及 び 特 徴	323) 様 式 及 び 特 徴	324) 様 式 及 び 特 徴	325) 様 式 及 び 特 徴	326) 様 式 及 び 特 徴	327) 様 式 及 び 特 徴	328) 様 式 及 び 特 徴	329) 様 式 及 び 特 徴	330) 様 式 及 び 特 徴	331) 様 式 及 び 特 徴	332) 様 式 及 び 特 徴	333) 様 式 及 び 特 徴	334) 様 式 及 び 特 徴	335) 様 式 及 び 特 徴	336) 様 式 及 び 特 徴	337) 様 式 及 び 特 徴	338) 様 式 及 び 特 徴	339) 様 式 及 び 特 徴	340) 様 式 及 び 特 徴	341) 様 式 及 び 特 徴	342) 様 式 及 び 特 徴	343) 様 式 及 び 特 徴	344) 様 式 及 び 特 徴	345) 様 式 及 び 特 徴	346) 様 式 及 び 特 徴	347) 様 式 及 び 特 徴	348) 様 式 及 び 特 徴	349) 様 式 及 び 特 徴	350) 様 式 及 び 特 徴	351) 様 式 及 び 特 徴	352) 様 式 及 び 特 徴	353) 様 式 及 び 特 徴	354) 様 式 及 び 特 徴	355) 様 式 及 び 特 徴	356) 様 式 及 び 特 徴	357) 様 式 及 び 特 徴	358) 様 式 及 び 特 徴	359) 様 式 及 び 特 徴	360) 様 式 及 び 特 徴	361) 様 式 及 び 特 徴	362) 様 式 及 び 特 徴	363) 様 式 及 び 特 徴	364) 様 式 及 び 特 徴	365) 様 式 及 び 特 徴	366) 様 式 及 び 特 徴	367) 様 式 及 び 特 徴	368) 様 式 及 び 特 徴	369) 様 式 及 び 特 徴	370) 様 式 及 び 特 徴	371) 様 式 及 び 特 徴	372) 様 式 及 び 特 徴	373) 様 式 及 び 特

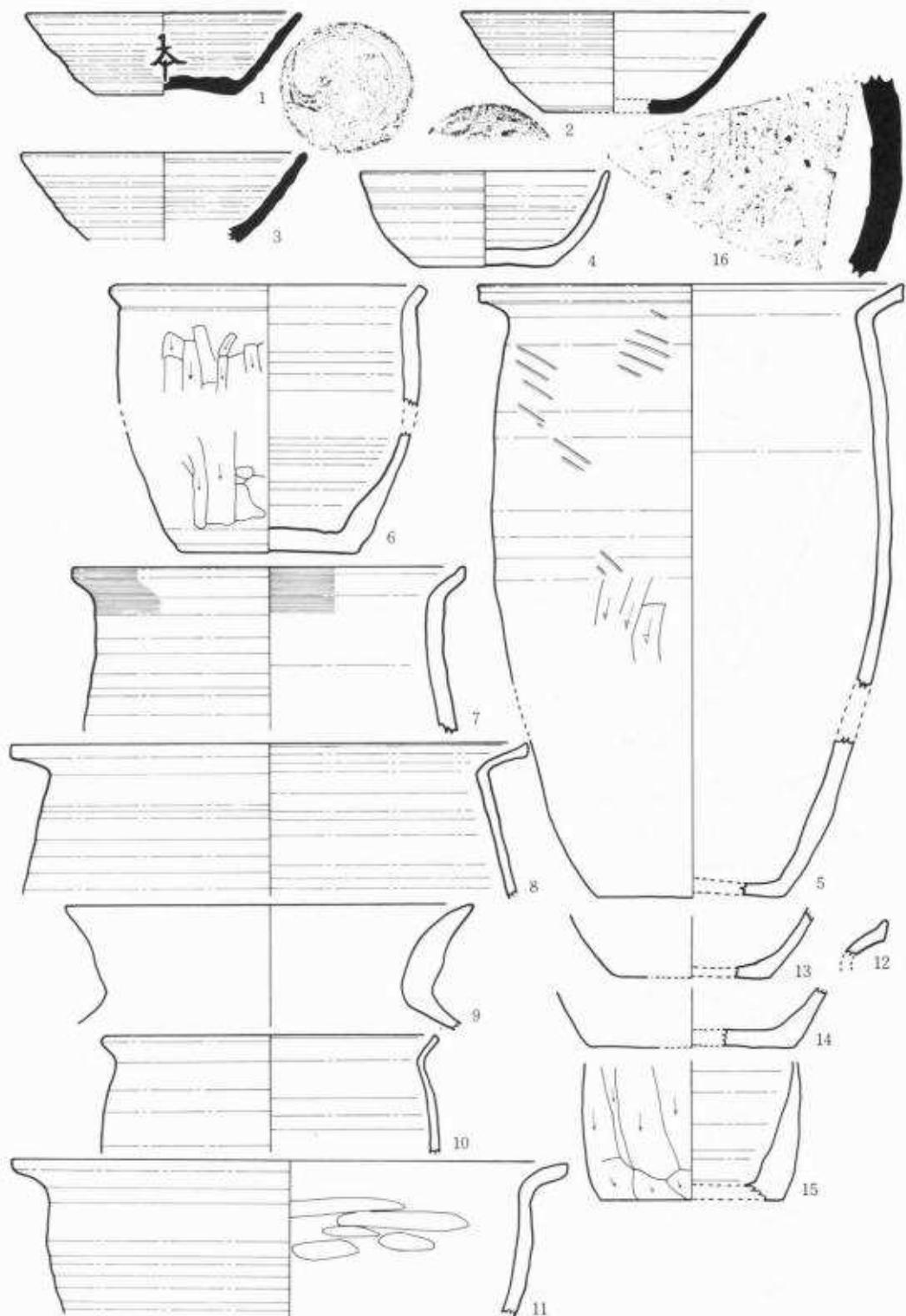


A-1a. 暗褐色土 粒子は細かいが1bよりやや黒ずむ。
B-1b. 暗褐色土 粒子は細かくしまりややあり、粗粒がかかるにつく
シルト粒がわずかに入る。
II-a. 黒褐色土 痴根土が大部分でやわらかく、まじりもの少ない。
II-b. 黄褐色土 シルトとのカタラン、しまりねばりあり、シルトは
ブロック状にみえている。
III. 明黄褐色土 シルトと腐殖土とのカタラン。
IV-a. 褐褐色土。シルト粒の混入なし。
IV-b. 褐色土 シルト混入
V-a. 暗褐色土 1bと同成分だが、ややシルトがブロック状になっ
ている。

I.	暗褐色土	褐色が強く、塊土が入っており、固くしまっている。
IIa.	塊 土 層	塊土がくらかんっている。炭化物がわずかに入る。 塊土はブロック状にならない。
IIb.	塊 土 層	固く塊土をなしている。赤色を呈しまじりものなし。
III.	黃褐色土	固くしまりソルトがカクランで入る。粘りあり。
IV.	暗褐色土	粘りあり、塊土粒、炭化物がまじる。しまりあり。团子状。
V.	黃 色 土	ソルトの流れ。
VI.	黑褐色土	しまりなく粘りあり。炭化物を含む。
VIIa.	褐 色 土	しまり・粘りあり。ヒモ状、ソルトブロック少量入る。 (カドマツが流れ込んだもの)
VIIb.	赤褐色土	Iaに幾土粒が混入したもの。
VIIc.	赤褐色土	Ia, Iaのカタラン。
VIIa.	暗褐色土	粒子は確かにソルトブロックが入る。しまり・粘りあり。塊土粒のまじりは少ない。
VIIb.	黑褐色土	しまりなく ^{レバ} サササした感じ。下部に幾土粒が少しある。
VIIc.	黃褐色土	ソルトのよごれたもの。

第21図 第3号(Bf56) 住居跡

— 南矢中遺跡 —



第22図 第3号住・遺物 S=1:3

第4号住居跡 (Bg 98) (第23図、写真14図)

〔遺構〕 [保存状況・壁] 残存壁高13cm内外。南西及び南東部は明確な区画を示さない。

〔平面形・規模・カマド方位〕 圓角方形に近く一辺約4.0m、カマドは東向きである。

〔堆積土〕 黒褐色土、暗褐色土・ブロック状黄褐色シルト質土(地山)が散在している。

〔床面〕 ほぼ平坦であるが中央及び南西隅を除く部分に性格不明の落ち込みが見られる。

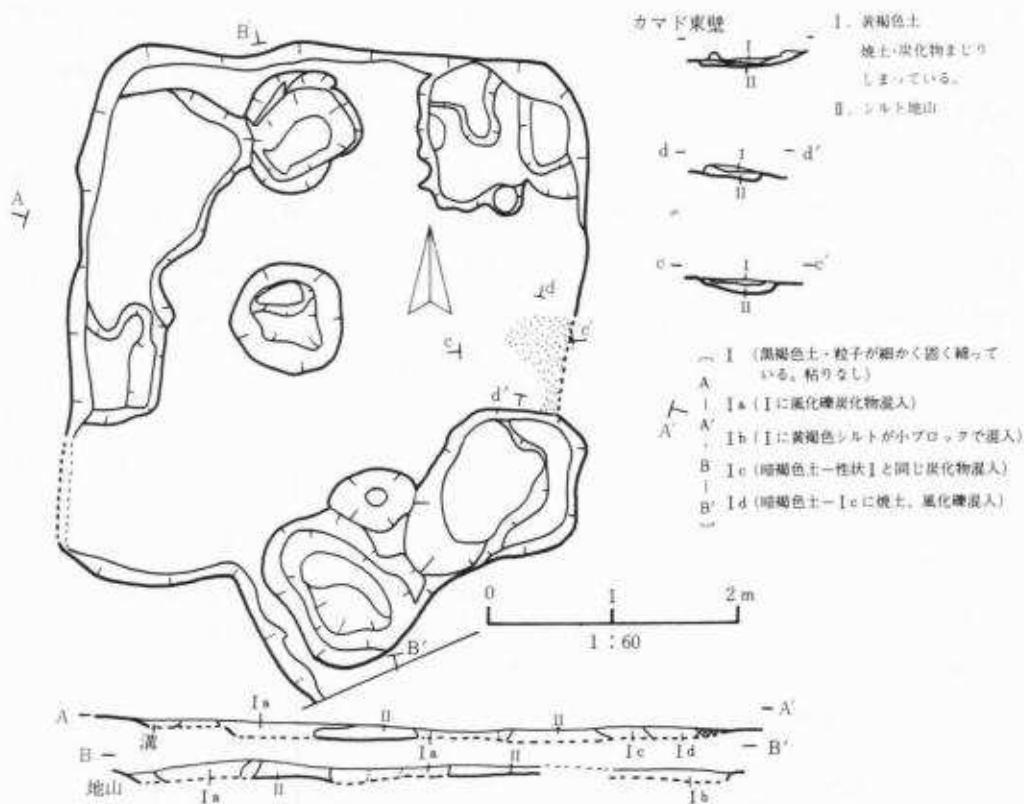
〔カマド〕 東壁南隅近くに焼土の広がりが認められる。他の付属施設はない。

〔遺物〕 (須恵器、土師器坏3点・甕3点) (第24図、写真14図、第7表) 出土総数は少い。

〔須恵器〕 :壺片 烧成及び胎土不良のもので軟質である。

〔土師器〕 :坏 ロクロ仕様で、磨滅している。:甕 破片で、落込み部より出土した。

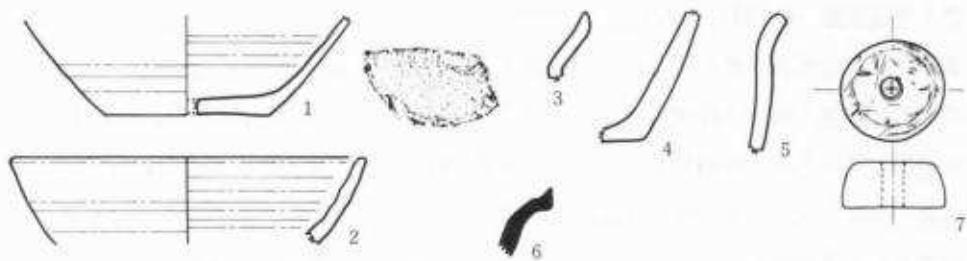
〔石製品〕 紡錘車(表面に少々傷がある。中央穴の1部に打欠き痕がある。滑石製。)



第23図 第4号 (Bg98) 住居跡

(第7表)	名	分類	万石	高さ	法	量	m	D	深さ	成	形	状態	孔	法	断面	調		外	内	施	施	考			
																年	月	日	種	式	度	底	高	度	施
須	住居跡	24-1	14-19	井	-	20.2				複合	-	コロ	-	井	-	-	-	-	-	-	-	-	-	千葉	東
居		1	24-1	14-21	南北	3.0	0.4	4.0	直	口	0	青	口	アコ	圓	井	-	-	-	-	-	-	-	横	青
跡		1	24-2	14-22	井	-	20.4			井	井	井	-	井	井	井	-	-	-	-	-	-	-	井	井
		1	24-2	14-22	南北	3.2	0.4	4.0	直	口	0	青	口	アコ	圓	井	-	-	-	-	-	-	-	横	青
		1	24-7	14-27	南北	3.2	0.4	4.0	直	口	0	青	口	アコ	圓	井	-	-	-	-	-	-	-	井	井
		1	24-7	14-27	南北	3.2	0.4	4.0	直	口	0	青	口	アコ	圓	井	-	-	-	-	-	-	-	井	井
		2	24-1	14-18	井	-	21.0			複合	-	コロ	-	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井
		2	24-1	14-18	井	-	21.0			複合	-	コロ	-	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井	井

— 南矢中遺跡 —



第24図 第4号住遺物 S=1:3

第5号住居跡 (Bh06) (第26図、写真17図)

〔遺構〕 [保存状況・壁] 残存部壁高18cm内外。崩落のため壁立たず皿状である。

〔平面形・規模・カマド・方位〕 隅丸方形2.4×2.6m、短軸方向のカマドはN65°Eと偏し東壁南東隅近くに河原石にて袖・天井を構築している。焚口・煙出底は水平な煙道より一段低い。

〔堆積土〕 暗褐色土・黄褐色土・黒褐色土の自然流入である。

〔床面〕 北側に傾斜し、南西方向及び北東方向の落込みがある。

〔遺物〕 (須恵器坏1点、土師器坏1点・小壺1点) (第25図、写真17図、第8表)

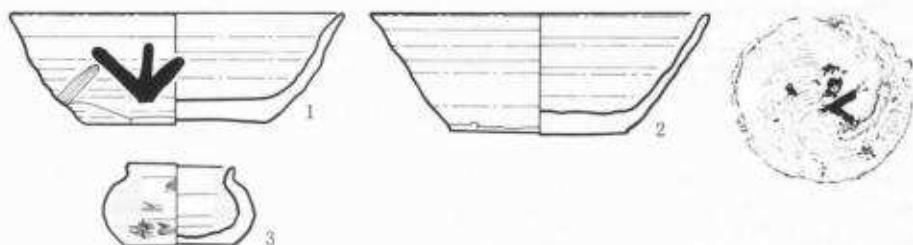
〔須恵器〕 : 坏 胎土・焼成不良で、底部の墨書も判読出来ぬ程に磨耗している。

〔土師器〕 : 坏 内面にロクロ撫で痕が残存している。褐色外面及び黒変のため墨書は判読出来ない。 : 小壺 内外黒色処理で所々に鏡磨きの跡が見られる。

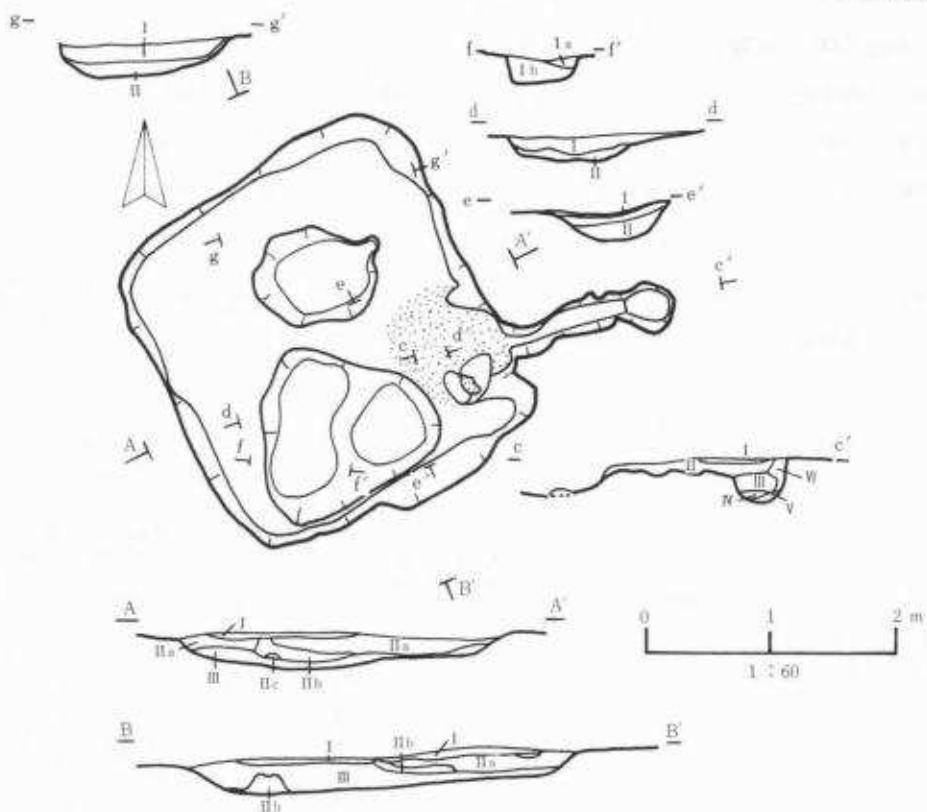
第6号住居跡 (Cg42) (第26図)

〔遺構〕 [保存状況・壁] 南半部検出掘上げのみで詳細不明。残存壁高5cm内外である。

(第8表)	図 番号	年 代	出 土 者	法 量 cm	口 径 cm	底 径 cm	成 形 法	形 式 法	底 部 形 式	胎 土	調 査 物	燒 成 度	備 考
Bh06	16	25-2	17-1	米	面	13.0	7.0	4.9	直	平	土質	±?	未
Bh06	16	25-3	17-2	厚	土	13.3	7.1	4.6	+	+	陶粒石	±?	未
Bh06	16	25-3	18-1	米	面	14.1	4.3	3.3	馬	瓦	陶粒石	±?	未



第25図 第5号住・遺物 S=1:3



A. 咬ぬ色土。やや滑るをもちシルト粒が多く入っておりしまりはあるが粘りなし。

IIa. 地上とシルトが混じり、やや粘りしまりあり。

B. 黄褐色土。やや滑くなる。

IIb. 地上。ハサハサしている。(古褐色土)

IIa. 黄褐色土。シルトがプロック状に入る。

IIc. 黑褐色土。シルトはカラン。最も部は固くしまっている。粘りあり(团子)しまりゆるやか。シルトはプロック状に入っている。上面には焼土粒がまじる。上部が生活面と思われる。

IIb. 黑褐色土。しまりなく柔らかい、シルト粒が少くなる。

III. 黑褐色土。シルトの流れ込みと思われ。黒く汚れている。カマドに近くなると特にそうである。(遺物の出土は皆無。底面に燒土れきえなし)

c. I. 黑褐色土。焼土プロックなし。

II. 黄褐色土。焼土プロック解。

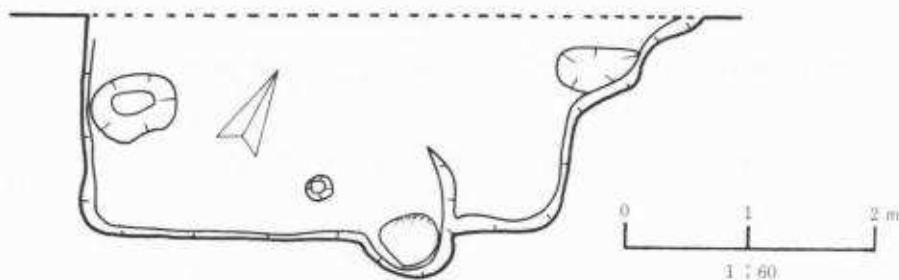
d. II. 黑褐色土。焼土プロックまじり。

III. 黑褐色土。魔芋土。焼土と炭化解。

e. II. 黑褐色土。魔芋土。焼土プロックなし。

IV. 黄褐色土。魔芋土。

第5号 (Bh06) 住居跡



第26図 第6号 (Cg42) 住居跡

— 南矢中遺跡 —

第7号住居跡 (Da 224) (第27図、写真18図)

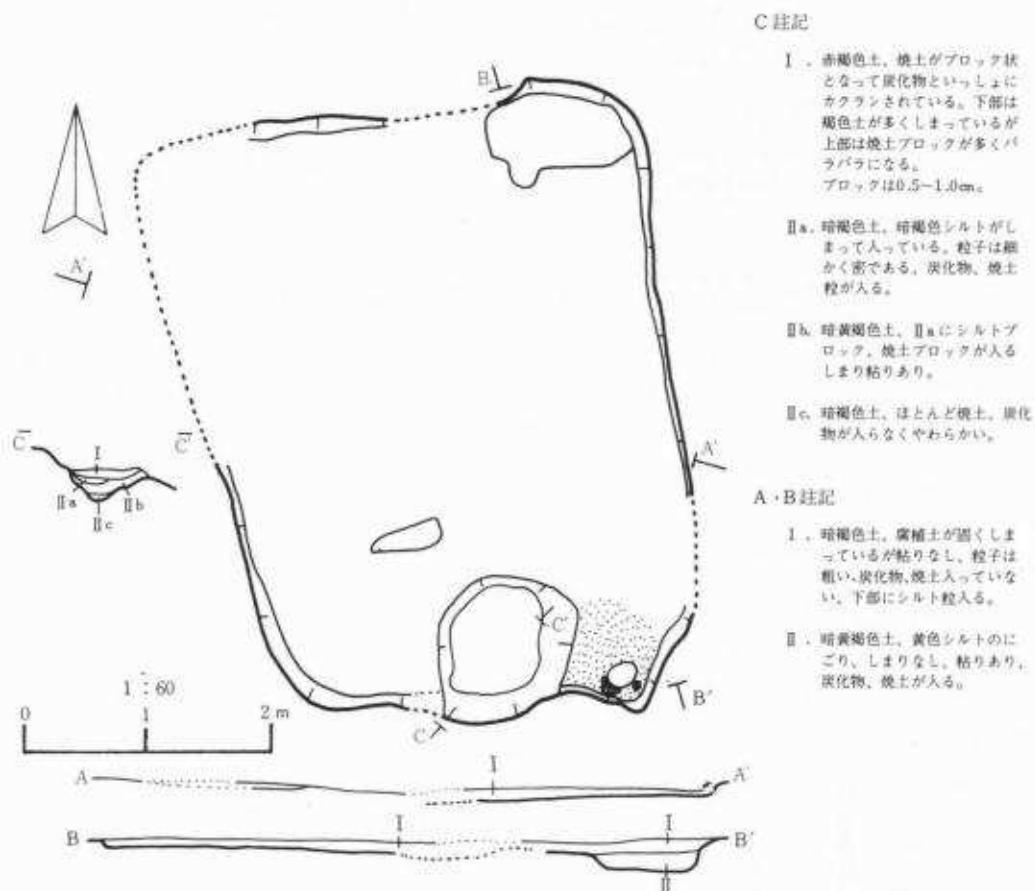
〔遺構〕 [確認面] 同前。掘込面は方形状溝の構築に関する擾乱にて不明である。

〔保存状況・壁〕 残存壁高17cm内外。南東より北西隅にかけ方形溝により切られている。

〔平面形・規模・カマド・方位〕 隅丸の長方形で $3.4 \times 4.4\text{m}$ 。長軸方向南東の隅に袖石らしきものと焼土が見られるのでこの方位とすれば S 12°E を示す。

〔堆積土〕 暗褐色土一層のみである。〔床面〕 ほぼ水平である。南壁際に小土壙がある。

〔遺物〕 [須恵器] 坯 第8号住居跡埋土口縁片と接合した床面出土のものである。



第27図 第7号 (Da224) 住居跡

第8号住居跡 (Df 245) (第29図、写真18図)

〔遺構〕 [保存状況・壁] 残存壁高15cm内外。ほぼ水平に残るが、壁は崩落している。

〔平面形・規模・カマド・方位〕 隅丸方形一辺3.6mの広さ。両袖に土を用いたと思われるカマドの煙道が第5号住居跡の形状に似たものならば、焚口・煙出の関係も同様になろう。北向きの焚口附近には遺物が集中している。

〔堆積土〕 暗褐色土、黒褐色土であり自然流入である。

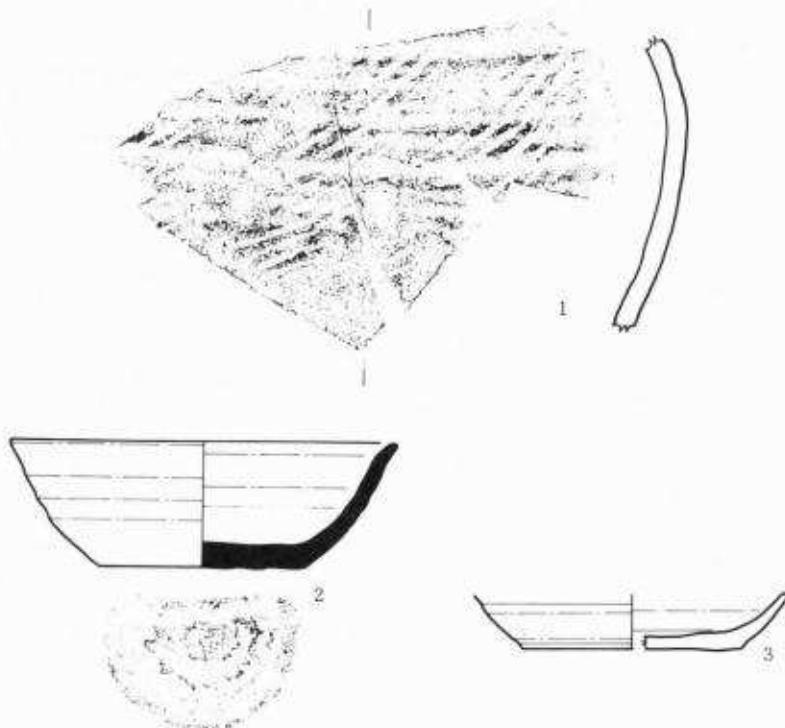
〔床面〕 南側中央・カマド袖東側に小土壤がある。北東隅に落込みが見られる。

〔遺物〕 (須恵器坏1点、土師器坏3点、甕13点) (第28・30・31図、写真18~20図、第9表)

〔須恵器〕 : 坏 第7号住居跡床面出土底部と接合した埋土口縁片である。

〔土師器〕 : 坏 ロクロ仕様で磨耗している。 : 甕 非ロクロとロクロ調整と半々である。

箆削りと箆撫の調整技法が大半のものに見られるが、2点程体部に叩目痕を有する物もある。胎土は細礫等も含まれるが良好である。焼成状態は普通である。カマド附近に10点程集中して出土した。

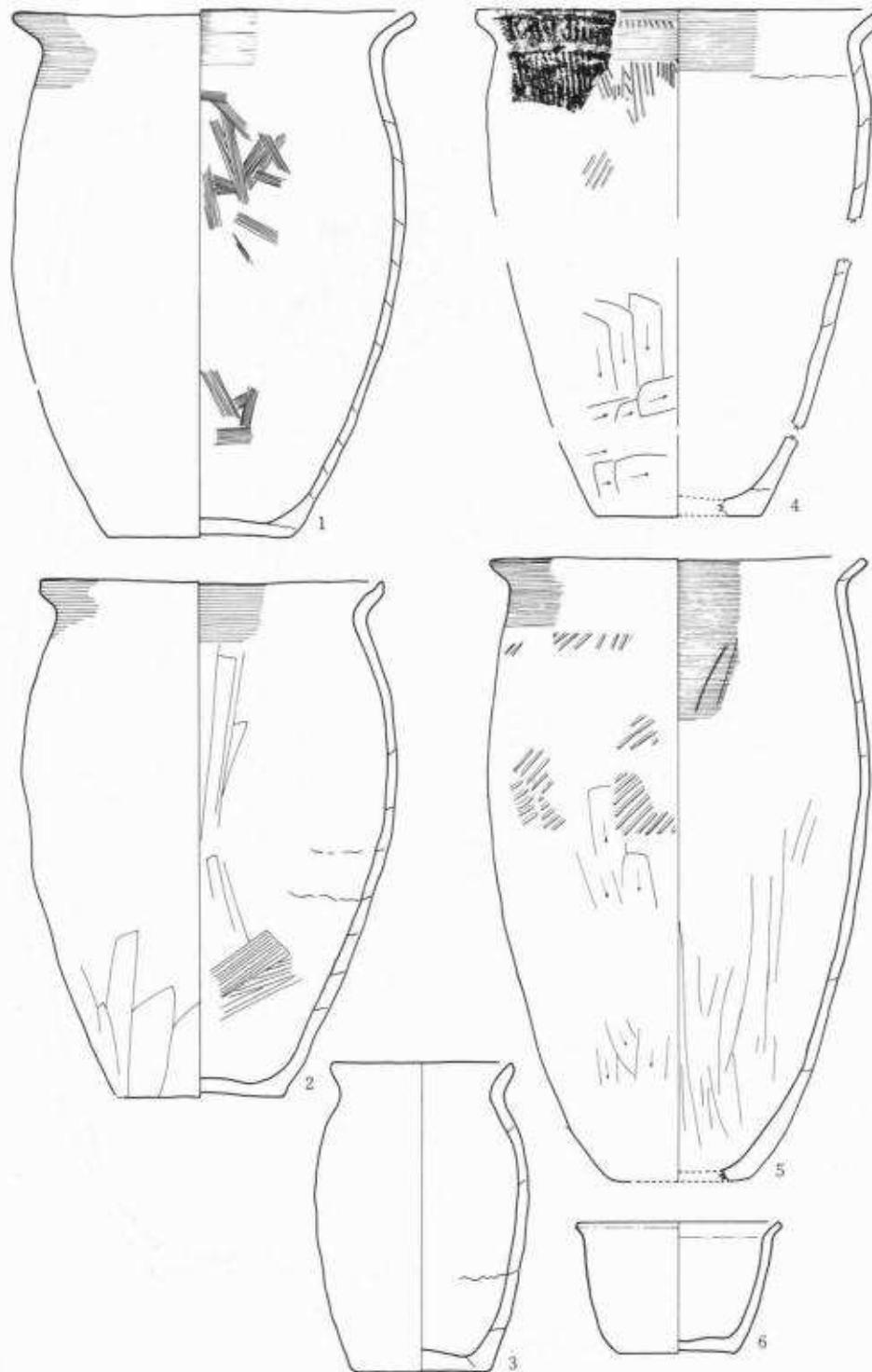


第28図 第8号住・遺物 S=1:3

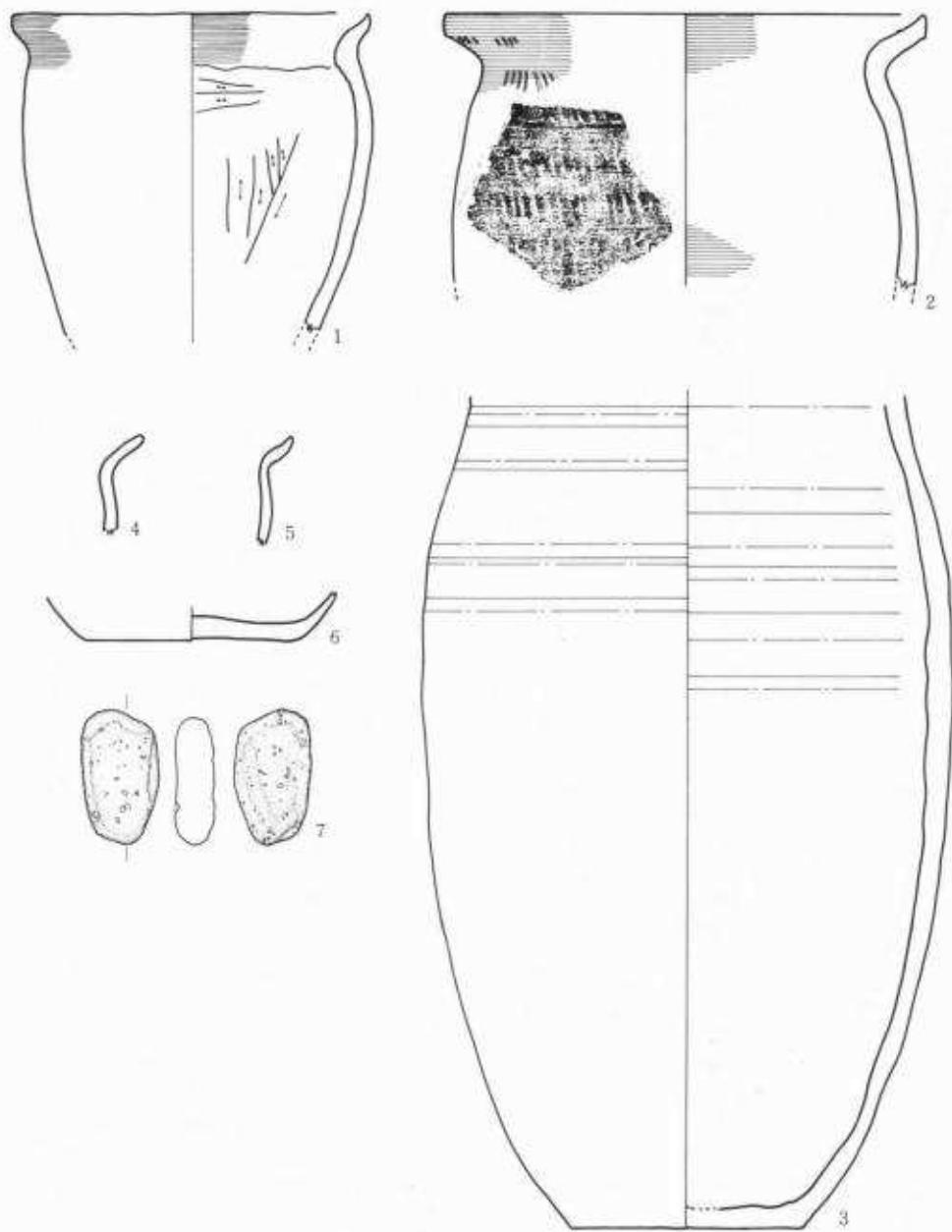
— 南矢中遺跡 —



第29図 第8号(Df245) 住居跡

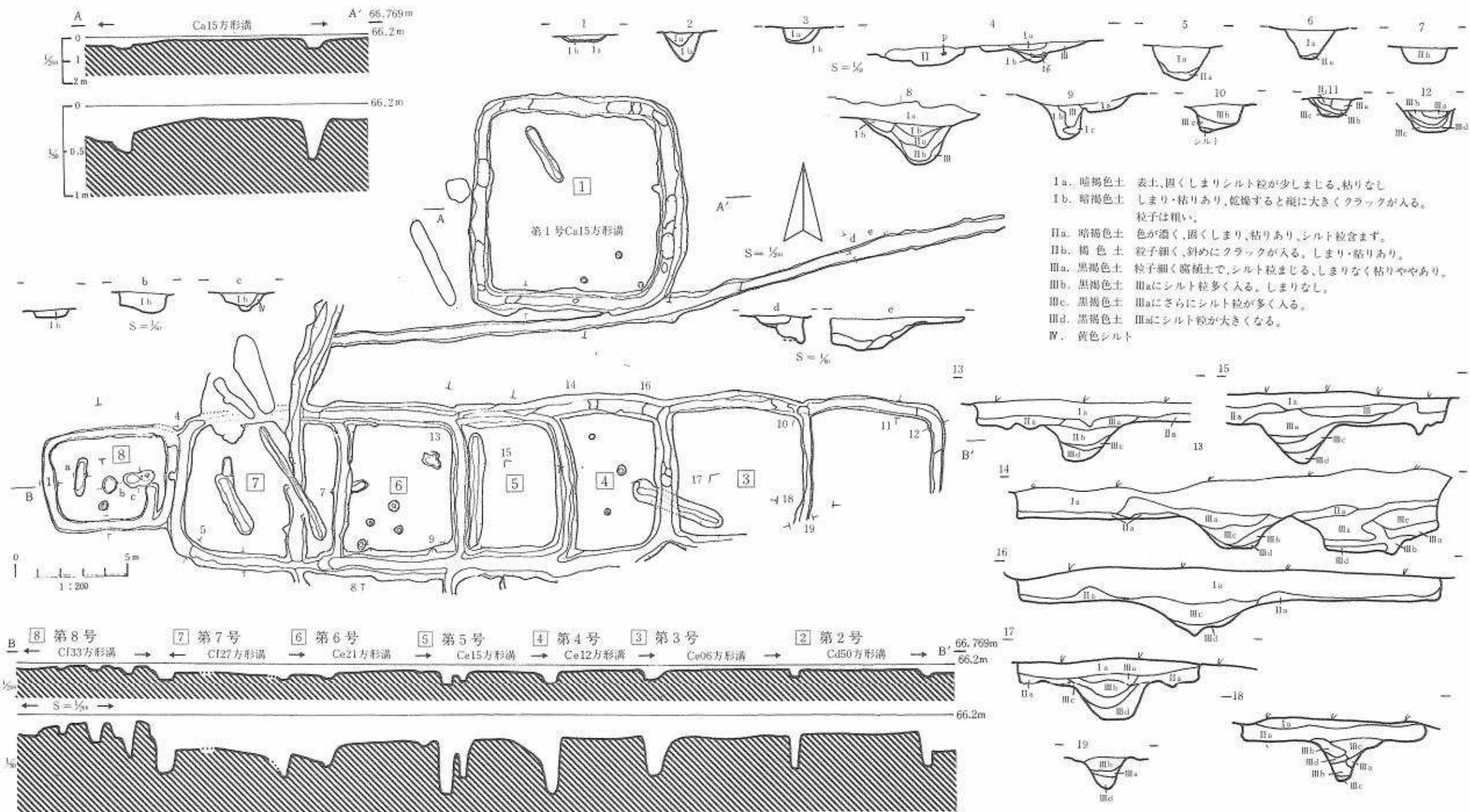


第30図 第8号住・遺物 S=1:4



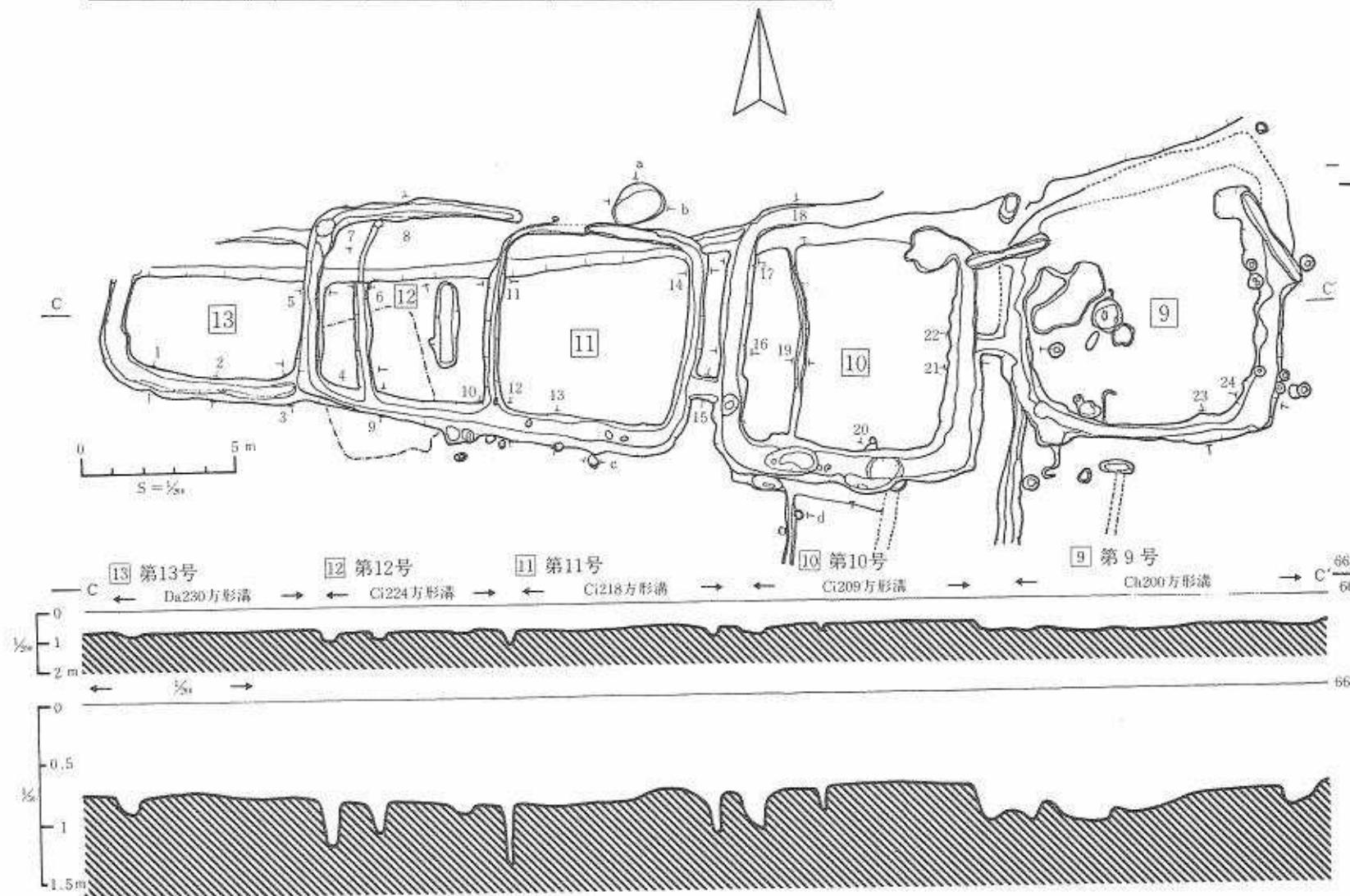
第31図 第8号住・遺物 S=1:3

第32図 第1号～8号方形溝

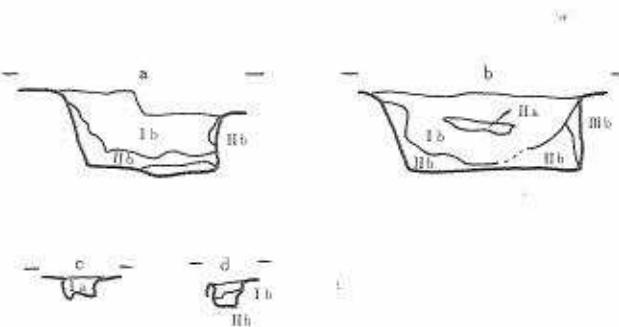


第10表

	第1号方形溝 (C1207)	第2号方形溝 (C1208)	第3号方形溝 (C1209)	第4号方形溝 (C1210)	第5号方形溝 (C1211)	第6号方形溝 (C1212)	第7号方形溝 (C1213)
東西巾[m]	9.2	5.6	5.8	4.4	4.1	5.8	7.1
南北巾[m]	11.0	5.1	6.9	7.7	7.6	7.5	7.2
溝巾[m]	1.2	0.5	0.4	1.0	0.9	0.9	0.6
溝深さ[m]	0.33	0.22	0.44	0.45	0.53	0.57	0.19
写真番号	21-1	21-2	21-4	21-5	21-7	21-9	(22-2)
	第8号方形溝 (C1214)	第9号方形溝 (C1215)	第10号方形溝 (C1216)	第11号方形溝 (C1217)	第12号方形溝 (C1218)	第13号方形溝 (C1219)	
東西巾[m]	5.9	8.7	7.8	6.9	5.7	6.4	
南北巾[m]	4.6	8.8	8.2	7.1	7.1	5.7	
溝巾[m]	1.0	0.9	1.2	0.5	0.7	0.7	
溝深さ[m]	0.71	0.13	0.39	0.37	0.54	0.16	
写真番号	22-7	(22-5)	22-5	25-I	25-1	24-8	

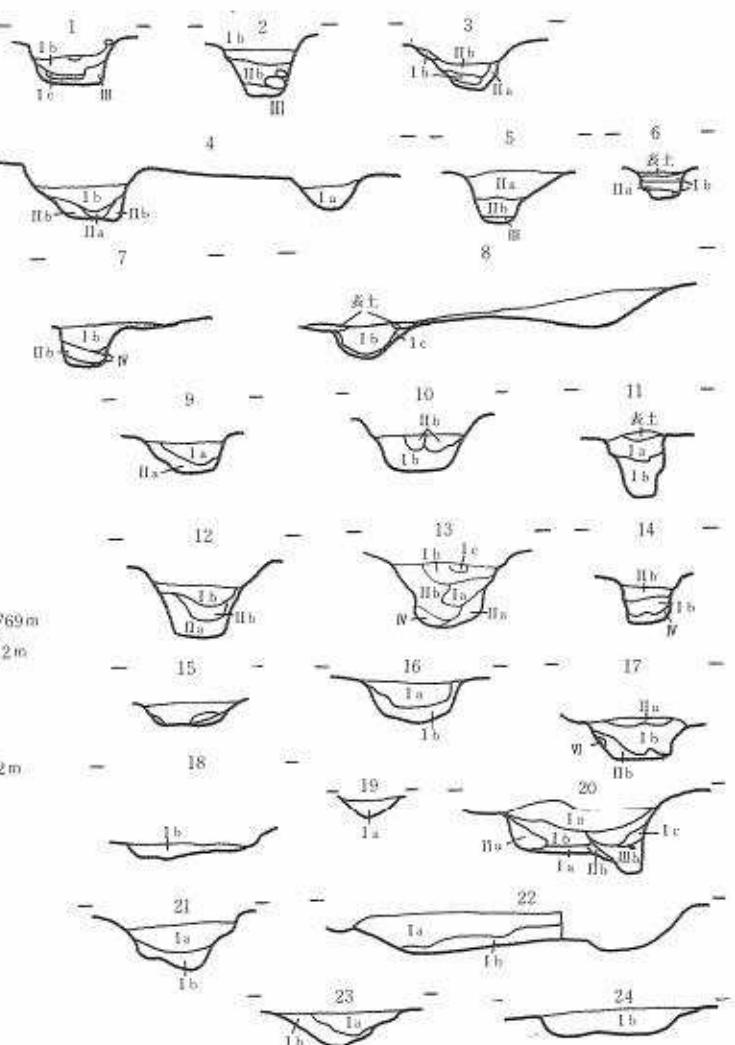


第33図 第9号～13号方形溝



Ia. 暗褐色土 表土、固くしまりシルト粒が少しまじる枯りなし。
Ib. 暗褐色土 しまり・枯りあり、乾燥すると縫に大きくクラック
が入る。粒子は粗い。
IIa. 暗褐色土 色が濃く、固くしまり、粘りあり、シルト粒含ます。
IIb. 褐色土 粒子細く、斜めにクラックが入る。しまり粘りあり。
IIIa. 黄褐色土 バイミス混りの擾乱土
IIIb. 黄褐色土 バイミスとシルトの擾乱土
N. 黄色シルト

a-d, 1-24 S=1%



2 方形溝状遺構（第32・33図、第10表、写真21～26図）

検出された総数は13基、その内の第1号遺構は独立している。その他はそれぞれ東西に連なり、7基と5基の2つの連続遺構を作っている。

〔平面形・方位〕 第1号遺構より基本形として隅丸方形の溝が考えられ、2連続遺構もその発展形態として見る事が出来る。東側の7基連続した遺構は西より第8号・7号とあり第6～2号と延びる。第7～5号までと第4～2号では形状の違いが見られる。第7号と第6号ではほぼ方形の連続であるが追設と思われる第6号は幾分南北に長い方形である。この様に追設は正方形で行なわれず延長される様だが、第4号は台形状になされ第3号では正方形に近くなっている。第2号については未調査部もあるが正方形に近い形であると思われ、第8号と第7号の様な連なり方と異なる事が考えられる。第9～13号の西側5基のうち、第9・10号は溝を共有せず繋溝があり第10と11号も同様である。第11～13号は西側に追設した形で延びている。第12号では更に小さい連続を有していた様であるが北部不明により断定出来ない。

〔規模〕 最大は第1号遺構の約9×9mで、最小は第8号の約6×4.5mである。

〔縦断面形〕 個々の溝断面はほぼ半長円形が検出されている。上部構造は削平を受けたものと思われる。第1号遺構の溝は東西方向にて東側底部が低くなっている。第2～8号では第6・5号・第5～4号のそれぞれの境の溝底が一番低くなっている。遺構図で示した通り第6と5号の境より南側に延びる溝があり前述した溝底の低さと関係を有するものと思われる。

〔溝堆積土〕 大半に於いて黒褐色土及び地山崩落土混土であるが、第7号の東溝及び第6号の南溝にては褐色土及び暗褐色土の卓越が見られる。この傾向は8号にても見られる。黒褐色土を欠く理由として、短期間の開口、または短期間内の埋設等が考えられる。

〔溝底表面〕 平滑ではなく凹凸があり、第1・9・10号の様に独立した形のもの程、小土壤等が見られるが遺構に伴うものか否かについては不明である。

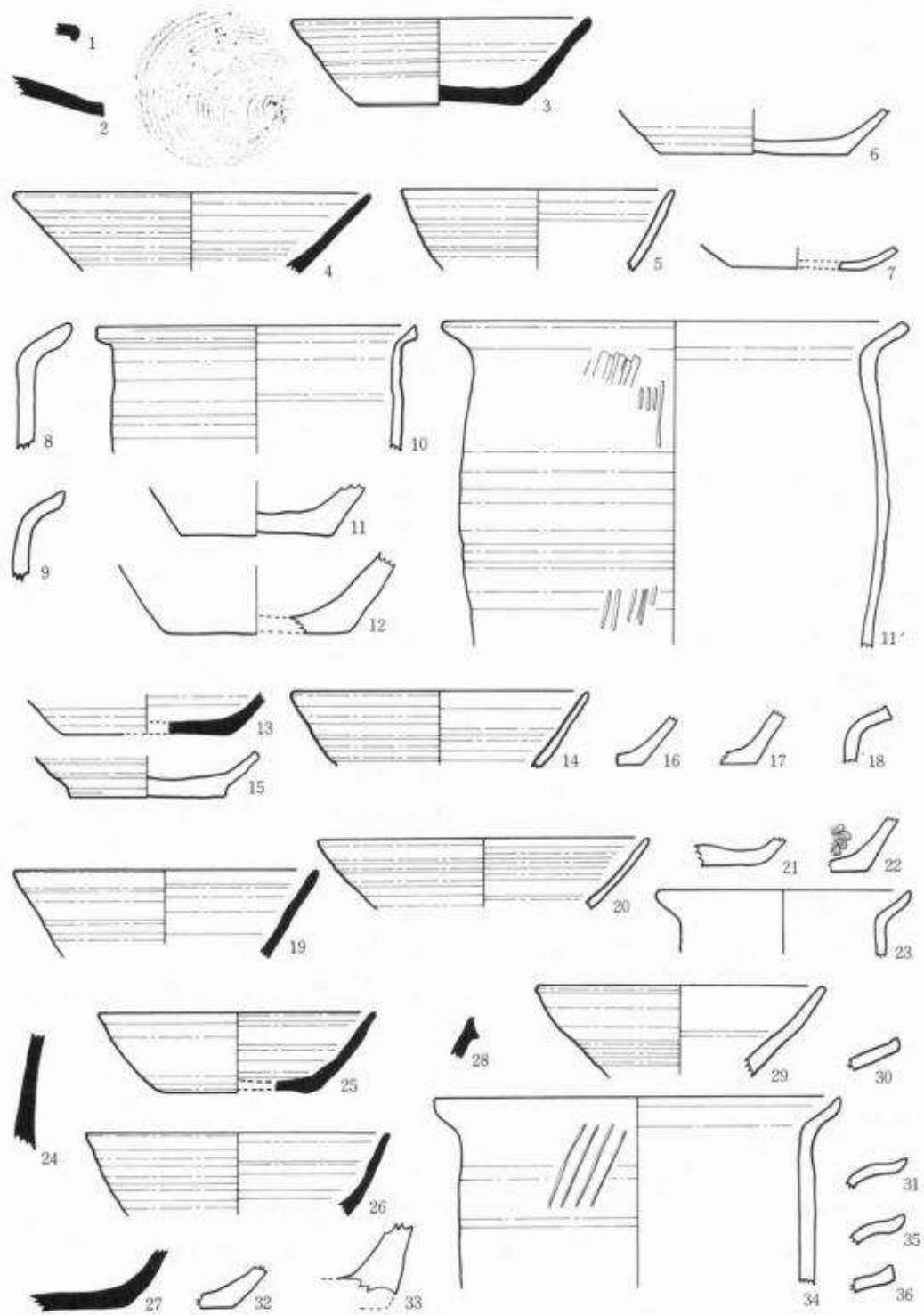
〔切合・新旧関係及び時代の推定〕 方形溝の追設という事で切り合い関係にないとも言えるが追設に関してまだ決定的な根拠を欠いている。一応追設と言う事で見れば、第7～2号では第2号が一番新しく追設された事になる。第11～13号では第13号が一番新しく追設された事になる。第7号と第8号にては追設は考えられず、新旧関係は不明である。第1号と2つの連続遺構の新旧も不明である。追設の新旧は各号の溝の同時存在を否定する材料とはならない。この事は断面形の項で述べた南側に伸びる溝との関係で同時存在の可能性も考えられるからである。また西側の第9～13号については、第9・10号及び11号間の溝が繋として機能していたとすればこれらも同時に存在した可能性もある。この事は北溝・南溝及び両端の東西の溝において一層強くなる。これらの時期については第12号方形溝が第7号住居跡を切っている事より考えられる事がある。第7号住居跡は出土遺物より平安時代前期（9C）以後とほぼ考えられるから

少くとも第11～13号方形溝はそれより新しい事になる。そして他の方形溝遺構も第11～13号方形溝と同時存在していたならば同様に考えられる。第7号方形溝は遺物として、須恵器の坏で、回転莞切調整有るもの、土師器坏で内黒・墨書のものを出土しているから、平安時代中期（10C）より新しい物である事を示す。第7号方形溝については第1号南北溝（Cd 24）との切合関係もある。溝の機能の一要素としての水路の役割は新しく出来た南北溝により少くなり理土層にも他との相異が生じた。南北溝とこれら方形溝の機能的共通性は少いようにも思える。

〔出土遺物〕遺構平場（削平平坦面）より出土のものに、第6号方形溝の須恵器甕片があるが、これは南西方向の第5号焼土遺構（Ch30）埋土出土や第2号住居跡カマド・第4号住居跡出土遺物と胎土技法等酷似しているのでそちらの所属とした。同遺構平場よりは須恵器壺3)が出土している。その他の出土物は溝埋土よりのものである。それら埋入された遺物の時代差はあるがそれぞれの遺構の時期区分資料とは成し得なかった。第7号方形溝須恵器壺6)は第6号出土物と接合している。同7号遺構出土物で第3号住居跡、カマド焼土よりの土師器甕9)や床面出土の甕1)と接合している。

第9~13号方形溝出土遺物は関連として第7号住居跡及び円形土壙（第9号方形溝削平平場上にあり同時存在または方形に併う施設との判断も出来ないが）第2~4号焼土（Ch200）（同前）のもの等がある。第6号方形北溝埋土遺物の甕は胎土技法等酷似の（Ch30）遺構出土須恵器甕6）にまとめた。記銘が方形溝の須恵器甕底部は第2号住居跡の口縁部と接合している。

時代差については須恵器甕の場合、第7号方形溝の3)のように底部範撫で調整の物があるが他の大半は回転糸切無調整である。上師器甕では、第5号方形溝3)・第7号方形溝1)の様な口クロ調整でも卯目を有する物があるが他は口クロ調整が主である。



第34図 方形溝等、遺物 S=1:3

— 南矢中遺路 —

3 烧土遺構（第39図、写真10・23・25図、同7～9図、12～13表）

第1号遺構（Cf 33）（写真10図、第11表）

第8号方形溝の北側70cmのところに検出された。東西80cm、南北55cm、長楕円形の焼土を伴なう土壤である。出土遺物は須恵器・完形環である(第8方形溝遺物一覧に記載)。

本遺構との関連は不明であるが、第8号方形溝の北西付近に焼土の広がりが見られ埋土中より遺物も出土して、調査時には住居跡との仮定もなされた。

第2号遺構（Ch 200②）（第39図、写真10図、第11表）

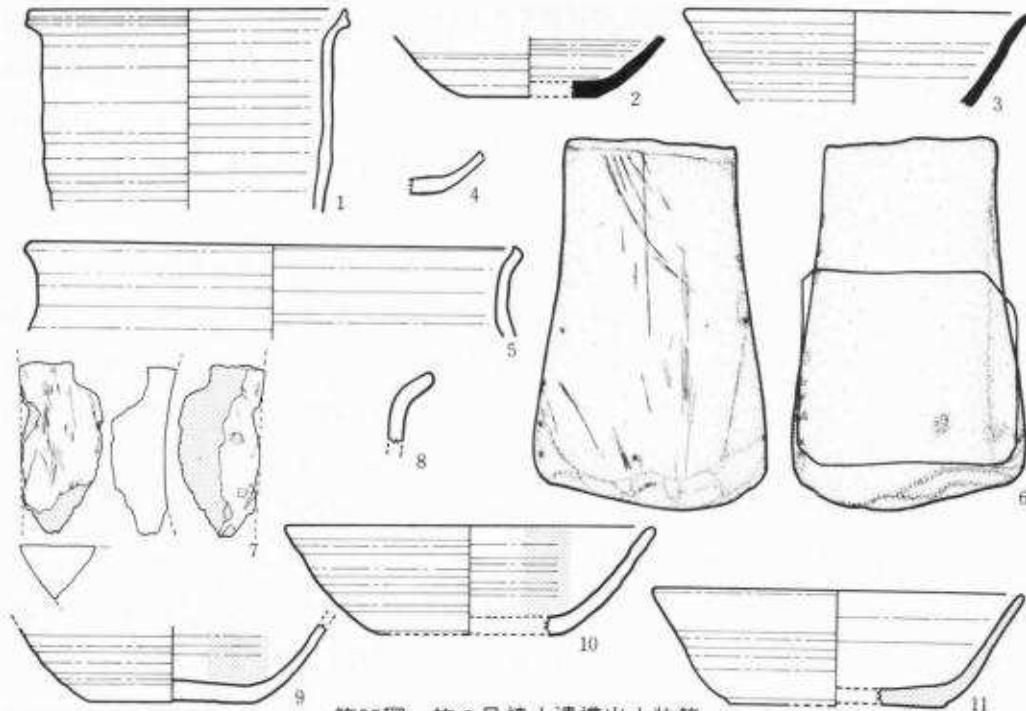
第9号方形溝平場上にて、円形(Ch200)土壙によって南西部を切られている。平面形はほぼ円形で直径約46cm・深さ25cmである。固く締った焼土下の2層には焼土團塊が下程減少して含まれている。遺物は上より2層目に出土している。最下層には炭化物も含まれている。これらの2層は擾乱土である。

第3号遺構 (Ch 200①) (第39図、写真10・25図、第11表)

第2号焼土同様、切合の関係にあり北西部を切られている。平面形は不整円形で、直径約75cm・深さ約15cmである。断面形は第2号焼土の鍋底状と異なり浅い鉢状である。堆積土は2層であるが上位の赤褐色土層が厚い。焼結の跡は見られず焼土団塊及び炭化物が擾乱土中に混在している。

第4号遺構（Ch200小土壤③）（第33圖、写真10・35圖、第11表）

第9号方形溝の北西隅近くにある。長軸長約1.5-短軸長約0.5-で北東方向に向いてゐる。



第35図 第6号焼土遺構出土物等

(第12表)	國	書号	写真	出上	通量	cm	口 徑 深 度	形 狀	底 部 形 狀	底 部 切 法	底 部 磨 耗	附 土 合 有 物	調 整			燒 成 度 美 良 否	備 考	
													外 面	内 面	底 部			
CH	16	—	26-18	標	土	6.1	—	平 底	口 之 口	削 輪 形	—	石 英 石	—	—	—	是 元 青	淡褐色同心円状施様	
CH	27	36	36-4	26-26	—	5.0	—	平 底	—	—	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	14号部上部は剥落した部分	
土師器	16	35-1	26-22	—	—	—	複 合	—	—	—	—	石 英 石	—	—	—	—	—	
CH	30	36	—	26-37	1	12.0	外 輪	口 之 口	削 輪	—	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	深手	
CH	30	32	—	—	—	11.6	—	—	—	—	—	石 英 石	—	—	—	—	—	
CH	33	36-25	—	—	—	8.2	—	平 底	口 之 口	削 輪 形	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	内面凹凸	
器	—	—	—	—	(体底片)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	丸輪形	
上輪器	1	—	26-10	—	—	15.4	外 底	—	—	—	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	足尖前	
上輪器	2	—	—	—	—	6.0	—	平 底	口 之 口	削 輪 形	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	直足	
上輪器	3	—	26-13	②	標	土	9.7	—	平 底	口 之 口	削 輪 形	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	丸輪直足
CH	32	36	—	26-14	②	—	11.2	外 底	—	—	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	丸輪上口付直足(1-1, 3-1)	
土師器	16	35-2	26-14	②	—	26.0	複 合	—	—	—	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	地口口付	
土師器	16	—	—	Ag18	II	—	—	平 底	口 之 口	削 輪 形	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	Ag18	
土師器	16	—	—	Ag18	II	—	—	平 底	口 之 口	削 輪 形	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	Ag18 内面直角、第2号口付上部凹	
土師器	16	—	—	—	—	8.6	直 底	—	—	—	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	N16 有白色斑	
土師器	16	—	—	白163	II	—	—	平 底	—	削 輪 形	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	白163 口付直角	
土師器	16	—	25-10	26-18	—	—	14.8	2.2	4.3	直 底	平 底	—	不 明	—	—	—	良 光 青	厚さ2.2cm(TAC366)
土師器	2	—	26-11	25-17	—	—	14.0	9.4	4.6	—	—	—	磨 擦 痕	曲 壁	浅 腹	—	良 光 青	直底(1741-65)
土師器	2	—	25-8	25-16	—	—	18.0	複 合	—	—	—	—	—	—	—	良 光 青	口付式施文様、3号口付直角	
土師器	16	—	26-15	26-29	II	—	—	平 底	—	削 輪 形	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	直底(1741-65)と複合	
土師器	2	—	—	—	—	—	直 底	—	—	—	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	直底(1741-65)と複合	
土師器	25	—	—	2号溝土	—	—	—	平 底	—	削 輪 形	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	2号溝土と複合	
土師器	25	—	—	26-65上塗1	—	—	—	—	—	—	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	26-65上塗1と複合	
土師器	25-13	813	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	良 光 青	25-13 813と複合	
土師器	16	—	—	C615 売大	—	—	—	平 底	—	削 輪 形	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	有直	
土師器	—	—	—	C615 売土	(復原)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	良 光 青	小孔	
土師器	—	—	—	C612 売	(復原)	—	—	—	—	—	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	小孔(1741-65と複合)	
土師器	—	—	—	25-18	C612 売土	(複原)	—	—	—	—	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	小孔	
土師器	—	—	—	—	C611	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	良 光 青	五孔型	
土師器	—	—	—	26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	良 光 青	内部直柱上	
土師器	16	—	—	Ce27 売土	—	14.8	直 底	—	—	—	—	石 英 石	—	—	—	良 光 青	C128-111と複合	

— 南矢中遺跡 —

不整形で深さは15cm程である。遺構北部は削平の為か境界は不明瞭である。一覧表に掲載の遺物は焼土より出土のものが多い。全体的には口縁部体部半々の出土である。焼土よりの出土物は磨耗片が多い。須恵器坏にロクロ仕様・回転糸切無調整が確認されるものもある。須恵器・土師器坏には墨書きのものがあるが判読出来ない。土師器甕3)はCh200土壤出土物と接合する。

第5号遺構 (Ch30) (第39図、第13・14表、写真7~9・26図)

調査地区 Ch27線上の土壤を5-1号とし、西に5-2号、東に小土壤の集合した5-3号の集まりである。東西約2.4m、南北約1.5mの不整楕円形状に広がる落込み中に前述の土壤が検出された。他の遺構確認面と同面にて褐色土中に焼土粒を含む広がりがあり、その下には、焼土塊をレンズ状に截せた黒色土層がある。この黒色土は下の焼土、シルト質土と更に下の黒色土とシルト質土の擾乱土がレンズ状に残存した上に載っている。

出土土器としては5-3号よりほぼ完形の土師器内黒坏等3個体が出土している。その他にも多数の土器片が出土している。須恵器坏にては調整の痕跡が認められるものもある。土師器坏の場合は、回転糸切り後範削り調整した内黒処理のものが出土している。甕は須恵器・土師器とも出土し前述の方形溝状遺構や第2号住居跡出土物と接合するものもある。

他の遺物：小型石盤（直径17.0mm、厚さ5.5mm円形に近い隅丸方形、砂岩質で第1号住居跡にもこれより幾分大き目の物が出土、用途その他未詳）^(注1) 稔摘み具様鉄製品（長さ10.7cm、巾1.8cm、厚さ約3mm、目釘様残存部長7.0mm、目釘様残存部2心間8.6cm、反り身状に残存しているが刃部不明、目釘様残存部は錆瘤中にあり周りに炭化物の細片が残っていた。錆化面には木質部が貼付いた形で僅かに残存）^(注1) 青森県教育委員会（碇ヶ関村）古館遺跡（昭和54年度）他

第6号遺構 (Ci33) (第39図、第12表、写真26図)

上端径45cm、中端を有し下端は窄む袋状を呈す6-1号は上部西部にて焼土を層状に挟んだ落込を有する。6-2号の平面形はほぼ円形で径は0.48m、断面形は鍋底状で深さは18cm程度である。埋土は2層で下部は汚れた細粒土、その上部は黒褐色土である。出土遺物は少ない。土師器甕口縁部は頸部より上が窄まり複合部は内縁の形になっている。

4. その他の遺構

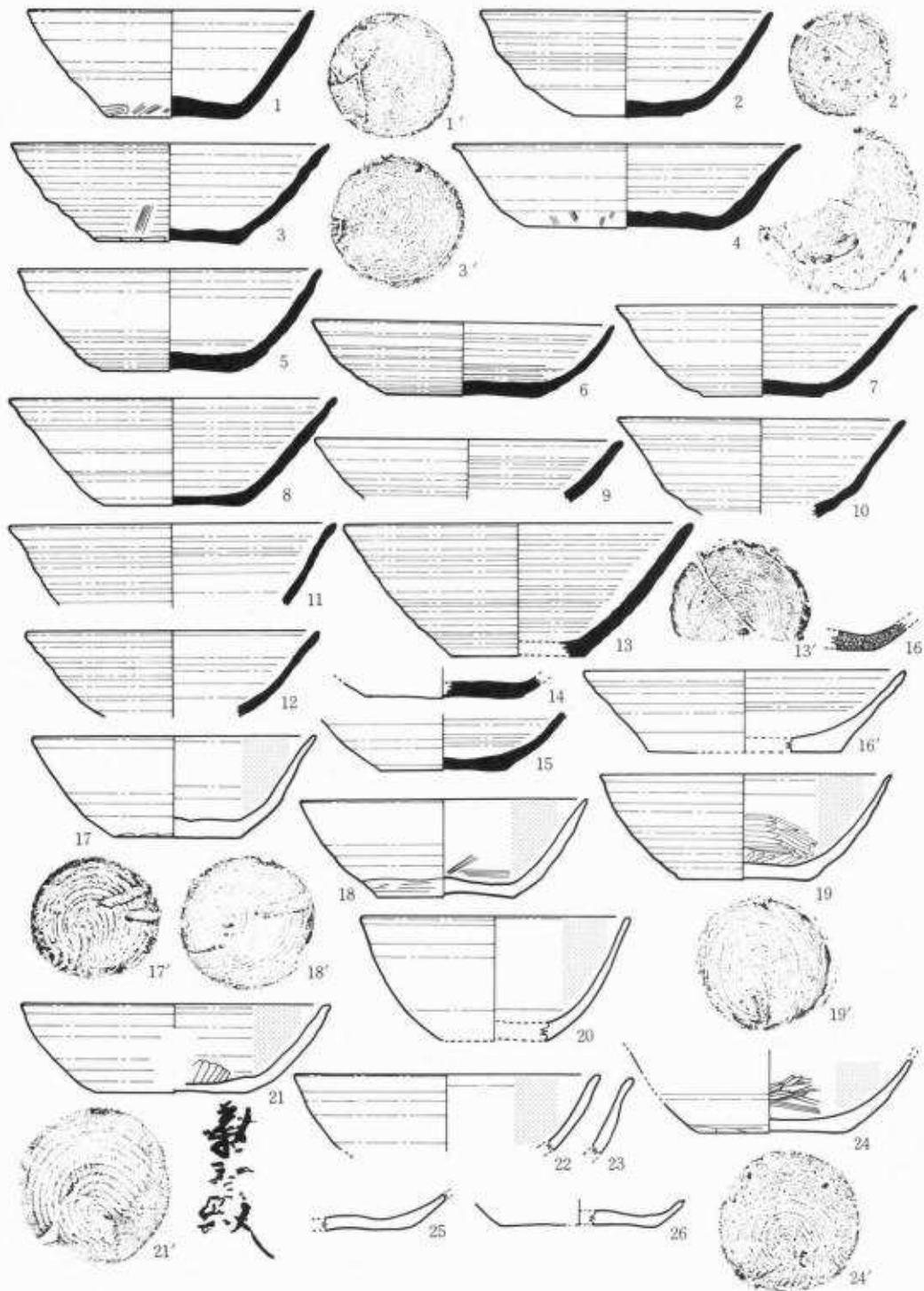
1)溝遺構 (第3・32・33図、写真1図・21図・26図他)

第1号溝 (Bc95)

調査地点 B_c96地点より南東方向 B_{f/g}107地区へ延び第2号住居跡の西壁及び南壁を切っている。埋土等の状況より近世のものと思われる。

第2号溝 (Cd21)

調査地区 C_b21より南のCh21に延びる溝で第7号方形溝を切っている。これらは時期差も大きくなく、同時存在とも考えられる。

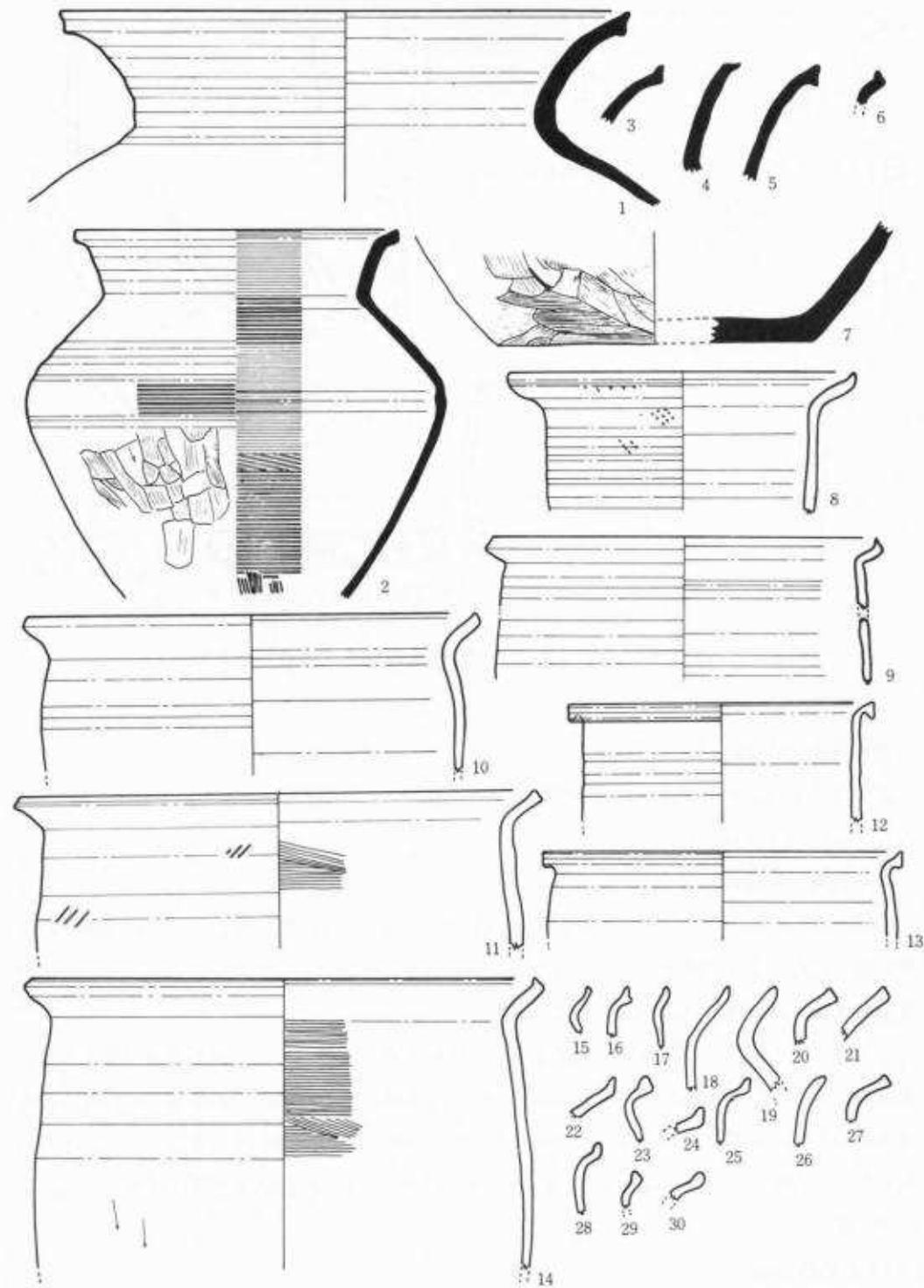


第36図 第5号 (Ch50) 焼土遺構関連遺物 S=1:3

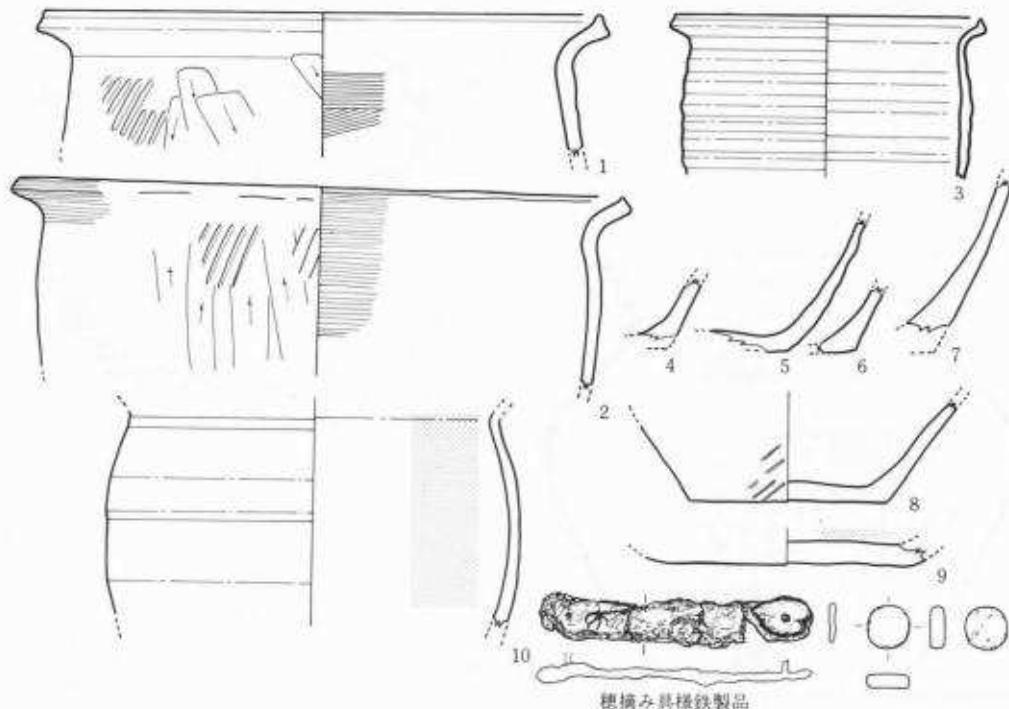
— 雨矢中遭跡 —

(第13番)	測定番号	測定場所	測定面	法量(m)		日 標		基準		感性		成形切削		地 士		調 整		整		地 成			
				上	下	12時	直角	表面	形態	性	直	成形切	削正	地	士	外	内	曲	直	良	不		
第一群	1-36-1	-7-Q1	床 面	12.0	5.8	4.8	角	平	是	口	コ	削正	是	地	士	-	-	是	是	是	是		
	2	-7-Q1	+	13.2	4.9	4.8	角	平	是	口	コ	削正	是	地	士	-	-	+	+	+	少し歪曲		
	3	-3-Q1	-3	14.3	6.2	4.3	角	平	是	口	コ	削正	是	地	士	-	-	+	+	+	無付着物		
	4	-1-Q1	-2	15.7	5.5	2.8	有	有	是	口	コ	削正	是	地	士	-	-	+	+	+	平坦		
	5	-5-Q1	床 面	13.7	5.9	4.0	角(傾少)	+	+	口	コ	削正	+	地	士	-	-	+	+	+	無付着物		
	6	-6-Q1	床 上	13.6	6.7	3.2	角	平	+	口	コ	削正	+	地	士	-	-	+	+	+	表面光沢、鏡面状		
	7	-7-Q1	床 面	13.5	5.3	4.0	角	平	+	口	コ	削正	+	地	士	-	-	+	+	+	光沢、CNC-C1300の特徴		
	8	-6-Q1	床 上	14.7	4.6	4.8	角(傾少)	+	+	口	コ	削正	+	地	士	-	-	+	+	+	Q1を除むと傾く。床上面		
	9	-3-Q1	床 面	13.9	5.6	4.8	角	平	+	口	コ	削正	+	地	士	-	-	+	+	+	厚手		
	10	-10-Q1	床 面	12.9	5.8	4.8	角(傾少)	+	+	口	コ	削正	+	地	士	-	-	+	+	+	手により傾く		
第二群	11	-11-Q1	床 面	14.8	4.8	4.8	角	平	+	口	コ	削正	+	地	士	-	-	+	+	+	厚い凹凸		
	12	-12-Q1	床 上	13.2	5.6	4.8	角(傾少)	+	+	口	コ	削正	+	地	士	-	-	+	+	+	変色(青色)、もみ板		
	13	-12-Q1	床 面	12.5	6.0	5.9	角(傾少)	+	+	口	コ	削正	+	地	士	-	-	+	+	+	大輪盤面 Ck1-C1300の類似		
	14	-14-Q1	床 上	14.7	4.6	4.8	角(傾少)	+	+	口	コ	削正	+	地	士	-	-	+	+	+	薄手等子、開く音		
	15	-15-Q1	床 上	5.6	5.6	5.6	角	平	+	口	コ	削正	+	地	士	-	-	+	+	+	削り落す		
	16	-16-Q1	床 上	6.7	5.6	5.6	角	平	+	口	コ	削正	+	地	士	-	-	+	+	+	削り飛ばす		
	17	-2-Q1	床 上	18.6	19.1	17	複 合	-	+	口	コ	削正	-	地	士	目	+	+	+	+	+	軸、引目(歯車駆動)	
	2	-1-2-Q1	床 上	26.0	19.1	17	複 合	-	+	口	コ	削正	-	地	士	目	-	+	+	+	+	1-2段位間隙	
	3	-3-Q1	床 上	9.9	9.9	9.9	複 合	-	+	口	コ	削正	-	地	士	目	-	+	+	+	+	無付着物	
	4	-4-Q1	床 上	25.2	25.2	25.2	複 合	-	+	口	コ	削正	-	地	士	目	-	+	+	+	+	1片のみ	
第三群	5	-5-Q1	床 上	11.9	11.9	11.9	複 合	-	+	口	コ	削正	-	地	士	目	-	+	+	+	+	複合面にない點がアリ	
	6	-7-Q1	床 上	14.5	14.5	14.5	平 直	+	+	不	規	削正	+	地	士	目	-	+	+	+	+	CNC走査なし	
	7	-8-A	-	-	-	-	複 合	-	+	口	コ	削正	+	地	士	目	-	+	+	+	+	複合面無し	
	8	-8-B-5	Q1床 面	16.0	16.0	16.0	複 合	-	+	口	コ	削正	+	地	士	目	-	+	+	+	+	複合面無し、即日机換	
	9	-9-B-5	Q1床 面	16.1	16.1	16.1	複 合	-	+	口	コ	削正	+	地	士	目	-	+	+	+	+	Q1、Q1	
	10	-6	Q1	16.0	16.0	16.0	複 合	-	+	口	コ	削正	+	地	士	目	-	+	+	+	+	昨日は無理にかけて	
	11	-26-Q1	床 面	12.8	5.6	4.8	左 右	複 合	-	口	コ	削正	+	地	士	直	-	+	+	+	+	地	
	12	-26-Q1	床 面	12.8	6.0	4.8	左 右	複 合	-	口	コ	削正	+	地	士	直	-	+	+	+	+	地	
	13	-29-Q1	床 面	13.2	5.6	4.8	左 右	複 合	-	口	コ	削正	+	地	士	直	-	+	+	+	+	無付着物	
	14	-29-Q1	床 面	12.3	4.5	5.6	左 右	複 合	-	口	コ	削正	+	地	士	直	-	+	+	+	+	無付着物	
第四群	15	-21-Q1	床 上	13.9	6.8	6.6	平 直	+	+	口	コ	削正	+	地	士	直	-	+	+	+	+	地付着、深移行	
	16	-22-Q1	床 上	13.7	6.8	6.8	平 直	+	+	口	コ	削正	+	地	士	直	-	+	+	+	+	無付着物	
	17	-23-Q1	床 上	14.1	—	—	斜見付着	—	—	口	コ	削正	—	地	士	直	—	—	—	—	—	無付着物	
	18	-24-Q1	床 上	9.5	9.5	9.5	平 直	+	+	口	コ	削正	+	地	士	直	—	—	—	—	—	複合面	
	19	-25-Q1	床 上	6.6	6.6	6.6	平 直	+	+	口	コ	削正	+	地	士	直	—	—	—	—	—	無付着物	
	20	-26-Q1	床 上	7.1	7.1	7.1	平 直	+	+	口	コ	削正	+	地	士	直	—	—	—	—	—	無付着物	
	21	-27-Q1	床 上	20.8	—	—	複 合	—	—	口	コ	削正	—	地	士	直	—	—	—	—	—	以接合面に切口削かず筋	
	22	-11-Q1	—	24.1	—	—	複 合	—	—	口	コ	削正	—	地	士	目	研 刃	—	—	—	—	—	無付着物
	23	-15-Q1	—	26.0	—	—	複 合	—	—	口	コ	削正	—	地	士	目	研 刃	—	—	—	—	—	無付着物
	24	-12-Q1	—	14.0	6.2	—	平 直	—	—	口	コ	削正	—	地	士	目	研 刃	—	—	—	—	—	二次欠陥
第五群	25	-16-Q1	床 面	17.0	—	—	複 合	—	—	口	コ	削正	—	地	士	目	研 刃	—	—	—	—	—	無付着物
	26	-17-Q1	床 面	16.4	—	—	複 合	—	—	口	コ	削正	—	地	士	目	研 刃	—	—	—	—	—	以接合面に切口削かず筋
	27	-18-Q1	床 面	22.7	—	—	複 合	—	—	口	コ	削正	—	地	士	目	研 刃	—	—	—	—	—	無付着物
	28	-19-Q1	床 面	19.4	—	—	複 合	—	—	口	コ	削正	—	地	士	目	研 刃	—	—	—	—	—	無付着物
	29	-20-Q1	床 面	19.4	—	—	複 合	—	—	口	コ	削正	—	地	士	目	研 刃	—	—	—	—	—	無付着物
	30	-21-Q1	床 面	19.4	—	—	複 合	—	—	口	コ	削正	—	地	士	目	研 刃	—	—	—	—	—	無付着物
	31	-22-Q1	床 面	19.4	—	—	複 合	—	—	口	コ	削正	—	地	士	目	研 刃	—	—	—	—	—	無付着物
	32	-23-Q1	床 面	19.4	—	—	複 合	—	—	口	コ	削正	—	地	士	目	研 刃	—	—	—	—	—	無付着物
	33	-24-Q1	床 面	19.4	—	—	複 合	—	—	口	コ	削正	—	地	士	目	研 刃	—	—	—	—	—	無付着物
	34	-25-Q1	床 面	19.4	—	—	複 合	—	—	口	コ	削正	—	地	士	目	研 刃	—	—	—	—	—	無付着物

〔第14表〕	試 験 番 号	出 生 年 月 日	性 別	重 量 kg	身 長 cm	頭 部 幅 cm	頭 部 厚 mm	頭 部 形 状	頭 部 法 則	頭 部 骨 格	頭 部 骨 格 分 類	測 定 部		地 質 考 査	
												外 面	内 面		
第5年 Cn 群 群 群	17	22-24	9-17	Gv 工	17.7	76.0	—	直 立	—	直 立	直 立	—	—	—	粗粒 漂砾、赤褐色(No.2)
	18	25	9-15	+	18.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	漂砾、内面上有花斑
	19	26	9-21	+	18.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	20	26-27	9-5	+	12.5	74.0	—	直 立	—	直 立	直 立	—	—	—	漂砾(No.2)
	21	28-29	9-26	漂 L 物	16.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	以砾石带漂砾为主
	22	29	9-27	+	17.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	漂砾(No.2)
	23	31-30	9-18	漂 L 物	18.0	74.0	—	直 立	—	直 立	直 立	—	—	—	漂砾白色
	24	35-4	—	漂 L 物	8.2	—	—	平 廣 不 規 則	—	平 廣 不 規 則	平 廣 不 規 則	—	平 廣 不 規 則	—	砂土白色(No.2)
	25	—	9-22	+	5.2	—	—	直 立	—	直 立	直 立	—	—	—	漂砾(No.2)
	26	—	—	Qv 漂 土	5.2	—	—	直 立	—	直 立	直 立	—	—	—	漂砾
第6年 Dn 群 群 群	27	38-5	—	Qv 漂 土	6.2	—	—	直 立	—	直 立	直 立	—	—	—	漂砾(No.2)
	28	—	—	Qv 漂 土	7.0	—	—	直 立	—	直 立	直 立	—	—	—	漂砾
	29	—	9-25	漂 L 物	7.0	—	—	直 立	—	直 立	直 立	—	—	—	漂砾(No.2)
	30	—	9-24	干 土	9.6	—	—	直 立	—	直 立	直 立	—	—	—	漂砾(No.2)
	31	30-25	第1 季	漂 L 物	(13.1)	—	—	直 立	—	直 立	直 立	—	—	—	漂砾



第37図 第5号（Ch50）焼土遺構出土遺物 S=1:3



第38図 第5号 (Ch30) 燃土遺構出土遺物 S=1:3

第3号溝 (Cd21-1)

調査地点 B^de20付近より東北東のCa 59付近へ延び、Cc 07付近にて第1号方形溝と接するが、前後関係は不明である。

第4号溝 (Da 209)

第11号方形溝と切合い関係にある。北側は削平により不明、南側については方形溝底より高位に底がある。第2号溝と同機能のものか不明である。

2円形土壙 (Ch 200) (第39図・第1表)

第9号方形溝平場上で既述の燃土遺構を切って構築されたものである。底部は幾分窄まるが、断面形は方形に近く、円筒状に掘込まれている。北東隅に水の浸出口があり井戸等の機能も考えられるが底中央の更に掘込まれた小穴との関係が不明にて可能性を述べるに止める。この小穴の深さは約40cmで、東側にも深さ約10cmの小穴がある。出土遺物に須恵器口縁片や、土師器両黒坏片等がある。

[3] その他の遺構

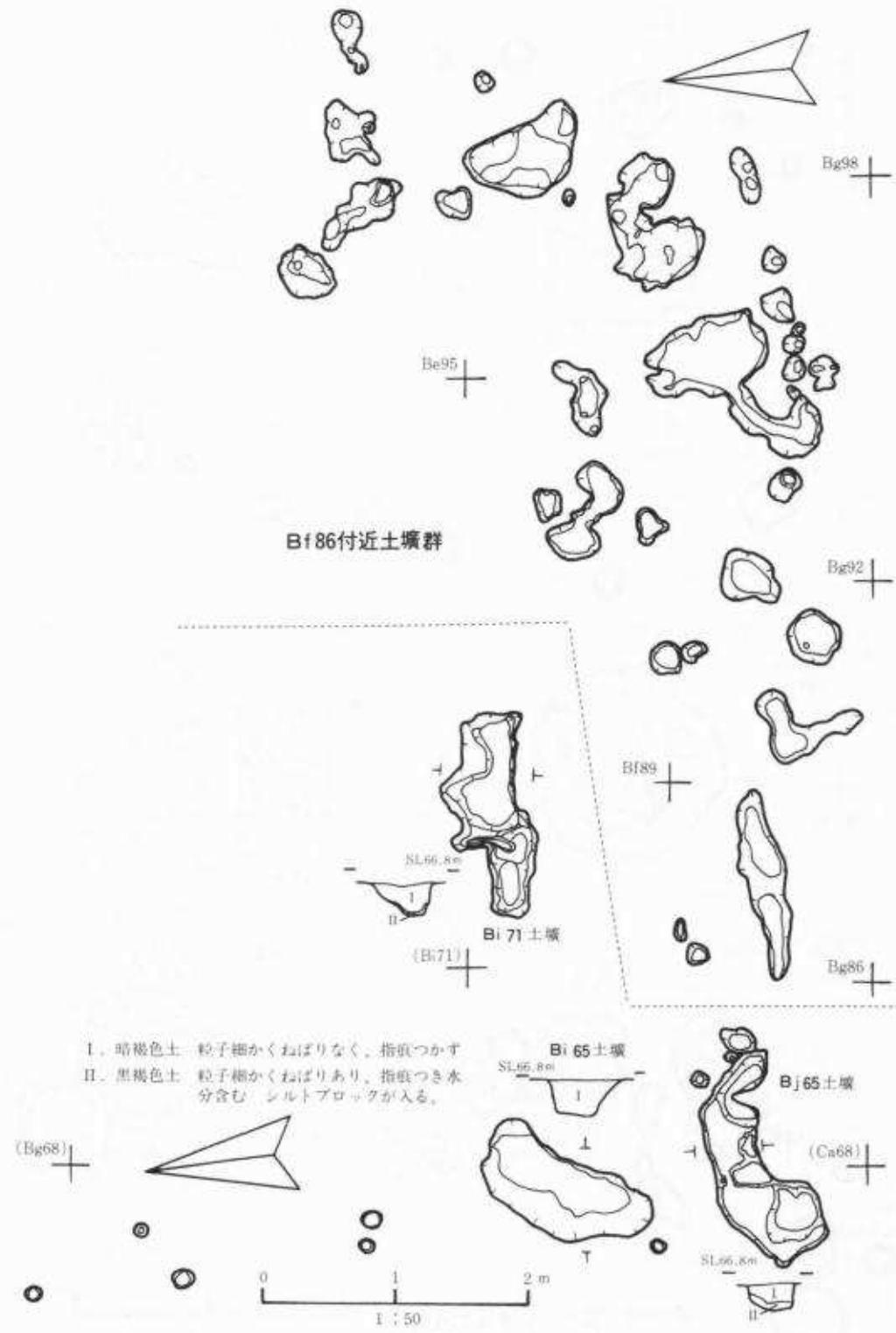
第1不定形土壙群 (Ba 128地区)

縄文晚期片出土小土壙周辺である。形状は不整いで配列の規則性も不明確である。



第39図 第5・6号焼土遺構等

— 南矢中遺跡 —



第40図 その他の土壌

第2 土壌 (Bh83)

平面形は不整円で底面もほぼ相似である。深さは約47cm、底面に小穴が認められる。

第3 土壌 (Bi 65)

北東方向に長い不整形の落込みで1.4×0.55m、深さ28cm、埋土は暗褐色細粒土である。

第4 土壌 (Bi 71)

小土壌が1.5×0.5mの範囲で東西に3基連なる。前後関係は不明である。断面(南北)の1例は片掘り状で底面に黒褐色土層が薄在する。深さは約22cmである。

第5 土壌 (Bj 65)

東西に延びる1.8×0.4m、深さ0.2mの規模の不整形より小穴の連続等も考えられるが、性格等不明である。埋土は第4土壌よりⅡ層が厚い。

第6 土壌群 (Bf 86付近)

調査地 Be95付近へ広がる浅い落込みを有する群であるが、それぞれの関連は不明である。出土遺物はない。

IVまとめ及び今後の問題

1. 遺構とその出土遺物の年代について

本調査地検出遺構の内、竪穴住居跡、方形溝遺構についてその概要とその年代を考察する。

(1) 竪穴住居跡

既述の8棟のおもな点について第15表にまとめた。

(第15表)	東西 m	南北 m	壁高 cm	カマド方位	神龜等	柱	臼	構	出土遺物等
1号 Be 71E	5.6	5.0	15	N35°W	(右)	+	有	鐵石(北西10°), 石子(底面), 石盤(4), 砂岩(1), 陶器(1), 木切(1), 木棒(1)	
2号 Be 86E	4.3	5.0	21	S	無	無	無	瓦(1), 陶器(1), 木棒(1), 木板(1)	
3号 Bh 56E	5.2	5.0	15	S22°E	無	+	無	陶器(1), 木棒(1), 木板(1), 木製品	
4号 Bg 98E	4.0	4.0	13	E	無	無	無	土加石, 木製品(3), 陶器(1)	
5号 Bh 104E	2.4	2.6	18	N65°W	有	無	無	陶器(1), 木棒(1), 木板(1), 木製品(1)	
6号 Cg 42E	3.6	平均	5	E	无	无	无	木製品(1)	
7号 Da 245E	3.4	4.4	17	S12°E	无	无	无	陶器(1), 陶器(1), 第3号住居跡と接合	
8号 Df 301E	3.6	3.6	15	N15°W	有	+	無	木棒(1), 木板(1), 木棒(1), 木板(1)	

【遺構】【保存状況】壁高15cm内外の残存にて遺構はもとより遺物の共件関係を明確にするにも困難点が多い。

【平面形・規模・カマド方位】方形溝遺構に切られている第7号住居跡を除いてほぼ隅丸の方形である。大きさは時期等を抜きにして第1号(Be71)・3号(Bf65)住居跡と第2号(Be107)・4号(Bg98)・6号(Cg42)・8号(Df245)住居跡と第5号(Bh06)住居跡の3群に分けられる。カマド方位は第1号(Be71)・2号(Be104)・8号(Df245)住居跡の北方向と第3号(Bf56)～7号(Da224)住居跡の東または南方向がある。

— 南矢中遺跡 —

〔堆積土〕 焼土ブロックや炭化物粒を含む例もあるが大半は自然流入堆積土である。

〔壁〕 保存状況の項でも記した通り、上部以上の構造を知る手がかりは少ない。施設との関係で第2号～4号住居跡の様に外側へ幾分の張り出しをもつ物もある。

〔床面〕 第1号(Bc71)・第3号(Bf56)住居跡の様に中央部が固く締っているものはある。

〔柱穴〕 第1号・第3号住居跡に4本、他に第8号(Df245)住居跡の1本が認められる。第1号(Bc71)住居跡の場合は2本が南壁際に設けられてある。

〔カマド〕 石を使用して構築していると考えられる第3号(Bf56)・7号(Da224)・8号(Df245)住居跡がある。地山を削り出したと思われる第1号(Bc71)・第2号(Be104)住居跡があるが、第2号住居跡は2基のカマドを有する。

〔貯蔵穴等〕 カマド左右に設けられており、後述の遺物を伴出する。

〔重複切合等〕 第1号(Bc71)住居跡か第1号(Bc71)円形土壙及び第2号(Bd77)溝状造構を切っている。第2号(Be107)住居跡は第1号(Bc95)溝にて切られている。第6号(Da224)住居跡は方形溝造構に切られている。

〔出土遺物〕 〔須恵器〕：坏 篦切のものは第1号(Bc71)住居跡床面出土(胎土分析資料)、第3号(Bf56)住居跡小土壙出土、第7号(Da224)住居跡床面出土底(第8号(Df245)住居跡埋土出土口縁部と接合)等である。回転糸切離し無調整のものは第3号(Bf56)住居跡床面出土。赤焼き土器を含めると第5号(Bh06)住居跡床面出土である。

：甕 口縁部は第1号(Bc71)・2号(Be104)・4号(Bg98)住居跡に出土している。第8号(Df245)住居跡には須恵片を欠く。

〔土師器〕：坏 篦による整形・調整を受け内黒処理を施さされているものは第1号(Bc71)住居跡出土。内黒処理の認め難いもの第3号(Bf65)・4号(Bg98)・8号(Df245)住居跡である。

：甕 ロクロ不使用のものは第1号(Bc71)住居跡焼土及びカマド出土・第3号(Bf65)住居跡床面小土壙出土・第8号(Df245)住居跡カマド出土である。叩きを有するもの第2号(Be104)住居跡焼土出土、3号(Bf56)住居跡床面出土、4号(Bg98)住居跡南小土壙出土、8号(Df245)住居跡カマド出土等である。

：その他 第5号(Bh06)住居跡小土壙より内外面黒色処理の土師器小壺(猫谷地1号墳中より高さ3.8cm、口径3.2cm、最大腹径4.5cmの類似物がある。)が出土している。第1号(Bc71)住居跡よりは刀子及び砥石・石玉、2号(Be104)住居跡に砥石、4号(Bg98)住居跡には石製紡錘車が出土している。

〔時期及び年代その他〕 遺構の形態及び出土遺物のその両者の組合せによる時期的特徴をまとめあげた編年資料は巻末に示す通りであるが、当遺跡の竪穴式住居跡に対応させて見た。(遺物同定の統一性に難が有り今後の課題ともなるが) 第1号(Bc71)住居跡、8号(Df245)住居跡はⅦ群(平安時代初期～前半)に相当する。第6号住居跡及び第7号(Da224)住居跡を除いた残りはⅨ群(平安時代前期～後期)に相当する。第5号(Bh06)住居跡は出土遺物の特異性をも考慮する必要がある。第7号(Da224)住居跡床面出土の須恵器壺は砲切無調でⅦ群相当のものであるが第8号(Df245)住居跡埋土出土口縁部と接合する事等より前記の結果の様になった。¹⁴C測定を行なった第3号住居跡出土の炭化材については(資料番号N-3860-13-13)(1290±60y BP(1250±60y BP))という結果を得ている。資料の流れ込み等は考慮する必要はないが、測定結果よりのAC660±60yはⅨ群10世紀代と約300～180年の差を示す。今後の類例を待ちたい。なお、材質はナラ及びクリで混合の形で測定を行った。

(2) 方形溝遺構について

本遺構の類例、性格、時期等についてだけ記する。

紫波町上平沢新田遺跡、江刺市宮地遺跡、二戸市上里遺跡、紫波町宮手遺跡、都南村湯沢遺跡等に見られる。形態的には連続しているという点で前二者は良く似ている。上里遺跡の場合は独立したものでありこれも類似している。また上里遺跡は円形周溝との兼ねあいで墓址との性格が考えられようが上部構造を欠く事より墓址との断定はさけている。時期的な点では、これら5遺跡とも、平安時代とし、上平沢新田遺跡にては中期(9世紀中半以降～10世紀代)以降、宮地にては平安時代初期以降、上里遺跡では中期(9世紀～10世紀)としている。当遺跡において性格を明示する材料は類例と同様皆無と言ってよいが、西方段丘延長上に鶴田古墳、南西方向に見分森古墳(平安初期造営)があり、幾分なりとも墓址との関連の可能性が出て来る。方形周溝墓は古くは弥生時代に見られる。当遺跡の本方形溝遺構は、切合い関係等よりⅨ群相当(平安時代後半)期以降としたい。

2. 遺跡の年代等

本遺跡の年代については、縄文時代早期末前期初頭より平安時代まで、途中に長い空白を有しながらも時を経過して来た。遺構よりは平安時代が最大の生活空間を占めた事が伺がわれる。

遺跡としては地形の延長方向への広がりが考えられ、東西に範囲は広がる。

本報告に関しては色々な未解決部分、分析不足の点があり、今後の類例研究の成果に期待したい。

— 南矢中遺跡 —

《参考文献》

(自然科学関係)

- 中川 ほか 北上川中流沿岸の第四系及び地形(地史) 地質学雑誌第69巻812号 1963.5
日本地質学会第80年総会見学旅行2資料 北上川低地帯の鮮新統第四系地形 1973
- 佐藤二郎 考古学のための地質学—岩手県文化課における講演資料一 1978.8
- 町田 洋 大山N. 岩手県(財)埋蔵文化財センター主催講演会資料 1979.6
考古学と自然科学 第1号～第10号
- 経済企画庁 土地分類基本調査 水沢(1:5万) 国土調査 1963
- 岩手県農政部北上山系開発室 北上山系開発地域土地分類基本調査 北上(1:5万) 国土調査 1978
- 北上市教育委員会 北上市教育センター理科講座資料
- (縄文時代関係)
- 今村啓爾 縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較 物質文化No.27
- 宮沢・今井 縄文時代早期後半における土壤をめぐる諸問題—いわゆる落し穴について— 1976
調査研究集録第1集 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 霧ヶ丘調査団 霧ヶ丘 1973
- 岩手県教委・日本道路公団 岩手県文化財調査報告書第31集 本調査関連報告書I 1979
- (財)埋文センター 岩手県(財)埋文センター報告書第2集 都南村湯沢遺跡 1977
- (古代関係)
- 水沢市教育委員会 岩手県水沢市佐倉河 胆沢城跡一昭和49～54年度発掘調査概報一
- 多賀城跡調査研究所 宮城県多賀城跡調査研究年報一昭和47～50年度発掘調査概報一
- 福島県考古学会 福島県の土師器編年(第18回福島県考古学大会シンポジウム資料) 1976
- 桑原・岡田 多賀城周辺における古代环形土器の変遷 研究紀要I 多賀城研究所
- 岩手ビルKK・都南村教育委員会 百日木遺跡発掘調査報告書(岩手県都南村) 1979
- 県教委・国鉄 岩手県文化財調査報告書第48集 東北新幹線関係報告書IV 宮地遺跡 1980
- 県教委・日本道路公団 * 第32集 本調査関連報告書II 1979
* 第52集 * III「上平沢新田」 1980
- 渡辺泰伸 東北古墳時代須恵器の様相と編年(試論) 考古学雑誌 第65巻第4号 1980
- 青森県教育委員会 青森県埋蔵文化財調査報告書第52集 大平遺跡(東北自動車道関連) 1979
* 第54集 緹ヶ関村古館遺跡(東北自動車道関連) 1980
- 県土木部・(財)埋文センター 岩手県(財)埋文センター報告書第8集 力石Ⅱ遺跡 1979
* 第9集 54年度略報 上里遺跡 1980
* 第13集 緹Ⅲ遺跡 建設省御所ダム事務所
- 水沢市史編纂委員会 「水沢市史I：原始～古代」 水沢史刊行会 1974
- 本堂寿一 「極楽寺伝座王坊跡緊急発掘調査報告書一付、寺院跡出土土器の再整理とその考察—北上市立博物館研究報告第3号 1980
- 草月・玉川 長沼古墳(岩手県和賀町) 和賀町教育委員会 1974
- 広島県教育委員会((財)埋文センター) 恵下遺跡 1980
- 神奈川県教育委員会 神奈川県埋蔵文化財調査報告17—新羽大竹遺跡— 1980
- 福島県教育委員会・(財)県文化センター 福島県文化財調査報告第84集 母畠地区IV 1980
- 石田茂作(監) 新版仏教考古学講座第7巻 墓葬 雄山閣 1975
- 斎藤 忠 墓葬(日本史小百科) 近藤出版社 1978

西 田 遺 跡

前 谷 地 遺 跡

西田 遺跡

1. 遺跡名 西田遺跡(略号ND74)
2. 所在地 水沢市福原字西田
3. 調査主体 岩手県教育委員会・日本道路公団
4. 調査担当 岩手県教育委員会
5. 調査期間 昭和50年6月26日～6月27日
6. 遺跡対象面積 2,500m²
7. 発掘調査面積 2,450m²
8. 調査概要

本遺跡推定地は、福原段丘面に存在し、表面調査において土師器片を採集している。調査は表土剥ぎをブルをもって行なったが表土中より土師器細片が、数点出土したのみで、遺構の検出はでき得なかった。

前谷地 遺跡

1. 遺跡名 前谷地遺跡(略号MY74)
2. 所在地 水沢市福原字前谷地
3. 調査主体 岩手県教育委員会・日本道路公団
4. 調査担当 岩手県教育委員会
5. 調査期間 昭和50年6月26日～6月27日
6. 遺跡対象面積 1,200m²
7. 発掘調査面積 1,175m²
8. 調査概要

本遺跡推定地は、福原段丘に存在し、表面調査において土師器片を採集しておる。表土剥ぎをブルをもって行ったが遺構、遺物の検出は出来得なかった。



袖 谷 地 遺 跡

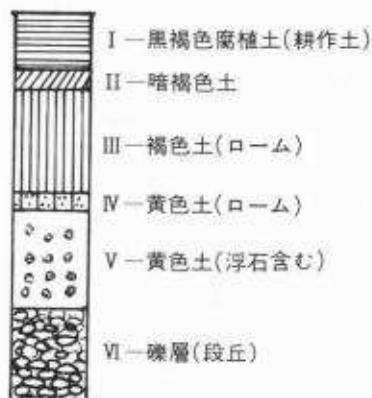
1. 遺 跡 名 袖谷地遺跡（略号SYT74）
2. 所 在 地 岩手県水沢市福原字袖谷地
3. 調 査 主 体 岩手県教育委員会・日本道路公団
4. 調 査 担 当 岩手県教育委員会
5. 調 査 期 間 昭和49年10月9日～12月4日
6. 調査対象面積 4790m²
7. 発掘調査面積 4200m²

I 位置と立地 (第1図)

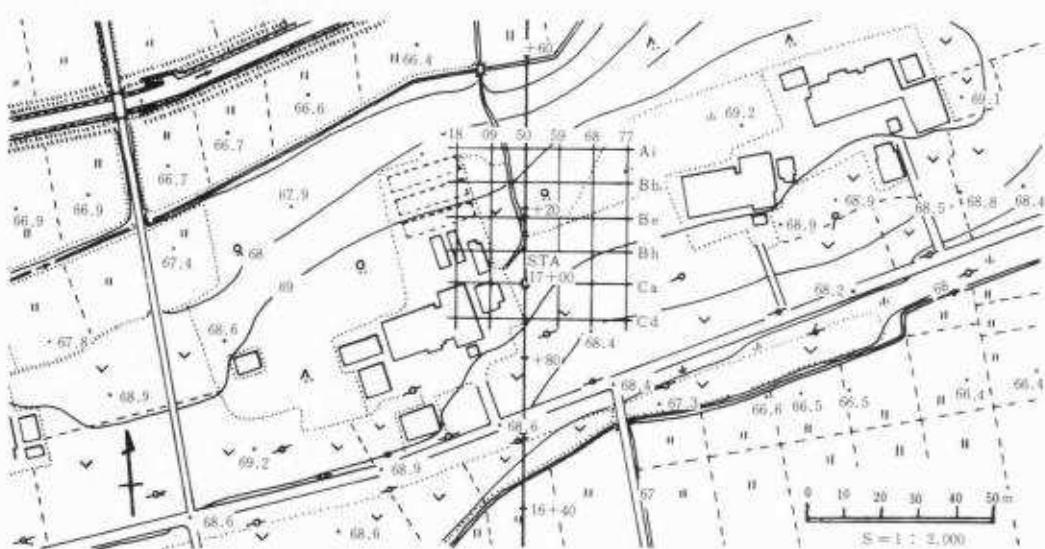
本遺跡は東北本線水沢駅南西方約5.0kmの中位段丘最下段(胆沢段丘福原面)の南縁近くにあたり、東西に長く延びる段丘平坦面に立地している。標高は約68mで現状は宅地・畑・屋敷林であった。調査は段丘平坦面を南北に横断する形で行なわれた。周辺の遺跡としては、西に合野遺跡(縄文前・晚期)東に公園遺跡(縄文・中期)南西の方向では見分森遺跡等があり、古墳、縄文時代のものである。本調査に関連するものは北方に、西田、前谷地の遺跡がある。

II 遺物包含層

1 [基本層序] 右記として、現状における土層断面の模式図を示した。詳細については第3図Bh77地点の深掘り断面図を参照されたい。Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層は火山噴出堆積物で、黒沢尻火山灰と村崎野浮石と呼ばれている。Ⅵ層は礫層である。歴史時代に於ける火山噴出物は秋田焼山や十和田火山に由来すると思われるものが遺構埋土中に若干見られる。供給源の特定は色々と試みられている。



第2図 基本層序模式図



— 柚谷地遺跡 —



小土壤断面图



第3図 遺構配置図・溝断面図